THE CENTRAL REVIEW

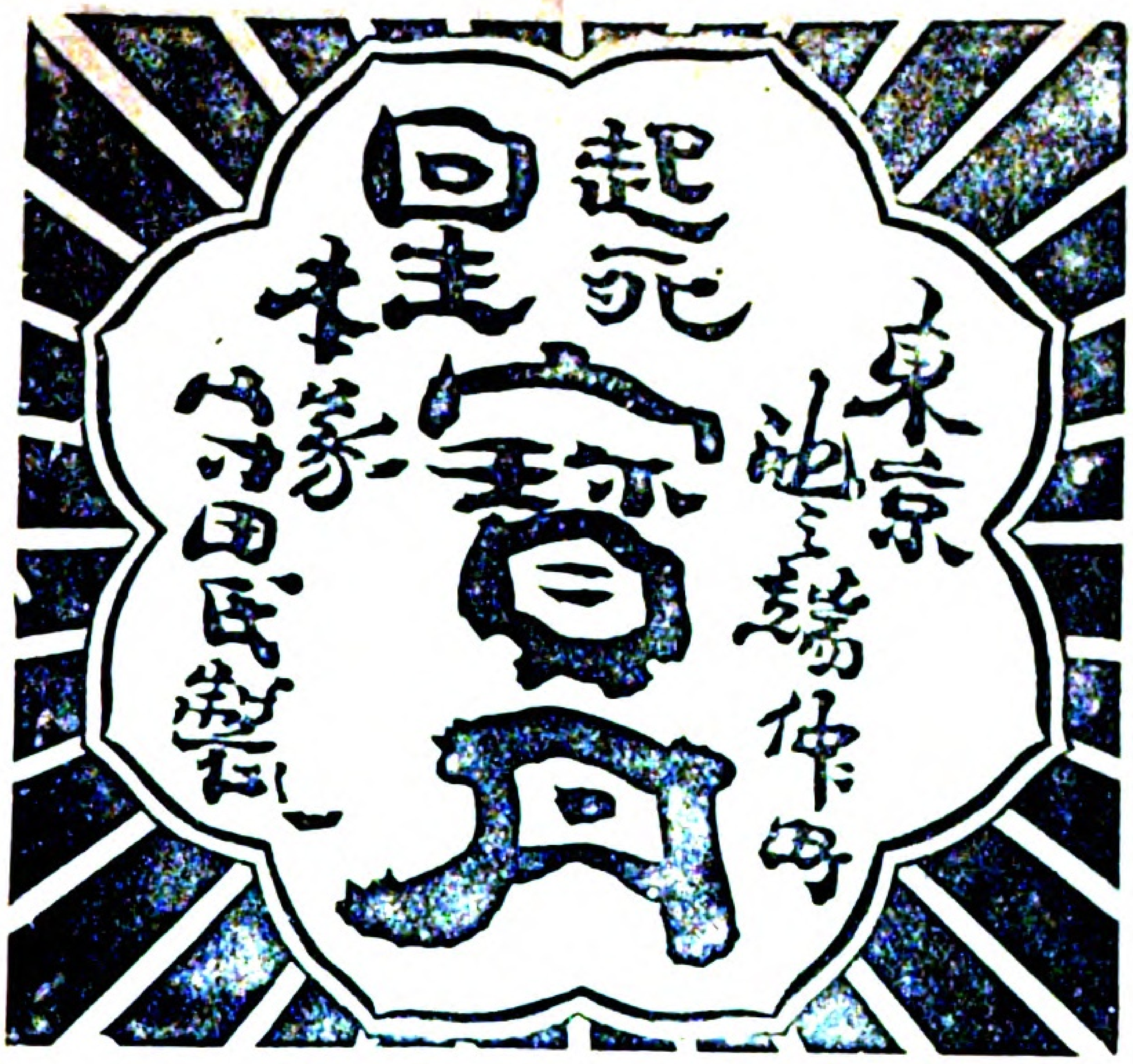
中央公論

春期大附錄號

第廿二年 第四號

年四月一日發行（毎月一回一日發行）

◎家製寶丹の儀軍旅必携の良劑たること普く世上の知ろし召給ふ所なり
今回清國北洋大臣袁世凱總督旗下の軍隊北京在營趙宿衛軍統領及び保定府常備軍第三鎭司令部等より練兵備用として寶丹數千個の御用命を蒙り眞に本舗の幸榮と云ふへし



◎第一氣附◎霍亂◎中暑◎痧症
◎痢疾◎吐瀉症◎食傷◎疝痢
◎癪聚◎頭痛◎心腹痛◎船車酒害

◎寶丹は軍陣練兵。旅行。遠出または船乘等のせつは勿論あるひは遊宴の席に到るにも必ず懷中に備へて大に自他の貴重を得べし眞にこれ濟世至寶の良劑なり

寶丹本舖

東京市下谷區池之端仲町貳拾七號所有地

十世 守田治兵衛

名譽總裁博恭王妃經子殿下　會長侯爵夫人鍋島榮子

大日本女學會

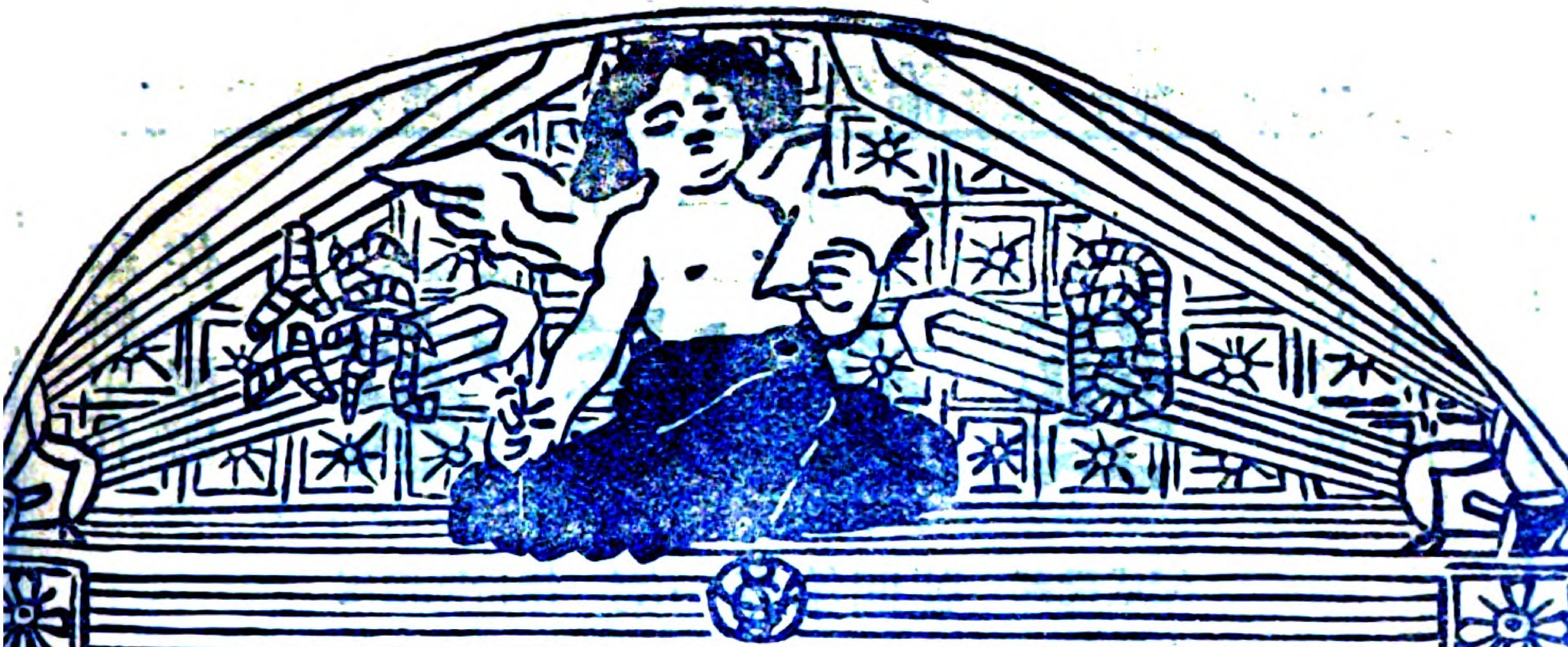
本會は女學通信教授に從事すると茲に拾參年此度第七回の學期を開きて新に會員を募集す●本會講義錄を女學講義と稱し其學科幷に講義囑托講師左の如し

○修身（後閑菊野）○禮法（佐方鎭子）○國文（同人）○作文（今泉定介）○漢文（菊地晩香、桂湖邨）○歷史（大森文學士）○地理（喜田文學士）○地文（脇水理學士）○數學（藤野了祐）○博物（脇水理學士）○理化（同人）○生理衞生（三宅博士）○家事（後閑菊野）○家庭敎育（三輪田眞佐子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○書學（武村千佐子）○史傳（下田歌子）其他附錄數欄あり

學期終了は貳ヶ年にして一個月の紙數菊判百五十頁以上之に對する會費は僅かに一個月貳拾五錢にて別に入會金を要せず●講義は其文章極めて平易にて總かな附なれば高等小學を卒へさる人々にても講習することを得べし高等女學校に入學し難き事情ある女子達は此書の配布を受けて女の道を辨へられよ●詳細なる會則希望の向はハガキにて申込あれ直に進呈すべし（尚此外に高等科もあり入學を許す）

新學期開始會員募集

東京市麴町區下二番町三七　大日本女學會（電話番町一三三〇）



中央公論第二十二年第四號春期大附録號目次



此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ





第二十二年第四號
（二百十七號）
春期大附錄號

政局の奇變

吾人の豫測したる處、幸か不幸か、其の一部分適中したり、吾人は少からざる興味を以て此の變局を觀察し敘述せざる可らず。

（一）

吾人の知る限に於て、山縣系の諸政事家は曾て非政黨主義なりき、然るも其の衆議院に於ける經驗は、漸く政黨の無視す可らずして、寧ろ其の力を利用するの外なきを悟りて、竟に帝國黨を作り、大同倶樂部を組織するに至れるが、尚ほ全然政黨内閣主義を執るまでには進まず、内閣と政黨と對等に對峙するを以て其の主義とするが如く、而して政黨も一個をして過半數を制せしむるを不利とし、寧ろ三黨を鼎立せしめて以て互ひに相牽制せしむるを上乘の政策なりと做すに似たり。

果して然らば、今の政局は山縣系の理想に適するものならざる可らず、少くも其の持說に反せざるものとす、然るに郡制廢止の問題に由て、端なくも西園寺氏の內閣と山縣系との反目を來したるは何ぞや、吾人の忖度する所によれば、其の原由一にして足らず、曰く內務大臣原氏の剛慢なり、曰く總選擧に對する黨派上の掛念なり、曰く進步黨の態度急變なり、曰く內閣の不人望なり。

（二）

內務大臣原氏の剛慢執拗なるは頗ぶる世人意料の外に出づるが如し、吾人の耳にする所によれば、氏が外交官として故陸奥宗光氏の下にあるや、其の献策を執持すること甚だ堅く、同僚の忠言も、長官の訓戒も曾て聽くことなく、陸奥大臣も竟に怒りて氏の爲すがまゝに放棄したること一再に止まらず、然るも事の結果は氏の判斷の精にして進策の是なるを證すること多きを以て、陸奥大臣も漸くにして氏を推重して以て次官にまで登任したり、氏は又元老井上馨氏の義婿にして、其の一令一命に從ふこと恰かも循吏の如くに傳へらるゝも、其の實容易に聽從せず、伊藤博文氏の言と雖も亦頑として從はざること多く、現に渡邊國武氏の政友會除名問題の起りし時の如き、金子堅太郎、末松謙澄、加藤高明の諸氏頗ぶる調停に力めたるも、原氏獨り堅く除名說を執て動かず、伊藤氏も殆んど之を持て餘せるが、竟に渡邊氏を放逐するに至りしといふ、去れば氏の性質を熟知する政界の所謂消息通は、皆西園寺內閣の中堅の應さに原氏に在るべくして、而して其の禍根も亦必らず氏に在ることを豫言せりと聞く。

郡制問題に於ても、原氏の剛慢なることは十分に看取せらる、夫れ此の問題は純然たる法律問題のみ、

之を成立せしむるも政費の減ずるもの多くも三百萬圓を上る能はず、或は二百萬圓以下なるべし、且つ郡制あるがため、地方人の多數が之を不便とするは事實なるも、一日之を存すれば則ち弊患の堪え難きものありとするにも非ず、故に其の存廢の決定を急にするの必要甚だ迫れりとして、一年二年を爭ふべき性質のものには非ず、若し前首相にして且つ西園寺內閣の後見役たる桂太郎氏が、果して本問題の提出を目して平地の波瀾を捲起すものと做し、其の提出を見合はさんとを忠告して切々偲々を盡したると事實ならば、寧ろ之に從ふの無事なるを利とすべき筈なり、恐らくば西園寺氏自身も亦然か信ぜしなるべし、然れども原氏の剛慢なる、敢て斷じて再び之を提出したり、思ふに原氏は曰はん『本問題は初め衆議院より建議し、前期には幾んど滿場一致を以て通過したるもの也、然るに貴族院にして若し之を否決せんか、是れ衆議院に反する也、輿論を無視する也、民意を蹂躙する也、曲は余に非ずして貴族院に在り』と、氏は實に此の筆法を以て貴族院に對し、若し機會だに良くば、貴族院をも通過せしめて以て桂氏等以下山縣系に一擊を加へんと期したるもの丶如し。

是れ本問題が純然たる法律問題なるに拘らず、疾くも政治問題たる色彩を帶ぶるに至りし一原山也。

抑も衆議院に郡制廢止の建議案出づるや、政友會は必らずしも極力之を排斥せざりしも、尙ほ黨議を以て之に反對したりき、然るに原氏の內務大臣として本案の提出者たるに及び、政友會が前年の態度を一變して之に贊成するに至りしは、是れ既に法律問題の範疇を超へて政略問題に入れる也、此がため測らずも政海に大波瀾を起せると、實は幾んど怪むに足らざるべき乎。

且つ原氏の手段も亦決して他の感情を平静ならしむべきものにはあらず、其の電車賃率引上願書を却下したるが如き、地方官を易置するに力めて年壯の俊材を用ゆるが如き、警察の方針を改め警察官の俸給を增加したるが如きは、稱揚すべき善政に相違なきも、京阪電鐵を議院操縱の好餌とし、政友會との或る關係によりて北海道を經營せんと欲し、又は突然電車の賃率引上を斷行せしめたるが如きは、假令何等の事情あるにせよ、痛く多數人の惡感を招致せるや爭ふ可らず、殊に貴族院議員の間に味方を作らんとしたる手段の如き、必らずしも淸淨潔白なるものゝみとはす可らず、素より山縣系に在ては寸毫も之を非難する權利なしと雖も、貴族院を以て自家の堅城鐵壁と恃む山縣系が、原氏の此の手段を見て憤怒せるとは想察に餘りあり、而して是れ亦兩者反目の一原由たるや明白なるべし。

〔三〕

政黨の勢力は議會に於て占むる議席の多少に由て決し、而して議席を占むべき多少は、府縣會に於ける勢力の大小に由ると多し、故に今年秋期の府縣會議員改選期は、各黨派が來るべき明春の總選擧に對する地盤を作るものとして互ひに苦心經營する所也。

西園寺内閣は明春の總選擧に於て恐らくは干涉を加ふるが如きとなかるべし、從前の內閣、殊に山縣系の內閣に在ては、總選擧に公平を主持すべしといひ、陽に地方官に訓令を發して戒飭を加ふるの例なりしも、陰に閥僚の緣故其の他を以て、自家の利便とするものに特別の保護を與へ、然らざるものには寧ろ妨害の方針を執りたるを蔽ふ可らず、西園寺內閣の流石に立憲的方針を標榜する丈け、恐らくは斯

の如きことなかるべし。然れども今秋の府縣會議員選擧に於ても果して然るや否やは一疑問なり、假令內閣の方針公平を主持するにありとも、野獸の如く無遠慮なる地方の政友會員等が、果して十分に謹愼に、十分に公平なるべきや否やは甚だ疑はし、否、彼は中央政府の威光を戴き、地方廳を我物の如くに振舞ひ、道路河川の問題は勿論、新會社の興廢問題等を好餌として盛んに勢力の擴張に努むべく、而して中央政府の意を迎合するを以て能事とする地方の官吏等、亦或は之に應じて朝黨勢力の增殖を計ること無しとす可らず、夫れ政府全く公平を主持し、何等の干涉を加へざるも、改選期と總選擧とに於て、政友會の甚だ利便を得而して勢力を增長するや言を俟たず、況んや地方官吏の心彼が如く、政友會の努むること彼の如くなるに於てをや、又況んや西園寺內閣と雖も、自黨のため往々偏頗の處置に出づること斷じて絕無なるに非ざるをや。

夫れ朝黨たる政友會の利便とする所は、素より進步黨及び大同派の不利不便とする所ならざる可らず、政友會が今秋及び明春を好機として、衆議院に絕對の過半數を占めんと鋭意することは、進步黨と大同派との倶に寒心し戰慄する所なり、彼等は故に政友會と緣遠き政府の下に於て、若し更らに望むべくんば彼等に便利なる政府の下に於て、改選と總選擧との行はれんことを希望するや、幾んど渴者の飮を欲し、飢者の食を求むるが如くなるべし、換言すれば一日も速かに西園寺內閣を倒さんと欲し、苟くも機會の乘ずべきあらば、必らず之を捉へて逸せざらんとするの心甚だ切なるものあり。

大同派を作り上げて實際其の持主たる山縣系に在ても、否、少くも淸浦大浦氏等の如く性急にして且

つ權勢に執着すると深き人に在ては、幾んど此の形勢を默視すると能はざる情なきに非ざらん、而かも況んや三黨鼎立のレコードを破りて、獨り政友會をして過半數を占めしむるが如きは、正さしく其の理想とする所にも反するをや、山縣系策士の感情と、大同派進歩派の選擧に關する掛念とは、是れ豈郡制問題に乘じて政局に奇變を生じたる所以の一大原由ならざらんや。

〔四〕

桂内閣の將さに罷めんとして、其の後繼を西園寺氏に托せんとするや、氏若し應ぜずんば再び武人執權の政府を見るの外なき形勢なりき、故に西園寺氏は必らずしも内閣を支持するの自信あるに非ず、外交財政に明確なる抱負あるに非ざりしも、敢て蹶起して新内閣を組織したりき、是れ西園寺内閣が勉强して山縣系の援助を求め、勉强して其の政策を踏襲せざるを得ざりし所以なるべし、故に世多くは其の山縣系との關係を悅ばざりしに拘らず、同情を之に傾倒するとを禁ぜざりしなり。

然れども不幸にして西園寺内閣は漸く人望を失はんとしつゝあり、夫れ西園寺氏の人と爲りは、實に天成の總理大臣にして、且つ頗ぶる順應の地位に立てるも、神經過敏にして、且つ他を咒咀するに馴れて幾んど第二の天性を成したるが如き新聞紙の多數は、常に西園寺内閣に不利なるものなりしに似たり、公平に之をいへば、西園寺内閣には多少の善政あり、而して未だ甚だしき秕政あらず、外交上にも未だ赫々たる勳蹟の現はるゝなきも、尙ほ爲すべきを爲すに鋭意せるや論なからん、然るに新聞紙の多數は罵りて無爲無能と做し、極力外交方面を攻擊せり、明治四十年度の豫算の如き、素より一時を糊塗

彌縫するものには相違なきも、何人も此の外に名案あるに非ず、且つ經濟界の激變を避け、暫らく大戰後の民心を休養するがためには、此の外に良策なきに拘はらず、殆んど都部の新聞紙を擧げて内閣の財政方針を攻撃し、財政の無能を罵詈して餘力を殘さず、一時は歐米の市場をして日本財政の前途を悲觀するまでに至らしめたりき、是れ實に西園寺内閣の不幸なるも、而かも其のために人望を失へることは小ならず。

且つ西園寺内閣の執れる手段中には、往々清淨潔白ならざるもののあるを免かれず、夫れ手段の不淨なるは、山縣系の特色にして、彼等は此の一事を以てしては到底西園寺内閣を責むるの資格なきも、然るも他の立憲的施設を以て西園寺内閣に期待せし人々に至ては、彼の京阪電鐵問題の如き、地方に於ける企業問題の如き、貴衆兩院の操縱手段の如き、往々清議の士をして顰蹙せしむるあり、而して新聞紙の或るもの等は、殆んど神經病的に之を誇張し擴大して吹聽したるを以て、所謂衆口の金を鑠すが如く、漸くにして民心を西園寺内閣より去らしめんとするに似たり。

此等の形勢傾向は、山縣系の機敏なる策士の必らず看取したる所なるべく、其の或るものは、獨斷的に之に由て政權再び手に唾して取るべしと做せるもあるべし、而して其の或るものは、西園寺内閣の不人望の實際如何の程度に在つて、而して其の反動として前内閣の受けたる民怨の如何程まで減却したるかを試驗せんと做したるもあるべし、其の志す所假令悉く相同からざるも、西園寺内閣と戰ひを開くに於ては彼此素より異存あらず、是れ郡制問題を好機として突如兩者の反目を見るに至りし一原由ならずや。

〔五〕

進歩黨の政權に渴する、今や幾んど頂點に達せり、幾んど渴して盜泉を掬ばざるもの丶如し。夫れ渴して盜泉をすら飮まんとす、汚水濁水の如き奚んぞ之を擇ばんや。

彼の改革派なるものは、殊に政權に渴するものにして、常に利害のみを目的として進退し、また主義に由て行藏するが如き操守は幾んど無し、彼等が多年苦節を守れる大隈氏を總理の地位より排斥せんとしたるも、故兒玉源太郎氏を擁立せんとしたるも、皆之に基けり、今や彼等黨内に多數を占め、竟に突如として突飛なる積極主義を宣言するに至りて、政權を獵せんとする熱心燃ゆるが如く、恰かも鹿を逐ふ獵者の山を忘るゝが如く、一切の歷史、一切の情實、一切の節義議論を忘却したるに似たり。

是れ進歩黨が竟に悅んで大同派と握手したる所以ならずや、是れ大石氏等が遑々乎として桂氏に欵を通ずるに努め、敢て大浦氏淸浦氏等と俱に共にせんと勉むる所以ならずや。

山縣系の一部、殊に淸浦大浦の諸氏は、進歩黨が積極的主義を執るに一變し、軍備擴張にまで贊成したるを看て、果して政權に渴するの極玆に至れりと爲し、若し政權を餌として之を釣らば、一擧手の勞を以てして彼等皆我が罟中の物たりと做せしなるべし、是れ亦政局の奇變を促進したる一原由ならずや。

〔六〕

吾人の信ずる所によれば、山縣系は一の瀨踏を爲せる也、一丸二鳥を獲るが如く、此の一の瀨踏によつて、二の試驗を爲さんとするもの也、一は進歩黨の果して堅實に提携するに足るものなるや否や是れ

也、一は西園寺内閣が敵として如何なる力量を有するや否やを測ると是れ也。

進步黨にも智者あり、如何ぞ之を看破せざらんや、彼等の或るものは、寧ろ暫らく山縣系と提携して、山縣系が果して西園寺内閣と惡戰苦鬪するに至るや否やを驗せんとし、果して全然西園寺内閣と絶ち、彌よ惡戰苦鬪を重ぬるを待て、然る後之を結びて新内閣を組織するも可也、更に轉じて急に政友會と提携し、以て山縣系の勢力を粉碎する手段に出づるも亦妙也、其の取捨兩つながら我が擇ぶがまゝにして、所謂政局の發展なるもの實に之よりすと做すもあるべし、蓋し進步黨第一の要務は、西園寺内閣と山縣系との手を切らしむるに在り、政友會と大同派とをして全く提携を絶たしむるにあり。

智者は多く斷なし、山縣系の策士が濔踏を爲す如く、進步黨も今假令山縣系に結ぶも亦全く西園寺派と握手するの餘裕を失ふを欲せざるもの也。

故に兩派の結托は成れるが如く成らざるが如く、信ずべきが如くにして未だ信ず可らず。

* * * * * * *

更に記せよ、桂太郎氏は大なる智者にして、而して又交讓と調和との成功の秘訣たるとを信じ、之に就て特別の大材幹ある人物なることを。

貴衆兩院に於て西園寺内閣（寧ろ原氏）と主として抗爭するものは淸浦大浦の諸氏にして、桂氏等は却つて旦夕伊藤氏西園寺氏と來往して多く平生に異なると無きが如し（今は伊藤氏在らざるも）或る場合に至らば、桂氏應さに淸浦大浦の諸氏を戒めて鬪戰を罷めしむると無きを保せず、而して或る場合に於て西園寺氏また原氏を抑ゆるとあるも必然也。

果して然らば、今の政局の奇變なるものは、尙ほ其の下層に止まれるなり、西園寺內閣、政友會と、淸浦大浦氏、大同派、進步黨との爭ひは尙ほ階下に於て紛々擾々するのみ、階上奧深き處に於ては、却つて伊藤、山縣、西園寺、桂の諸氏歡晤談笑して春風滿坐、階下殺伐の景趣と全然別樣なるも亦未だ知る可らず、吾人は之を以てまた一の『奇變』と名く、今の政局を觀るもの、時に眉に唾せざる可らざる也。

（七）

事實形勢は乃ち斯の如きも、之を立憲的に評すれば、吾人は殆んど下すべき適當の言辭を發見する能はず、否、之を非難するの外、他の一語だも有せざるのみ。

區々たる法律問題を化して政略問題と做し之を以て挑戰する、理に於て已に非也、挑戰に應じて之と抗爭するまた素より非也。

其の離合和戰共に主義に由らず、理論によらず、去年は各黨一致して賛成しながら、今や二黨聯合して之に反對す、其の間何等公明なる根據あるに非ず、唯だ機略と術數とを以て互ひに利勢を爭ふのみ、抑も何の處に立憲的行動ありとするぞ。

剛慢も可也、執着も可也、術數權略可也、利害得喪の打算も亦又可也、政治が書生の空論に非ざる以上、全く此等を度外に措く可らず、然れども政治は決して姦智や謀略のみの競爭に非ず。純然たる商估の駈引に非ず、國家の正義、國民の禍福を基として、理に由り節に從つて進退卷舒せざる可らず、是れ立憲政治の本領に非ずや、此の公明なくして唯だ機略と打算とのみによりて政權を爭奪せんとす、是れ陰惡なる專制政治の弊風を煽するもの也、若し斯の如き風潮を增長せしめば、吾人は實に我が憲政の前途に深憂なき能はず。

公論

國民の氣風を一變すべし

志賀重昂

（地方の知人に與ふる書面）

謹啓、先便を以て積極的節儉の義に付卑見申上候處未だ盡くさゞる所も有之候上、右積極的節儉の思想養成に附帶し國民の氣風を一變すべき義に關し更に愚存の程申上候

元來日本社會一般の氣風を一變せしむべしなど申せば如何にも大言壯語の樣に御座候へ共、其實敢て然らず哉と存候、日本にて新聞紙の發行高は一百萬枚內外に有之、而して一人にて數種の新聞を購讀する者も不少候に付、購讀者の數は必らず七十萬よりは多からず、これとても唯だ新聞紙の購讀者と申すのみにて、新聞紙の論說なり將又重要なる記事を了解し得る者は購讀者全體の十分一に過ぎずと存候、然れば七萬內外の人々にて日本全體の社會を動かし得べき義なれば、御互の如き者共が聊か先達となり少しく注意して社會一般の氣風を變化せしめんと期するに當りては、思ふよりは存外に目的を達し得べきことゝ確信致居候

我が陸海軍の百戰百勝は種々原因有之候義豫て御承

知とは存候へ共、時間を格守する事、規律ある事、命令に服從する事、命令の實行を期する事、職務に忠實なる事、事務に責任を有つ事は、實に大原因の內に數ふべきものと奉存候、例へば本日午後六時三十分、味方の步兵が敵の掩堡に突擊する事、故に六時に工兵は爆藥を敵に投じて敵を屈伏し置くべき事、故に五時に二十八珊の砲を發射して敵を豫め弱からしめ置く事、步兵の突擊する前後には味方の砲兵は一齊に發射して味方の突擊を助け且つ敵の防禦力を弱からしむる事と豫定せらるゝとせよ、然るに五時となるも砲兵は發射せず、之を質せば二十八珊彈を運ぶ能はざりしと答ふ、六時となるも工兵は何等の行動をなさず、之を質せば爆藥が不足なりしと答ふ、此の如く時間を格守せず、規律はダラ／＼とし、命令は實行せられず、職務に忠實ならず、責任を有せざらんか、味方は時機を失ひて不覺を取り、千人萬人の死傷を生ずるは分かり切つたる義と存候、然るに我軍の如きは全く之と異り、時間、規律、命令、責任の能く嚴守せられたればこそ每戰大勝利を得たることゝ存候、倩昨年六月發兌の雜誌中央公論にも小生の談話掲載有之候通り小生には一昨三十八年の秋五名の日本兵士に護衞せられ露領樺太の內陸を旅行致候處、前日の晩に小生が明日は午前四時に出發と申すと、分隊長は「ハイ」と答へ之を兵士に命令し、更に睡眠前に「明日は四時出發」と命令を繰り返し候、すると明日午前三時には一同起き上り、枯木を採集して薪となし、火を作り、溪水將た沼水を汲み飯盒にて湯を沸し、肉を煮、其の熟する間に外套をタヽみ、劒を磨き、小銃を掃除し、軈て朝餉を了へて、午前正四時に出發致候、尙又其後軍艦松江に便乘し水兵の作業を目擊致候へば、何時何分甲板の掃除、何時何分操練、何時何分被服洗濯、何時何分日課手入、何時何分軍事點檢と時間を格守し、而かも複雜なる作業を時間通りに着々と執行致居候は、感服の外無之、我が海陸軍が百戰百勝の重もなる源因は此邊にあることゝ今更了解致候

然るに軍事以外なる日本社會の一般を見れば、時間

は格守せられず、何事も不規則千萬にして、グヅ〳〵とし、ダラ〳〵とし、命令は實行せられず、責任を守ること少く、己れを待つこと寛にして人を責むることのみを是れ主とし、萬事に桶の箍の抜けたるが如きは、實に今の社會の深憂大患なりと存候、世間にてはポーツマスに於ける所謂外交の不手際に依り媾和談判に失敗し、樺太の南北折半と一厘の償金だに得る能はざりしとは心外千萬なりなど申候へ共、若し日本の一般社會にして時間、規則、命令、責任を能く守ることゝなれば、實業の如きは容易に發達し得べく、『我は苟くも商人なり一度口約せしことは違へず』『苟くも英吉利の銀行なり、受領證を出さゞるも間違なし』と云ふ英國人の如き氣風となれば五億や十億の金額は期年の間に増殖し得らるゝことゝ存候、要するに今日日本の情勢を顧れば、國民は實に臥薪嘗膽以上の臥薪嘗膽を要する義に有之、之が實行の第一着は時間、規律、命令、責任を儼守する事にありと奉存候

然らば先づ以て

社會改良の實行方法

の義申上候、近年國民氣風の一變とか社會改良とか學生の墮落とか唯聲を喧しく聞き傳ふるのみにて、如何にして改良すべきやと申す段に相成候へば、喧しき聲ほどには其方法を説く者少き樣被存候、然らば所謂社會改良の實行方法を縷々可申上、此く言へば甚だ大層なる樣相聞へ申候へ共、小生は左まで大層なる義は不申上、唯年來自分に於て聊か實行し居れる件々のみを申上げ、自分の如き者すら之を實行し居り候へば、全く言ふべくして行ふべき方法なりと信じ候、然れば其事のみを摘みて申上候

(一)　紹介狀の濫發を止める事

先づ紹介狀の濫發を防ぐは社會改良實行方法の一なりと存候、支那にて『補交』と記しある書翰即ち紹介狀を受けたる節は、自分の面目上、其書翰を携へ來りし人を責任を以て世話をし、其人の爲めに心力を盡くすこと我身の如くに致す義に有之、將た又携へ來りたる人の爲めに職業の世話を爲さても濟むとか、又は其

他の事を致さずして濟む抔の節には、必ず其人を優遇し厚く饗應位は致すべき慣習と相成り居候、又西洋にて Letter of introduction とか Letter of recommendation とか申せば其價値實に萬斤の重みあるものに有之、之を受けたる人は責任を履みて其人を世話致し、若くは優遇可致義務ある慣例に有之、或は紹介狀を認むるに當り事項に應じては手數料として三十磅（我が三百圓）とか四十磅（四百圓）とかを要求すること有之、是は一寸聞くと拜金の風の樣なれども、西洋の紹介狀に價値あり責任あり重きを置くの風を一方より反證致候、然るに今日我國にては紹介狀を書くことを最も輕んじ、僅かに交際せし人を紹介したり、間接に人を紹介したり、間接なれば未だ可なりとするも、間接の其又間接の人を紹介したりなど致候、此の如く親しく交際せざる人、一面識の人、未だ知らざる人、間接に依賴し來りたる人、間接の其又間接に依賴し來りたる人の爲めに容易に紹介狀を認め、甚しきは其人を信ぜざれども、請求するに任せて紹介狀を認め、紹介狀の末尾に「此人の依賴に應じ御紹介は致し候へ共、元來小生の餘り承知せざる人物にも有之候へば、右御含みまで念の爲め貴意を得候」など附記する者さへ有之、果ては某地方の大官が某甲の依賴に應じ東京の乙豪商に宛紹介狀を認め、之を甲に與ふると同時に、乙に對しては甲の人物に關し紹介狀中の文と全く別意味なる義を郵便にて發信し置きたりとの實話も有之候、此の如き次第に御座候へば、我國今日の紹介狀の價値とては支那の十分の一、將た又西洋の百分の一だにも不相及義に有之候、今日の如き世智辛き世の中にては職業を求むること唯さへ甚だ困難なるに搗て加へて此の如く無責任なる且つ價値もなき紹介狀を互に交換するといふ風あるが故に、紹介狀を受けたる者は狀を持參し來りたる者に對して然までの注意も不致、職業の周旋を依賴されたりとて等閑に附し去ること往々有之、滔々たる紹介狀濫發の結果、益々職業を見出すこと困難と相成り候、然れば己が信ずる人とか、己が如何にしても世話致さゞる可らざる樣の人の外には、紹介狀

認めぬと申す慣習を作ること、先づ緊急と存候、斯く申せば酷薄の樣に相聞え候得共、其實は矢張り多數の人を世話する所以と可相成、誰も紹介狀を濫發せざる事となれば、自然と紹介狀に價値出て、價値のある紹介狀を持參すれば之を受けたる人も責任を生じ心力を傾注して其人を是非世話するか、若くは優待致すことゝなり、職業を見出すことも容易と可相成、今日に當りて眞の神の道を行はんとすれば、却て惡魔の如くし、大槪の人に對し紹介狀を認むるを斷はる丈ケの勇氣を發するこそ、大に世の中の爲めに相成ることゝ信じ申候、倘又以上の如く紹介狀を認むる者も無責任には有之候へ共、紹介狀を請求する者も亦た無責任ならざる樣力むべく、西洋各國にては、一度紹介狀を得たる以上は、其紹介狀より出來したる結果を該紹介狀を認めし者に對し報告するの慣習有之、例へば『御紹介書を持參し某甲に面會致し夫れ〴〵用談を了り候』とか『御紹介願上候某乙を訪問致候處、目下病氣臥床中にて面會を不得、依て此義御報知申上候』など報告致す義に有之、總じて紹介狀に重きを置く事は我國にて學ぶべき義と奉存候、尙又鳥渡名刺に先方の名前など書きて附與するは極く何でも無き事の樣に存じ、之を容易に承諾して與へ候へ共、是も亦紹介狀と同樣に濫發をせざることゝ相成り候へば、其持參したる名刺に價値も出て、價値出れば先方にても責任を持ち候故、紹介狀と同樣に濫發せざることに致度候、以上申上候如きは言ふべく行ふべきものにして、唯々自分が紹介狀を濫りに書かぬ濫りに名刺に先方の名を書いて與へぬといふ事さへ致候へば、それ丈けにて實行方法と相成る義に有之候、實は今日の日本ほど職業を求むるに困難なる時代とては無之、職業に渴する人は數限りも無き折柄に御座候へば、是れが應急の一方法としても紹介狀に十二分の價値を持たしむる事に最も力めざる可らずと奉存候

(二)『親展』の字の濫書を止める事

次は親展書濫發を止める義に有之候、葉書に『親展』

と書きたりとは二十餘年前の一笑話に有之候處、近頃の如く如何なる書信にも『親展』の二字を附する樣に相成り候ては、事實に於て葉書に『親展』と書くと同じ義と存候、此の如く『親展』の字輕く相成り候故、『必親展』の字が出來、『必親展』の字輕く相成り候故、更に朱字にて『必親展』と書く、更に朱字の『必親展』すら價値無くなり候故、遂に『必親展』と圏點を打つ樣に相成り候、既に此の如く相成り候柄には、親展の效能も全く無之、葉書に書きたりとも些だに笑ふことは出來ざる義と相成り申候、尤も日本人が親展書に重きを置かざる事は、『親展』とか『必親展』とか封筒に儼めしく署する風の人は、亦却て相當の重事を葉書に細々と書き認めて郵送する流の者に多く有之候、偖又西洋にて Confidential の字が封筒に書きあれば、之を受領せし者は眞の責任を持ち嚴重に秘密を守り、誠に價値あるものに有之候へ共、我國の『親展』と云ふ字は殆ど無意味と化し了り候、然れば此親展に價値を附けんと欲すれば、よく／＼の重大の用事の外には手紙に『親展』てふ字を書かざることに致度候、小生は十年前『必親展』と圏點の打ちたる書簡を得たる以來、頓に感起する所有之、爾來『親展』の字を書くことを廢止し、眞の重大の事件のみ『親展』と書くこと丶致候處、一年に二三回の外は『親展』の字を書く必要も無之、全く『親展』と書くほどの大秘密の重事は一年に二三回しか無之と信じ申候、斯くすれば小さく云へば『親展』など云ふ小六ヶ敷字を手紙に書く勞力も省け、大きく云へば『親展』と書きある手紙に重きを置く樣に相成り候事と存候、要するに日本にて秘密の容易に漏るゝは日本人の秘密を守らざる不謹愼の性格にも起因すとは存候へ共、所謂『親展書』なるものゝ價値なきこととも其一と奉存候に付、『親展書』に秘密を保たしめ責任を持たしむる樣にするは今日の急務なりと存候、是れとても唯だ御互が『親展』の二字を書かざれば夫れ丈ヶにて即ち實行方法となる義に御座候へば、極めて簡單なる極めて容易なる方法と奉存候

(三) 序文の濫書を止める事

其次は個人の立言に責任を生ぜしめ、著述に價値を保たしむる義に有之候、小生等の如き者すら虚名の爲め人より序文を書き呉れよと頼まるゝこと随分度々有之候、然るに今日坊間にて刊行する書籍を見れば、何侯何伯とかの題字、將た何先生何名士の序文相見え候處、其所謂序文なるものを見るに『議論精確、識見該博』とか『抱負雄大、立言警拔』と申す様の類に有之、單純無意味、斯文の上より見れば無用蛇足のもの殊に多く、甚しきは徹頭徹尾無用の文字數行を羅列したるも有之、縱し長く書きたる所が此の如き殆ど無意味のものに付、却て短き題詞の方がイッソ宜しきかも知れず候、(題詞なども固より無用と思へども)偖以上の如く題詞とか序文を挿めば凡俗の注意を惹くに足る利益ありと申す者も有之候へ共、今や都會の地は勿論、地方にても夫れ〳〵腦力啓發し來り、盛名の人士が題詞とか序文を挿みたりとて當該書籍にして價値なくんば顧みる者も無之、僅かに片田舍の深山の人位は今日の序文などにて動くやも知れず候へ共、最早題詞や序文などの有無は書籍の刊行に何等の關係なき時代と相成り候、乍然序文と申すものも非常に效能あるものに有之、例へば此書の著者は後進の人なり、又世間に名の顯はれざる人なれ共、其議論と云ひ學説と云ひ、新奇且つ有力にして、又誤りなきものなれば、如何にしても世の中に傳へざる可らず、然るに其著者は世間に未だ名聲を得ざる人なりとすれば、先輩たる者は之を紹介する爲めに力を極めて力のある序文を書かざる可らず、英吉利のチンダルなどは何時も此事を實行し、有用有數の著述にして而かも後進無名の學者が造詣に係るものある時は縷々萬千言の序文及び批評を起草し、以て其人を社會に紹介することを力め候、此の如く致候へば序文の效能もあるべくと聊か感起致候以來、微力にして及ばずながらも最近の六年間に於て或る二書に長き序文を草し、或る一書に七ケ月を費して批評致候、要するに無意味なる序文は全廢し、意味あり能力あるものを挿入し、以て斯文の啓發に補ふは今日の急務なりと存候、是れとても社會の先輩となりて人より

序文など請求せらるゝ人士が、唯だ無用なる序文を起草せず、請求者に斷はりさへすれば、夫れ丈けにて實行と相成る義にて、是亦極めて簡單容易なる方法に御座候

（四）濫りに祝詞を贈らざる事

凡そ一事業の開始に當り、避病院、監獄、遊廓の開場に非ざるよりは、人誰か其益々盛大ならんことを望み且つ祝せざる者あらんと存候、然るに誰も彼も祝詞を述べ祝辭を寄するに至ては、冗の極、繁の極と申すべく、世道人心に何等の裨益もなく、社會の進運上に些々貢献するなき義と存候、乍併祝詞悉く廢止す可らず、當場の代表者をして之を演べ之を寄せしむるは、宜しく社會の好禮儀として待たざる可らず、即ち同席に招かれたる賓客の中にて先輩の一人が祝辭を演ぶるとか、多くとても二三人演ぶれば眞の祝詞ともなり挨拶とも相成り候へ共、誰も彼も祝詞を演ぶるは禮儀にも非ざるが上に、さて／＼煩苛に堪へざる義と存候、然れば宴會なれば列席の先輩一二名、地方に於ける事業の開始なれば地方官中の先輩將た人民の代表者一二名、中央より祝詞を要求するとせば、政治社會なれば伊藤、大隈、西園寺三君の中とか將た又其當時の首相とか、實業社會なれば岩崎、澁澤の諸君子とか申す數君子の祝詞を掲載してこそ眞の『祝詞』ともなれ、又所謂『紙上に光彩を放つ』ことゝなるべしと存候へ共、其他の紛々擾々たる祝詞を掲載したりとて何の紙上に光彩を放つ所ありやと存候、小生の如き聊かの虚名の爲めに時々新聞雜誌社などより祝辭を徴發せらるゝこと有之候處、自家の地位に省み小生の祝辭の如きは畢竟紙面を塞ぎ黒汁（インキ）を流すに過ぎず、彼我共に些の利益なきを知るを以て、毎時之を辭し、代ふるに卑見を贈致することゝ定め、然らざれば祝詞廢止説を寄贈致居候、縱し墨汁を流すは可とすれ、此の如き無用の文字、世道人心に裨益なき文字を陳列して紙面の場塞ぎを致すは、社會の進運を阻害するものと存候、斯く大きく言はぬまでも、趣味も無く面白くも無ければ、新聞雜誌夫れ自身の爲めにも利益とならざる義と存候、今や

世運は益々進歩し、殊に戰後の社會は愈々繁劇となるに當り、祝詞を陳列するが如き思想を抱き候へば、必ず時代の競爭に後レを取るべく、特に新聞雜誌の如き社會の指導者たる者は、深く此間の機微を察し、最早此の如き時候後レの事を敢てせず、祝詞の代りに先輩の有益なる趣味ある談話なり言說なりを出來得る丈ケ多く掲載せられんことを祈り申候、社會の進運の爲めに祈り申候

(五) 祝電を改良する事

『何々を祝す』『何々の盛會を祝す』『何々會の盛大を祝す』との如き祝電を發するは、今日一般の習俗に有之候處、此の如き一樣單調にして而かも蠟を嚙むが如き無味沒趣味の措辭を以てするは、弊事にあらずと雖も亦た改むべきものゝ一と存候、同じく盛會を祝する電報には有之候へ共、『ショクンコクカノタメフンキセヨ』の一音信電報を發すれば『ツッシンデセイカイヲシユクス』よりは聽く者に感激を授け且つ趣味を添ふることゝ存候、要するに意味あり趣味ある祝電を發するの風を作らざる可らずと存候

(六) 無勞力なる出版物を止める事

他人の屬稿せし文を拔き取り、自己に於ては唯だ鋏にて切り糊にて貼るのみの勞力を致し、『春花秋月』とか『落花流水』とか申す樣なるヲツなる下品なる名稱を附し、安ボキ出版物を發刊する風は、今日の流行と相成り候處、此の如く他人の勞力を無視して自己のみに利せんとする弊風は斷じて改めざる可らずと存候、此の如き事をなす者あれば切り取りせられたる原作者は、出版者なり編輯者なりを夫れ〲の方法を以て制裁するを以て至當と存候、即ち出版後、該出版物より自分の文を是非除かんことを要求するも可なり、若し此要求に應ぜざれば社會改良の爲め多少の入費はかゝりても起訴するも可なりと存候、要するに此の如き出版物は是非絕滅せしめんこと必要と存候、以上の如き德義論は別としても、舊き原稿を改正もせず其儘出版するが如きは、社會の進歩を阻害する一害物と存候に付、是非止めしむべき事と奉存候

（七）時間を格守せしむる方法

其次は時間を堅く守らしむる事に有之候、是は誰も申す義にて小生等の説明は要せぬ樣には御座候へ共、今日時間を正確に守るは西洋人の風なりと稱へ、一時より始める事を正一時に始めるを『西洋時間』と呼び、五時開會の振レ出シを正五時より開會するを『西洋時間』と言ひ做はせ、而して午後一時開會と通知すれば三時後ならでは出席者が揃はず、五時開會と云へば七時頃よりノソリ〳〵參會するは今日の風にて之を『日本時間』と稱へ候へ共、我々の祖父母などより聞き又我々の父の時代の人に聞き候へば、舊藩の頃、藩廳より寅の刻なり卯の刻なりに登城をせよとある時には、其頃は金時計も無く銀時計も無く又白金(プラチナ)、白銅(ニッケル)の時計も無かりしかども、必ず寅の刻なり卯の刻なり又其時間より少し前に登城したるものにて、今日の如く白金の鎖(くさり)や銀側金側の時計をブラ付かせて居る先生達が二時間も三時間も通知の時間より遲れて參會すると申す不シダラなる風は決して無かりし樣確聞致候、若し時間を格守する義をしも『西洋時間』と申すなれば、昔の人は昔の時に『西洋時間』否眞の武士の日本時間を守り居りたるものに有之候へば、決して西洋風にあらず、全く日本の風なりと信じ候、然れば日本人とて決して時間を守らざるにあらず、現に小兒に致したる所が八時より學校が始まると申せば八時前か將た又遲くとも八時には出校致候、是は遲刻すれば點數を減ぜらるゝとか又は度々遲刻すれば保證人より屆書を要する故に有之、此の如き制裁が當初よりありたるが故、遂に習ひ性となりて一分一秒だに生徒の遲刻致さゞる義と相成りたりと被存候、又何故に我々が鐵道の遲刻を誤らざるかと申せば、今日午後十二時三十分發なれば午後十二時三十分發の汽車に乘らざれば、翌朝の八時半に神戸に着すること能はず、故に汽車に乘る時間が極少しと思へば、二人挽の人力車に後押まで付けてもステーションへ驅け付ける義に有之候、是は汽車は其人の爲めに頓着なく定刻の時間通りにズン〳〵と煙を吐きて出發し、一分一秒だに其人を待たず其人を乘せ

ずに行くと申す制裁ある故に御座候、日本全國にて最も嚴格に時間を守る處は臺北に有之、去る明治三十二年十一月小生同地に參り候節、內地流に時間を格守せずして三回の失敗を累ね申候、第一は到着の當夜、時の臺灣銀行總裁添田君より七時開宴と申す招待有之、七時四十分頃參會致候處、他の臺北の諸客は悉く居並びて小生等即ち主賓の來着を今や遲しと待ち居られ、小生等の來着するや直ちに宴會の始まりたる義に有之候、次は天長節に於ける臺灣總督府夜會の案內に有之、是は午後六時開會と申すのに六時半頃參會致候處、宴會は開かれ居り候、第三は淡水館に於ける歡迎會の遲刻に有之候、是は午後四時半開會と申すより、前二回の失敗に懲り今度こそ遲刻せざるべしと心に期し居り候處、當日臺北近郊の林維源氏の邸宅に招かれ、歸途淡水河にて二中隊の兵士に會し渡船の後れたる爲め淡水館には大遲刻にて參會致候、然るに同館には來會者疾くより悉く集り居られ候に付、小生は遲刻を謝し、且つ傍の人に臺北にては如何にも能く時間を守るなりと嘆賞致候處、其人の申すには、否臺北にても當初時間を今日の如く嚴重に守りたるに非ず、臺灣占領後、新開地の事なれば何事にも新しき慣習を作らざる可らずと、其手初めに先づ時間を堅く守ることゝ規定し、遲刻者は一分時毎に十錢宛の罰金を課したり、然るに此事が自然に習ひ性となり、今日となりては罰金の事なども無く、罰金の事蹟すら記憶する者少くなりたるに拘らず、御仰せの如く能く時間を守る樣になりたりと申し候、偖以上の如く臺北に於て時間を嚴重に守るに至りたるも、當初罰金と申す制裁のありたる故に御座候、又學校生徒の例なり若くは汽車に乘る例なりの如く、日本人は時間を守れざるにあらず、全く橫着にして守らざるなり、然れば此橫着者に對し又懶惰なる社會に對しては夫れ〳〵の制裁法無之候ては、如何に時間を守るべしと主張するとも到底効能なかるべく、制裁法も幾分か殘酷なる工夫を用ひ是非之を斷行せざる可らず、是れ實に時間を格守せしむる唯一の實行方法なりと存候、即ち講談會、演說會などにて會主より

招待されたる際、定刻より一時間過ぎ位までは待つと致したる所が、其時まで開會せざれば、辯士なり講演者はサッサと退席して歸途に就くべし、此の如くすればば該會の幹事とか役員とか云へる面々は肝甚の辯士將た講演者の退席したるを以て聽衆に申譯なしと狼狽を極むべく、當事者に對しては氣の毒千萬には御座候へ共、此位の制裁を致さゞれば今日の弊風を矯正する能はずと存候、又宴會なども遲刻者あるに拘らず、定刻よりドシ〳〵可開、偖は會社、銀行なりの相談も、若し定刻に出席せざれば出席者丈けにて事を處分する旨豫め通知し置き、定刻に開會の上、偶々遲刻者の爲め不利益となる議決をなしたりとて一向に頓着なく此議決を決行可致、其他政黨、協會、倶樂部などにても同樣に可致候、然る時は遲刻の爲めに議決の權利を失ひ且つ自己の不利益となりたり、又は異見ある者は自己の利害に關係し來るが故に、向後必ず定刻に參會可致、今日の如き時間を格守せざる惡風の存する間は、何事に依らずビシ〳〵と其時間に始め、遲刻者の權利を褫奪する樣に制裁をさへすれば、時間を守ることも出來可得と存候、小生も地方に講演に聘せられ開會の定刻より一時間餘も遲れ候節は今の社會を改良する所以を思ふて演説せずに會場より退席し態と會主を困らしたる事二回有之候、此の如くして時間を守らしむることゝ致度、何卒御決行の程願上候

(八) 訪問の時刻

人を訪問する約束に付ても目下實に漠然と致居り、或は『明日出ますが宜しうございますか』と言ひ、或は葉書にて『明日訪問可致候』など書送し來り候へ共、是亦時間を確然と豫定致度存候、責任を以てすれば『明日』など言へば二十四時間待ち居らざる可らず、然れば唯だ漠然と『明日訪問可致候に付何卒御在邸有之度願上候』など申し來れば、先方が此く無責任なる故に、此方に於ては是等に相構はず外出をする事と致候へば、自然時間も先方より定め來る樣可相成と存候に付、是亦御決行可然と奉存候

(九) 客と會食する法

賓客と會食するにも今日の如くに手數掛り、家の主人、妻女將た婢僕が皆遽しく用意する樣の實際にては、實以て時間を徒費するのみにて何等の甲斐も無之候故、是に付小生には或る方法を實行致居候、そは小生輩の如き資產の薄き者にありては、幾十脚の椅子を調へテーブルに倚りて食事すること出來不申候に付、テーブルの長さ凡そ一間幅凡そ二尺、高サ二尺許りのものを幾脚も作り置き、五六人にて濟む時には一脚を用ひ、十人の時には二脚を用ひ、五十人の賓客を招きたることも一回有之候處、其時は十脚を用ひ、此の如くして普通の時には客も家族も子供も隣家の小供も同じく此テーブルの四周に坐りて皆同じ物を喫べ、テーブルの中央には或は果物とか或は到來品とか或は各地方の名產の類といふを載せ、相互に是等の食物を品評などしつゝ主客賞味致候へば、客も亦强て御馳走せられざるが故に、氣の毒にも思はず緩りして色々の話をも盡くし、一入親密の交際も出來候故、此の如き事を實行致居候、然れば是亦御參考迄に申上候、

以上申上候社會改良の實行方法に次ぎ

顚倒せる風習を顚倒すべし

と云ふ卑見可申上候、今日日本社會一般の風習中に種々顚倒し居るもの有之、此顚倒は正しからざる顚倒、誤り居れる顚倒に御座候間、到底矯正せざる可らざる義と奉存候

（一）事業開始に於ける顚倒

先づ一工業社會を組織したりと可致候、會社の固定資本及び流動資本の事、器械の新式なるか舊式なるかの事、技術者の新式の器械に習ひ居れるや否やの事、國内に於ける販路の事、國外に於ける販路の事、國內に於ける競爭者の有無强弱、國外に於ける競爭者の有無强弱、其他くさ〴〵なる細密の事項を調査に調査を重ね、かくても尙ほ中々の遺漏あるに拘はらず、此の如き事には然までの調査を盡くさず、先づ一通りの調査にて濟まし置き、開業前より權利株の高低、如何にして權利株を疾く高價に賣り飛ばすべきやなど申す事より、偖は如何に開業式をハデにし如何に盛大にすべ

きやと申す類に力を用ひ居る、是れぞ即ち顛倒に御座候、固より景氣を付けるも廣告の一手段に候へば、開業式などを盛大にするも亦可なりと雖も、而かも大に心を盡くし骨を碎きて調査せざる可らざる事項は一通りに致し置き、却て開業式の際の緑門(アーチ)の事、酸漿提灯(ほうづきてうちん)の事、式場の順序の事、演說の事、來賓の『益々當會社の盛大ならんことを望む』なぞてふ形式的祝辭の事、奏樂の事、式後の宴會の事、配膳の事、餘興の事、藝妓の手踊りの事などまで細大漏しなく注意し用意するなど、是れ之を顛倒と申す義に有之候、即ち顛倒する風習を顛倒すべしと申すは、會社の實利實益となる事、切言すれば會社の實力を養成する事には心を盡くし骨を碎き、權利株などの事は固より、開業式の類の如き一時的の事は一通りの注意と用意とにて相濟ますべしと云ふ義に候

（二）**無用有用の顛倒**

以上の如く日本の實業家が開業式をハデにするに引換へ、西洋の實業家は事業の經營にこそ勇往大膽には候へ共、一體の計畫にジミに有之候故、事業の實力頓に揚がり、隨て利益多く、利益多きが故に、總じて寄附に寛大にして、赤十字社、養貧院、施療病院、感化事業、學校、學會、傳道事業、道路の開鑿、橋梁の修繕等、其他各種の慈善事業、社會の進歩を促すべき事業に投金し得る義に有之候、然るに日本人は總じて無用の事、意味なき事、爲さでも濟むべき事には極めて寛大に有之、極めて贅澤に有之候へ共、有用の事、意味のある事、世の爲め人の爲めに爲さゞる可らざる事に對しては、極めて寛大ならず、極めて吝嗇(けち)に有之候、例へば宿屋の亭主とか女主人とかにペコ〳〵頭を下げおじぎするが嬉しきにや、將た又隣室の客に見せびらかさんとするにや、茶代などは身分不相當に遣はすのみか、酒色の事には無意味なるまでに寛大に金を拂ひ候へ共、此等の人々に對し、赤十字社への寄附とか、學會への寄附とか、學校への寄附とか、博物館への寄附とか、道路の修繕將た開鑿への寄附とか、橋の架設への寄附とか、慈善會への寄附とか、孤兒院への寄附

とか、養貧院への寄附とか、學生の寄宿舍への寄附とか、其他眞正なる公共事業への寄附などへは、三圓五圓の寄附金とても澁々として出し、五十圓百圓の寄附と聞きては眉をひそめて中々に應ぜざる義に有之候、總じて未開人は無用なる事、無駄なる事をするほど奢侈なりと考へ、以て人に誇り、クダラ無き事を榮耀と致居り候へ共、此一點よりすれば日本人も同一の所不少と存候、即ち無用なる事には極めて贅澤にして、有用なる事には極めて吝嗇なる義に有之候、此顚倒せる風習は是非顚倒させ、無用なる事には極めて吝嗇にして有用なる事には極めて贅澤なりと迄は行かずとて、切めては有用なる事には寬大にする風習を作り度ものと存候

三）　**報酬の顚倒**

或る事に對しては法外にして破格なる報酬（？）を贈り、正當に贈らざる可らざる報酬をば却て贈らざる風習は是れ又顚倒せる風習にして宜しく顚倒せしむべきものゝ一なりと存候、例へば政府に對し何々の請負事件とか、下渡事件とか、拂下事件など云ふに對しては、贈る可らざるものを密に其筋々の人に贈り、將た又帝國議會に利益上の問題起れば、贈る可らざるものを密に議員に贈り、彼れと云ひ是れと云ひ、贈りたる金額とても法外にして破格なるもの多く有之候、此の如く贈る可らざる筋々に對しては法外にして破格なるものを贈り、而かも正當に贈らざる可らざるもの、即ち自己の利益の爲めに他人に腦力を費させ、勞力を費させ、時間を費させ、將た又原料を費させなどせし類に對しては少しも報酬を贈らざるは、是れ又顚倒せし風習に有之候、小生の如き者すら虛名の爲め地方より何々の計畫など依賴さるゝ事度々有之、自己にては力及ばざる故、學會とか協會とか大學の人に依賴し、依賴されたる人は學者なれば何れも責任を負ひて種々調査し、中には調査に一個月有餘も費し吳れたる人もあり、偖調査了り依賴の計劃を書送り遣はすと、何れも禮狀を贈り來るのみに有之、小生は夫れにても宜敷候へ共、長々の時日間腦力を費して調査し吳れたる人に對して

一片の禮狀のみにては、中間に居る小生の實以て氣の毒に感じたる事毎々有之候、又土壤を送附し來りて分析を依賴したり、鑛物を送附し來りて鑑定を依賴する者も有之、小生にては力及ばざる故、夫々專門家に依賴致居候處、元來此等の專門家は、專門家となるまで莫大の時間と資本とを費し〻人々にて、既に莫大の時間と資本とを費して今日に成られ候人々なれば、此等の人々に對して何事を依賴するにも固より相當の報酬を爲さゞる可らざる筈に御座候、然し今日の日本の風習にては報酬云々は先づ第二の事となし、切めては分析なり鑑定なりの際に使用せし實際の藥物なりアルコールなり消費せし丈けの費用は辨償せざる可らざる義に有之候、然るに是れとても辨償せざるのみか、分析なり鑑定なりの結果を報道すれば是れ亦一片の禮狀のみにて事を濟まし申候、又何々に關する意見とか調査とか云ふを依賴し來る事度々有之、返事を不差出置候へば度々催促狀を遣はし、此の如き催促狀の中には必らず郵便劵一枚封入致しあり、自宅にある材料にては判明せざる故に、上野公園内帝國圖書館に一度ならず二度までも往き半日宛調査すれども、未だ充分なる要領を得ず、人に託して圖書館に至りて調査し貰ひたる事も有之候、偖其調査の結果を書送すれば、禮狀一片のみに有之候、何事に限らず依賴者は依賴事件に付き有形なり無形なり依賴者自身の利益となる義にて、自己の利益の爲めにこそ他人を依賴する義に御座候へ共、依賴されたる者は、縱令さまでの腦力、勞力、時間、原料を費さゞるとて實は相當の報酬を要求すべき權利ある者に有之候、然るに之を請求すれば、日本の今日の風習にては、ケチとか何とか惡評する次第に候、眼を閉ぢて考ふれば、實に自分勝手千萬なる次第にて、誠に顚倒の甚しき者と云ふの外なしと存候、敢て地方人に限らず、能く〳〵權利義務の事を承知し居れる者にても、亦此の如き事有之、東京にて自分の受くべき報酬に付ては最も苛酷なりとまで評判せられ、如何なる知人の依賴と雖も他人同樣なる鑑定料を嚴金に請求し、甚しきは友人の親切なる忠告に對してすら面會料、

時間料數十金さへ要求せしことありてふ英國仕込の某バリストル有之、小生は現に此バリストルより或る問題を供提せられ起稿を請求せられしことあり、此調査の爲めに上野の圖書館に一回、地學協會の圖書館に一回往きたるも、尙ほ要領を得ざりしかば、地學協會の係員に取調を依賴し置き、其後同係員と數回電話にて往復し、遂に同係員が六七年前なる倫敦の雜誌より件の材料を發見し吳れ、調査が全く出來たる故に、之をバリストルに送附し、バリストルは僅かに是れが爲めに自分の利益となりしなり、然るに如何なる事を依賴しても、將た又誰人に對しても、嚴格に報酬を請求するとて隱れなきバリストルは、此調査に對しては、其發表せしものを小生に送附し吳れたるのみに有之、小生は地學協會の係員に對し實に氣の毒に感じ申候、此の如き顚倒せる風習の爲めに、依賴者と被依賴者との中間に立てる者は氣の毒千萬、迷惑千萬に感ずる事度々有之候、要するに贈る可らざる筋に對し贈るの風習を廢絶し、正當に贈らざる可らざる者に對して報酬を贈るの風習を起さゞる可らず、是れ亦顚倒せる風習を顚倒すべきものゝ一なりと相信じ申候

(四) 贈答品の顚倒

尋常一樣の贈物に就ては、無意味なる事、寧ろ罪なきことを主意とせざる可らずと存候、然るに尋常一樣の贈物に對しては、日本今日の風習は全く顚倒致居候、即ち意味のある罪のある贈物を遣り取りする者最も多く、意味の無き罪の無き贈物をする者は極めて少數に有之候、例へば人に稀有なる珍品を贈る者、金時計を贈る者、高價なる仙臺平の袴地を贈る者、絹の反物を贈る者は、皆夫れ〴〵意味ある事罪ある事多く其間に含まれ居り候、小生は此の如き風習を廢絶致度と希望致候、然るに自分の畠にて出來たる野菜の初物(はつもの)とか、銃獵に往きて獲たる鳥獸とか、故郷より贈り來れる珍らしき物産とか、旅行先きより携へ還りし土産物とか、此の如き意味の無き罪の無き物を贈りたり贈られたりすることあれば、何となく自他の感情を通じ、賑々たる社會の善感情を呼び起し、少しく大きく言へば社會

の安寧秩序に補益することにも相成り候、然ればかくの如き贈物は決して廢さず最も行ふこと可なりと存じ候、即ち意味のある罪のある贈物をする風習を顛倒し、意味の無き罪の無き贈物する風習を行はしめざる可らず、是れ亦顛倒の風習を顛倒すべきものゝ一なりと存候

(五) イエスとノーとの顛倒

諾否、即ちイエス(然り)とノー(否)とを明言せず將た顛倒せる者は、朝鮮人最も甚しく、支那人之に次ぎ、日本人之に次げりと存候、若し日本人が一般西洋人の如くにイエスとノーを明言し、一時の不人望と惡感情とを冒すも事の諾否を瞭々然と決答する樣に相成り候へば、物事は早判りし、何事もチヤキ〳〵と疾く要領を得、無駄なる勞力、無益なる時間、徒勞なる費用を費さずとも相濟み、事業も頓に擧がり、不知不識の間に巨萬の金額も增殖し、隨て國家の富力も期年の間に加倍することに確信致候、然るにイエスとノーとを明言せず、黑と白とを決答し得ず、其中間なる鼠色の如きドッチ着かずの返事を致し、甚しきはノーとイエスとを顛倒せるより、社會の事物は何かに遲延して疾く要領を得ざる次第に御座候、今日の日本人を造らんとするは多大の要求を致さず、唯だイエスとノーとを明瞭に言ひ得る人物を一人にても多く造れば夫れにて足れりと奉存候

(六) 出版物の顛倒

西洋にては一書籍の再版三版を發行する每に材料を增訂し、紙質を善くし、總じて愈々益々改善する風習に有之候、既に初版にて若干の利益を得たる義に御座候へば、新版每に愈々益々改善するは出版者の德義なりと存候、縱し出版者の德義なりなど申さずとて、誤植を正さず、誤謬を改めず、材料をも增訂せず、舊き元の儘の材料を存置するは斯文發達上の障害とも相成候故、新版每に改善するは出版者の義務なりと致居り候、然るに日本にては再版三版に於て何等の增訂をも致さず、舊き元の材料を其儘存置するのみか、甚しきは紙質よりインキまでも初版より劣り愈々益々改惡す

るの弊あるを見受け申候、恰も當初好見本を送りて後には下劣なる品を送り、日本貿易品の聲價を外國に失落致候と同樣に有之、是等は全く顚倒せる風習に御座候へば、此風習は斷然顚倒せしむべきものと存候

結　末

之を要するに今日の社會に於ては、社會改良の爲め國民の氣風一變の爲めなりと悟れば、時には人より憎まるゝ事を決行せざるを得ずと存候、人に厭なる顏をするが辛しとて心にも無き言動を致候は、實以て社會先達の事に非ずと奉存候、社會の先達たる者は今少しく幇間的ならざる樣、今少しく待合の主人的とならざる樣相願度、人に好い顏をし好い子になり、さて一時の人望を得んもの何にても人の申す通り承諾致候へば、百年河の淸きを待つとも社會の改良、國民氣風の一變は成就し得ざる事と存候、世に幇間なる者あり、又待合の主人なる者あり幇間と申せば、小ザッパリせし白足袋を穿ち小ザッパリせし縞の羽織を着け白扇をパチ〳〵しながら御客の前に叩頭し居り、又待合の主人と申せば、如何なる御客にも笑顏を作りて厭なる顏を見せず、金とさへ見れば御辭儀し心にも無き笑を致す次第は豫て御承知の通りと存候、乍然彼等は待合の主人なり幇間なりと自から申し居り、公然と鑑札を受け其稅金をも納め居り候者故、殊の外に淡白にして瀟洒とし甚だ愛すべき點を認め候へ共、世には別に幇間たり待合の主人たる者あり、鑑札をも受けず稅金をも納めず、豪傑然慷慨家然とし、而かも客の前に憂國慨世の空涙を濺したり、但しは一時の人望を得んと心にも無き言動して始終好い子となり濟ます者、是れ實に精神上に於て全くの幇間將た待合の主人に有之、而かも其陰險なる度に至ては待合の主人將た幇間より十層百層の惡物なりと存候、然らば社會の先達たる者は今少しく心を淡白にし磊落にして幇間たり待合の主人たらざる樣偏に願申候、待合の主人たり幇間たらざる精神を以て今の社會に處するこそ實に國民の氣風を一變する端緒なりと確信致候に付、此義是非とも御實行の程願上度、是非とも御實行の程願上度と熱心の餘り、

前後クド〳〵敷御書送申上候、其間時としては失禮なる言辭をも相列べ候段何卒御海容の程奉願上候、匆々

無名の識者

[illegible]

世に全能なる者なく、全無能なる者なし、能を以て推さるゝの意外に無能なることあると共に、無能を以て目せらるゝの意外に有能なることあり、崇拜に過ぐると輕蔑に過ぐるとは兩つながら誤れるなり。其の誤れるの明白なるに拘らず、普通の褒貶は一方に偏するの甚だしく、熱なるは沸騰點以上に熱なりとし、冷なるは氷點以下に冷なりとし、而して幾多中間のものあるを顧みざらんとす、心すべきことにこそ。

王安石は曰へりき、李漢豈に韓退之を知らんや、其文を輯むるに美惡を擇ばず、子孫に示すべからざる者あり、況んや世に垂るゝをやと。是れ誠に退之を知るものゝ言、退之文に妙なるも、百篇豈に盡く妙ならんや、種類に依りては、啻に他の諸家の之に優るのみならず、凡常作家も亦た及び易からずとせず。退之の文の比較的妙なるの多きは、即ち其の傑出せる所以にして、之を稱揚するの當然ならんも、同時に無名の文の必ずしも此に劣らざるを察せざるべからず。

世界傑作一百種を選擇するの流行せし時、マクス、ミューラーの曰へりしやう、昔より傑作と定まれるあるも、首より尾まで秀でて少しの瓦石を混ぜざるは殆んど絶無とすべくホーマーの詩篇の如き、千古の絶作とせらるゝも、猶ほ往々にして冗長蕪雜の句なきに非

ず、ゲーテの作中にも、一讀興盡きて再讀の厭ふべきあり、全篇皆な珠玉、以て世界の文學とすべきはづも之れ無し、著名なる作に珠玉の多きも、凡常なるにも亦た時に珠玉の散點するを見ると。

犬養木堂の隨筆を讀むに、アダム、スミスの富國論を著はし、頃、我國にも同樣の意見を發表せし者ある由に聞けるが、其の何人なるを知り得ざるを憾むとあり。若し果してさる人のありしならば、其の何人なるの知られざるは遺憾千萬の次第なるが、スミスの如く組織立ちて論ぜるものこそなけれ、其の要點を攫み大體に於て異ならざるは、決して之れなしと限るべからず。經濟の道理は經濟に與かれる者の自然に想ひ到るべき處、多數人士の中、意見のスミスと暗合せしもの、恐らく二三のみにあらざらん。

福澤雪池は青砥藤綱の五十文の炬を買ひ十文を水に拾ひしを論じ、經濟を知らずと爲しにき。蓋し西書を讀みて金錢の唯一貨財ならざるを悟りしなるべし。該論の出てし際甲論乙駁の有樣にして、以て如何に當時經濟思想の幼稚なりしかを徵するに足る。されど此に先だつこと數十年にして既に已に之を論じ、剩へ眼識の一層透徹し、評言の一層整備せるあり、若し雪池先生にして之を讀みしならば、知らず如何の感かありたるべき。今左に全文を錄す。

論滑河搜錢

史稱。青砥藤綱。夜行過滑河。誤墜錢十文於水。輙出五十文錢。買炬。使照水搜索獲之。人或非其得不償失。藤綱曰。五十文錢。留在人間。彼是六十文。不復失一錢。其利不亦多乎。聞者悅服。我獨以爲非之者當矣。夫自米穀布帛。以至糞土之汚穢。凡存於天地之間者。莫不益於世利於人。獨錢之爲物。不唯不可衣寒者食饑者。欲充尋常一小器之用。且不可得也。然而世俗貴之。過於穀帛者。以衣食百物皆以此物可換耳。苟使衣食百物有餘。則錢又何所用乎。其所以貴者。由物之可貴而然也。藤綱燃直五十文錢。以獲十文錢。其所得惡得償其

所レ費乎。是與下獲二十文錢一而棄中五十文錢上者。一間而已矣。且如二藤綱所一レ言。設使三滑河洪深無中所レ措手。亦將下費二多錢一役中衆夫上。搜求百方期中必獲上。是狂人之爲耳。雖レ有二多寡難易之不一レ齊。其得不レ償失則一也。我故以爲非レ之者當矣。然彼固庸俗獨貴レ錢而不レ知三費レ炬之爲二可レ愛。故及レ聞二藤綱所一レ言。爽然自失。不レ足レ道也。然則藤綱搜レ錢遂無レ可レ取乎。曰。否。是藤綱故爲二此拔俗聳聽之擧一以醒レ世。其意甚深矣。當二此之時一。去レ古已遠。風俗陵遲。廉耻殆掃レ地。上下各謀レ利レ己而不レ顧二人害一。毫髮之得爽。動生二怨隙一。而其自奉輕煖甘旨極二其力一。無レ有二省約一。是禍亂之道。在位者所レ宜二最憂一也。史云。藤綱平生自奉極薄。而至レ恤レ貧賑レ窮。則傾レ橐不二顧惜一。士民感化。風俗漸敦。滑河搜レ錢。亦導レ人之一術也。彼奢侈無レ度者。聞二其愛二十文錢一。則將二惕然猛省。貪而不レ饜者。聞三其五十文錢不レ分二人我一。則赧然有レ所二慚愧一。是一擧而得レ挽下回弊風於冥々之中上者。非二鮮少一也。嗚呼。洞二見此意一。而後可レ知二其所レ利果多一也。

弘化乙巳季上浣寸雲玉置元季吉父錄舊文

雪池は青砥の謬見を指摘せしのみなるが、玆に論ぜるは先づ其の謬見を指摘し、次て一轉して別に理由の認むべきあるに言ひ及べり。彼奢侈無度者、聞其愛十文錢、則將惕然猛省、貪而不饜者、聞其五十文錢不分人我、則赧然有所慚愧、是一擧而得挽回弊風於冥々之中者、非鮮少也とあるは、料るに常人の頭腦に浮ばざる所ならん。藤綱の眞意の此の如くなりしや否やは必すべくもなし、藤綱其人の存在さへ疑はしからざるに非ざるも而も假りに史の傳ふるが如しとして事を論ぜば、雪池と寸雲と孰れが優るやは言はずして明かなり。

弘化乙巳は今より六十三年前にして、舊文を錄すとあれば、文の成りしは更に其の以前なるべし。今日に在りては寧ろ平々凡々と見ゆれども、雪池先生の青砥論にして卓見ならば、之に比し遙かに卓見なりと爲さゞるべからず。然るに玉置寸雲は津山藩士にして古賀

侗貪の門人たりしといふの知らるゝのみにて、其の名は全く聞えず、日本教育史資料の津山藩の部に侗貪の門人として稻垣寒翠及び大村桐陽の名あるも、玉暇の名なく、之に類する者もなし。彼の如く卓越の見識ありて遂に全く湮沒せるは、其の見識の偶然に出てしならんも測られざれど、少しく憾むべからずとせず、履歴を知る人あらば、乞ふ一報を吝まざらんことを。

賭博、富籤并に投機

文學博士 谷本富

昨今大阪地方に於ては臺灣彩票の檢擧始まり、法曹間是非の議論太だ喧しきが如し、而して客秋は又實に夫の競馬會社の事に關し、世上物議の頗る騷然たるものありしを想へば、此の際必ずや深く此等の事爲に就きて研究する所あり、以て論者の辯爭に向つて多少の判斷材料を供給するは、又吾儕の務なるべし、況んや戰捷の後、起業相踵ぎて興り、泡沫的投機亦鮮からず、人心洶々たる者あるをや、乃ち今茲に是等を一束とし、孰れも皆人類射倖心の發動と看做して是を概論せんとするは決して閑事業に非ざるべしと信ずるなり。

敢て問ふ、賭博と謂ひ、富籤と謂ふは、爾く罪惡視すべきものなりや否や、是れ一見極めて明瞭なるに似て、實は太だ判決し難き事なりとす。蓋し由來賭博と謂ひ、富籤と謂ふ者、其の種類極めて多し、之れを擧げて一概に罪惡視するは素より不當なりとす。勿論法律の條文明に其の種類を列擧し、或は其の範圍を限劃したる場合にあつては、之れに牴觸するものは、直に罪科と看做して處罰すべきは當然なりと雖も、然れども列擧主義に據れる者はともあれ、單に簡短なる釋義樣の文辭を掲げて其の範圍を限劃したる者は、動もす

れば曖昧にして適用に困むとあるべし。況んや之れを以て道德上の不善なり惡事なりと斷定するをや。是れ決して輕々概論するを許さゞるべき筈なり。

否、余輩の稱に按ずる所にては、賭博と謂ひ、富籤と謂ふは、必ずしも道德上不善にあらず、惡事にあらず從つて法律上にても寧ろ處罰せざるを以て其の本則とし、唯だ或る特殊の場合に於てのみ之れを咎むると至當なりとす語を變じて云へば、賭博富籤の嗜慾は元來深く人間の天性に根柢せる者にして、尋常一般の場合に於ては敢て他の干渉を須ひざるべきものとなすなり。請ふ些か詳論せんか。

抑々人は何故に爾く賭博を好み、富籤を欲するかは、是れ實に一個の未了の問題なり。然り、或は此くの如きは物質慾に惑溺するの弊なり。金錢を過重するの弊なりと言ふ者あらん、余輩亦之れを許す。而かも若し之れを以て悉皆網羅し盡くせりとせば、過てり。實際上にては必ずしも結果其の者の如何は暫く措いて問はず、賭博、富籤其の事が直に愉快を與ふる多きを以て、頻に之れに耽湎する者あれば、敢て稀しき事にあらざる如くなればなり。去れば論者は更に又他の方面よりして、賭博と謂ひ富籤と謂ふは、何故に爾く愉快を與ふるものなるかを、心理的に考究するの必要ありとす。

或は言ふ者あらん、此くの如きは人間固有の射倖心に由るとせば可なりと。然り、而かも所謂射倖心なるもの果して何か、是れ亦一個の疑問なり。射倖心果して本能の一種たらば、意識的に分析を容るすの餘地あるか無きか、是れ少しく論辯せざるべからず。近時兒童研究の教ふる所に據れば、凡そ兒童には早く夙に一種の賭博的本能とも稱すべきものゝ見はれたり、是れ殆んど諸民族共通の狀態にして、到處賭博類似の遊戲彼等の間に行はるゝを見て知るべしとす。而かも此の本能を措きて、尙ほ別に賭博富籤の嗜好出りて來る所ありとは余輩の今玆に指摘し說明せんとする所なり。

即ち余輩の觀る所にては、賭博と謂ひ、富籤と謂ふは、畢竟一種の冒險にして、而して冒險は都べて人間

に莫大の愉快を與ふる者なるより、賭博富籤の慾嗜は來るなりとす。

然り而して冒險の爾く愉快を與ふる所以に就きては、余輩別に說あり。之れを分解して四個の因子に歸せしめんとす。其の一は冒險は變化を意味す、變化は愉快にして、不變は退屈を覺ゆるは、贅辯を待ちて後ちに知る所にあらず。其の二冒險は急激を意味す。急激なれば心身緊張す、緊張の愉快にして、弛緩の不愉快なる、亦一般の知る所なり。其の三は冒險は敢勇を意味す、敢勇の男子的快樂なるは、固より爭ふべからず、最後に冒險は凌駕を意味す。即ち自己を擴張し、等輩に超越し、衆目の羨望する所となるを欲するは、人情なり。

之れを要するに、賭博富籤の嗜慾は、其の始は人間固有の本能に出で、冒險の愉快に基づき、而して又金錢の渴望に由るべしと觀るなり。金錢の欲求は素より其の第一要素にはあらざるなり。古來英雄豪傑の相競ひて中原に鹿を爭へりしが如きは、皆是れ純然たる賭博なり、而かも其の望む所は必ずしも金錢にあらざるや、恐らく言ふを待たざるべし。極言すれば古今東西人文の發達進步なる者は、幾多英雄豪傑の賭博に負ふ所大なりと做すも、强ち不可なからんか。

但し斯く言へばとて、余輩は賭博富籤の類は人慾を逞くするに任せて毫も干渉を許さゞるべしと主張するにはあらず、否、通例所謂賭博富籤の上には、惡弊の見るべきもの頗る顯著なるありとせば、余輩は之れに對して適宜制限を加ふるの必要を認むるに躊躇せざるべきは、太だ明なりとす。蓋し彼の本能の發動は一切不羈獨立なるべしとし、其の滿足には何等束縛を施すを許さずと云ふが如きは、素より必ずしも余輩の主張する所にあらず。冒險の快は太だ快なりと雖も、又甚だ危き事たる別に喋々を須ひざるべし。斯くて一旦賭博に指を染むる者は、容易に耽溺して、復た正業を顧みず、終に墮落し沮喪するに至る者多きは、吾人の夜目覩する所なれば、寧ろ之れを警戒するを以て、人の利益とし、社會の利益とすべし。將た又富籤にお

つては其の弊害より賭博の如く甚しからざるべしと雖も、然れども設し倖に大金を贏得たる場合に於ては却つて其の身を敗滅するの基と成ると、比々皆然りと謂つて可なるは、又余輩の日常數々見聞する所なれば、之れも同じく本人の爲め、社會の爲めに、警戒するを好しと信ず。

即ち余輩の卑見にては、賭博幷に富籤は其の者直に不善の事にもあらず、非行とも呼ぶべきにあらざれば、必ずしも法律を以て嚴密に禁制すべきにあらず、法律は寧ろ一層寛弘ならんことを望む、而かも之れと同時に道德教訓としては充分丁寧に其の流毒を警戒するを肝要なりと做すなり。若し夫れ賭博富籤は正業なりやと謂はゞ、余輩は斷然否と答ふるに躊躇せず。蓋し賭博富籤に由る如きは、一方に獲る所あらば、又一方に失ふ所あり、全體を通算すれば、毫厘も富を增殖することなし、此くの如きは決して正業にあらずと知るべし。賭博富籤は他の正當なる事業の一方便に供せらるゝ時に於て、僅に正業の末に加はゝるを得べきも、其の本來の性質は飽迄も遊戲たるに過ぎず、而かも危險なる伴隨あるを免れざるの遊戲なれば、余輩は寧ろ之れに近寄らざらんことを勸めて止まざるなり。

更に之れ迄法制史上より考究するに、昔時は賭博富籤に關する法律太だ嚴酷なりしを認めずんばあるべからず。外國の事例は暫く之れを措き、單に我が國史に徵するも、其の跡頗る歷然たり。即ち我が國に於て賭博富籤の禁制、史上に見えたるは、天平勝寶六年十月四日の官符に、禁斷雙六事とあるを嚆矢とす。當時之れを犯す者は、六位以下は、男と女とを論ぜず、決杖一百、蔭贖を須ひず。五位の者は現任を解き、幷に位祿、位田を取上げ、四位以上は、封戶、職田を給することを停むとあり。鎌倉時代にても亦之れを承繼ぎたりしは「法曹至要抄」などを見て知るべし、其の後ち「貞永式目新編追加」には嘉祿、延應と追々歲月を經過するに從つて、嚴重に禁斷し、終に寛元々年の制度に至つては、侍ならば斟酌を加へて所職、所帶を沒收すべく、下賤の輩には、初犯、再犯は指を切り、三犯に及

ば、伊豆大島に遠流すべし、と定めたり。斯くて德川時代に及びても、依然嚴酷に掟する所あり。享保以後の高札には、主犯者は流罪或は死罪に處すべしと見えたり『御定書百個條』中にも、代々の禁制採錄せられたるが、孰れも重きは遠島より、輕きは過料に至れり。而かも此等の嚴令酷法は當時果して能く賭博富籤の嗜欲を杜絕し得たりしやと云はば、頗る疑はし。否、舊幕政の末路には、都鄙到處富籤の興行太だ盛なりしと聞けり。乃ち明治維新、百度更始に際して、元年十二月の御布告を以て、富籤興行を嚴禁するありしが、終に現行の刑法制定せらるゝに及びて、賭博富籤共に風俗を害すの罪として、孰れも一定期間の重禁錮に處し若干の罰金を附加する事となれるは、人の知る所なり。之れを舊法に比すれば、固より太だ輕し、而かも刑法改正草案に於ては更に一步を進め、原則としては賭博は處罰せざる事となれるやう見受けたり。又富籤に關しても、旣に勸業、貯蓄兩債劵の割增附きなるは、富籤と殆んど相擇ばざるあり。競馬會社も素より允許を承けて興行せるなるが上に、夫の臺灣彩票に關しても、近頃司法省民刑局長の指令なる者、頗る寬容の傾あり。『大阪每日新聞』連載する所に據れば、我が京都帝國大學敎授たる仁井田、勝本、國松、諸賢の意見も亦皆不問主義を執れる樣なり、果して然らば大勢の趣く所自ら定るありと謂つて可ならん。此の際に方つて余輩は賭博富籤の性質に就いて多少の說明を試み、以て道德敎育上の警戒を望むは、强ち無用の業に非ざるべしと信じて、斯くは禿筆を呵するなり。

最後に投機に就いても、亦余輩は右述ぶる所と同論法を用ひて是を警戒するを必要ありとせり。然り、投機は素より決して不善にあらず、惡事にあらず、寧ろ活動進取の由つて來る所なりと謂ふも可ならん。苟くも新起業としさへ言はば、一概に泡沫的なりと看做して、之れを禁遏せんとするは過てり。世界は未だ曾て斯く悲觀するを許さず、寧ろ勇往邁進して怠るなからんとを望むや切なりとす。唯だ起業の計劃者に卒誠意の存するなく、研究調査の太だ粗漏なるあり、

入者亦徒に利益分配の急且大ならんとを欲して、注意を缺くが如きは、甚だ不可なり。是れ確に起業の德義問題なり、豫め充分警戒を加ふるの必要なり。今や戰後新事業日に月に勃興す、知らず是等新會社の多數は果して眞に泡沫的なりや否や、是れ先づ考察せざるべからず、株式一時の浮沈の如きは、未だ以て之れが範となすに足らざる也。

平清盛論（日本思想史より見たる）

山路愛山

（一）

頃日日本の思想史を調ぶる用事ありて諸書を抽讀しけるに連れて興感を催せしこと多し。近頃和歌に宗教なしと論じたる人もあり。又耶蘇教の教師などは日本人は宗教に冷淡なり。日本の歴史には宗教の煩悶なしなどゝも云ひたり。されど是は全く誤解なり。世界の人は誰れも同じく人なり。誰れも宗教なしには存在し得るものに非ず。日本の歴史は正しく其證據なり。

（二）

興味ある日本の歴史を書かんと思はゞ日本人民の思想史を書くべし。英雄豪傑も思想史の上より見れば水上の萍なり。思想は血肉なり。制度は皮殻なり。眞の日

本人民は唯、日本思想史の研究に依りて知らるゝなり。世に人間は思想を要せずと思ふものもあり。人は思想することなしに地上に立ち得べしと信ずるものもあり。されど是れ人は骨なしに活動し得べしとするの類のみ。歴史は人の思想せざる能はざる動物なるを示す。思想は人の一半なり。全體として人を考ふる時は我等は思想する人を想はざるを得ざるなり。人の歴史を書きて其思想の變遷を閑却するものあらば是れ書きかけたる肖像にして書き了(オハ)りたる肖像には非るなり。

（三）

平家物語に曰く「祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を現す。驕れる者久しからず、只春の夜の夢の如し、猛き人も遂には亡びぬ。偏に風の前の塵に同じ、遠く異朝をとぶらふに秦の趙高、漢の王莽、梁の周伊、唐の祿山、此等は皆舊主先皇の政にも從はず。樂を極め諫をも思ひ入れず、天下の亂れんことをも悟らずして民間の愁ふる所をも知らざりしかば、久しからずして亡びにし者どもなり。近く本朝を窺ふに承平の將門、天慶の純友、康和の義親、平治の信賴、此等は驕れることも猛き心も皆とりどりなりしかども間近くは六波羅の入道、前の太政大臣、平朝臣清盛公と申しゝ人の有樣、傳へ承るこそ心も言葉も及ばれね」と。清盛は眞(マコト)に傍若無人の亂暴男なり。公卿は藤原氏に限り門閥の鐵關、牢として破るべからざりし世に敢て之を破りたり。先祖國香より正盛に至るまで六代、共に諸國の受領にして殿上の仙籍を許されざる家柄なりしに歷史と傳説とを無視し、其身は一躍して太政大臣となり一門は公卿に連りたるもの多く莊園は日本國の半に過ぎたり。猶其上に天子を門生同樣にし、法王を押込め奉り、其頃王法の威力と並んで世の恐怖する所たりし僧權を嘲弄し、火を放ちて南都を燒きたり、平家物語の作者が其傳記を評して「心も言葉も及ばれね」と仰天したるは尤(モツトモ)の事にして、先(マヅ)は晴天に雷が落ちたるも同樣なりと云ふべし。さらば清盛は史上の不思議にして歷史の連鎖を破りたる生損(ウマレソコナ)ひなる乎。何ぞ其れ然らん。彼れも亦日

本の思想史に浮びたる蹟に過ぎず。

（四）

若し人間萬事を唯經濟的現象として說明するカール、マルクスの徒をして清盛の事を評せしめば彼れは其社會觀を基礎として清盛の勃興を說明するならん。清盛の事業は成程或部分にては物質的に說明せられざるには非ず。先づ藤原氏の政治を見るに其始は成るべく武人を抑ふるやうにしたり。貞盛秀郷が將門を伐ち、賴義が貞任、宗任を亡ぼし、義家が武衛家衛を攻めたりしも勳賞行はれしこと僅に受領には過ぎざりき。是れはたとへば、工場に働く、勞働者に莫大の、功績ありとても資本家の側よりは、成るたけ其功勞を小さく認め報酬を少くするが如し。されど其頃は武人も天下の要地は貴種たる藤氏の物となるが當然なりとて諦らめ居たれば別段苦情も鳴らさず。却て藤原氏の家門に伺候して其機嫌を取り、其寵愛を得るを以て滿足したり。即ち將門が少年の日名簿を攝政忠平に奉りて其家人たり。賴光が道長に事へ、賴信が道兼に事へしが如し。是れはたとへば勞働者が資本家の家に出入して其恩を誇るが如し。さりながら時世は此に止まらず。追々武人が大切がらるゝ世とはなりたり。白河の御時より院政と云ふこと起りて北面の武士と云ふものあり、威權を弄したること是れ其一なり。藤原氏が威張りたるは武人を門下に伺候せしめて其爪牙としたればなり。白河院も此秘密を看破し玉ひて直ちに武人を院中に伺候せしめられたり。是れ則ち北面の始めなり。武士の内には身柄賤しきものながら下北面より上北面に上り、上北面より殿上の交を許されしものもあり。自ら傳奏の役の如くなりて君命を出納したるものもあり。從つて左右なき切者と稱せられて社鼠城狐の威を振ひしものもあり。後には公家殿上人をも事とせす、過分の振舞を爲すものも多かりき。其後皇室は當今と院との二に分れ、藤原氏又家運の末になりて一族互に權を爭ふに至りて武士の力を待つこと更に多くなりぬ。是れ其二なり。されば賴長も爲義を賴んで事を擧げ、鳥羽院は內亂の生ずべきを計りて內裏へ參るべき武士の

交名を注し置かれ、信頼の事を擧ぐるときも義朝に懸志を表し、義朝をして「かやうに御意に懸けられ候條身に取りて大慶なり。いかなる御大事をも承はりて一方は固め申さん」と約するに至らしめたり。昔しは人らしくも待遇せられざりし武士も此に至りて天子宰相の好運に缺くべからざる人なりとせられたり。武士何ぞ自ら其力を自覺せざるを得んや。此力の自覺はやがて武士が他人の爲めならずして自己の爲めに其力を用ふるの時期を生ぜざるを得ず。清盛は即ち武士の自覺を代表したるものに過ぎず。是れはたとへば勞働者が資本家の盛衰興廢一に懸りて自己の力に在るを知ると共に自己の位置を自覺し、一轉して共同聯合の勢力に依りて逆まに資本家を征伐するに等し。此點より見れば清盛の傳記は社會學の好材料にして其勃興は物質的に説明し得べきものなり。

（五）

さりながら是は唯だ半面の説明なり。我等は之れに思想史の説明を加へざるべからず。事の根底に溯れば清盛の勃興は武士の勃興なり。武士の勃興は武士の醒覺を意味し。更に田舍の醒覺を意味す。何故に田舍は醒覺したるや。我等は日本國文學の發達を以て其一原因に歸せんと欲す。我等嘗て空海の性靈集、菅家の文草。都氏江氏の文集を讀み其頃までの日本文學は即ち支那文學に過ぎざるを知り、かくては思想の開拓甚だ難かるべきを想はざるを得ざりき。そは自國の語に非る文學の廣く民間に讀まれんことは固より期し難きことなればなり。何の時にても知識は勢力なり。知識が外國語の寳庫に鎖され少數の人のみ其主人たる間は迷信が世を支配し、門閥が恰も天の定めたる法律の如く人間を指揮したるも亦宜なり。既にして日本人民は自己の語と自己の文字にて立派に自己の思想を顯はし得ることを認識するに至れり。源氏物語の出現是なり。たとへば此物語は京都の貴族の深宮に翫ばれたる寫本に過ぎざりしにもせよ、日本思想史より見れば日本が漢文學の壓制より全然解脱し得べきことを確實に證據立てたるものなり。是より後、日本人は始めて容易に知識の

寶庫に入るを得んとす。我等はたとへ源氏物語を以てルーテル聖書翻譯に比するを得ざるも、其外國語の暴威に苦しめる精神上の奴隷を解脱せしめたる功に至つては必ず多大なるものありしを信ず。斯くて國文學は漢文學と相並んで知識は漸く貴族ならざる階級にまで及ばんとす。必要は發明を生む、印刷術は此間に起りて書籍出版の事漸く端緒を發せり。我等は不幸にして日本思想史に大關係ある此技術の歴史を詳にする能はず。されど法然既に其選擇集を上板して天下に流布せしめたれば此技術が當時に在りては既に新しきものに非りしを察すべく、從つて板本の世に行はれし起源を源氏著作の時代の後、保元平治の前位に假定するも不可なきに似たり。そは何れにしても板本を用ひて書籍を世間に廣むるは是亦知識を民間に流布する所以にして武士の醒覺は之に待つこと多かりしなるべし。

（六）

さりながら知識の普及は必しも典故の破壊を意味するものに非ず。典故は唯知識の光に照らして其存在の理由を失ひたる時にのみ破壊せらるゝなり。何れの時代にても制度文物は之を維持すべき思想ありて相伴ふ。若し其思想を破壊し了りて獨り其制度文物をのみ維持せんとせば是れ生命なき木偶を拜跪せしめんとするものに似て其勢危しと謂ふべし。保元物語に曰く「末代とは云ひながらさすが天子の御運は凡夫の思ふ所にあらず。天照大神正八幡宮の御計なり。七千餘座の神。殊には三十番神、朝家を守りたまふ」。又曰く「南には正八幡大菩薩、男山に跡を垂れて京都を守り、北には賀茂大明神、天滿天神、東西には祇園、松尾、大原野等光を雙べて日夜に結番し、禁闕を守り給ふ。縱ひ逆臣亂をなすとも、いかでか靈神の助なかるべき。又曰く「正法念經には初め胎中に宿り給ふ時より諸天之を守護す。三十三天其德を別ち與へ給ふ故に天子と稱すと云へり。彼の經には三十七法具定せるを國王とす。常に惠み施しを行ひて惜まず、柔和にして怒らず、正直に理りて偏頗なし。古き道を正しくして捨てず。能く人の好惡を知り、能く世の理亂を鑑み。貪慾なく邪

見なく一切を憐み十善を行す」と是は皇室に關する時代の信仰を述べたるものなり。平家物語にも又此世こそ王位も無下に輕けれ、昔は宣旨に向ひて讀みければ枯たる草木も忽に花咲き實なり、飛ぶ鳥も從ひきと記し、頼朝の範頼に與へたる書には「大方は帝王の御事今に始めぬ事なれども木曾はやまの宮、鳥羽の四宮討奉せて冥がつきて失せにき。平家又三條高倉宮を討ち奉りてかやうにうせんとすることなり」と云へり。皇室の尊嚴は宗教心と相表裏すること此の如し。其頃藤原氏は世々天子の外戚たり。天子亦藤原氏の外戚たり。皇室と藤原氏とは天上の複星の如く殆んど分つべからず。天子の尊き所以はやがて藤原氏の尊き所以なりしかば天子の尊嚴を支へたる宗教心は同じく藤原氏の威權をも支へ春日の神威赫々たると共に藤氏の威力も亦衰へざりき。されば菅原道眞の右大臣たりし時の辭表にも臣地非貴種。家是儒林とあり。菅公英雄なりと雖も藤原氏は貴種にして及び難きものなりと諦められしなり。此點より考ふれば佛者が佛法王法は一雙の法なり。鳥の二の翼の如し。車の二の輪の如し。一もかけては不可なり。故に佛法をもて王法を護り、王法をもて佛法を崇むと云ひしは事實其通の事にして當時の制度は當時の信仰の上に坐りたるものなり。然るに此處に世態一變して佛法大に頽れ信仰次第に動搖するに至れり尤も佛法の破壞は久しき歷史を有するものにて三善淸行の上表にも「國分寺の僧は皆是れ無慚の徒なり。妻を蓄へ、室を營み、田を耕して商價す」とも「諸國百姓の課役を逃れ、租調を逋ふ者、私かに自ら落髮し、猥りに法服を着く天下の人民三分の二は皆是れ禿首の者なり、此れ皆な家に妻子を蓄へ、口に腥膻を啖し、形は沙門に似て心は屠兒の如し。況んや其甚しき者は聚りて群盜を爲し、竊かに錢貨を鑄り、天刑を畏れず、佛律を顧みず。若し國司法に依りて勘糺すれば則ち霧合雲集し競ふて暴逆を爲す」ともあり是れは延喜年間の事なれば淸盛より二百年の前の事なり。其後莊園諸國に起るに及んで山門南都も亦各莊園の多きに誇りて儼然たる一個の大俗權となり、傳道の

沙汰は全く閑却して唯寺門の富貴を計る俗人とは、なつてけり。但し此時までは舊信仰に異議を唱ふるものなく、人民皆な僧徒の暴横には泣きながら猶ほ宗教の權威は彼等に在りとて畏縮し居たる所に美作國稻岡の人俗姓は漆間氏に法然房と云ふものあり。其始め山門の學徒なりけるが、承安五年四十二歳にして始めて念佛宗を唱へ出したり。是は淸盛全盛の時の事なり。抑も念佛宗と云ふは決して珍らしきものにあらず。支那にては曇鸞、道綽、善導以來久しき歷史を有し、殊に善導は此宗旨の中興の祖とも云ふべきものにして法然の起請文にも一天四海、善導和尚を以て善知識と仰ぎ、貴賤上下、皆な念佛者となると記したり。日本にも法然が念佛宗を唱へし年より百八十六年前の永觀二年に叡山に慧信僧都と云ふもあり、往生要集三卷を著はし念佛の敎は末代の衆生には相應のものなる由を述べ、法然の開宗に先つ五六十年なる天治の頃には融通念佛なるもの行はれたり。是れ皆な春の催して花の蕾の次第に開けかゝりたるものなれども、其全く民間流布の功を爲したるものは實に法然なり。其頃までの宗教家は莊園增加の計にあらざれば古流の功德を積み、平民の信心に緣遠き修行を誇りたるに過ぎず。平家物語に文覺の荒行を記して十九の年道心起し、髻切り修行に出でんとしけるが、修行と云ふはいか程の事やあらん、ためし見んとて六月の日の草もゆるがず照りたるに、或片山里の藪の中へはいり。裸になり、仰のけに伏す。虻ぞ、蚊ぞ、蜂蟻など云ふ毒蟲どもが身にひしと取りつきて刺し喰ひなどしけれども些とも身をも働かさず、七日までは起き上らず。八日といふに起き上りて修行と云ふは是程の大事やあらんと人に問ひたりとあるは其一例なり。かゝる間に法然は念佛の一流を唱へ出し、簡易直截なる法門を以て直ちに人民の心胸に訴へたり。一言にして曰へば寺門に籠居し、慣習の威を負ひ、富貴に驕りたる僧徒を彼等の爲すまゝに一任して、人民の心胸を以て其戰場とし直ちに精神上の戰鬪を開始したるなり。南都北嶺は此に於て始めて其有害無益の存在物たるに過ぎざる事實を立證せられた

り。總ての宗規、總ての宗學、總ての知識、總ての思想は殆んど人生と沒交涉なる空影に過ぎざることも間接に暗示せられたり。斯くて人心は始めて大なる動搖を感じたり。王法と相纏糾して離るべからざる古き佛法は斯くして大打擊を蒙れり。制度文物を維持すべき思想既に動搖を免れず。清盛の平然として典故を破壞し去りたる亦宜ならずや。此思想の革命時代に逢はざれば清盛もあれ程の亂暴を爲すまじきなり。

(七)

賴山陽は禪學は北條氏を驅りて天皇を遠島に遷し參らするが如き不孝不忠を敢てせしむるに至りたりと論じたり。禪家之を聞かば勿論異論あるべし。されど新思想の起ると共に、舊制度の輕蔑せらるゝこと敢て珍らしからず。法然の念佛宗起りしより禪宗も亦起り、法然を以て「プロテスタント」のルーテルに比すれば其位置恰も加特利教のロヨラに比すべき保守的反動の代表者日蓮法師も起ち、思想の波、激して又激するに至つて社會の制度も亦大に動搖し、遂に太平記時代に於ては、「國に帝王あるは費多し、禁闕の前にて馬を下るは煩はし、所詮帝王なくてかなはぬことならば木にても銅(カネ)にても造るべし、生きたる帝王は入らぬものなり」など放言するものを生ずるに至りたり。新思想の發生は些事に非ず。識者の三思すべき所なり。清盛を論ずるにつきて筆の序なれば併せて此に及ぶものなり。



獨逸の議員選擧

『ナショナルレビュー』

英國諸新聞は一般に、獨逸の總選擧を論ずるに當り、賢く謹愼を守りつゝあるに、ピユーロー侯並に彼の御用新聞等は、遲疑するところなく、「政府に不利益なる投票はこれ敵國に利益なる投票なり」と云へり、言ふまでもなく獨逸政府は此「敵國」なる語によつて、我大英國を指稱するなり、左れどこはタイムスが選擧の夕に就いて記したる鋒鋩鋭き論文に於て指摘したる如く、恐らくは我英國を利するもの現在頗る我に益するところある彼の政策に對し、それに信任を示す國民の投票に越すものあらじ、拙くもピユーロー侯は獨逸を彼れが曾て歐洲大陸の仲介者たりし位置より引下して、最も不快なる孤立の狀態に陷らしめ、之に反して彼は却つて我大英國をして前古未曾有のものとならしむるに至れり、全歐國の獨逸黨における勢望を有する一强國とならしむるに至れり、數年前まで吾人は自ら持すること獨逸人の踏藁坐の如く、獨逸に於ては甚だ輕蔑せられ、その他の諸國、特に佛蘭西と露西亞とに於ては憎惡せられぬ、然るに今日に在つては獨逸の政府側は疑もなく猶ほ吾人を憎む、去れど最早や輕蔑はせず、而して他の諸國に於ては吾人はその尊敬と善意とを受く、彼等はチユートン民族の侵蝕に反抗する、歐洲の自由と獨立との主たる保護者なりとせり、如上の凡てに對して吾人は實に廣くいはゞ獨逸政府、特にいはゞピユーロー侯に多大の感謝なかるべからず、侯は辣腕によつて到るところ自ら自己の術中に陷りたるなり、吾人のボーア人に敗衂を見ると信ずるや、彼はその地における英帝國の沒落の後には、獲物の大なる分配を得ん爲代つて入らんと欲したりき、斯くて南亞戰爭の、勝敗の數未だ明かならざる間に在つては終始一貫して吾人に敵意を示したりき、こは元より空なる希望を基として直に思考を生む一小政治家の誤算なれど、想へば又明瞭地に自己の手を示し、之によつて眞率、眞直、懷疑心なき英國民をしてすら、獨逸の友情の虛僞なるを認めしめ、且つ協約上の英獨同盟政略は吾人に取りての大謬なりしを知らしむるに至れるは、ピユーロー侯並に獨逸政府の疎忽なり、幸にも佛蘭西も亦吾人と同じく彼のウイルヘルム帝國の見え透きたる詭計には乘ぜられざりき、斯くて自然の勢英佛兩國の關係は自らに變化を見るに至れり、伯爵ピユーロー氏はデルカツセ氏を倒したるが爲に侯爵とせられぬ、更に親睦策を案出することに對して王となるべき資格を有せず、現在帝國

の元老たる斯ゝる大恩人の失職を欲すとせば、吾が英人並に佛人は實に一忘恩者たらざる可からず、彼にして獨逸の國政に關しその首領として止まる間は、稍半睡的なる吾が同胞をして無雜作に服從せし昔日の態度に歸らしめざるは安し、去れば吾人はビユーロー主義の繼續を指示するかぎりに於て、第一期議員選擧の結果を喜ぶものなり。

軍備廢止の提議

『グラスゴー、レコールド』

我東京通信員は、日本政府が海牙會議に提出せらるゝ軍備廢止問題に贊成なりと云ふ重要なる報告をなせり、彼が此政略の主張に對し自己の善意ある態度を明確にせんとするは、疑もなく列國の吃驚するところなるべし、彼が支那及び廣く東亞に於て勢力範圍を擴めん爲に、從來畫策し來れる成案あるは一點の不審あらず、彼は今滿洲に立脚地を得たれば其の支那における兵力の根據を永久ならしめんと欲するは明白なるところ、更に露西亞諸新聞は、日本は又朝鮮を以て附屬國となさんと勉めつゝありといへり。

然るに日本は近來の行動にて再び全世界を驚かせり、彼が露國に壓碎的大敗衂を與へし事と、彼がポーツマス條約にて、假令滑脫に富めりとはいへ彼程の大帝國に對して寬大なる條件にて應諾したりし事とは猶は異常となすべきにあらず。吾人は露國が、日本と和局を結びし後、如何に絕望的位置に立つて猶は



THE CZAR'S CHRISTMAS-TREE.
—*Humoristische Blaetter* (Vienna).

日本と戰鬪を續けたりしならんかを知りぬ、露國には社會主義者あり反亂あり、財政の困難あり、若し彼れの對陣區域の一層擴張せられたらんには、その結果たるや日本に對して今有るよりは一層退讓的條件ならざるべからざりしなり。

されば之に見るところあり、世界列强中の一等國の班に入りたる一新興國、而して他によりて、國民の大なる戰勝の誇を以て活躍すべく、その位置を鞏固にせんとの壯大なる計畫あるべしと想像せらるゝ新興國が、重き軍備の負擔を減ぜん爲、その將來に對する海陸軍の計畫を棄てんとする際、恰も著しき且つ印象力ある一先例は與へられぬ。日本は他の大なる軍備を有する諸國の如く、經費の異常なる負擔は痛く商工業の發展に害あるを感ずること疑なく、若し軍備廢止が國家の保護に何等の危惧なしとせば、それによつて助けを得ることを頼る喜ぶものなるべし。

亞米利加合衆國並に我英國の代表者と共に日本帝國の大使も亦實際的政略として軍備廢止を主張すべき權利を與へらるべし、聞くところによれば獨逸と墺太利とは此提案には反對者たるべく、而して此獨逸の態度の爲に、佛蘭西並に多分は露國及び伊太利も亦、之を現在には行ふべからずと主張すべしとのことなり、されど、假令全體ならずとも、多くの小國は元より此軍備の負擔を輕減せんことには賛成なるべく、獨逸と雖も此軍備廢止が議論の一問題たるを理解して、海牙會議に一代表者を送ることは有り得べし、去れど此「軍備廢止」てふ文字を單にその備忘錄中のものとさんとする平和會議は、恰も一部の禁令を論ずるを拒みし酒會議と等しく笑ふべきものなるべし。

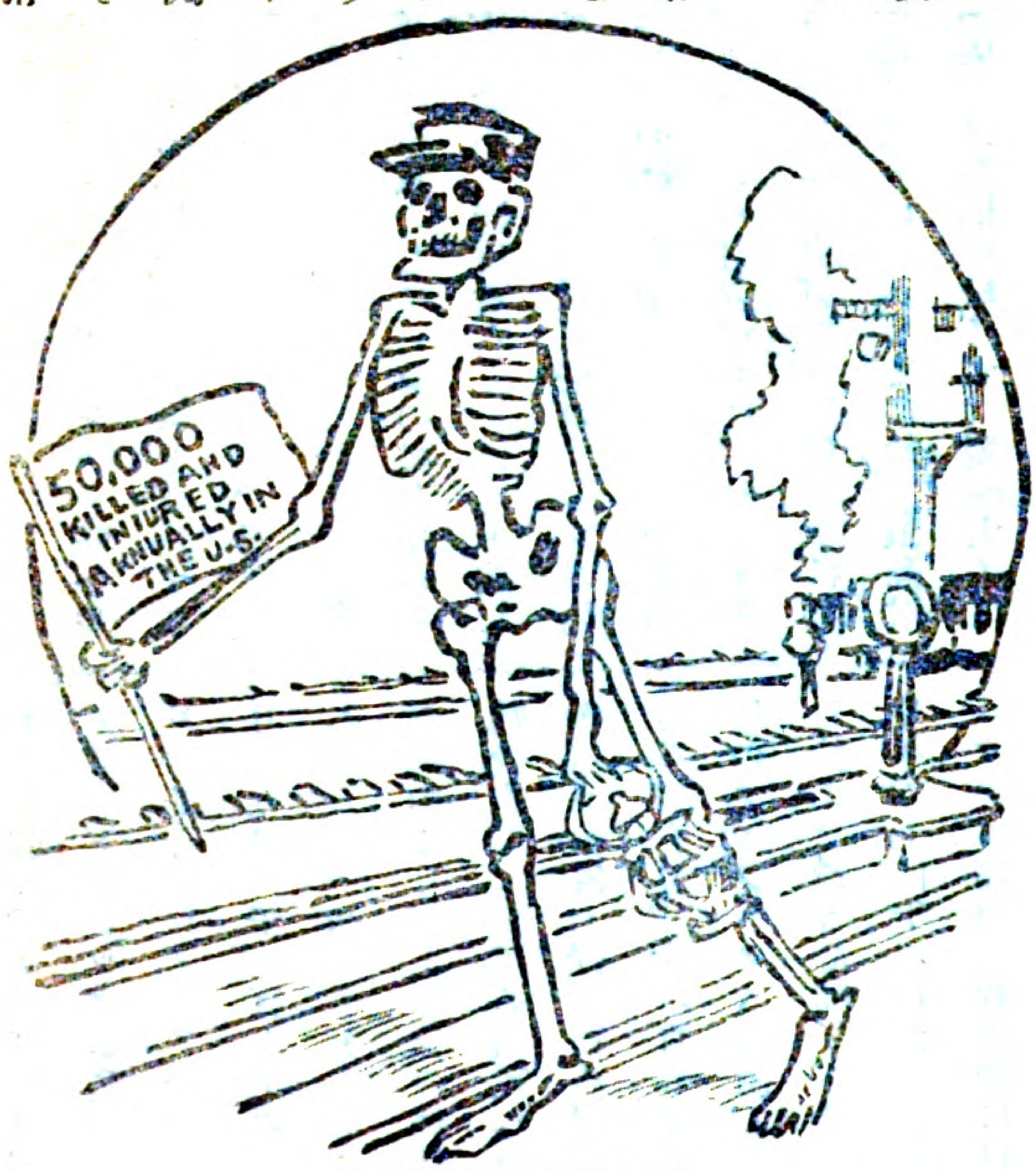
厚顏なる讒謗

テーグリヒ、ルンドシャウ紙は露國新聞ノオエ、ヴレミャが、年頭の所感として、英露の接近を論じ手酷しく獨逸及獨逸皇帝ヰルヘルム陛下を難じたるに對し說を爲していはく、かくの如く兩國の接近の下に獨乙及獨帝を誹難し、更に進んで、輓近日露間に多事なりしも、英吉利が之が仲介者となつて調停せしものなりとの露紙の所說は下の如きものなり。

日本との戰は其結果延いて他の歐洲列國との關係に於て還償を喚起すに至れり、此還償は今や其一歩を着けんとす。抑々絕東に於ける露國の巧妙なる政略を行ひ、隨つて遂に日露の間干戈を交ゆるの止むなきに至らしめたるは有爲なる代理者の爲せる業なりき。自ら伯林の奧深くに潛伏せる代理者の業なりき。フォン、プラントの如き有爲なる外交家は多年、日淸兩國を合從して以て露國に當らしめ、露國をして此兩國を挑發し刺戟したりき。爾來吾人は二三の政客が秘事を漏せる結果、膠州灣の占領より生じたる露國四十年の歷史に亘りて切迫せる危機に際し、其斷乎たる命旨は一に伯林而もカイゼル維廉剌らの手より出でたるものなるを知りぬ。此措置たる西方亞細亞に於ける獨國の行

ならしむるものなるが故に、又若日本が勝つとも亦打負くるとも露國は之が爲スラブ民族の保護を棄絶すべきを、精妙しくも倩して、獨逸はあらゆる計略を運らせり、是或は露國は日本より旅順を委棄せしめ自ら之を占領し、之が爲め漸く熟せんとせる日露間の交誼を永久に破らんとするの下心にあらざる無き乎。

かく苦心慘　して熟慮せる結果露本國に於ける露國利害の困難なる點は常に亞細亞の版圖に存す、而して此亞細亞の版圖に取りての一國その者に外ならず、との揣摩又倩疑の念は久しく在聖彼得堡英獨兩國大使間の爭鬩を逞しうせしめたり。かくの如き奸猾極まる獨逸國の公々然たる猾計の後、露國が印度へ向けて動かすべき遠征的分遣隊を紀念する料に英露接近は生じたるなり、假令此接近の唯一の理由とする所は分遣隊を紀念する代りにありといふに非らずとするも、而も此措處たるや實に正當なる遁辭たるを失はざるなり。



SHORTEN HIS HOURS.
Death is working overtime on all the railroads, and if Congress can reduce his labors it can't be done too quickly.
—Bartholomew in the Minneapolis *Journal*.

かくお引合に出されたる獨逸の側に於ても言ふとは夥し、吾人は英露の接近を平和の維持として衷心希望こそすれ、此露紙即ち露國一般の輿論をも造り、輿論をも代表するノヸエ、ヴレミヤ如き新聞紙が、獨逸及我皇帝陛下 の厚意をも忘れ果てゝ、さながら瘦狗が己の影に吠ゆるが如く、虛構中傷の毒舌を逞しふするや聊か心に平かならざるもの無きを得ず。該紙が如斯厚顏なる攻擊は或は恐る、延いて自己の利害上より「獨逸新聞」の如き新聞の憤を買ひ、全く從前と反對の體度に出てんことを、何者如斯新聞は毫も露國に負ふ所あらざれば也。冀はくば我半官報は露國の半官紙に對し毫も毫も返答すべき所あらざらむ事を、と。

波斯先王の畧傳

一月九日の來電に曰はく、昨夜深更に國王の崩御の變は本日午前九時、官報に依りて發表せられたりと。フランクフルテル、ツァイツングは其紙上に王の略傳を掲げたり。

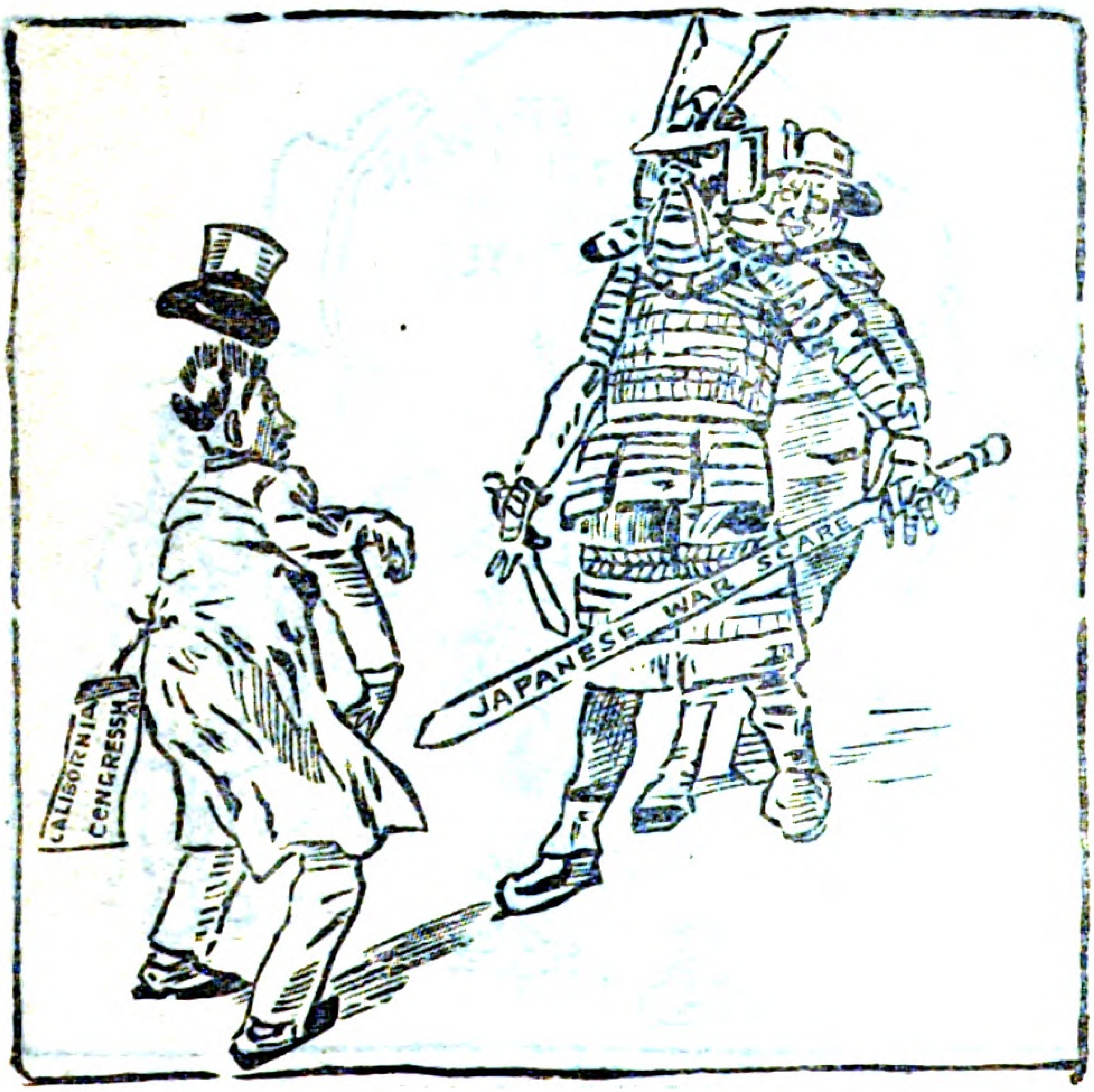
ムツァフフェル、エド、デヰン陛下はサザール、エド、デヰン陛下の第二太子にして、千八百五十三年三月廿五日に降誕あらせらる。長ずるに從ひ父王陛下の御寵愛たからず、其未だ幼少に渡らせるゝ頃、早くもテブリスに謫せられ、波斯語の師傅の手に渡りて監督を受け給ふ、此師傅は毫も太子の爲を計らず、自己が地位を奇貨として一身の榮花を求むるに汲々たりき。國の最高僧官は太子を誘ふて迷信者たらしめんと欲したるも、太子未だ利己的師傅の手を離れ給はざるを以て奈何ともする術なかりき、此頃恰もクルデンの紛亂起り、弱冠の太子をして之が鎭壓に當らしめたるも戰利あらざりしより、テヘランへ召還せられ、父王不興の日月を宮中に於て送り給ふ。千八百八十二年、窮屈なる璽府の下に再びテブリスの太守として流すが如く任地に送られ、かしこに於て最高僧官の師傅が不正を訴へたるも父王の不興は之を納れ給はず、剩へ太子は回々教の信仰に對する懐疑の念さへ起りて心怡まず。即ち躬を歐洲列國史の研究に委ねさせられ、佛蘭西を學ばせ給ふ。後に至りて女王孫迄に佛語の師を聘して學ばしめ、王孫には佛國陸軍砲兵中尉を傭ひて佛語を學ばしめ給ふ、十有餘年間、アゼルバイドシヤンの太守として職に當らせ給ふ間、太子は毫も自己の財産を造る事をなし給はざりしが、兄太子ムツザッドミルツァ殿下はイスパハンの太守として波斯第一の富者となり給ひき。

父王ナザル、エド、デヰン陛下は千八百九十六年五月一日弑せられ給ひしを以て、ムツァフフェル殿下はテブリスに遯れ給ふ、人民は長兄ムスザッドミルツヤが長王子たるの口實を以て王位に陞らんことを恐れたり、此時ムツァフフェル殿下は凡ての儀式上より已に儲嗣と定まり居たりしなり。千八百九十六年六月八日太子ムツァフフェルは國王の位に即かせらる。此に至るまでは種々の障碍起りしも皆排除せられたり。此等の理由より新王即位の後は内務、陸軍の官職を買得するの道を廢し、麵麭及肉類に課する租税を免ず之の法令を發し給ふ。父王在世の砌は日常需用品の値上げの爲め國内の不穩絶えざりしが、玆に至つて鎭靜に歸するを得たり。千八百九十九年カソニに於て宗教的狂信者の暴動が基督教地のアルメニアスに對して起りしも、陛下單獨の力を以て之を鎭撫に成し給ふ。最も心痛すべき大難事といふは國庫の漸く空乏を告ぐる事是なりき。王は千八百九十九年三月を以てアーゼルバイドシヤン、ケルマンシャアー諸州の收税權に白耳義より監督官を招聘して執務せしめしが、其成績頗好良なりしを以て、其他の諸州にも同様の制を用ひて執務せしめたり。露國政府より總高二千二百五十万留の國債を募りて焦眉の急用に充て、通行税及波斯灣諸港の海關税を除くの外各種の租税を徴集し、千九百年には政府は凡ての負債殘額を返償し、金融を盛ならしめ、從つ

て通商を活潑ならしめたり。如斯國狀に際し王は歐洲漫遊を企て、コントレキスビルに於て長期の選擧を見聞したる後、聖彼得堡へ赴かれ、次には巴里に遊んで万國大博覽會を見物し給ふ。巴里俺留中王はフランソア、サルソンといふ無政府黨員の爲めに窺はれしも事なきと得給ひき。當時伊太利王、ザクゼ、コーブルヒ、ゴタの選擧侯の崩御に假托し英國、獨乙、及び伊太利の漫遊を思止まり給ひき。六月半麵麭の騰貴の爲初めてテヘランに擾亂あり、秋に入つて王は波斯に崩御ありたり。千九百二年王は再び歐州に向つて御發程、此時英王エドワード陛下を訪問し給ひしなり。

王は數年來腎臟病に罹らせ給ひしが、先月に至りて漸く危篤の症狀を呈しぬ。昨年の波斯は擾亂常なかりき、是れ日露戰爭に於て露國の
が斯國に自由主義の發展を促したるに由る。故に昨年八月には王は令して人民に參政權を與へ國會を開催し給ひき、而も王及王儲に王室典節を定めたり。太子は憲法制定には頑强なる反對者なりき。何者憲法は「西戎の模倣」なりとの見を抱き給へるが故なり、されど國國新聞紙の要求に仍り讓歩する事となりしなり。

先王に嗣いで立ち給ひし現王陛下、即前の太子ムハムメッド、アリー、ミルツア殿下は當年三十四歲體軀偉大頗る健强に渡らせ給ふ、王は從妹マリク、エハン、カーンズーム公主即ち現陸軍大臣の令孃を立てゝ妃となし給ひ、他に嬌嬪の類を近づけ給はずと聞く。王子逹は已に三人を有せらるゝ由。



BOO!!
—Macauley in the New York *World*.

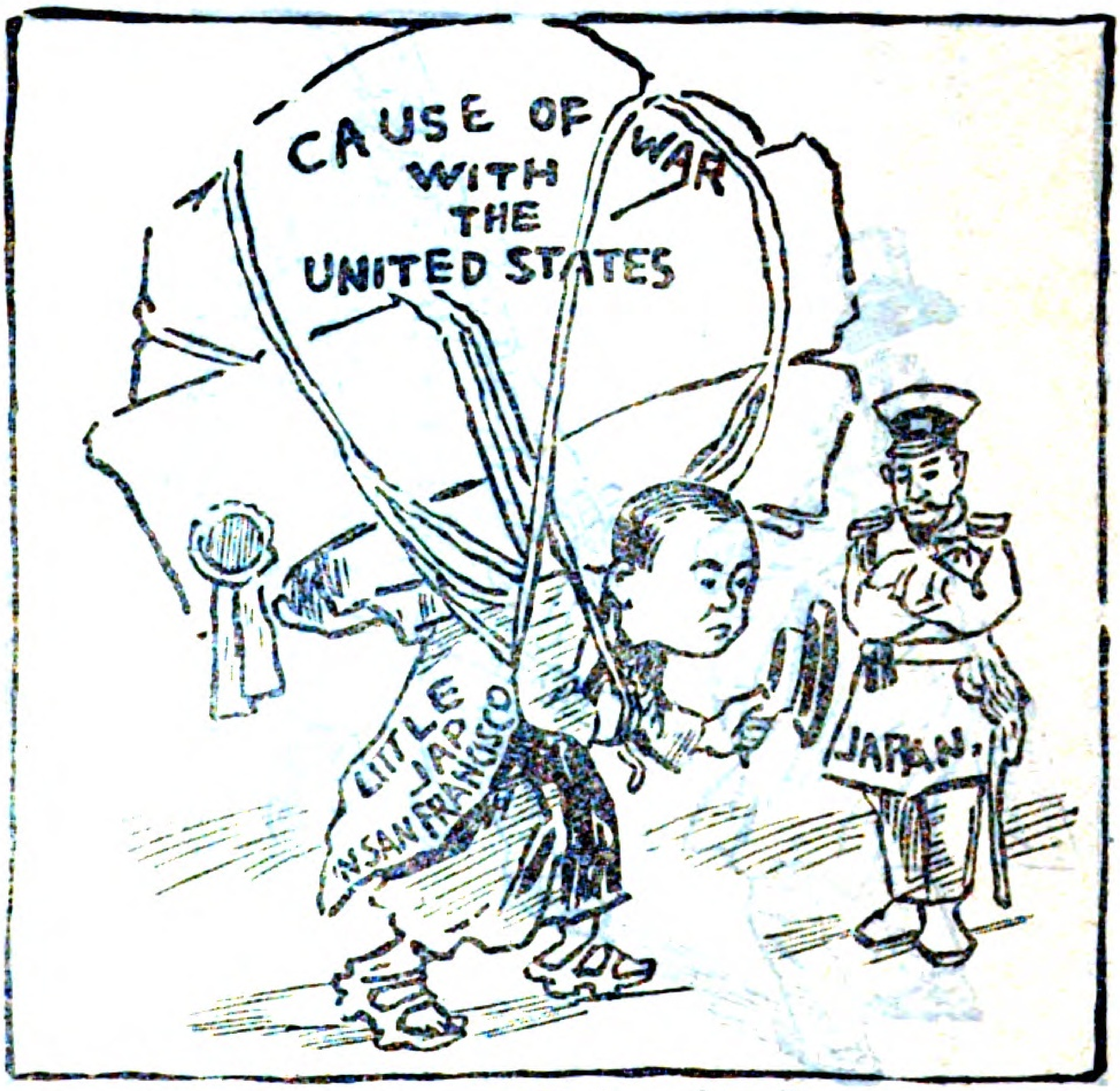
人類の教育

『ダス、エヒロウ』

ジュード、ドヰチェン、モナーツヘフテン紙上に於て剛氣なる一教師が其日記の一節に於て、學生の課程過重にして、力量以上に過ぐるものとなし、「學生は教業科目の爲めに出席するものに非ずして、授業科目が學生の爲めに存するもの」なりと論

破したる者に關し、カルヘン、ミースニックなる名を以て其一家言を世の教師に對して發表せるものあり。更に之を轉載すれば下の如し。

諸君、諸君は只善なるものは凡て善なりと思へるか。請ふ予が言ふ所に聽け。予や未だ人の年少なる者也、而して予が幼年期は寧ろ平穩なるものなり。故に未だ故老には達せれど斯く年少の域を脫せんとする予が年少者に對する見に關し、言ふ所は毫も諸君の悞懼する所あらざるべきを思ふ。予が年少の頃は享樂にあり、直言すれば予は先づ肉體的に生存し、成長せんことを希ふなり。諸君は予が重大なる業務を以て予が成長の如何に困難を蒙れるかを諒知せざるべし、是諸君が毫も關興せざる所なればなり。若し諸君にして一週に六回、午前八時より十二時迄、午後二時より四時迄一週に四回、教室に追込まれなば、總計三十二時間と成るを知らん。如何にして予は此間に在つて成長せんとするか。眞直



ANOTHER CASE OF CHILD LABOR.
Isn't Japan overworking the Japanese schoolboy of San Francisco a little?　—Bartholomew in the Minneapolis *Journal*.

の背、規則的の胸、及健康なる眼を具へたる立派なる兵士の軀とは如何にして成るべきぞ。併し予は未だ涙に教室を出でたるものにあらず、又常に家に在つて諸君より課せられたる美事なる素振らしき長文を草し、講讀の下調を爲し、怪げなる翻譯を試み、歷史の紀元ヽ問答書の暗誦に耽り、方程式を解き、物理、化學を研究す、かくの如きは極めて面白く、或は有益にもあり又必須の者なりと或人は吾人に教ゆ、先生諸君。何處に予は時間を見出すべきか、偸むべからざるに非ずや。予は抑何時成長すべきか。夜に入つては九時より翌朝の六時迄のみ、此間に在つて一分たりとも念學校を去る能はざるに非ずや。更に諸君は予が春季及夏期の休暇の半優游唱歌に費さんことを欲し、音楽の演習に費さんことを欲し、體操遊戲に費さんことを欲し、尙も學校の圖書館より貸出したる良書を、家庭にあるの日に於て誦讀せんことを欲す。而も父

兄と共に家にある予は之を省みざるべからず。好からさるものに費す時は一分もなくして、而も一日二十四時間ならずして三十二時なる限り。吾人が頭腦のみを有するに非ずして、四肢、體軀、眼、肺臟等と具足せる限り、學校の課税は一箇の怪物也。何故に而呼ぶか、他なし、一個の武器をも有せざる旅カバンと見るの外なき吾人は、此中に出來得る丈の數學といへる膀衣、羅典語と呼做す綫を墳込むの奇蹟を演ずればなり。予は彼の有名なるストラスブルグの飼鵞は物陰に於て、秣糧をしたゝか詰込み、かの病理學上之を腐敗と呼ぶ作用を惹起すに至らざれば止まざるものなるを懐起せり。人は之を飼養の鵞に於て肝臟肥大と呼ぶ、予は一般教育の名を之に蒙らしめんとするなり。予をして、請ふ予をして成長せしめよ、予をして自ら進んで學ばんことを求めしめよ。予が胸中は半ば明かなる感情、思想の世界を朧げ乍ら豫想す。即ち成熟して醱酵せる葡萄液の如く年少者の胸中に欝勃するもの湧ける事是也。予は少時間の閑暇を求むの念に切なるものなり、自ら成長し成熟せんことを冀ふこと轉た深きものなり。予は教授を受くる器械にあらず、課目引受自動器にあらずして、實に一箇の人の子なり、うら若き人の子也。故に多量の空氣を要す、されど要するものは昏濁せる教室の空氣にはあらず、又多くの光明を要す。され



JAPAN—"This looks like a good chance to make new trade arrangements."
—*Kladderadatsch* (Berlin).

ど要するものは煌々たる教室のランプの光にはあらず。多くの運動を要すれど而も學校に於けるもの及び、通學途上の運動を指せるものにては毫もあらざる也。故に予になすに將來最良好なる教授課程を以てせよ、予は遲擬なく之に應ぜん、毫も諸君の嘆くことならずしてわが年少期を享樂し得るならむを。

説苑

自然を敵としたる文化と自然を友とせる文化

戸川秋骨

西洋婦人の頭を見ると、其十中八九までは被つて居る帽子に鳥の羽根がさしてある。頭から少し下つて肩の處を見ると、其處から獸類毛皮が胸の邊へぶら下つて居る。それが只の毛皮でない、其兩端には獸類の爪若ゝは頭の形が其まゝ現はれて居る、衣服は素より獸類の毛を以て製したもの、靴は其皮である。斯くの如きは何を意味するか。察するに西洋人の祖先が山野に狩獵し、其の獲たる獸類の毛皮を以て自己と其妻との衣服となし、其射たる鳥類の羽根をとり之を以て其愛妻の頭を飾つた上古の遺風に違いない。之は衣類の事である。次に食物に就て見るに、これは言ふまでもなく肉食であるが、其肉食たるや單なる肉食ではない。其肉

には必らず骨が付いて居る、小鳥や七面鳥に骨の付て居るのは已を得ぬとするも、羊の肉にも牛の肉にも骨が付て居る。牛の肋骨の云々といふ料理がある、それには付けなくて濟む肉に肋骨が付て居る。ビーフステーキにも大きな骨が付て居る。凡て肉には骨の付て居るのを貴としとして居る。其他牛の腦味噌若くは牛の尻尾を珍重して居る。これ等も亦かれ等西人の祖先が其獵物を卓上に並べて自から誇としたる遺風ではあるまいか。さらば住居の状態を見るに、所謂米國の摩天塔(スカイスクレーパー)は云ふに及ばず、歐洲に於けるやうに低き家屋に至つても、其構造は外界と全く絶縁するやうに出來て居る。外界の空氣も日光も屋内には入れない、むしろ入れられない、其結果は建築の内部が暗黒になる。内部の廻廊は勿論、室に依つては二六時中電燈を點し通して居るのもある。これは實に不愉快極まる事であるが歐米の建築風としては致方がない。但し其結果として室内の設備若くは便宜の點に至つては著く進歩したのもある。さらに又其室内の裝飾如何と見れば、大きな る鹿の角が壁間に掛けられてあるのである。さて斯くの如きは則ち歐米の衣食住の状態であるが、吾れ〳〵はこれに對して如何なる感を得るであらうか、かくの如き文物を如何に判斷すべきであらうか。余はこれを以て凡て自然を敵とした結果であると感ぜざるを得ぬ凡て自然を敵とした文物の發達と判斷せざるを得ぬ。今翻つて日本の衣食住を見るに、全く歐米のそれ等と反對で自然を友として居つた事が分る。

吾れ〳〵日本人は何を着て居るか、第一木綿は何であるか、これは即ち植物をして自然の發育を遂げさし其成熟の結果を取つてこれを用ひたものである。絹に至つては考へ方に依つて生物を苦めたやうに思はれぬでもない、併しながら鳥獸を打ち殺したのとは霄壤の差がある。一粒の卵子から繭に成熟するまでを以て、蠶は先づ充分の天命を完ふしたものと見て差支へない食物に至つては野菜を食ふ、これも植物をして其壽命を完ふさして其結果を利用したに過ぎぬ。殊に常食の米の如きは種播から刈り入れに至るまで、一粒の種を

して充分に發育せしめ完く一周さして其結果を收めたもので、頗る自然に從つたものである。住居に至つては實に外界と近接し、通例只一枚の紙を以て其分界として居り、日光は常に室を照らし、空氣は絕えず流通して居る。なほ室内には一枝の花が其裝飾として、床の間の一隅若くは中央に生けられてある。この一枝の花はかれの庭の角に當る處であらう。かくの如く吾人と自然とは相接し相觸れ、極めて親しく極めて樂しく生活し發達して來つたものである。此の點に於て吾れの文化とかれの文化とは根本的に相違がある。これは素とかれの自然と吾れの自然との相違より來れるもので、かれの自然は吾れのそれの如く穩和靜平でなく常に自然の方から人間を敵視したため遂にかれ西人をしてこれを敵視するに至らしめたのでもあらうか。殊に家屋の建築に至つては直接に自然の影響から來たものであらうと察しられる。

米國に於て日本の家屋の紙一枚を以て外界に接して居る事を某氏に說明した時某氏は風雨の時を如何にすると疑を容れた、余は其時は戶を鎖すのみと答へて、さらに日本に於ては風も雨もしかく猛烈でなく、戶を鎖す如き事は一年一二回に過ぎぬと言つた事がある。實際米國の雨と日本の雨とは著く違ふ。こは余一個の實驗する處のみならず、多く人々の認めて居る處である。則ちこの一事を以てするも、かれの自然と吾れの自然とに相違があり、かれに於ては自然が親切でなくこれを敵視せざるを得ぬに反して、吾れに於てはこれを朋友視する事が出來たといふ事の理が分るであらう。

併しながら斯くの如く歐米に於ては自然を敵視した結果、自然を凡ての方面に用ひた、所謂自然征伏なるものはそれであらう。これに依つて汽船も出來、汽車も出來、電燈電話電車等それ〳〵の發達が出來たのであるが、日本に於ては自然と朋友となつた結果からいふものは出來なかつた。明治初年の日本が歐米の文物に驚いたのは此の物質的文化に對してゞあつた。日本はこれ等の事物に眩惑し、かれの進歩を認め吾れの文

化を以て遙かに劣れりとなした。今でも人は多くさう考へて居る。併しながら此れは驚くには及ばぬ事である。物質上の文化則ち余の所謂自然を敵としてつくり上げたものは必らずしも羨望するに及ばぬ。なるほど其點に就ての吾れの文化は後れて居るには違ゐない。後れては居るがそんなものは何時でも出來るものである。考へれば出來るものである。萬已むなくば敎へて貰へば出來るものである。實際吾れ〳〵は獨力で考へたか、或は敎へて貰つたのか知らぬが、今日ではソロ〳〵歐米に勝つたものをつくり出した。軍艦薩摩の如きは世界一て、チブラルタルの浮動したものだと西人も感服して雜誌にまでそれを公言して居る。實際所謂物質上の文明には腰をぬかすに及ばぬ。それよりも吾れに於ては考へて得られず敎はつて出來ない處の長所を持つて居る事を知らねばならぬ。則ち永く自然を友として得た、その自然に對する親愛の感情、其樂しみ其趣味それから起る感化とカルチユアに至つては、金を出しても買へない、考へても及ばない、敎はつても得られない。如何なる事をしても一朝一夕には持つ事の出來ないものである。吾れ〳〵はこの尊重すべき特色を持つて居る、此れは實に吾れ〳〵の喜ぶ處であり貴ぶべき處であり、又大に自分等の興味とする處である。

　電氣や蒸汽の事はその通りであるが、精神上の事に至つては少しく考ふべきである。大づかみに歐米の思想と日本のそれとを比較すると云ふやうな概括は往々非常な誤謬に陷るものであるが、今一二明瞭なる事實を比較して見やうと思ふ。先づ第一にかれの繪畵を見るにこれは何處までも人間を離れぬ。何處の畵堂に行つても少し古いもの、山水若くは花鳥の名畵などの陳列してあつたのを見ない。多くは某王の即位とか入城とか云ふ歷史畵か人物畵である。余は繪畵の事には門外漢であるが、英國の畵などに於ても自然はターナーあたりからやうやく深く注意されて來たのである。凡て自然に注意した畵は近代十九世紀の産物てラフアエル前派とか印象派など云ふもの、皆此の傾向を代表し

たものであると聞て居る。此等を以て推してもかれの思想の自然を冷眼視した事が分る。よし冷眼視したのでないとするも、それを日本のと比較したならば非常な相異がある。日本の繪畫に付ても余は門外漢であるが、上代の佛畫は別として、中古以來の土佐派でも狩野派でも四條派でも、筆力畫題若くは其思想の形式にこそ變化はあれ、凡て畫家の思想には自然が主になつて居るやうに見える。山水でなくば花鳥、然らずば風月と殆んど極つて居ると云つて宜しい。只こゝに不思議な對照がある、西洋では近代に行つて自然の風物に注意されるやうになつたのであるが、吾が日本に於ては近代に至つて始めて人事に注意された。浮世繪が則ちそれである。吾が日本の近代畫史は浮世繪の歴史と云つても差支なからう。思ふに此がすでに東西融和の道を爲したものであらうか。

さらに轉じて詩歌の方を見るに、この方面に於ても西洋では自然といふ觀念が少かつたかと思ふ。著名な大作を見ると何れも人間臭いのばかりである。ホーマーなどの神事を歌つたものは茫として追ふべからずとするも、ダンテもミルトンも抑も亦近世思想の一大木標であるゲーテも、其詩歌の題目とした處は人間である。ゲーテの如き自然に對して新しい感興を持つたらしく思はれるも、矢張只背景としてこれを用ゐたに過ぎぬ。然るにこれが又近代になつてやうやく詩人の注意を惹き始めた。佛獨の事は余は知らぬ、又詩の事に付ても實は一向に知識がない。併しながら英吉利の詩に就て言へば、十八世紀の末からやうやく自然といふものに特別の感興を持つて、バーンスを出しウォーズウォスを出したといふのは、全く確定した説で、文學史家の説を待て知らないのである。然るに日本の歌に至つては全く自然のみである、春の霞にあらずば秋の月、鳥の歌ふにあらずば蝶の舞ふといふに極つて居るやうに思はれる。此も歌人の方から言つたならば、神祇釋教戀無常で、自然ばかりでないかも知れぬが、若し日本の歌のうちから自然を引き去つて仕まつたならば、殘る處は何者であらうか、極めて僅かであらう。

併しかく自然に惚れ自然と心中したやうな狀態を見て余は決してこれを嘆ずべき事とは仕ないのである。なほ此の詩歌についても繪畵と同樣な事實がある。則ち德川時代に發達した俳句に於て吾人は著く人間の香を感得するのである。俳句に於ては著く人事が加はり、其自然に對する態度さへ一變化をなして居る。これは繪畵の場合と同じく、當時の文物が平民の手に渡つて一新紀元を劃した故と信ぜられる。素より繪畵に於ても俳句に於ても余は自然の勢力がなほ偉大である事を承認するが、只兩者とも在來舊套の見方をすてゝ、新らしい見方を始めたのが頗る敬重すべき處であると思ふ。

若しそれ戲曲小說に至つては、これは決して自然を主とすべきものではない。飽くまで人間を主とすべき性質のものである。故に自然にばかり心を奪はれて居た吾が思想を以てしては、立派な作が出來なかつたのであると思ふ。是も德川時代平民の手に依つて多少の發達をなし、明治時代の道を開いたのは事實であるがこれを人間本位の思想から生れた西洋小說に比べたなら遙かに下にあると言はねばならぬ。此點に於ては吾等首を垂れ膝を屈してもかれの敎を仰がねばならぬ。こゝに一寸注意すべき要點がある。獨逸では十八世紀にレッシングが慷慨の口調を以て、當時流行した佛文學の輸入を排斥し、獨逸國文學の自立發達を主張したかのやうに覺えて居る。則ち外國文學の輸入といふ點に於て當時の獨逸と今日の日本と似た處があるかの感がある。併しよく考へればこれは全然性質を異にした二つの事實であらうと思ふ。國文學の粹を保存すべきは申すまでもなき事ながら、當時の獨逸人の考ふべき處と今日吾等日本人の取るべき方針とは大に違つた處がなければならぬと思ふ當時のかれに於ては只佛文學の模擬輸入であつたが、今日の吾れ等が外國文學を云ふのは、始めから吾れに無きものを迎へるのである。全く缺けて居る處を補ふのである。總て歷史を見る自然の順序が外國の人間本位の文學を受納するの風になつて居る。德川時代がすでに過去の自然

教文學から一頭地を拔て、人間文學である戯曲と小說との方に向つたのである。明治時代は自然に養成されたかくの如き思想の上に、さらに堅固なる人間文學を建てるのが其一大任務であると余は信ずる。事實が又さうなつて居る。則ち明治時代の美文學を一瞥するに今日までの處ではそれは實に小說の舞臺である、外國小說飜譯の時代である。そして今後とても此の二つの發達をとゞめてはならず、又とゞめる事は出來ぬと思ふ。併し又今日の如く外國の小說なり思想なりを入れては國辱であるといふやうな感が自然と人心に起るかも知れぬ。かく外國趣味のものが輸入されては、日本在來の思想が壞はされて仕まつてやがては思想上國民の自立がなくなりは仕まいかと氣遣ふ人があるかも知れぬ、併しそれは誤つた考である。經濟上にも輸入超過が何時も惡い顯象とは限られて居ないと同じやうに思想界でも決して外國思想の紹介されて來るのが悲むべき事とは限らぬ。其理由はなほ後段に述べるが、一言にして蔽へば、輸入するもの丶可否に依つて、其結果の可否が生ずるのである。立派な者を輸入するに於ては、決して國民思想の害となる筈はないのである。この意味に於て余は外國小說の飜譯を重んずるもので此れは是非丁重にやらなければならぬと考へて居る。これは話頭が少しく主張の方に走つたが、さて余はこれまでに於て大づかみに、自然を敵とした立脚地から出た歐米の文物と、自然を友とした吾が文物とを比較した積りであるが、さらに此兩者の融和に就て少し述べたいと思ふ。

東西の融和といへば實に近世の初めから始まつて居る。東洋の茶の西洋に入つたのは遲くとも二世紀ほど前の事であらうが此れが、今では普通の飲料となつて居る。かれの婦人は其毛もの丶衣服にさらに加ふるに絹の着物を以てする。極めて拙なる代表ではあるが日本流の演劇はかれの觀客を惹て居る。食物に於ても米の如きがかれに用ゐられて居るのは驚くべきほどである。米國に於て少し大きな都會に支那めしやのない處はない、支那めしやとは則ち日本同樣の米飯を供する

食事店で、其來客はみな西洋人である。太平洋通航の汽船の風呂場に各國語を以て「注文」といふ意義の語を書せるなかに、日本の假名にて「チウモン」と記されたのを見た。ニユーヨークの某四辻の廣場なる角家の三階に英語學校があり、外部に各國の言語を以て英語學校と記せるなかに、立派に「英語學科」と日本文字を以て記されたのを認めた。此等はむしろ日本の勢力を示すものであらうが、又一面には日本風の流行日本風の侵入を示すものである。衣食等の外些末の事に至つてはかくの如くであるが、さらに思想上の事に渉つて見るに、これも能く世人の知つて居る處であるが、繪書に於て吾れのかれに影響した處は決して少くはない殊に近時のかれの模樣意匠等の上には著しい勢力を及ぼして居る事が認められる。又卑近な例を取つて見れば、吾が青年が西洋の繪端書に熱中すると同じやうに西洋の學生等は日本在來の印刷した繪に熱中して居る繪端書と日本の印刷畫との東西に交換されて居るが如きは、趣味の融和として頗る面白い現象である。さらに又高尚な處を言へば、ロセッチの如きも大に歌麿の畫風を學ぶ處があつたとは、或は讀者は疾くに知れる處であるかも知れぬが、余は始めてこれを耳にしたのである。文學に至つては文學といふ牆壁のために、吾が作物のかれに移される事極めて些少ではあるが、なほ多少の飜譯のあるのみならず、日本趣味を解する幾多の作物の公刊されて居るのは、洽ねく世の知つて居る處である。キーガン、パウル、トレンチから出た「日本書史」を見れば日本に關する外國文の著書の如何に多きかを知る事が出來、同時に日本思想のかれに知られて居る度を計る事が出來やう。なほ又文學に顯はされた著作に於てせずとも、單に思想として又日本の特色がやうやく彼れに知れて來た。たとへば武士道の如きを今更らかれ等の喋々するも其一であらう。吾が愛國の精神に敬嘆して居るのも其一であらう。兎に角色々な形になつて吾が長所はかれに知られて居る、殊に故小泉氏の著書に至つては、吾が隱微な美しい所をかれに知らせる點に於て尤も偉大な力をもつて居ると余

は斷言する。

さて此れまでは日本の西洋に及ぼした影響であるが、飜つて西洋の日本に及ぼした事に至つては、今更言ふも愚かであり又一々說き切れぬ故敢て言はぬ。むしろ此點に於ては吾等如何にして歐米の文物を取るべきか若くは如何なるものを歐米より紹介すべきかを考ふべきであらうと思ふ。これは頗る困難な問題てある。昔支那文物の輸入の盛んであつた時其取捨に付て「和魂漢才」と說破したのは頗る世人の氣に入つた態度のやうで今日でも「和魂洋才」などゝ言ふ人があるやうであるが、そんな單純な事では今日の場合はすまされぬ。又屢人は斷言して「かれの長をとり吾が短を補ふ」といふ。一應尤もであり又都合の良い言葉であるが、併しかれの長所もこれには短所となる事があり、かれの短所もこれに移せば長所となる事もある。

鶴の足と鴨の足と長短を補ひ合つても困るといふ事は旣に淨瑠璃子が說破して居る。鴨の足は短くてもそれを長くされてはなるほど困るに違ゐない。吾れの短は短て良い場合も隨分あるてあらう。それ故にかれの長を取つて吾が短を補ふといふ事は畢竟無意味な事てはなからうかと思ふ。況んや、吾れの長を捨てゝかれの短を取るといふが如き不思議なる藝當を演ずるものもある、斯る如き場合に至つては大に注意しなければならぬ。言少しく滑稽に亘るが、吾が長き採上げを態々剃り落して短くするハイカラの如きは、其文字通り吾が長をすてゝ彼れの短を取つたるものて感服出來ぬものである。救世軍の往來に叫號するも不思議なる外物輸入の一である。基督の說かれた教に對して余は甚しい異存はない。併し米國の教會の說く基督教には大に不服である。まして救世軍の―之は余の敬愛する英國が其本家であるが―爲す所に至つては飽まて不承知てある。これ等はよし彼れの長を取つた者としても吾れには適さないのである。余は又近頃或る宴席に連つた、洋食の會て會集六七十人もあつたてあらう、其處てスープが一同に配置せられると會長は某君に祈禱をと指名した。某君は立つて長々と感謝の辭を天帝に捧げら

れた。天帝は果して如何にこれを受納し給ひしか知らぬが、吾れ〲は湯氣の立つスープを前に置て其香を嗅がせらるゝ事暫らく恰も犬のやるやうな藝當をやらせられた。この食前の祈禱に就てはチャールス、ラムが其エッセイの內に極めて面白くこれを罵つて居るが、其劈頭に第一かくの如き事をなすは上帝に對しすまぬ事であると云ひ其理由を擧げて居る。些事ではあるが實際ラムの言ふ如く不都合な事である。これと云ひ救世軍と云ひ少くも惡趣味である。かくの如きは宗敎の方面のみてはない。近時の雜誌には善くもなき西洋俳優の寫眞を極めて拙なる印刷に付して其卷頭を飾らして居る、此れ亦極めて惡趣味である。これよりは當初の如くに美しき藝妓の寫眞を收めたる方遙かに勝つて居るのである。また彼れの短に於ても吾がとるべき處がある。たとへば金錢崇拜は米國の短所である、併しながら此の崇拜の後ろには勤勉努力といふ事が控へて居る。吾が國には眞正の金錢崇拜が行はれぬため、手を懷ろにして金錢を得んと欲するものがあるのである。金錢を崇拜して勤勉努力の習慣を養ふもかれに學ぶべき處であらう。

余はかれの文物を選擇するの困難を說かうと試みて少しく橫路に入つたが、さて斯くの如く選擇に困難であるとすれば、其標準を何に求めたならば適當であらうか。形而下の事は凡て便宜に依つて決せらるゝものて、電車の如きは今やロンドン、パリにも勝つて吾が東京に盛んに運行せられて居る。併し精神上の事はかく簡單には行かぬ。これは余の如きものゝ決し得べき問題でない、宜しく憂國憂世の士の深慮すべき處であらうと思ふ。併しながら如何なる理由か所謂憂國憂世の士があまり斯くの如き問題に對して注意して居ないかと思ふ。これは余の誤解かも知れぬが、頑冥者流の外これ等に付て考を以て居る人は少い樣に感ずる。今余は只余一個が實際に適用して居る其標準を記して江湖の敎を乞はうと思ふ。余が獨りて標準として居る處は、人情の極致と趣味の高雅とにある。人間は如何に異つても耳目口鼻の備はつたる點に於て東西の相違はな

い、其通り人情の極致に至つてはかれとこれと相反する處はないと思ふ、趣味の高稚なるものは東西一途に出づると思ふ。余はこの文の初に當つて、歐米の文化を以て自然を敵としたものとなし、日本の文化を以て自然を友としたるものとなした。併しながら自然を敵とするも友とするも、それは只人間の態度であつて、究極の人情の中には此の二つの態度を超然として別に共通な世界がある事と思ふ。高稚な趣味の世界も同樣共通であらうと思はれる、人情と云ひ趣味と云ひ畢竟一物の兩面で遂に同じものに歸するかも知れぬ。今趣味の共通といふ事に就て見るに、たとへば通例西洋向きと稱せらるゝ多くの雜貨は、其賤劣なる趣味に於て多數の外人に喜ばれるかも知れぬが、かれに於ても趣味あり思慮ある人の欲する處は、吾れ〳〵の好尚と少しも異ならぬ。ムリロの聖母受胎の畫は吾れ〳〵が見ても心持が良い。ミロのヴイナスは幾千年前の希臘人にも、現代の歐米人にも立派なものであると共に、日本人にも逸品と思はれる。金岡の佛畫も雪舟の山水も實際かれに於ては大に珍重されて居るのである。

さて恰も下賤劣等なる趣味のものが、續々として歐米に輸出され同時にこれがかれの多數に歡迎されると同樣に、歐米の惡趣味若くは人情の皮相がまた續々として吾が國に紹介されて居る事と思ふ。かくの如きは所謂輸入超過として頗る恐るべきものであらう。こゝに於て吾れ〳〵は第一眞正の人情を解し且つ高稚な趣味を養成する事に力めねばならぬ。余一個の考を以てすれば此の二つが凡ての根本問題である。吾等若し人情と趣味との粹にして且つ醇なるものを輸入し得るに於ては、所謂輸入の超過を見てもそれは少しも恐るべき事でないのみか、益々奬勵すべき事であらうと思ふ。何となればそれこそ吾が思想の自然の發達である故である。また斯くの如き自然の人情趣味に適つたる文物の輸入は、決して在來の文物制度を破壞するやうな事はない筈である。併しながら萬一斯くの如き立派なものゝ輸入が在來の文物制度を破るやうな事があつたとすれば、それは在來のものが間違つた人情なり趣味な

りの上に立つて居たものて、すてに根本の大義を誤つて居つたものてあるから、それ等は打ち壊しても又打ち破られても差支へないのてある。それ等は今日に存在の價値のなくなつたものてある。それ等の無くなるのは則ち世の進む所以てある。そしてそれ等の破壊された後には必らず自然の人情に適つた高い趣味のものが出來るに極つて居る、今日は古いものが壞れるからと言つてビク／＼して居るべき時てない。それは臆病者の行爲てある。汽車が出來たなら驛路が衰えるだらうと心配して、此の交通機關を用ひなかつたならそれこそ愚者の爲てある、眞正の發達を知らぬものゝ爲てある。思想上の事に至つては滊車の場合よりはさらに緊要てある。或る思想の紹介された爲めに幾多在來の思想の打破される場合も少くはないてあらうが、斯くの如き必要なる思想を輸入するに付ては、幾多の妨害も豫期して居なければならぬ。それ等の妨害に打ち勝つには極めて强固なる意志を要する。眞正なる外國の趣味人情の粹を紹介するものは今後益々猛進して其務を果さなければならないのてある。

▲次號豫告

次號の本欄には

白鳥庫吉
福來友吉
畔柳芥舟
佐々　雪
加藤咄堂

外數氏の寄稿あるべし

文藝の調の飜行

島村抱月

文藝の絶　價がたゞ其の感情の上にあるの理は、多く言ふまでもなからう。事を傳へるだけなら文藝の必要はない。又理を傳へるに於ても文藝の必要はない。ひとり其の事其の理を　きたものとして傳へんとするとき、そこに始めて文藝の光が欲しくなる。而して事や理の活きてくるのはたゞそれが感情の血に溶けて流動し始めるからてある。此の流動の姿をそのまゝ手に取つて人に授けんとするのが文藝の要旨であらう。

併し流動の姿をその　ゝ手に取るといふとは知量の外である。感情そのものに直接に指を觸れた氣持は、之れを表白するに於いても、はた之れを感納するに於いても、到底證說の能くするところではない。之れを譬へば香ひの說き難きが如く光の捉らへ難きが如きものである。玆に吾人が調と名づけたのは、此の一現象を指すに外ならない。

さればあらゆる文藝には調がある。而して猶夫の感情の一面全く普通であると共に他面に個々特別の相を具してゐると同じく、文藝の調も種々の意味に於いて

個々の面目を表してゐるのは勿論てあらう。たゞ吾人は此所に種々の意味といふ。或者は大に個的なるべく、或者は少しく個的なるべく又或者は國民性によつて別あるべく或者は題材の種類によつて別かるべし。此の各自特有の調を感受するに至つて、始めて其の文藝は鑑賞せられたものといはれる。

批評の發足點に鑑賞の無かるべからざるは言ふ迄もないが、飜譯の發足點にも是れが無かつたら文藝の飜譯にはならない。文藝の飜譯に生命となるものは言葉ても筋ても落想でもなくして實に調であらう。調の飜譯といふことが缺けてゐたら、それは飜譯てはなくなる。而して調を飜譯せんとする以上、飜譯者が先づ其の原作の調を感受するの要あるは勿論である。

今の我が飜譯文學の多數には此の用意が頗る缺けてゐるやうだ。無論中には十分原作の調を鑑別して、之れを譯文の上に流し出さうとはしてゐるが、技倆が足らず、乃至性向が合せずして、どうも其の調が出ない、自分の調になつてしまふといふものもあらう。併し初めから鑑識といふ域に至らずして之れを譯したと見えるものも決して尠なくない。

此の種の飜譯には、啻に原作者の特調が香ひ出て居らぬのみならず、丸て題材民性の別すら棄てゝしまつたやうなものがある。原作者の個人格から來る調を譯し出さうといふのは、それは餘程の老手てなければむづかしい事かも知れぬ。けれども題材民性の別から來る調ぐらゐは必らず譯し出して貰はなくてはならぬ。殊に題材の特質から來る調などに至つては、之れを逸し又は變ずるがために文藝の醇味を破り去つてしまふ。時としては滑稽のものとなり了はる。詩句の飜譯の如きに至つては、特に此の注意が必要である。極端に之れを言へば詩句の飜譯にあつては、句中の意義、言語の如きはどうでもよい。譯者はまづ其の句を誦して、言語以外主義以外に縹渺として心に殘る一種の情調を、如何なる方法に於いてか直下唇に上せて音にするといふ樣な工風をして貰ひたい。吾人は意味の明かな調の無い譯詩よりも、意味の支離滅裂なものでもよ

いから調の傳はつた譯詩を佳しとする。

同じ嘆は音樂の飜譯にもある。飜譯といつても樂譜は元のまゝであるから、こゝでは之に伴ふ歌詞の飜譯又は新作歌の應用といふことゝなるが、樂譜はやがて原作の調そのものゝ記號であるから、之れに新しい詞を後から引きあてる時、そこに文學の飜譯とは違つて一種の現象を生ずる。すなはち引きあてられた新詞が果たしてよく原作の調を傳へ得るや否やといふことが一聞して分かる。言ひかへれば、樂譜の調と新歌詞の調とがうまく相諧ふや否やといふことが直ちに其の試驗となる。而して若し歌詞みづからの調が原音樂の調と合しない場合には不快または滑稽の感を起こす。樂劇の飜譯の如きは、歐洲諸國たとへば獨と英との如き差に於いてすら、しば〱此の弊あるを免れぬといふ。我國にあつて、西洋の樂曲に直ちに詞を附する唱歌の例の如きも、其の調の粗大雜駁なる場合にはさしたる不都合もないやうであるが、少しく微妙な情調にわたるときは、直ちに右の破綻を生ずる。不快かさもなければ滑稽なものとなり了る例が多い。

されば我國に作曲家が起つて曲と詞と皆邦人の手になるの日が來れば、其の時始めて、互に其の調を相味うて、乖離のない音樂が出來るのであらう。それまでは西曲の借用も已むを得ぬ事として、たゞ其の飜譯歌詞若しくは新歌詞がみづから藏するの調を傷ふことなく、無理をせずして而も原曲の調と相諧ふやうに力むるの外はあるまい。即ち十分原曲の調を鑑識した上でそれを歌詞の上に流れ出てしめるだけの用意ある作詞者を得なくてはならぬ。要するに茲にも調の飜譯といふことが根本である。



東西比較 楊柳美觀論（上）

芥舟漁郎

豔陽四月、散策子の空想は柳條の絲の長きよりも長く、楊花の絮の輕きよりも輕く、流に浮び空に舞ひ、時を渉り處を獵り、殆んど窮竟するところを知らない。

創世記三十章三十七八節「茲にヤコブ楊柳と楓と桑の青枝を執り皮を剝で白紋理を成り枝の白き所をあらはし其皮はぎたる枝を群の來りて飲むところの水槽と水鉢に立て群に向はしめ群をして水のみに來る時に孕ましむ」何西阿四章十三節「彼らは山々の巔にて犠牲を獻げ岡の上にて香を焚き橡樹楊樹栗樹の下にての事をおこなふ此はその樹蔭の美しきによりてなりてゝをもてなんぢらの女子は淫行をなしなんぢらの兒婦は姦淫をおこなふ」の楊柳と譯し楊樹と譯したる原語libneh は白き意味であつて、舊約書に現はるゝこと僅かに此二回に過ぎない家畜の心を動かさんが爲めに白紋理をつくりたるヤコブの行爲と、樹蔭の甚だ美しきことゝを參照して、白色の著しき樹を覓め、英譯には單に poplar とのみ書いてあれど、古來大抵の學者は白楊 P. alba 説を主張して居る。撒母耳後書五章二十三四節及び歴代志上十四章十四五節「ダビデ、エホバに問ふにエホバいひ給ひけるは上るべからず彼らの後にまはりベカの樹の方より彼らを襲へ汝ベカの樹の上に進行の音をきかばすなはち突出づべし其時にエホバ汝のまへにいでゝペリシテ人の軍をうち給ふべければなり」のベカの樹なるものを英譯には桑としてあれど、

未だ遽かに信ずることが出來ない。原語の bekiim は文字の上より泣くの意味があるといへど、夫れだけでは何を指すか不明である。從つて學者の議論が多岐に別るゝ所以であるが、トリストラムはパレスチナに生ずる植物に配當して移楊P. tremula說を提供して居り、ロイルは更らに移楊の亞剌比語は今日バカと稱せらるゝことを告げて居る。本文を案ずるに、樹の上に神の步み玉ふ相圖は風に木の葉の颯々たる姿となるであらうと思はれるが、大荒れに荒れたる空模樣が書いてあるのでないから、一陣の山風のサット音づるゝにつれて著しく立ち騷ぐ葉を持てる樹が丁度此場合に適當であらうと信ずる。さればトリストラムの移楊說に左胆したい。其一變種 var. villosa は日本に於いて實に「山鳴らし」の名稱を帶びて居る程微風にさへ鳴り騷ぐのである。

楊屬凡そ二十種、兩半球に跨がれども主として北半球の寒帶溫帶に存し其うちの約五種は聖地に產する。ブライオール博士の所言に依れば楊の populus なる羅甸語は顫動する葉のパッパッパッといふ音に歸因するらしく此葉と印度の菩提樹 Ficus religiosa. の葉と類似するところがあるのみならず、菩提樹を印度語で pipal と言ふのは偶然の暗合でなくして多分起原を同うするのであらうといふことである。楊屬は心臟形の濶葉にして葉柄長く葇荑垂下し大木のものが甚だ多い。白楊 P. alba は南歐・高迦索・波斯・亞弗利加北部等到るところに分布して樹の高さ六十呎より百呎に及び、灰色の滑かな表皮にて掩はれ、枝々は水平に擴がつて葉の長さ一吋より三吋に及ぶ。大抵の木の葉柄は上から見て平らであるが楊屬のものは橫から見て平らなるために、風につれて左右運動をする。葉緣は波狀を呈し、表は滑らかで裏は雪の如く白く且つ綿毛を着けて居る。三四月頃現はれる葇荑は圓錐狀であつて、花が了つて仕舞ひ種子の莢が開く頃には種子に着ける蒴柱の白く長く綿毛のあるものが飛ぶので四邊は一面に雪の降るやうである。移楊 P. tremula は歐洲全土は勿論西伯利亞にもあつて平原を代表する一樹であるが、バサァリア

アルプスなどは海面上四千四百呎の高所にも見える。白楊程の高さに達せず八十呎位まで成長して五六十年も經てば次第に衰弱し始める。枝々の葉は卵形の殆んど圓に近くして、葉縁の波狀も深く喰込みて尖端が内を覗くまでに鋸齒をつくり、變種山ならし var. villosa の葉裏には絹絲狀又は綿毛狀の毛があるが變種 var. glabra の葉裏は殆んど平滑である。移楊の葉柄は他のものよりも餘程長いから斷えず顫動して居るのが人目につき易い。北米の P.tremuloides は甚だ移楊に近似するが故に獨立の一種とする學者もあるが、移楊の變種と見做す學者もある。同じく北米の P. grandidentata も亦甚だ似て居る。普通英語で aspen 獨語で aspe といふ語原に就いて、同じくプライオール博士の所言に依ると、其葉の動くために生ずるシュウシュウいふ齒音を示すものらしいことは、丁度クレオパトラの自殺譚に關係して有名なる埃及毒蛇が同樣の音響を生ずる爲めに希臘語で蛇のことを aspis といふのと同じことである。

詩篇第百三十七篇一、二節「われらバビロンの河のほとりにすわりシオンを思ひいでゝ涙を流しぬわれらそのあたりの柳にわが琴をかけたり」利未記二十三章四十節「その首の日には汝等佳樹の枝を取べしすなはち棕櫚の枝と茂れる樹の條と川柳の枝とを取りて七日の間汝らの神エホバの前に樂しむべし」以賽亞書四十四章四節「斯くてかれらは草のなかに川のほとりの柳のごとく生そだつべし」以賽亞書十五章七節「このゆゑに彼等はその獲たる富とその藏めたる物をたづさへて柳の河をわたらん」以西結書十七章五節「すなはち之を水の多き所にもちゆきて柳のごとくにこれを樹しに」等に柳と譯し水楊と譯したるものは英譯に willow としてある。約百記四十章二十二　と上述の以賽亞書に見えたる文意によつて此木の水邊に生長することが推測され其名を有する河さへ存在するのであつて、以賽亞書の所謂「柳の河」はモーアブの南岸にあつて死海の南東に注ぎ入るのである。神がヘブル人に命ずる美しき枝のうちに撰まれ、結茅の節會に小　を葺く

に用ゐられ、喜悦の記號、繁榮の意義を寫したることは上述の利未記と以賽亞書とで明瞭であるが、獨り詩篇に於いては、バビロン人に故國の一曲を吹奏せよと强ゐらるゝヘブルの捕虜等目を擧げて見るに風光おのづから故鄕の姿にあらず、唯だ獨り吾を迎ふるが如く舊知の感あるは柳條の長く河岸に垂るゝもののみであるから、望鄕の念禁め難く萬解の愁思を絞つて箜篌に似たる其琴を懷かしき柳に懸けたのである。歌ごゝろあるものは何人も當時の心情を想ひやらずに居られない。

柳屬凡そ百六十種、それすら間種變種多くして流石のフッカーも匙を投げかけた程であるから到底正確に數へることは出來まい。大抵は北半球の寒温帶にあるけれども印度の樣も熱い所にS. tetrasperma があり、また或種は西亞弗利加のセネガル河とて北緯十六度のところで太西洋に注ぐ河の岸を飾つて居る。多數は灌木であるが北極地方やアルプス地方には甚だ矮小のものがある。S. herbacea は蘇國の山及び其以北にあつて地上一吋に達せず、S. arctica とS. polaris とは北極方面の小さき木であつて、各國の氷雪帶にも又矮小種がある、例せば喜馬拉山脈のS. lindleyana の如きものである。しかし普通俗間で柳と名付けて居るものは其樣な小さなものを謂はないで、大きな木の方を指すことが多い。聖地に產するものは八種であるけれども區別せずに汎く柳と總稱したのであらう。少くとも聖書の文句の上では分らぬ。唯だ二種だけ日本のものと同じであるが、琴を懸けたる柳は其實は楊屬のP. Euphratica であつて俗間に信ずる如く枝垂柳(しだれやなぎ) S. Babylonica でないといふ說もある。しかし枝垂柳の嫋嫋たる長條に琴を懸くる聯想をつくるは俗間に於ては不得止ことであつて、從つて大なる勢力となつて居るのみならず、實に又彼の地に枝垂柳があるものだから、聖書との關係を斷つに忍びない心持ちがする。柳の Salix といふ名稱に就いてはメーン博士の所說に依ればSalio 跳ね出づより起りたる意味にて生長甚だ急速なるが爲めであるらしく、又他の學者の唱道するところではケルト

語の el 近い lis 水より起りたる　味にて水邊に能く育つが爲めてあるらしい。楊の濶葉と垂下する葇荑とに對し、柳は僅少なる例外を除きて大抵狹長葉と直上する葇荑とを特色にする。枝垂柳 S. Babylonica は亞細亞の日本及其他を原產地として今や汎く歐米到るところに移植せられ、水邊に最も著しく美しき姿を呈して世の賞讚を博するものであるが、嘗つてはユフレチーズ河岸を本場と誤信したるが爲めに學名をバビロン柳と稱するのである。高さ五十呎にも達する大きな木で細鋸齒の狹長葉をつけたる細長い優しい枝が地に向つて垂れ下りたるなど今更らしく喋々する必要はない。

・步を希臘羅馬に轉じてみると、白楊は既に知られて居たので、哲學者シオフラスタス植物學者ヂオスコリデスの leuke が夫れてある。ヴァーヂルの詩エクローグスにもヂオルヂックスにも度々記載され、ホレースやプリニーにも亦數々言ひ及ぼされて居る。殊にヴァーヂルのヂオルヂックスには白楊培養談が書いてある。希臘勇士のハーキュリーズと白楊との關係に就て傳說の告ぐるところに依れば、滿山白楊を以て掩はれたるアヴェンタイナスに近き穴に住むケーカスなる巨人を殺したるハーキュリーズが鬪爭に勝ちて其額に結ぶに此樹の枝を以てしたといふことである。更らにまた傳說は白楊の葉裏の白色に說明を與へて謂ふやう、ハーキュリーズが黃泉（よみ）の國より戾り來れる時、其頭に白楊の冠を着けたるが、此勇士の汗の爲めに葉裏は白くなると共に表面は黃泉の濃煙の爲めに薄黑く變化したのであると。オーヴィドはパリスが其妻のイノーネの名を刻みたるは白楊であるといふて居る。オーマーのイリアッドのなかにエーヂャックスから殺されたるシモイシュースの仆るゝ狀が白楊の倒るゝに似たりといふ文句がある、

"So falls a poplar that in watery ground
Raised high his head with stately branches crowned."

但し自分の調査したる書物のうちで或る著者はハーキュリーズの楊を黑楊 P. nigra と認めて居る。黑楊は

葉や外皮に黒色の部分がある爲めに斯く稱せらるゝのではなくして、葉の裏面に白色若しくは灰白色の綿毛様のものゝない爲めに斯く稱せらるゝに過ぎない。外皮は灰白色で五六十呎若しくは八十呎程に眞直に生長し、水平に分岐したる枝々の葉の形ちは三角形から殆んど圓形迄も色々あつて廣さ一吋乃至四吋に達する歐羅巴・北亞細亞一面に汎く分布して居るうちに、以太利亞のポー河岸に甚だ多數なるが爲め、オーヴィッドの物語のうちのフェエソンが太陽神の車を御して一日空を驅けたれども弱輩にして馬を制するに力足らず、常道を逸して地上に近づき、あはや地に火事を起さんとしたるを見て、ジウース大神忽ち電光一閃のもとにフェエソンを殺して遺骸をポー河中に投げ込み、且つ馬を車に軛づけたる其妹等ヘリアディーズを變形して木にしたることに適合させ、木は即ち黒楊であるといふ詩人等も仲々多い。實際に於いても黒楊は總て水邊の植物の通有性として餘分の水氣を葉面の小孔から滲出せしめなければならぬから、丁度泣いて居るやうに見立て易い。加之、太陽の光線が黒楊に輝き亘るときは比類なきまでに美しいから、太陽神の子煩悩がフェエソンを死なしむるに幾分か與つて力あるところを想ひ及むで、不幸なる吾子を悼む親の慈悲の今猶ほ存するとも感じ得られる。從つて後の詩人等が之を主題として歌を作つて居る。黒楊の葉の顫動すると共に其滑らかなる葉面に日光の躍る有様は、數多の詩人に活動美を暗示したものであるが、ホーマー既にペネロープの小間使に用ゐて美しき指の運動を喩へて居る、

"Some ply the loom, their busy fingers move
Like poplar leaves, when zephyr fans the grove."

實際白楊と黒楊とは甚だ似て居るから美觀上に區別を立てずに使用することもあるし、又兩者とも羅馬文學のありたる以太利亞に多數に存在するのである。故にハーキュリーズの楊を黒楊と見做したならば、羅馬のヴァーヂルがハーキュリーズをアルサイディーズと稱して書いたる次句の楊は矢張黒楊説にならざるを得ないわけになる、

"Come, then, with us to great Alcides pray,
And crown your heads, and solemnize the day,
Invoke our common god with hymns divine,
And from the goblet pour the generous wine,
He said; and with the Poplar's sacred boughs,
Like great Alcides, binds his hoary brows."

移楊は殊に其葉の顫動するためにヴァーヂルは夜鳴鶯の喪へる子を悲しむ、ところに此楊を用ゐて調和を謀つて居る、

"So mourning 'neath the trembling poplar's shade
The nightingale bemoans her absent young,
Which some hard-hearted rustic, noting well,
Drew from their nest, unplumed; now she, distressed,
Weeps through the night, and, perching on a branch,
Repeats her mournful song; and with sad plaints
Fills up the grove extended far and wide."

白楊・黒楊・移楊・枝垂柳に關して研究の出來るだけ區劃を立てゝはみたが、實際詩的に用ゐらるゝ場合には相混淆し相轉換して明瞭なる觀念の構成せられざることも數々あるといふことを豫測して、廣義に理解すべき必要あるは、なほ支那や日本に於いて楊柳と併稱するもとに或は楊のときもあり或は柳のときもあり或は楊柳兼用のときもあると同じことゝである。偖、泰西に於いて所謂世界文學と稱する二大思潮に分け入つてみたからして、中世より今代に流れ出づるところを何れの國に求むるとも其人の考へ次第であらうが、自分の都合上英米の方面に向つて進まうと思ふけれども、夫れに先ちて更らに亞剌比亞物語に依憑する枝垂柳起原の傳說をも併記して置く必要があらうと信ずる。デヴィッドがバスシーバと結婚して後、我が部屋に獨り提琴を彈ぜる折柄見識らぬもの二人忍び込むで來た。これは天使であつて、デヴィッドに悟らしむるに其罪障を以てしたから、デヴィッドは四十日間晝夜を分たず地上に伏して泣きに泣き、悔いに悔いた。其時代より審判の

日に到る迄の間に全人類が罪を悔いて流す涙に匹敵する程の大涙と註されて居る。デヴィッドの瀧なす涙は二條の流れとなつて部屋を出で丶庭に入り、地中に浸み込むところに二本の木が生えた。一は乳香を生ずる木であつて他は正さに枝垂柳である。乳香の木は大きな涙の玉を斷えず零すと共に枝垂柳は泣き悲むで居る。といふのが此傳説の大要である。

（未完）

處世ノ二要訣（宏量タレ）

嘉納治五郎

凡そ世に立ち、人に接するの工夫は、種々ありと雖も、胸襟濶大にして、漫りに怒らず、妄りに憤らず、寧靜事理を察し、以て後日の悔なからしむるが如きは、亦必要の事たらずんばあらず。夫の一些事の爲に、怫然として色を爲し、輕擧暴動し、後に至つて其非を悟るとも、復及ぶなきもの丶如きは、其局量の狭小なること、誠に憫む可きに非ずや。蓋し宏量大度は、人の品位を高うするのみに非ず、其利害得失に於て關する所甚だ大なり。我等は今日の時勢に於て、殊に其必要なるを認るが故に、青年諸子に勸むるに、之を修養するの必要を以てせざるを得ず。

總べて世の中にて、人と人との間に起る爭は、如何なる事より起るが。多くは是れ一方若くは双方の者、些々たる末事に拘泥して、深く其本末を考察せざるに由るものなり。人あり某事を企畫するに、我に圖らずして之を起せり。是れ我を侮蔑せるにはあらずや、故

に彼れ、後に及んで、我が助力を乞ふとも、我豈彼を助けんやと云ひ、或は、某事は我が平素親交せざる人、若くは平素事を共にせざる人に主張せられたり、故に我は之を助くるを快とせずといふ。我は某々の下に立つて事を爲すは、我が屑とせざる所なりと云ひ、或は某々の輩と伍して事を爲すが如きは、我が欲せざる所なりと云ふ。彼等は其衷心に於て、其事の美擧たるを信じ、己れ一臂の力を添ふる時は、其進行に於いて頗る便する所あるを知ると雖も、其局量の小なるが爲に、些々たる感情のために、或は勞力を惜み、或は爭を起すが如きは、世間屢々見る事なり。固より此等の事に全く拘牽せざるを得ざる場合なきにはあらざらん、然れども大局に眼を着け、事の理非曲直を考へ、其事の成否の國家社會に對する得失を察せば、些々たる感情の如きは、之を放擲して、進んで之を助成せざる可らざる場合多かる可し。然るを、白眼冷視して遂に此に出づるの意なきが如きは、豈惜むべき事に非ずや。更に日常の交際に於て之を見るに、僅かに人の言語動作の一端を以て、直に我に向つて惡意を有するものとなし、或は我に向つて無禮を爲せりとなし、爲に友とすべきものを疎んじ、或は爲に我に好意を有するものをして、我を敵視せしむるに至ることなきに限らず。蓋し人の性質習慣は、區々にして一樣ならざれば、其一朝一夕の言語動作を以て、容易に其本心を觀るべきに非ず、故に其言語動作の、多少我を懌ばしめざるものありとも、此を以て我に惡感情を有し、若くは無禮を加ふるものと速斷することなかれ。是れ唯彼れの習慣性質等の致す所ならんと寛假して、己れの盡す可き所を盡せ。斯くの如くする時は、中心我に向つて惡感情を有せざるものは言ふも更なり、假令其始め多少の惡感情を有せるものも、遂には我が宏量大度に感服して、其思想を改め、我に向つて赤誠を披瀝するに至る可し。故に特別の場合を除けば、先づ他人の我に向つて爲す言語態度の如何を問はず、我は我として人に盡すべき所を盡さんとの考を本體とし、假令他人に多少の過失ありとも之を咎めず、他人をして重ねて同　の

に陷らざらしめんことを希望すべきこと必要也。

更に日常普通の例に就いて言はん。我、人に用ありて一書を郵送す。人之に答へず、再びして復答へず、三たびして猶答を得ず。是に於て怫然として怒り「何ぞ我を輕侮するの甚しきや」と云ふ。乃ち或は復之と交際するを欲せず、或は之に向つて其無禮を責むるの書を發す。甚しきに至つては、一回にして答を得ざれば、乃ち直に之を詰責するものあり。何ぞ圖らん、其の後の通信に依れば、其返書を得ざりしは、友人の過にあらずして、自己が宿所を誤記したるに由れるなり。然らずんば、其人會々旅行して他方に在り、我が書を見るに由なく、歸りて後、机上に堆積せる書簡中に、我が書あるを見て、直に一書を我に寄せ、懇々事情を述べて其答の後れたるを謝し來ることあり。是に至りて先きの難詰を爲したる我は、慚愧覺えずして脊に汗すべし。若し其友にして我の猥りに人を難詰するを憤りて、我と交際するを欲せざるに至らば、我は乃ち一個の友を失はざるを得ず。斯くの如きは、豈我が局量狹小なるより生じたる過にあらずや。

更に卑近なる一例を擧げて。奴婢の輩、過つて器物を損ずること往々あり。主人忽ち之を怒り呵責すること甚しければ、奴婢は恐怖の情の爲に、却つて過を再びするに至ることあり。如此は、主人は默して其自省注意するを期するか、若くは溫言を以て其將來を誡しむるか、適宜の處置を爲すの勝れるに如かず。

凡て狹量は、善く其對手の在る所を察せず、深く其利害の關する所を思はず、一時の感情に支配せられて、事を爲すに由る。若し其れ能く他の眞意を、徐ろに考察し、事理の在る所に從ひ、利害得失の分るゝ所を明かにして、以て事を處理せば、たとへ人に多少の過失ありとも、我が心何ぞ之が爲に擾されんや。所謂心廣く體胖かに、大海の百川の水を容れて溢れざるが如くならん。我等は青年諸子に望むに、斯くの如き宏量大度を以てするなり。

方今の時勢は、特に宏量大度の必要を示せり。日本國民は内に一致戮力して益々國運を進むると共に、外

ば海外諸國民と交際して、和睦協同せざる可らず。若し人々皆度量狹小にして、瑣細の事の爲に、其親睦を失ふが如くんば、奈何ぞ擧國の團結を固うして、以て對外の力を養はんことを望む可けんや。外國人に至りては、其風俗習慣頗る我と異なるものあり。我に於て無禮とすることも、彼に於ては妨げなきものあり、亦彼れに於て無禮とすることも、我に於ては咎む可らざるものあり。故に我に於ては十分注意して、外人の感情を損せざるを勉め、外人に在りては多少の無禮ありとも之を寛假すべし。斯くの如くにして外國との交際始めて圓滿なるを得可く、彼我交々其利を享くるを得ん。夫の偏狹なる思想を抱き。外人とし謂へば。直に之を賤しみ、之を侮り、以て快とするもの丶如きは共に語るに足らざるなり。

今、諸子は、修養の時代に在り。諸子の宏量大度、亦今日より之を修養せざる可らず。諸子は學校に於て學友に接し、塾舍に於て同窓者と交るの間に於て、宏量大度の德を養ふべき機會は常に之あらん。諸子は常に之を利用して以て其德を完うし、以て世に立つの準備を爲さゞる可らず。

本篇は嘉納高等師範學校長が曩に殊に青年學生の爲に起稿せるものなるが一般人士の心得ともなる可き點尠からざるを以て請うて玆に載することゝはなしぬ…………編者識

文藝雜考

佐ゝ醒雪

ヂンキンス氏がジヤパニーステツキストを讀む

萬葉の長歌を盡く飜譯したといふことは非常な勞力であつたらう、ことに、かの尨大な、頗る冗漫な萬葉集古義を、とにかく讀破し咀嚼したといふ熱心には、寧ろ驚嘆すべきである。大體の飜譯の忠實なことも、

萬葉の趣味を理解してゐることも、ジャパニーズ、タラシックス時代のチャンバレーン氏よりは、遙に立ち優つてゐるやうで、アストン氏などは比較にもならぬやうである。

就中、最も感心したことは、氏が枕詞に對する意見てあつて、それが單なる弄語以上の意味を有してゐることを認めたのは、流石は萬葉の全部を飜譯した人として、その眞の意義に到達したに近いといはねばならぬ。僕が嘗て枕詞をホーマーのエピセットなどに近似したものであると說いて、更にそれが趣味の類似又は聯想を利用した一種の形容詞てあるといふことを說いたことは、本誌の讀者の或は記憶せらるゝ所てあらう。僕は自分ながら、稍新しい見解てあると自信してゐた。この泰西の同好が、枕詞を說いて、殆んど同じ點に歸着してゐるのは頗る嬉しかつた。從來の外人が、これを單なる滑稽諧謔と見做してゐるのに比しては、實に多大の進步といはねばならぬ。だが、それを直接な比喩又は形容詞と見做さうといふ企は、往々極端に走つて、

さゝ浪の志賀の大わだよどむとも昔の人に又もあはめやも

といふ歌を、

Still are the waters of the pool of Owada in
Wavy Shiga—
O would the men of old time there might be
seen once more!

と譯し、「石走る近江の國のさゝ浪の大津宮」を

Omis land........a land all rocky with roar of
waters echoing, and by the ripplis of Ohotsu's
strand.

と譯したなどは、全く誤譯といふべきてあらう。「石走る」などは單なる音に附屬した枕詞てあつて、さゝ浪は地名てある、デッキンス氏はこれを認めながらも、なほ其の餘意を顯はさうとしてかく譯出してゐるものと見えるが、決して其の意を得たものてはない。

或は「冬籠り春さり來れば」を

from winter's prison now cometh Spring escaping

と譯したのは、全く春を擬人法にしたもので、邦人の思想てはなからう。枕詞の譯語にことにこの類が多く見受けられる。

今一つは我が古歌の特色であつて、又あらゆる古詩の特色といふべき疊句（イタレーション）が往々その故態を失つてをることとてある。例へば

in many a wherry fare o'er the morning water's
and the evening waters with many a craft are
crowded.

の如きは、「舟なめて朝川渉り舟競ひ夕川渉る」といふ對聯の形を失つてをる、

Shore weed and deep sea tresses—with the
morning breezes are blown to find their resting,
and as the seaweeds at last rest, wind or wave-
tort.

の如きも「玉藻沖つ藻、朝はふる風こそ來よせ、夕羽ふる浪こそきよせ、浪のむだかよりかくよる」といふ句のイターレーションを失つて了つたものだ。この疊句といふことは、枕詞よりも恐くば古い形で、且つ萬葉にはこの辭樣のないものは例外と稱せられゐる程であるから、最もこの點には注意すべきてあつたらう。

其の外譯語の多少の不穩當は、勿論免かれぬことゝして、大體からいへば、萬葉の譯はよく出來てゐるといつてよからうが、古今集上百人一首の部は頗る不成功だ。先づその歌の選擇も無意味て、寧ろ譯し易いものゝみを取つたものかとも思はれる。

The cherry blossoms are like this world too
fleeting scarce had I seen them in all their
glory blowing, when 'fore the spring winds
fell they.

は「空蟬の世にも似たるか梅花咲くと見しまにかつ散りにけり」を譯したものであるが、「かつ散る」といふ語は、勿論、一方からぼろ／＼とこぼれ落ちる樣で、風に吹かれて散るのではない。更に甚しいのは

All overwhelming is the wealth of cherry

blossoms that hideth from me the heart of spring
that hideth—I see but the cherry blossom.

て、何の歌を譯したものとも、殆んど見當も附かぬ、「山櫻我が見に來れば春霞峰にも尾にも立ちかくしつゝ」などでも讀み損ねたものであらうか。それにしてはあまりに甚しい。「春の心と」いふ語は、かの業平が「世の中に絶えて櫻のなかりせば」といふ歌に見えてゐるが、これは春時の人の心で、春といふものゝ心(heart of spring)といふ語は、恐くは眞淵の絶章といはるゝ、

うら〳〵と長閑けき春の心よりにほひいてたる山櫻花」などが始てあらう、古今時代の思想てはない。

發句に至つては、一體に平凡な駄句が多いから、可なりに譯せられてゐるのもあるが、例の配合て出來た句などは、全く情趣を失つてゐる。ことに、最後の一句、「戀しなば我が塚て鳴け杜宇」の「戀」といふ字眼を失つて、

If I die, fly, cuckoo, fly, fly to sing my tomb
anigh.

と譯したなどは論外てあらう。總じて發句の趣味は此人には未だ理解せられてゐないらしい。しかしこれは今日の外人としては尤なことも知れない。併しかゝる駄句と、かゝる譯とで以つて、我が發句が外人に紹介せられるかと思ふと、稍情なくも感ぜられる。

以上の外に、本書中に挿入したる漢字の誤謬の多いこと、日本語の綴字の誤脱などは隨分甚しい。「名所」は皆「各所」になつてゐる、倭名類聚鈔などゝ來ては、唐にも天竺にもない字形て出來てゐる。文選がブンセン、平城がヘイゼイ、興福寺がキョーフク、賤民のイヤシト、旅人(タビト)のタビウド、山柿(サンシ)のヤマカキなども先づよいとしたところて、新撰性氏錄の新撰といふ文字を姓氏の形容と心得て、List of New made Kabane とするに至つては稍烈しい。

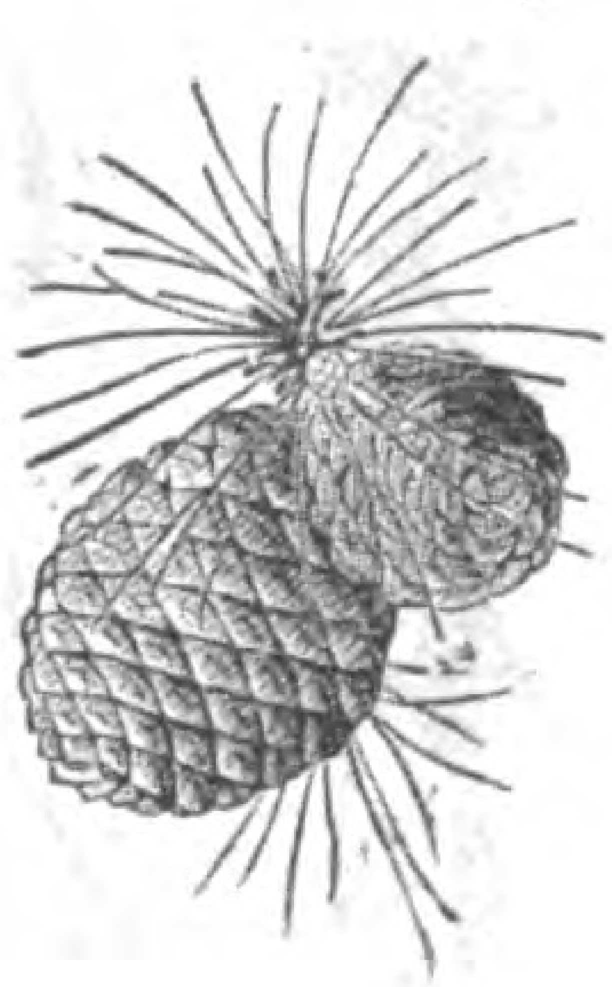
又漢詩との對照の條に池月漸東上山光忽西落を「池に月はやや東を上る山は光に忽に西に落つる」と讀んだ所を見ると、少くも、日本文を書くことは出來ぬ人

らしくもある。源順が「いく代左右二(マデニ)か」といふ句に苦心したといふ話を引用したところは稀る面白いが、その「左右二」を「石二」と思つてかStone twoといふ文字だといつてゐるなどはとんだ愛嬌である。

惜むべきはやゝ通を振り廻すに近い所であつて、日本の昔の旅行の困難を說いたフートノートに、十六世紀に至つても、未だこの困難が甚しかつた、佐々成政といふ人は、槍が嶽て全家族とゝもに餓死したなどいつてゐる。これなどはやゝ馬鹿氣てゐるではなからうか。今一つの通がりの失策は、家持の死んだことをゾク日本紀には薨と書かないで死とかいてある、これは家持が名族大伴家の人であるといふことが認められなかつた爲だらうと說いたことである。續日本紀は、中納言種繼事件て、家持が官職を褫奪せられてゐる最中に成つたものであるから、家持死といつたので、勿論、家柄などの如何に關係したことてはない。

この外、この類のことを數ふれば、隨分尠くない。日本人としては普通の知識であることが、外人には却つてむつかしいといふことは當然のことて、これ等を數へ立てゝ、敢てこの熱心な忠實な研究家を非難する譯てはないが、かゝる堂々たる大作を公にする以前には、相應な知識のある日本人の一閲を經るといふ注意が極めて必要ではあるまいか。

五百頁近い書物を僅か數日の暇に拾ひ讀みしたのみであるから、十分な批評は、他日熟讀の上で公にするつもりてある、今は唯、一閲の際、目に觸れた點のみを、備忘かた〳〵書止めたに過ぎない。



羅馬字ひろめ會對皇道國語會

芳賀矢一

國字問題も隨分久しいもので、或時はその浪が非常に高くなり、或時は又稍落着いて、この二三十年來絶えず、その波動を續けて居る。去年の冬、高等教育會議で、假名遣改正を議決してから、其影響を蒙つて、今年にかけて復一層この論が盛になつて來た。一方では羅馬字を小學校敎科に入れよといふ建議案が衆議院を通過したかとおもふと、一方では國字はすべて從來の儘にせよといふ建議案が貴族院にあらはれた。元來假名遣改正案と國字問題とは關係の無い事柄であるが、此度の改正案では、すべて發音的に書きあらはすといふ主義によつて國語の綴方の上にも大改正を加へたので、これはゆく〳〵羅馬字にする下拵だらうといふ推測も加はつて、國字の將來を俄にやかましく言ひ出したのだらうとおもふ。明治三十五年に國語調査會の方針として、將來は音標文字を用ゐると發表した時には、世間ではとかくの評もいはなかつたが、此頃になつて、殊にこの方針を取立てゝ、文部省は羅馬字を實行する積だらうと論ずる人もある。貴族院と衆議院との兩建議案の對照でも分るが、この問題は全く保守主義と進歩主義との爭である。保守主義の極端な代表者は皇道國語會で、その副總裁は東久世伯。主唱者として名を列ねて居る人々は島津、久我、松方、津輕、松浦、宗、野村、黑田、高崎等の侯伯子男の面々、其外には三浦安氏、關義臣氏等があり、發起者は大敎正

林甕臣氏である。一學者側の贊成者には物集高見、井上頼國の二博士の名が見える。この皇道國語會は假名遣改正は皇道に背くといふ樣な宣言て、羅馬字論者などを目して殆ど亂臣賊子の樣に見做して居る。この會には加入しないて、別に單純な學術問題から、漢字保存論を唱へる人はもとより多いが、伊澤修二氏、井上圓了氏、市村瓚次郎氏などが、その親玉であるらしい。羅馬字ひろめ會の方は西園寺侯を會長林外務大臣を副會長に戴いて、多くの敎育家、外交官、實業家等があり、新俳優まで加つて來たとの事。上田高楠の二博士、藤岡勝二氏等言語學專攻の人が其中堅となつて居るらしい。この兩會の顔觸を見れば、其主義、主張は自ら認められる譯て、概して言へば、貴族對平民、老人―少壯、神道家―敎育者、國學者―洋學者、歌よみ―言語學者、ショーウイニズム、―コスモポリタンといふ樣な傾向をもつて居る。皇道國語會は文字論に國家論を結付ける極端な主義になつて居るので、伊澤氏の樣な有力な保守論者を味方に引入れる事が出來ぬのに反し、羅馬字ひろめ會はひろめの三字の爲に苟くも羅馬字を擴める事に贊成な人は皆その會員に引入れて居る。中には假名説の人もある。余もその會員の一人てあるが、余の會員になつたのもたゞひろめの三字の爲てある。

この兩方の會員は孰れも愛國者である。愛國の至情があればこそ文字の論もするのである。生存競爭のはげしい今日の社會、日新月歩の現今の文明に伴つてゆくには、思想の符徴たる文字の爲に、多くの力を盡すのが急策であるといふのが、進歩主義の人の主張て、三千年來の文明東洋固有の文化を忘れる樣な虞があるから、文字は昔の儘にしておけといふのが、保守論者の主義である。どちらも一理があつて、どちらも愛國者たるに相違ない。極端な保守論者は稍もすれば國賊呼ばはりをするが、これは甚だ不穏な事でさうすると總理大臣も外務大臣も皆國賊になられるのである。

羅馬字ひろめ會員の中には隨分急激な論者があつて、一日も早く漢字を廢して羅馬字にしたいとい、

があ る。これは理想としてはよからうが、もとより難義な事である。恐くは不可能の事であらう。何も文明の無い國が突然西洋の文明を受けたのならば、いざ知らず、我國史、文學の存在する限り、殊に明治以後の文明の進歩か漢字を用ゐた儘て、進んで來た今日は、とても急には改められぬ。チヨン髷を切る樣に樂には行かぬ。一切の公文をはじめ、學校教育まで、すべて羅馬字でやる樣にするのは、それだけの準備が必要である。準備は事實の上の準備ばかりでは無い。時の準備が必要である。一朝一夕にこの改革が出來るわけがなく、强ひてすれば危險である。余は理想として音標文字を採用することが、世界大勢の上から見ても、進化論の上から見ても、必要と信ずるのであるが、之に到る準備は、口先でいふ樣に急激には行かぬものとおもふ。世界交通の今日、國家の自衛上、實際の必要上、段々と羅馬字を知る人も多くなり、事務の上にも、商賣の上にも、實際に於て羅馬字を用ゐることが殖えて來る時分になつて始めて行はれるのだらうとおもふ。今日では最早アラビヤ數字の1、2、3を知らぬ人はない。さういふ樣になつて、始めて羅馬字も自然に用ゐられるであらう。片假名を吉備眞備が作り、平假名を釋空海が作つたなどいふ事はすべて間違て、漢字を草體にし、片畫を省いて假名の出來上る迄には百年以上もかゝつた。片假名などは始終變遷があつて、現今用ゐて居るものになつたのは近い世の事である。羅馬字などでも、そんなに急に取つて代らうといふ事は無理な話だ。それ故ひろめる手段を講ずるのはよい。一方に於てはひろめる手段を講ずると同時に、益古文學を研究し、古史を闡明し、いつ羅馬字が一般の文字になつても差支ない樣にして置く方の準備も必要である。將來の國學者はさういふ方面に力を盡さねばならぬ。教育者にしても、政治家にしても、その方の準備を忘れてはならぬ。今の樣に反對者が多い中は行はれる氣遣はない。行はれる樣な時代は、反對者の無い時代である。それは恐くは一世紀も後であらう。あまり急激に行はうといふのは誤であると同時に、絕對に之を容れまいとい

ふのも愚論である。どちらも國家の爲に危險であらうとおもふ。前者は國家の文明を無視し、後者は國家の進歩を世視する論かと信ずる。今は唯準備の時代と考へるのが、余が持説であつて、羅馬字ひろめ會に加入したのもその故である。

余が見方からいへば、皇道國語會の事業は無用の様に考へる。何となれば羅馬字はそんなに急に行はれる氣遣が無いとおもふからである。一部の　馬字論者の議論に對して、あまりに杞憂を起した論では無いかとおもふのである。よしや小學校で羅馬字を併せ敎へたところが、漢字はそんなに急になくなるものでは無い。國語調査會の方針もたゞ理想として音標文字を採用すると極めたもので、そんなに急に騒ぎ立てる問題ではあるまいとおもふ。

薔薇文學

竹柏園人

薔薇は希臘の女詩人サフホが花の女王と名けし以來、既に二千年であるが、其間種々の新しき花が賞翫せられたるに拘らず、今に至つて依然として花の女王として尊崇せられて居る所を見れば、古今の人心は薔薇を賞翫するに於ては誠に貞操があつて變らぬものと云つて差支なからうと思ふ。此花たるやソロモン時代にてはイスラエル人が之を培養して盛に賞美したといふこともあり、又ヘロドタス王の頃、マケドニヤに於て盛に培養せられて、今猶其遺跡があるといふ所を見れば、希臘から小亞細亞に掛けての産物であるかとも思はれるが、併ながら波斯に於ても此花は亦盛に賞美せられたる所を見れば、あの地方の花とも思はれ、又支

那に於ても南北朝頃より盛に此花を賞美せらるゝ所を見れば、支那の花かとも思はるゝが、然らばと云つてヒマラヤの高原より近年に至つて新しき種類を發見せらるゝ所を見れば、或は又彼の如き寒き土地にも生じたものかとも思はるゝが、又日本より生じたる一二種もあれば、亦全く日本に無かつたものとも思はれぬ、併ながら南北亞米利加に至つては、全く種類が無かつたやうに識者が言つて居る所を見れば、先づ小亞細亞より支那大陸及び日本あたりに產出した、即ち舊世界の花と云つて差支なからうと思ふ、現今既に敎へられたる所に據れば、其種類は二千五百種であるが、千六百年代には僅に二百五十種であつたさうであるから、三百年にして大凡二千二百五十種程殖えた譯である。現今我邦に來て居るものは殆ど二百五十種程と思はるゝが、概して佛蘭西及び英吉利より來たものゝやうに思はれる。支那は嘗て其文明は世界の最も高き程度に達したことがあつて、文彩風流、世界を風靡したものてあれば、薔薇は宜しく古くより賞美せられてあるべき筈であつたが、不思議なことに周、晋、漢、魏、の時代に於ては、未だ嘗て薔薇なるものが賞翫せられた迹が見えない、稍や詩や歌に這入つて來たのは南北朝以後、梁、陳、隋、以後であつて、古い所には甚だ薔薇に付ての文學が見えぬ所を見れば、全く南北朝頃より支那に這入つたものかと思はるゝ形迹もあるが、併ながら愚見に據れば、支那の朝廷は楊子江を以て南北を限り、魏晋六朝以前は楊子江以北の朝廷であつて、全く北の文明であつた、而して北には薔薇の種類が無いではないが、其妖艶華麗にして人の耳目を惹くものは南方に成長した薔薇であつたに相違ないから、北方の朝廷は未だ南國の花とも云ふべき此薔薇を賞翫するの機會がなかつたものと思はれる、然るに魏晋以後に至つては楊子江を渡つて、若くは渡らざるも楊子江に接近した朝廷であつて、稍や南方の文明と云つて宜いものであつたから、自然に朝廷の榮華として此薇薔を賞美する機會が來たものと思はれる。それて梁の柳惲といふ人の詩に斯ういふのがある。

當戸種薔薇。枝葉太葳蕤。不搖香已亂。無風花自飛。春閨不能靜。開匣理明妃。曲池浮采采。斜岸列依依。或聞好音度。時見銜泥歸。且對淸酤湛。其餘任是非。

此詩には既に薔薇の香があつたことを書いてある所を見れば、通例有觸れた四季咲の長春薔薇ばかりとは思はれなかつたやうに見える。それから又唐の孟郊の詩に斯ういふのがある。

蜀色庶可比。楚叢亦應無。醉紅不自力。狂艶如索扶。麗蕊惜未掃。宛枝長更紆。何人是花侯。詩老强相呼。

是に依つて見れば、全く今日のアメリカビウチーの如き眞赤な薔薇の樣に思はれるが、併ながら枝の長くして曲つたやうな所のことを書いてある所を見れば、是は多分蔓性の薔薇と思はるゝ節が無いでもない。それから又唐の方干といふ人の詩に斯ういふのがある。

繡難相似。畫難眞。明媚鮮妍絕比倫。露壓盤條方到地。風吹艶色欲燒春。斷霞轉影侵西壁。濃麝分香入四鄰。看取後時歸故里。庭花應讓錦衣新。

此形容詞を見ると、如何にも近世の雜種で、窮艶を盡し、芳香四邊を拂ふものが、最早此頃に出て來たやうに思はれる所がある。斯ういふ譯で支那の詩は、魏晉六朝以後に至つて薔薇に付て咏じたものが多い。然らば前に言つた如く、多分是は南國の花であるから、南方の朝廷でなければ之を賞美するの機會がなかつたものであらうかと思れる。但し、支那の詩人なども種々なるものを歌ふけれども、往々にして歌ふべきものを歌はずして終つたことが無いではない。彼等は或は民間に居つても見聞が狹く、或は朝廷榮華の花であつて、野人が之を知ることが少いといふやうなことで咏じないことが無いとも言へない。即ち支那の詩人の詞に、廣平梅花の賦なく、少陵海棠の賦なしといふことがあつて、あれ程の詩人でも梅花、海棠を咏じなかつたといふ位なことがあれば、六朝以前の詩人が薔薇を歌はなかつたからと云つて、必ずしも其頃の支那に薔薇がなかつたものとは思はれぬが、要するに今日の如く、

香氣あり、窈艶あり、華麗なる薔薇は、先づ南北朝時代に至つて始めて盛に行はれたものであらうと斷言するも、必ずしも大早計ではあるまいと思はれる。即ち現今上海などに澤山の薔薇があるが、是等は多くは歐羅巴より來たものではあるが、併し同く明以來培養せられた花も無いではないといふことである。

さて西洋は希臘以來、既に薔薇を尊重したといふことを言つたが有名なるセミラミス王の後二百年、ソロモンが既に薔薇を賞美したことは舊約聖書の詩編にあつて、我はシャロンの薔薇なり、野の百合なりと言ひ、或は又我をして薔薇の苔を以て冠せしめよといふやうなことを言つたのが見える。又希臘の詩人アナクレオンの如きは殆ど薔薇氣違ひであつて、酒飲が願くは酒の中にし死なんといふが如く、アナクレオンは願くは薔薇の香を嗅ぎつゝ死なんと言つた位なもので、アナクレオンに言はしむれば、薔薇は其咲いた時の窈艶華麗が人に可なるのみならず、其花が枯れ凋んで屍骸となつた後も、猶美人の屍骸が人に敎訓を與ふるが如く、言ふに言はれぬ趣があるといふことを歌つて居る。古への詩人が如何に薔薇を重んじたかといふことは、昔噺に依つて分ることが出來る。即ちフロラといふ神が、自分の侍女ともいふべき女神の一人が死んだのを見て、如何にも深く悲んだ、なぜなれば此女神は其德といひ、其美といひ、如何にも申分の無いものであつたからである。其處でフロラは嘆息の餘、多くの神を呼集めて、此女神の屍骸を花に造り變へるといふ事業を始めた。此時アポロの神は光線を送り、バッカスの神は其首を洗ひ、ベルタムナスの神は其香を與へ、ポモナの神は其實を造り、而して最後にフロラの神は自ら其花の瓣を造つたといふことを言はれて居る。即ち存在すると認められた神の中、最も勢力ある神々が合作したゝのが薔薇であるといふ昔噺がある。之を見ても如何に薔薇が古人に尊重せられたかゞ分る。波斯に至れば有名なるゾロアストルが遺した話がある、彼の言ふ所に據れば、薔薇は太古にあつては決して刺の無かつた奇麗なものであつたが、アイマナスといふ鬼神

が此世の中に這入つて來て、薔薇の奇麗にして一點の批難すべき所なきを見て、之を嫉んで刺の生へるやうにしたといふことを言遺してある。即ちアダム、イブは素と罪なき者であつたが、蛇の爲めに罪を覺えたといふ如く、薔薇は最初にあつては全く刺のなきものであつたが、人類が腐敗して惡事を覺ゆるやうになつて、始めて刺があるやうになつたといふことが言傳へられて居るのである又印度の鬼神傳に依れば、創世の神ビスナスの妻の一人なるパオダヒリは、薔薇の花の化したものであるといふことを言傳へられて居る。それから又アタム、ト、ルラツールの書いたものに據れば、昔し波斯に一の學士院があつて、時の名流を集める所であつたが、其時有名なる學士でゼブといふ人があつて、其學士院に這入りたいと思つたが、不幸にして學士院の會員は悉く定數に滿ちて居つて、之を容れるの餘地が無かつた、それでゼブが這入りたいといふことを申込んだ時に、他の學士は如何にも有名なるゼブのことであるから入れたいと思ふたけれども入れることが出來ぬ、さればとて最早滿員であるといふことを言つたらば、如何にゼブが悲むであらうかといふことを考へて、之を告ぐる言葉を持つて居らなかつた、是に於て乎其學士會院長は一つの工夫を考へて、コツプに水を一杯湛へて、之を見せて、即ち最早コツプに水が充滿するが如く、定員に滿ちて居るといふ意を暗示した。其時ゼブは之を見て、深く失望嘆息したが、忽ち庭に下りて薔薇の一片を採つて之を盃の上に載せたら、水は溢れずして花は浮いて居つた是に於て乎學士院は水が一杯であつても猶花を浮べるの餘地があるといふ謎を掛けられて、餘義なくセブを會員としたといふことを言つてある。

薔薇は英語ではローズであるが、希臘ではロドンといひ、セルチツク語ではロースといひ、羅甸、ポルチギース、匈牙利、波蘭、伊太利、西班牙などはローサといひ、佛蘭西語や索遜及び英語ではローズといひ、獨逸語ではローゼンといひ、スラブニツクではローサといひ、波斯ではグルといふが、日本で薔薇といふ言葉は

如何なる來歷があるか、言語學者をして調査せしめたならば必ずや面白き說がありはせぬかと思はれる。私は他日閑日月を得たならば、古今東西の薔薇に關する文學、及び薔薇に付ての自分の經驗を集めて、小冊子を作りたいと思つて居る。（談話速記）

今日來ずは明日は
雪とぞなりなまし
消えずはありとも
花と見ましや





天下の愚物

［東京朝日新聞］

近來臺灣富籤一件に關して、續々檢擧の行はれつゝあるを見る。想ふに、議員の腐敗も、一たび檢擧の手を下せば、蔓引株連、恐らくは之と同樣ならん。而して臺灣富籤の流毒を論じて、その結論として流毒の本源を政府に歸し、犯罪の製造者を以て當局者を目するの已むを得ざるに際會すると同樣、議員の腐敗に就ても亦必ず悲む可き結論に到着せん。畢竟するに、日本が大戰爭には勝ちながら、大與國の地位には躋りつゝありながら、內政上に於て人々不愉快の感あるを免れざるは、社會の上流に居る或る少數の仲間が、政治的道德を重んぜざるのみならず、更に國法を蔑視するに因りて此の如し。故に滔々者流には比較的罪少し、濁水をして滔天の勢を爲さしめたる其本源に大なる罪あり。其本を問はずし

して、而して其末を論ずるは、獨り富籤買ひを罪して、その興行者を今のまゝに差置くに同じ。識者は其本源を清めざる可からず。

しかし斯く云へばとて、吾人は末流の現狀を良しとするにはあらざるなり。吾人を以て之を見れば、末流の汚濁に染る人間は蓋し天下の愚物なり、勘定を知らぬ仲間なり、計數を度外にする仲組なり。議員選擧の一票を五圓に賣るよりも、政府をして濫費せしめずして、直稅、間稅、並びに專賣品收益に、毎年五圓以上を拂はざる樣、善く參政權を行使するに如かざるなり。萬に一つも頭彩に取り當らぬ勘定なる富籤彩票を買ふよりも、始めよりして毎回五圓を只取りに取られざる樣、善く我手中の貨幣を貯蓄機關に確保するに如かざるなり。此取捨は、道德上の問題たる以前、先知識上の問題たる可し、而して勘定に明かにして、計數に敏なる人々は、必ずしも多く講究するに及ばず、損得の分るゝ所を知る可きなり。若も此が勘定に合ひ計數に利するものならんには、世界の立憲政體は其存在の基礎を失ひ、ロスチヤイルドは直に富籤彩票の全部を毎回買占むべし。其の然らざるは、勘定に依る、計算に因る。彼の腐敗議員の仲間にても、年中賄路を取り落さざる樣心懸けても、其收入は果して幾何に上る可きぞ。果して割に合ふや否や。一時賢く思はるゝ事ありても、結局天下の至愚に陷らざるもの其れ幾何ぞ。吾人は必ずしも窮屈なる道德を以て彼等を責めず、寧ろ彼等が今少しく其智慧を働かしめんことを望まざる可からず。近來に至りては、彼等は互に相計きて以て直と爲さんと欲するもの丶如くなるが、此有樣を測る可き智愚の測量機の若も世の中に存在する有らば、必ずや其事の愚中の愚、愚の行き止まりたるを表示す可きなり。しかも人間の良心は、他に責めらるゝに先だちて自ら責むるを免れず。而して自己良心の呵責を醫せんがためには、煩悶の極、遂に許き合ひとまで隨落せざれば止まず。此の如くなること明かなるに、之を知りつゝ之に陷るは、竟に天下の愚物たる所以か、而して濟度す可からざるか咄。咄（拔萃）

都市の膨脹と農的趣味

（日本人）

都鄙氣風を異にするも、如何なる點に於て異なるかといへば、畢竟するに執る所の職業に於てするのみ。僻遠の地に住むも、首都に居ると同じく商工業に從事するは、氣風の著しく異なれるにあらず、規模に大小あるも、實質の同じければ、家情も亦た同じ、一方に淫靡に流れ惰弱に陷るの恐れあらば、他の一方にも之れあるべき筈、東京の氣風惡るしといふも、地方都市の果して之より善きかは疑問たるを免かれず、動もすれば一層惡しき者なしとせず、若し地方なるが故に氣風の異なるあらば、そは農業との關係に於て見るべし。農は多數の人群居して從事するを得ず、場所に依り群を成すとも、商工に比して甚だ小なり。大農主義の允分に行はるゝ處は例外とし、一般に廣野の中に散居し、業務の一定せると自然界に接近するとに因りて輕佻に流れず、土地を重んじて國を重

んずるの念強く、自然を友にして天眞の流露すること多し、夫の陸戰に最も强きの農民にして、商工の及ばざるは蓋し此に因る。氣風の異なるは首都と地方との關係に因らず、實は商工と農との關係に因ると謂ふべし。

　商工業を盛んにするは國を富ますの途たり、國の富まんことを欲せば、商工業の益々盛ならんことを望まざるべからざるか、更に國の强からんことを欲せば、農業に意を致たす所なかるべからず。當今陸軍を以て鳴るは、農業國に非ずんば、則ち農の猶ほ衰へざる國、農の衰へて依然强國の中に列するは、唯だ一の英國あるのみ。而も英の强國たるは、海軍を以てなり、陸軍を以て然らんこと甚だ思束なし。國人運動に勵み、空地だにあれば球を拋げんとするなど、尙武の氣風を維持するに與かりて力あるべきも、近く南阿戰役に徵すれば、陸軍は到底稱揚を値ひせず。總べてといふの不可ならば或る程度までの農の衰ふるは陸軍の衰ふる原因なるべし。惟ふに人の首都の弊を言ふもの、此邊の意味よりするに非ざるなきか、若し地方人士に稱すべきあらば、其の農的趣味を失はざるを以てにあらざるか。田舍漢とは土臭きを意味し、賞むる時は質樸なりとし、謗る時は土百姓とし、糞桶擔ぎとする、想長の存する所知るべきのみ。太平の世に薩摩武士は田舍武士の骨頂として笑はれしも、事あるの日、他藩の武士に優りしは、其の最も田舍的なりしが爲めにして、田舍的とは農的趣味を失はざることなり。人々商工に馳せて全く農的趣味を失はゞ、都會風と爲ると共に輕佻浮薄らしくなる。國を富ますは商工業に若くはなく、農を維持するは商工業の發達を妨ぐるに終はるとて、農を眼中に置かざる者あれば、是れ實は心すべきことなり。列國の中、商工を以て立つもの無きに非ざれど、こは餬かするの已むを得ざるに出づ、此の如きは能く富國たるを得るも、强國たらんこと難たし、强國たれば、海軍國としてのみ。陸兵を用ゐるの必要なくば、誠に天與の幸なるも、其の必要ある以上、別に考ふるを要す。農的趣味は他にも利益あれど、其の陸軍との關係は決して忘るべきに非ず。

　都會の盛大と爲り、首都益々盛大と爲るは固より可、其の弊を歎ずるは歎ずるもの丶陋なるも、而も村落の人をして或る時期の間都會に遷つらしめ、都會の人をして或る時期の間村落に生活せしむるを得ば、事の頗る妙なるものあらん、交通機關の發達と共に漸次さる趨向の生ずるならんか。但し都會人士の農を侮り、自ら此に與るを厭ふは、主として人糞を扱ふ點に在り、人糞は最も汚穢なるもの、之を扱ふは業の最も賤しきを意味し、厭ふも無理ならず。されど多數の中には人糞を扱ふの避け難からんも、農は必ず人糞を扱はざる可らずと限らず、之れに代用すべき肥料は他に少からず、臭氣の甚だしからざるもあり。既に人糞を扱ふを要せずんば、農に種々なる趣味の伴ふは言ふ迄もなし、加ふるに農は耕作のみに非ず、園藝もあれば、牧畜もあり、土百姓と趣を異にする無しとせず。況んや人糞の厭ふべきさへ、老西鄉の自ら之を擔ひ自ら之を撒きしといへば、是れとて一種の興味の惑ぜらるるあるべし。老西鄉の所爲は何人にも望むべからざるにせよ、花卉果物を栽培し、若くは牛羊

を牧する、皆な自然界に接して其の妙趣を解するに少からざる便利あるもの、最も不潔なりとせらるゝ豚さへ、人の想ふ如く爾かく不潔なるものならず、其の不潔なるは不潔のまゝに放置するが故にして、彼れは自らは寧ろ清潔を好むとすべく、清潔に飼養すれば、頗る趣味ある動物たり、之を飼養するに於て何の厭ふべきかある。近來都會に住む者は競ひて地方に別莊を構ふる風あるが、徒らに土地を割りて家屋を構へ、都會に在ると同じき生活を營むは、都會に在ると何の差違あらず、都會を離るゝならば、其れ相應の生活を爲し、相應の趣味を養ふの宜しからん。首都の膨脹に就て種々の議論あるも、船に、車に、交通機關の備はり、倘ほ益々備はらんとする時代に在りては、決して膨脹を憂ふべからず、膨脹するの勢あらば、其の膨脹するに任かせ、而して他の方面に於て爲すべきを爲すべし。弊源は別に在るあり。(抄錄)

我國遂に亡びんとするか

〔活動の日本〕　河野廣中

予を以て妄りに不祥の言を弄するものとなす勿れ、今日に當りて我國の患ふべきもの、獨り一二にして止まらずと雖も試みに其の最大なるものを數へば、當に我が財政基礎の薄弱なるにあり。敢て十八世紀の佛國の如しとは云はず、少くとも財政の紊亂しつゝある事、佛國の當時に似たるものあるは事實也、宗教家、實業家は墮落せり。政治家、教育家は墮落せり。然れども其の患ふべき度を以て云へば、以上に述べたる一事より患ふべきの大なるものなし。或は國家社稷の滅亡の先驅を爲すものが、社會の頽敗、風教の墮落にありとせば吾が戰後社會の腐敗は、必ずや我が帝國滅亡の導火線なるべし。而して此の線頭に火を點じて爆發の慘禍を被らしむべきものあらば、そは誤りもなく吾が財政の紊亂之れならん、危ふからずや。

三年以前日露が滿洲の野に相戰ふや、列國の豫想は少くも吾が民族の敗北を以て當然の事となせり。而して其の理由とするところは、實に軍備の完不完にあらずして、吾が財政の基礎の薄弱なる點に存しき。若し日露戰爭當時に於て吾が國民に國を愛するの念なく、國家の存亡を晴る、一に越人の秦人の肥瘠を見る如くなりせば奈何。戰費の供給に躊躇し、負擔に應ずるなかりしには奈何。我國が敗殘に歸したるは毫も疑ふべき所あらざる也。然るに大和民族の忠君愛國の信念に富めるや、生命財產悉く之れを擧げて、何の愛惜する所なかりしかば、十八億有餘の巨額なる戰費も、何等の面倒を見ずして徵收する事を得たり。其後も、政府が令して通行税を徵すれば、國民は唯々として其の求に應じ、食鹽に加税すると云へば、默々とし異言を云はず、斯くして織物消費税、所得税、營業税、印紙税等、ありとあらゆる直接税間接税は漸次に徵收せられたり。凡そ如上の租税の如きは、皆な國民の惡税として呼ぶ所のものなるに係らず政府當局者は之れを永久税となさんが爲に、昨年の議會を籠絡して、横暴殆んと爲さざる所なかりき。猶は且つ國民租税の請求

は、獨り之れのみに止らず、更に三十億の外債を償却すべき義務を負はしめつゝあるなり。是れ豈に吾が國民が堪へ能ふ所ならんや。

近來倫敦電報の報ずる所によれば、倫敦金融の騰貴は日々逼迫するものの如し。舊臘中に吾人の最も刮目して睹んとしたる所のものは、公債を如何にして書き換ゆべきかの一事に存しき。之れを何故と云はんに、かの埃及の滅亡せし所以は猥りに外債を募集せし結果にあり然れども今や他國の事にあらず、我國も又た其の繁實に陷りつゝあるに非るか、外債の輸入は必ずしも不可ならざるも、一旦不幸にして其の方法を過りたらんには、國家の存亡に關する大事を惹き起さずとも限らず、而も一面に於て公債は一種の信用なりとは牛面の眞理たるに背かず、現に我が廿有億の外債の如きは一に信用を以て前提とせるものなるが故に我政府は之れが責任として、飽くまでも此信用を失墜せしめざるべき義務を存す、少くとも年々の利息を支拂ふに、何等の障碍なき事實を外國に示し、以て債權者を放念せしむるは、事實上に採るべき第一次の策ならん。而して公債利子一年の支拂額は、一億萬圓にして、此の支拂額を國民各自の頭に打算せば、之れ濟重なる負擔と云ふも過言にあらざる可し。知らず政府當路者なるものは、果して國民負擔の輕減の成算あるや否や。

我が島帝國の前途を達觀すれば、政府の漸次經營すべき新事業の多々なるは、今更の議論を須ゐざる可し。內には新領土たる樺太、臺灣、北海道を首めとし、外には遼東半島及び鷄林八道あり、此等の地に經營す可き新事業は、我が政府の一日だも念頭に閑却すべからざる緊要事にして、而かも之を早速に實行するに當りて、先づ何よりも先に立つものは經費の一點にあり。吾人の政府當路者に問はんとするは、實に玆にあり。即ち政府が當然一面に國民負擔の輕減を策せざる可らずして、而も其の一方に如何にもして巨額の新事業の財源を得來らざる可らずとせば、果して此の財源を何所より得來るべき乎。若し吾人の觀る所をして大誤なからしめば、我對外政策は、之より十年を出でずして、必ずや一大艱難に逢着せん。蓋し之れを致せるものは、ポーツマス、媾和條約の結果ならずんば非ず、若し不幸にして、吾人の豫言が的中するあらば、我が政府は、果して如何にして之を彌縫せんとするか。(拔萃)

家族制度は國體に非ず

(慶應義塾學報)

鎌田榮吉

正史以前のごく草昧の社會には、大體家長制度が行はれて居る。即ち一人の家長の下に多くの妻孥子孫が隷屬して居ると云ふのが、まづさういふ未開な社會の有樣である。即ち舊約全書にある所のアブラハムとか、モーゼスとか云ふやうな人の率ゐて居るのは、皆自分の子供であり孫であつて、之を自分の手に付けて、其れを支配して居ると云ふのが其時分の社會。支那にしても或は印度にしても、又歐羅巴にしても、昔は皆同じことである。國體とは國民の常住不變の性質に胚胎するものであるからかゝる經過的の制度の如きは決して國體の要素とならぬ筈である

彼の一派の論者の如きは未だ國體の眞相を知らざる者である、此の如き根據なき議論は、どうしても打破して仕舞はなければいかぬ、それが爲に種々の間違を起し、種々の迷信を起して、道徳上にも法律上にも、隨分有害なる思想を懷くことになつて居る。例へば醜業を營まんとする者が、今はどうでありますか、警視廳に往つて鑑札を貰ふ、さうすると理由を質して、先づ正業に就くべし、此の如き淺ましい業は禁むものでないと云ふことを一通り説諭する。けれども親の爲め、據ろなく一時に大金を要するが爲に身を賣るのでありますと云ふと、是は是非に及ばぬと云て許すのが例である。ネ、今でもさうでありませう、今日さうでなくとも大方さう云ふ主義になつて居る。て外國に至るといふと全く反對の考を持つて居る。例へば佛蘭西でもつて——佛蘭西は公娼——娼妓を許して居る。

所がまづ自分の獨立の意志でもつて、いよ〳〵もう社會には立つことも出來ない墮落の婦人である、自ら許してもう自分の身を汚海に沈めるといふ者ならば、是は許すけれどもです、若し之を質して見て、親が金を要するが爲に、親の爲に鑑札を受けて醜業を營むと云ふことであつたならば、決して許さない。此點に至るとまるで反對。そこで其の何れが正しいかと云ふに、根據の主義から糺さなくてはならぬ。此法律、又法律を行ふ所の政府なるものは、社會の秩序を保ち、人民の自由を保護しなければならぬ。然るに強者が弱者を壓すると云ふ時には、どうしても自然に放任して置けば、弱者は壓服されてしまふ。そこに至つて政府は法律といふ武器を以て其間に挾まつて、即ち此弱き者の味方をしてやる。弱い者の側に立つて強い者の惡行を防ぐと云ふのが法律の效用である、これが政府の職分であると云ふ主義から割出されて居るからして、此の如く親の命令によつて身を汚海に沈める如き者は、飽までも之を許さずして自由を保護してやる。尚ほ自己の境遇上已むを得ぬと云ふ事が證明され決して強者の威壓に基因せぬことが明かになつて始めて許す、これは日本とはまるで反對で此れなどは、人々の考へ次第で、どうも流石は日本で、如何にも是は美風である、親の爲ならば身を賣ることをも厭はない、又親は自分の子を賣るは、差支のない事で政府も許す、大層これを美な事と思つて居る人もあるのです。それは歐羅巴人も、昔は矢張り日本主義であつた、否日本どころか、支那以上の家族主義親權主義が行はれて居つた、それが進歩して人權尊重主義に移つたのである、換言せば野蠻主義より文明主義に移つた、試に遡つて羅馬の時代を見るとやはり日本と同じこと、やはり支那と同じことである。否、其れ以上である。親權——羅馬法の親權といふものは大變強いもので、パテリヤーポステッタスと云ふは甚しいもの、即ち此羅馬の法に從ふと、親は子を殺すは當然である。此點に至ると支那よりも一層強い、支那も隨分その考をば有つて居つたかも知れないが、明に親は子を殺すと云ふ法は無い。是は昔の社會は家族制度で即ち家長が政府である、親が君主である、自己の手に屬する所の子孫妻孥は牛羊と共に皆此家長の所有物であるから、家長は之に向つて生殺與奪の權を有つて居る、やはり西洋で

も、羅馬の時代等に於ては支那と少しも異ることはないのみか其れよりもひどい、さうして見ますと、即ち之は比較研究て、古代と今代とを比較し、又今日の或程度以上に進歩した國と、或程度以下に止つて居る國とを比較して見ると、どうしても此家族制度など丶云ふことは、唯此經過の話てす、或程度に居るときは何處の國ても皆家族制度てある、それより進むといふともう一段自由の社會になつて居る。然るに今此日本が僅に四十年前まては全く古い方の、所謂强制階級の時代てあつたものが、急轉して自由契約の狀態に進んて居る文明の風を輸入されたが爲に、社會萬般の事が皆變つて來た。そこて奈何せん鈍い頭腦を有つて居る人は、之に伴つて行くとが出來ないが爲に、兎角此舊い考へが除かない、除かずしてイヤ日本は家族制度てござるの日本の國體に於てはそんな事はない筈だなど丶云ふことを言つて居る、其のくせ矢張燈心よりはランプの方が明るい、ランプよりも電氣の方が明るいと云ふことは爭ふことは出來ない。只無形の事になると一目瞭然てない爲めか又は負惜みか固陋な說を主張して居るは、甚だ宜くない事てあらうと私は思ふ。
(拔萃)

知識と信仰

金子筑水

『早稻田文學』

知識は信仰を產まず、信仰は主として情意活動の上に成立するものにして、知識やがて信仰とならざるの一事は、信仰其のもの丶本質上明白なる事實なるべし。蓋し宗教上の信仰の中心は、單に冷靜に實在の意義を認識する事のみには留まらずして、むしろ其の至善至美又は其の他の價値不價値を感得するの點に存す、實在のうるはしく貴き暖かなるハート又は其他の精髓を感得するの點に存す、斯かる實在の精髓に觸れて、最も貴く最も美はしき情の發動に激せられ、吾人の意志がそこに限り無き滿足を覺ゆる、これ宗教的信仰の生命なるべし。故に信仰の精髓は認識と謂はんよりはむしろ至高價値の感得に存す。されば信仰が知識より產まるゝものにあらざるは、極めて分明なる事實ならずや。價値の感得又は學者の所謂價値判斷は、主として情意の上に成立すべきものにして、決して純粹なる理知の上に成立すべきものにあらざるなり。理性の職務は單に實在の認識にあり、其の善美なる價値に對してだに、單に之れを認識するに留まりて、之れを味ひ之れを感ずる力なし、之れを味ひ之を感ずるは、ひとへに情意の働きにして、宗教的信仰の精髓は、まさに斯かる情意の働きに根ざすべし。故に吾人の理性は如何ばかり進歩すとも、それみづからにては永久に宗教的信仰を造出だす力なきもの也。

されど此の理由もて大早計にも、知識は信仰に何等の關係だに無きものと言はゞ、そはゆゝしき誤解なるべし。予輩は彼の一知半解の主情意論者が、動もすれば知識は信仰に全然無關係なるが如く說きなすを見て、其の餘りに皮相の見なるに驚かずんばあらず。少しく精確に信仰上の現象を檢査せる者には、知識は假令直接に信仰を造らずとも、信仰の發展完成に如何ばかり大なる關係を有するかは、極めて明瞭なる事實た

ろべし。予輩は主情意論の立脚地並びに情意の本質其のものより推して、窮極するに信仰は知識の未だ到達する能はざる神秘の境に進入するを得れど、知識は容易に信仰の到達せる領域まで進むを得ず、最高の宗教的眞理は遂に理知の力の企及する能はざる所なるを認めながらも、尙しかすがにカントの如く、知識の到達範圍と信仰の到達範圍とを截然絕對的に鮫別するの餘りに技巧に過ぐるを認めずんばあらず。吾人は待對的現象界（斯かる語を使用せざるを得ずとせば）を離れたる絕對的實體界を容ふる能はず、現象界はすなはち實體界の待對的實相にして、吾人の知識は宇宙の最高實在を待對的に認識するもの、必しも信仰の範圍を全然認識する能はざるにあらざるなり。若し夫れ絕對を絕對としての宇宙の實相に至りては、人類の信仰と雖も之れに到達するを得ず、斯くの如きはいと小さき人間の事にあらずして、所謂「神の事」、人類の宗教的信仰と雖も、此の意味に於ては所詮待對的なるを免れざるべく、之れを絕對的と呼ぶは、たゞ從來の宗教家が自家の確信の絕對的程度を言ひ現はせるに過ぎざるなり。故に信仰と知識との到達すべき境を比較せば、要するにゲーテが明言せる如く、種類（カテゴリー）の別にはあらずして程度（グラード）の差に歸せらるべきは明白ならずや。兩者の到達すべき程度の差は常に頗る大なるべし、而も知識は絕對的に信仰の範圍を認識する能はざるにあらず、假令其の至極の境には到達する能はざるまでも、尙知識の進步に準じて、多少信仰の內容を思議するを得べきや疑ひなし、（此等哲學上の問題に關しては、後日別に評論するの期あるべし）。蓋し知識は經驗的事實を基礎として、一步々々精確に着實に進み行くもの、精確を其の生命とするだけに、遂に情意の直觀的飛躍に遲れざるを得ざる也。

斯くの如く知識は其の進步の程度に準じて、多少信仰の內容を批判するの力あり、隨つて知識が信仰に及ぼす影響も亦決して小少なりとは謂ふべからず。其の最も著きは眞知識が彼の宗教上の迷妄謬信を破壞し去るの一事ならむか。

理知が迷信を破壞すといふは、知識の信仰に及ぼす影響の消極面に過ぎず、此の消極的影響の裡面には、更に大なる積極的影響の潛在せるを認むべし。蓋し宗教上の迷信が理知のために破壞せらるといふは、やがて信仰は理性の滿足を要求する所以少なくとも理性の滿足といふ事が、眞の信仰を强め若しくは之れを完成するものなるを示さずんばあらず。固より宗教上の最高の信仰又は最高眞理といふが如ききは、理知の力もて其の內容の眞僞を批判する能はずと雖も、少なくとも理知の力の到達する範圍內に於ては、其の信仰は理性の判斷に吻合し、其の力の及ばざる範圍に於ては、眞の信仰は理性の判斷以上なるべく、斯く理性の滿足が信仰に融和して、初めて其の信仰は完成せられたるを感ずべし。理性の滿足は、必しも信仰の第一義にあらずと雖も、而も理性の滿足を缺ける信仰は、必しも圓滿なる信仰とはいふべからず。此の意義に於て、知識は其の到達し得る範圍內に於て信仰の內容を明らかにし、且之れによりて信仰其のものを完成すといふべき也。（抄錄）

教育は術なり學に非ず

『教育の實際』

山路愛山

教育は畢竟人間をこしらへる術なり。人間をこしらへる術は元來が「エンピリカル」即ち經驗的に得たる術ならざるを得ず。上方の町人が手代小者を使ひこなして二代目の善き町人を作るも、上役が下役を育てゝ一廉の人物として長く政府の役に立つものとするも、英雄豪傑がナポレオンの言ひたる樣に塵の中より大將を作り出すもいづれも其術なり。此種の人間製造家（則ち教育家）にはヘルバルトの講釋もならずペインの口眞似も出來ぬことなるべけれども、彼等はそれ〴〵心に得たるエンピリカルの一術ありて其子弟門弟を育てゝ立派なる人物にしたるとなり。されば教育家に大切なるは教育學の研究よりも寧ろ此「エンピリカル、ノレーヂ」（經驗的知識）の蓄聚なり。いかほど上手に教育の理論を解釋し得たればとてそれは畠の柔術、炬燵の水練、紙括の兵法なり。名醫の臨床講義を聞かぬ醫者は藪醫者なり。眞に人こしらへたる人の苦心を知らず、其骨法を合點せず。唯教育學にて間に合はさんとするは憚ながら藪教育家、猿先生にして眞の先生に非ず。されば教育家は勉めて博覽なるべきなり。家康が井伊直政を育てたる仕方も、ナポレオンが平民より元帥を造りたる技術も荻生徂徠が英才を其門下に集めたる行方も、吉田寅次郎が足輕、輕猾の子を維新の元勳に仕上げたる手段も、大阪町人が手代を育つる苦心も、皆我が分内の事として心得置くべきことなり。人の智慧は理論的、組織的に頭から押込まれたるものが役に立つのみならず、彼所で一個發明し、此方で一個面白しと感じたる零細の感得も役に立つものなり。或は役に立つ上より云へば後のものゝ方が前のものよりも大きに効多き例多し。文章なども修辭法の講釋よりも其道の先輩に一寸教へられたる呼吸が役に立つことは僕の自ら經驗する所なれば、教育の術にも必ず左樣の事あるべしと信ずるなり。然るに今の教育家に此エンピリカル、ノレーヂを大切にせず、唯理論の城に籠らんとする風あるも僕の不平とする所なり。

教授の目的は、形式的陶冶と實質的陶冶との兩者を施すにあるといふ事は、既往に於けるも、將來に於けるも、斷じて正鵠を失しない所の確說である。果して然りとすれば、この形式的段階は、到底不充分のものたるを免れない。余はこれに關して、余の建設的考案はあれど、これは異日に讓るとしやう。兎に角、かの五段又は三段教授法なるものは、旣に過去の教育史の幻影であつて、今日の心理學の前では、消失せざるを得ざるものである。而してこれに關して婆心を披瀝したのは、我が小學校教員諸君にして、何時までも、この幻影に固着し居らず、あらに確實なる基礎を以て行動のたよりとせられたなら、その成績はひとしほ増大し、義務教育延長の結果は益す發揮せられ、同時に、その靈界に對する報賞は、しきしまの大和島根に一段の磐石を加ふるに至るといふ事は、こゝに豫言を憚らないのである。（拔萃）

眞宗信徒生命保險株式會社

- ●當會社の約款に從て保險契約を爲す者は最も多くの便宜を得べし
- ●當會社にて引受くる一人の保險金最高額は壹萬圓なり
- ●利益配當附保險の契約を爲す者は最も公平の方法に依り計算したる利益金を得べし
- ●掛金割增(年增契約)の代りに保險金控除(或ル年限内ニ死亡セバ)の新法あり
- ●當會社は本願寺保護の下に全國に涉り有力なる眞宗信徒の組織せしものなり
- ●當會社は啻に眞宗信徒に限らず何宗旨の人にても保險契約を爲すに取扱上彼是の別なし
- ●當會社は短期掛金拂込の便法あり又保險證券を擔保に貸金の便法もあり

京都市下京區油小路御前通角　(電話　七貳貳番)　**京都本店**

東京市京橋區南傳馬町三丁目、壹　(電話本局五壹八番)　**東京支店**

大阪市東區大川町御靈筋角　(電話東壹貳五參番)　**大阪出張所**

廣島市紙屋町(秦　忠兵衛方)　(電話　六〇八番)　**廣島出張所**

最新最優 實用安價 輕便室内電話機の發賣

電話機の應用は日に月に發達して、殆んど遺憾なきに似たれども、實用を旨とする室内電話機に至つては、未だ完全なるものを見出す能はず、或者は高價に過ぎて普通電話機と異らざるものあり、或者は舶來と稱して出處明かならざる如何はしきものあり、價の不廉にして而も忽ち狂ひを生ずるは、在來の室内電話機と稱するものなりしが、當商會主が多年苦心經營の結果、今回專賣特許を得たる輕便室内電話機は、其の技術に於て獨特の工夫を凝らし、構造に於て專ら輕便を主とし、而も堅牢無比狂ひを生ずることなきを以て、最新最優實用的の名に負かず又代價の廉なること無類にして、少しく念の入りたる電鈴取付費にて事足り、而も通話の出來る信號なれば一名**呼鈴電話**と稱するも可なり。會社、銀行、新聞社、旅館、學校の事務用とし、紳士紳商諸君の家庭實用品として使用せらるるに最適當なり。

◉專賣特許(第壹壹四四九號)(小浦式送受話器) 輕便壁掛室内電話機



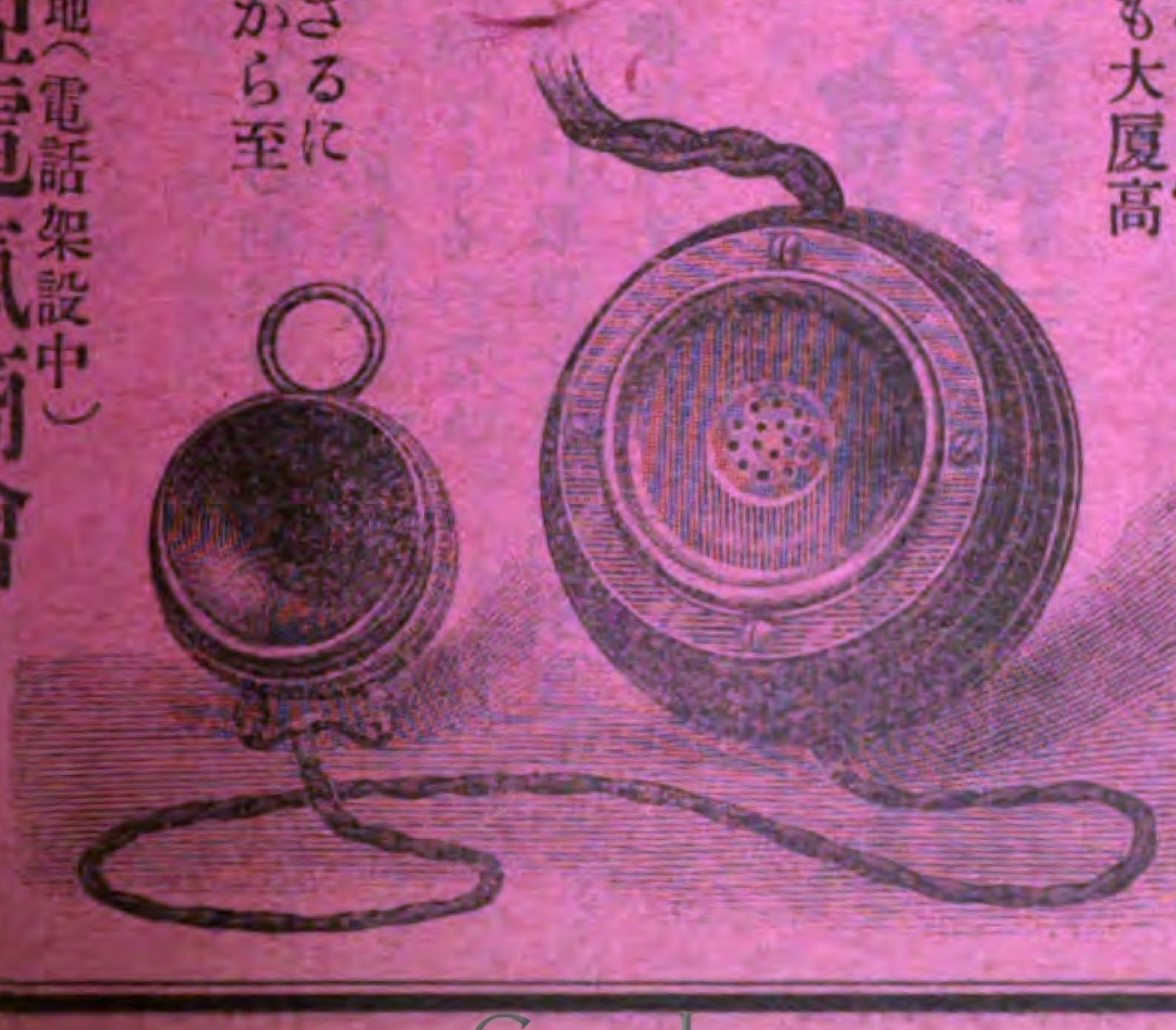
◉電話機は圖の如く簡短にして柱や壁や机の脚に取付くるに妙なり。而も構造簡にして場所を取らず實用にして趣味ある、眞に文明人士座右の通辨なり、官衙事務所を始め、苟も大厦高樓、離れ座敷階上階下の通信器として使用したまへば、一人の小僧を一ヶ月雇用せらるゝ費用にて幾年の久しき利便あり。其經濟的なること今更言を用ゐず。冀くは使用して眞價を知り給はんことを。

◉定價壹對(貳個)金八圓也附屬品(乾電池貳個、上等電鈴貳個、押釦貳個線百尺に付)金參圓七拾錢也

◉實用新案(第四八七二號) 輕便卓上電話機

此電話機は各種卓上電話機に付て研究し、最も斬新奇抜なる新意匠を凝らして製出したるものにして、取扱簡便、價格無比の低廉、未だ發賣せざるに注文山の如し。世の紳士諸君試みに本器を使用したまひ、齒舌奔轉の妙、自から至り翼なくして飛び、體なくして翔けるの妙味を試みられよ。

◉定價壹對(貳個)金八圓五十錢也(附屬品前に同じ)



●營業目錄

電信、電話、電燈、電線、電力、諸機械器具及附屬諸材料醫科電氣器具輸出入並ニ製造販賣修理其他設計

東京市芝區田町貳丁目四番地(電話架設中)

東亞電氣商會



彼の少女

ゴーリキイ作
孤月譯

一

私等二十六人は、陰氣な濕い地窖に閉ぢ込められた二十六の活きてる器械で、朝から晩まで菓子や乾麪包の粉を捏ねくつて居て、窓の前あ厭やな溝で、濕氣で青くなつた煉瓦がぎつしり詰つて居るんです。

それで窓の枠にあ鐵の格子が外からはまつて居て、其上硝子あ麥粉が粘着いてるんで、日の光も入つて來ねえんでさ。それに持主め錠て窓を締め切つて置いて貧乏な者や、仕事がねえんで食ふに窮つてる仲間に、麪包片を與つちや惡えつて言ふんで、加之に私等を「罰當」つて云やあがつて、中餐だつて肉あ食はせねえて、腐つて惡臭くなつた臓腑を與れるんです。

室ん中あ狹苦く息が詰りさうで、宛然石の牢獄みたいで、極あ底く重苦く、それが煤や蜘蛛の巣だ

らけて、壁つて云や厚くて泥や黴で汚れてるんて、其中に居るなあ随分惨酷でさ。

私等あ朝五時に起きなくちやならねえんて、充分眠ることも出來ねえんてす。馬鹿々々しく定りきつて居て、六時にあちやんと机に坐つて、私等の眠つてる間に仲間が準備へて置く生麪て、乾麪包を造るんてす。

て、終日朝早くから夜十時まて、中にあ机に坐つたきり醱酵する粉を捏つて居て、他の者が水と麥粉を混ぜる間、麻痺爲ないやうにつて、體あ前後に搖つて居るんてす。何しろ一日中睡くつて厭やて、大釜に湯をぐら／＼沸して、乾麪包を蒸すんてすがね、眞赤になつた煉瓦の上へ、生麪の燒けた片が飛び落ちる度びに、炕く者が素早く鐵杴を竈の下へ突つ込んて、私等の耳の傍て煩くざら／＼あらけるんてす。奴等も朝から晩まて煖爐の一と隅て木を燒べて居て、焔の眞赤い反射が、默つて私等あ笑つてるやうに仕事場の壁にゆら／＼映つて其大きな煖爐が、何か古譚の、怪物の不恰好な頭みたいて、地の下から突き出て、火て眞赤い大きな口を開いて、熱い息を吹掛けながら、丁度其額の所の黒い二つの風穴て、私等のひつ限無しに働く仕事を覗て居るやうて、加之に其深あい二つの穴ん、如何にも怪物の慾も憐みもない眼のやうで、奴隷を見張るのが倦いたつてやうに、常もけだるさうに私等を視て居て、汝等に人間らしいこたあ何にも出來ねえつて樣に、世の中の知識を馬鹿にして、私等を蔑んで居るやうでさ。

毎日々々忌やな塵や、庭から足に附けて來る汚い物や、濃い惡臭い蒸氣の立つ中て汗をだら／＼滴し

ながら、生麪を捏ねちやあ乾麪包を造へて居るんて、私等あ仕事が厭やて厭やて耐らねんてす。て、私等あ決して自分等の造ふ物あ食はねえんて、乾麪包の代りに黒麪包を食つて居るんてす。

長い机に九人と九人互に對つて坐つて、唯器械のやうに腕と指を動かいてるんてさ。もう今ぢや慣つこになつて、自分が何を爲て居るか氣も付けねえて、始終仲間の面を見て居るんて、誰の顏にあ皺が幾つ在るまで知つて居るんてす。て、話する事も無えんて、何にも話さずに默つて居るやうになつて、喧嘩ても爲ない時あ常も靜なんてさ。男の寄り合ひで、そこへ仲が善過ぎるんて喧嘩も爲るんてす。

然し其れだつて稀なこつて、始終苛酷に働くんて、皆半分死んだやうになつて、全て人形で、感情まて鈍くなつてるんて、喧嘩も餘んまり出來ねえんてす。

だが有るつたけの話を爲盡くいて、もう話す事ん無え者が、寂と爲て居るなあ、氣味が惡くて苦しいんです。然しさう云つたつて、別に話す事あ無いんて、寂として變あ無えんてす………

ても時にあ歌あ唄ふ事た有るんて、仕事の最中に一人、疲れきつた馬ん嘶くやうに、假に「アーア」つて云つて、それから調子ののんびり爲た歌あ徐に唄ひ出すんてす。悲しい優しい唄て、常も斯う、自然にうたふ人の氣が輕くなつて、一人唄ひ出すと、他の者あ始めあ默つて、其しんみり爲た歌を聽いて居て、室の重苦しい屋根の下で、その歌が震へて消えて、恰度どんよりした灰色の秋の夜、灰色の天が鉛の家根のやうに地に蔽つてる時に、草原で焚く小いさい野火のやうなんてす。で、直きに初め唄つてるのへ又一人伴いて、穩な哀しい二人の聲が、狹苦しい溝の、息の詰る熱い中から、漂つて上つて行

んです。すると急に五六人の聲が一つになつて、歌が波のやうに擴つて、漸々強く高くなつて、石牢のやうな灰色の重苦しい壁を、廣くする如に思へるんです。

そんな風に私等二十六人皆唄つて――同じやうな強い聲が一つになつて、仕事室へ充滿になるんで、歌が中で思ふやうに擴れないやうに感へるんです。で、それが石の壁に反響つて、揉られて痛いやうな、古傷が復口を開いたやうな感覺が、私等の痲痺つて居る心に起つて、變に悲しく胸騷ん爲て、魂が眼を覺すんて苦悶いんです。て、唄つて居て、皆深い苦い嘆息を爲て、其中に誰れか思はず調子が外れると、仲間の唄ふのを熟く聽いて居て、それからもう一度、聲を響の巨波に混和るんて、又中にあ苦く「アー」つて云つて、それから確り眼を閉ぶつて、歌あ續けるのも有るんです。

何しろ聲の廣い濃い波ん心に起つて居て、遠く、ずつと遠く擴つた――燦爛する日に照らされてる廣い路を、獨り自分と沿つて歩いてるやうで…………

始終竈の焰が搖ら〱爲て居て、そこへ麪包を炕く者あ鐵杴て煉瓦の床あ削るんて、其音がずあ〱耳に入くし、湯は大釜にぐら〱激つて居て、その上火の反射ん壁に動搖いて、靜に私等を笑つてるんて…………

他人の聲を聞いてる中に、自分等の面白くないことや、日の光も見られねえ生活の苦痛や、奴隷の辛苦を考つて、つひ泣けるんです。斯樣な風に私等二十六人大きな石造の室ん中に住んて居て、其狀態あ、

此三階の家あ私等の肩の上に建てられたかと、惨くて哀しいんです。

然し私等あ唄ふ外にもう一ッ善いことが有るんで、それあ私等の大切な者で、恐らく日光の代りなんです。

二

私等の家の二階に、金で縫箔を爲る製造場が在つて、其所に雇はれてる工女の中に、十六歳になるタヌアつて云ふ少女ん居るんです。それん毎朝私等の仕事場の、壁を突き破つた小い窓に來て、可愛らしい綠の眼の、優しい薔薇色の顔を押し付けて、 子の良い和しい聲で

「牢の中の衆、ビスケット少つとおくれ。」つて云ふんです。

すると私等あ、皆直ぐに其快活い親密しい聲の方に顧くんで、そして莞爾笑つてる初心な小い顔を、嬉しがつて凝視めるんです。

て、終ひにあ屹度來ることになつて、窓の板に押し付ける小い鼻あ見たり、笑つてるんで、薔薇色の唇の間から、ちらりと可愛いゝ白い歯ん輝つて見えるのが、娯になつたんです。

て、來ると皆起つて行つて戸を開けるんでさ。が、其時相互に急ぐんで、混雑して仲間の足を踏むんです。

それから少女ん入つて來るんですが、何時も元氣がよく嬉しさうで、私等の前に立つて首を斯う一寸片方に曲げて、膝袚を持つて始終笑つてゝ、栗色の濃い長い縮れ毛が、だらりと肩あ越いて胸に垂つて

るんです。
如何ら私等みたいに汚く見苦しい人間だつて、其所に立つて少女を見上げて——見上げるつて戸口あ床より四段高いんです。——少女ん顏を上げて、「お早う」つて云ふのを待つんて、少女に言ふ時あ、私等の言葉ん違ふんでさ——其言葉ん少女の爲めに特別に出て來て、其少女ばかつりに出るやうで、私等の聲ん平常たあ違つて、溫和て、戲談も亂暴ぢやなく、全く特別な變つた樣子なんです。
麪包を焼く者あ、籠の中から色の美い最良く焼けたビスケツトを、鐵杴に一杯すくつて、巧くタヌアの膝被へ投り込んで、
「意を注けて持主に見出され無えやうに爲ねえ、善いかい。」つて、私等何時でも云つてやるんです。すると少女あ、惡戲て笑ひながら
「あば、牢屋の來。」つて、小鼠のやうに直ぐ行つて終ふんてす。
唯、少女ん行つた後だけあ、長く面白く少女のことを話し合ふんです。私等あ何時も同じことを云ふんです。さうなるんてさ、何故つて、私等の周圍あ、「少女だつて、私等だつて、何だつてかんだつて、常も同じて少つとも變ら無えんですからね。
實く周圍の物ん變らぬ所に居るなあ、隨分苦いんて、假令此爲め氣脫け爲たやうにあならねえつて、長く住みあ住まふほど餘計困くなるんてす。
私等斯樣な風に始終女のことを話いて、時にあ亂暴な外聞の惡いことを云つて、無理に聽いて居るん

です。何て云つたつて、私等の知つてる女でさ、話をする價値ん無えに定まつて居るんです。然し、私等決してタヌアあ惡るく云つたことあ無えんて、誰れだつて指一本觸つた者あ無えんです。それ所ぢやねえ淫りがましいことも言はねえんです。

此れあ一つあ、少女ん私等ん傍に長く居ねえて、星のやうに眼を瞬ちして居て、直きに行つて終まふからなんです。たが又一つあ、小いさくて、奇麗て、可愛らしいからなんです。幾ら粗野い人間だつて、美しい物を見りや尊く思ひまさ。そりや他にも理由ん有るにあ違え無えんです。如何に私等ん監獄に居るやうな勞働爲て、陰氣て感が無いつて、矢張人間なんてすからね、人間並みに何か尊ぶ物ん有るんです。

私等にあ少女より善い者あ何にも無えんて、他の者あ誰れだつて、窖住みの私等の回顧も爲ねえんてす。居るにあ隨分大勢居やがるんですがね。

それてもう一つ——そいつが最主要なんて——私等皆少女を妙に私等の所有みたいに考つて、乾度ビスケット貰ひに來る者と定めて居るんです。て、出來たつてのビスケット與れるのを義務のやうに思つて、それが私等の神像に捧げる毎日の供物なんてさ。宛然神聖い役目のやうて毎日乾度爲る事になつたんてす。又私等あビスケット與れるより外に、種々告つて遣るんです——「もつと厚着爲ねえ」とか、「二階を走け廻つちやあ惡えとか、」「木の重いのを持ち歩いちや惡え」とか、其樣な事なんてす。すると少女あ莞爾して聽いて居て、云つて終ふと乾度笑つて、決してこれんばかりもさう爲ねんえてす。て

も私等そんな事て憤怒ねえんて、私等唯少女を思つてるつて事を知らせりや善いんてす。

時々少女あ私等に種々な事頼むんてす。「室の戸が重くつて開かないから開けてくれ」とか、「木を切れ」とか、其様な事を種々云ふんてす。すると私等あ喜んで、喜ぶ所ぢやない頼まれたのを自慢に思つて何でも爲てやるんてす。私等の方ぢや其れ程に爲ても、何時だつけか仲間の奴が、一枚限りの襯衣を繕つてくれつて頼んだんてさ、すると少女あふんつて鼻て輕蔑して、

「それから何に? 其様な事より、外に爲る事が有りますつて、お氣の毒さま、へえ。」

私等あ腹の皮あ糾つて其野郎を笑つて、もう決して仕事を頼まなんだんてす。

私等あ女に惚れて居たんて、――言つ終やあさうなんでさ。

男あ常も誰れか可愛いがつて居たいんてす。そりや時にあ其爲めに苦めたり、酷い事を爲たりする事も有るんてすがね。

男は惚れると隣の者を毒害すことだつて、随分やり兼ねゝえんてす、惚れると少つとも對者の事を考へねえんてすからね。

私等他に惚れる對者が無いんて、タヌアに惚れるより仕方ねえんてす。

時々斯んな事考へてみる者も有るんてさ。

「何だつて己等斯様なに彼女郎をあまやかすんだ。一體彼女が何所ん善いんだ。えッ、何故己等あ彼女に大騒ぎ爲るんだ。」

斯樣な事云やあ、それこそ怒鳴られまさ、私等何か可愛がるものん要るんて、それを見出いたんて可愛がるんてす。

私等二十六人が可愛がる者を、誰れだつて手を觸ける事あ出來ないんて、彼れあ私等のあらたかな神社て、誰れだつて此れに背いて行りあ直ぐ皆の敵なんてす。

人つて云ふものあ、眞に善くなくたつて時々惚れる事も有るんてす。然し、私等二十六人は同じ舟に乘つてるんて、他人の善いと思ふものあ、自分も然う思つて、自他人に手を觸けない樣になつたんてす。

三

持主あ乾麪包製造場の外に、上等菓子麪包の製造場も持つて居て、それが而も同じ家て、私等の窖たあ唯壁一と重なんてす。それて其方の奴等あ——四人居やあがるんです——私等を輕蔑爲て、私等より潔な仕事爲て居る氣て、それて私等より優らい量見て居て、私等の仕事場へは決して來ねえんです、庭て出會つたつて、馬鹿に爲ていやに笑ふんてす。

私等の方も行かねえんてす。持主ん私等ん乳菓を盜むつて心配爲て、行つちやあ惡えつて禁めてあるんてす。

私等あ菓子工場の奴等大嫌ひなんて。何故つて妬けまさ、奴等の仕事あ樂て、錢あ澤山得つて、其上甘い物を食つて居て、仕事場あ廣くて明るくつて、美い衣服着て、體だつて壯健て、私等たあ皆反對て

す。

其所へ行くと私等あ全く情無えんて、病氣て困苦つて居て、皆肺勢が惡くて、一人あレウマチて全然足が利かねえんてす。

それで彼方の奴等あ祭日や暇のある時にあ、潤い短表衣を着て、ぎう〳〵鳴る靴を穿きやあがつてね、而も二人あ手風琴など持つて、皆して公園へ繰り込むんてす。私等の方は常の通りな汚い襤褸衣服で、踵の摩り減つた上靴か、ヅックの靴を穿いて、それて公園へ入り込まうつとすると、巡査め惡えつて云んてす、是れぢやあ何う爲たつて、彼方の奴等あ好きにあなれねえんてす。

それから、私等あ奴等の監督ん酒ばつかり飲んでるつて事や、持主ん其奴を解雇いて、他の奴を雇つたつて事や、今度の野郎は兵士上りて、立派な繻子の背衣を着て、時々金鎖をぶら下げて居るつていふ事を聞いたんてす。て、私等如何な野郎か見てやりたいつて、交みに庭へ走けて行つたんてす。

すると野郎私等の仕事場へ來て、戸を足で蹴つて開けやがつて、而も開いたなりて入口に突立つて、いやに莞爾して

「やあ、働いてるな。」つて云ふんてす。

戸を開けたなりに爲て置くんて、煙ん雲のやうに爲つてる所へ、寒い風が戸口からぴう〳〵吹き込んて、奴の足の所でぐる〳〵廻るんてす。て、野郎は入口に立つて、上から私等を見下いて居やがつて、丁寧に捻つた赤つ黄い鬚の下から、大い黄色い歯が見えて居て、又其胴衣ん變なんてさ、青い地へ花あ

縫つてあつて、いやに燦爛爲てボタンにやあ小い眞珠ん附いて居て、其所へ金鎖ん見えて居るてんてす…………

男振りの善い野郎て、丈が高く壯健さうて、頬が赤く、眼は大く活き〳〵爲て居て、人好のするきつぱり爲た眼て、頭にあ白い、糊て硬めた帽子を被ぶつて、清潔な汚れのないズボンの裾から、意氣なぴか〳〵磨いた長靴の尖ん見えて居るんてす。

乾麪包を炕く奴ん丁寧に、「何卒戸を閉めておくんなさい。」つて云ふと、考へるやうに一寸首を曲げて、閉めてから、種々私等に持主の事を聞くんてす。私等あ互に、持主あ慾深て、人をこき使つて、殘酷て、惡人て、罪人だつて、さんざん云つてやりました。持主の野郎眞實に癪に害つて堪らねえんてす。

兵士の野郎鬚を捻ねくつて聽いて居て。莞爾して私等あ見ながら、

「此邊にも淫賣が多いだらう。」つて、急に云ひ出したんて、皆くす〳〵笑つたり、顏を歪めて我慢して居ると、一人の奴ん此所にも隨分下等女の多い事を話したんてす。すると

「甘くやるだらう。」つて眼を細くして聞くんてさ。て、私等復笑つたんてす。そんなに大い聲てなく顏を歪めて。中にあ私等も、御同樣に「かまはぬ連中」だつてことを、知らせたい奴も隨分居るんてす。然し誰れもそれを云はねえんてす。えゝ一人も無えんてさ。唯、誰か「御覽の通りて……」つて云つたゞけて。

「さうだらう。そりや困難しからう。」つて、兵士の奴眞に受けて、熟つと私等を見ながら、

「今に如うかなるだらう。貴樣等一寸運が惡いんだ。然し、今に何うかなる。もう其所に見えて居る。分明つたか。それから女は風采の善い男を好くから、立派で無きや惡ん。何ても恰好が善くて、さつぱりする必要がある。それから力の强い男を好む者だ。ヱッ此腕は何うだ。」

兵士の野郎右の腕をポケットから出いて、シャツを剝くつて肘まで露して見せるんてす。力の有りさうな白い腕て、色の善い黄金色の毛が生えて居るんてす。

「脚も胸も同じやうだ、何うだ强固爲て居るだらう。それから衣服も氣が利いた着樣を爲て飾も附けて居無くちや惡ん。己を見い女が皆惚れて來る。己れは女を呼びもせず色眼も用はんが、彼等から幾らも來て頸に纒き附いて煩さい。」

斯う云つて野郎麥粉の籃に腰を掛けて、女が惚れたの、何う爲たのつて事を何時までも話いてるんてす。

奴が出て、戶をぎいと閉めると、後は少しの間奴の事や其話を考へて居て皆靜てした。

暫く經つと急に皆話し出いて、彼奴あ頗る愉快な奴だつて、誰れも彼れもさう云つたんてす。

奴あ勿體ぶらない面白い奴て、恰て私等の仲間のやうに、來て腰を掛けて話を爲たんて、前にあ斯樣に親しく話を爲た者あ一人も無えんてす。て、私等あ種々奴の事の話をして、金の縫箔工場の娘等と、甘くやるだらうつて云つたんてす。彼等ん庭て會ふと、彼等あ常も口を歪めたり、故意と避けて行つたり、又誰れも彼奴等の途に居ねえつてやうに、眞直にずつと私等の方に歩いて來るんてす。私等あ庭て

會ふ時や、窓の傍あ通る時一寸見るだけなんです。娘等冬にあ變てこな小い毛皮の帽子を被つて、妾の衣服を着て、夏あ花を附けた帽子て、派手な日傘あ持つていやにすまいて行くんです。

然し私等あ隨分酷い事を云ひまさ。彼娘等に解りやあ怒つたり、恥しがつたり氣が違ふかも知れねえんです。

「然しタヌアは如何だらうな、兵士め彼の女汚りやあ爲ねえだらうな。」つて麪包坑の兄ん急に陰氣な聲て云ふんです。

此一と言ん私等に非常く感いて、私等皆默つて終つたんです。私等あタヌアの事をつい忘れて居たんてさ。兵士の立派な粗大い體あ見て、其方に氣を取られて居たんで……。て、直きに喧しく議論が始まつて、中にあタヌアあ決して其樣な事て、靡くめえつて云ふし、又然しさうは出來めえつて云ふ者もあるんです。て、終ひに、兵士の野郎若しタヌアに手を觸けやうつて爲りや、野郎の肋つ骨を打ち折らうつて云ひ出したんです。とうとう我等あ兵士とタヌアを注意て居て、少女に奴の事を告つてやらうつて定めて、議論が收つたんです。

四

それて一と月過ぎたんです。兵士あ自分の巻麪包を燒いて、工女等と出て來ちやあ、時々私等の仕事場へ來るんです。然し女等を手に入れた事に就いちや一と言も云はねえて、唯、口髯を捻つて、舌打ち爲て居るんて……

タヌアも毎朝「ビスケット少つとおくれ」つて來て、常も樂しく溫和しく、私等と親しく爲るんです。て、私等ん兵士のことを話すと、彼の「凸眼の愚人」とか、種々惡口を云ふんて、私等あ安心するんてす。他の工女等ん兵士に纏き着くのを見ると、私等あ

「何んだ彼の女郎等の態あ、我等のタヌアあ見ろ。」つて樣な氣て鼻ん高かつたんてす。

タヌアが兵士に對ふ態度が氣高いんて、何だか私等全體の運命が高まるやうて、タヌアの監督のやうな氣が爲て、兵士の奴を輕蔑するやうに化つたんです。

然しタヌアは前より可愛がつてやつて、私等あ毎朝愉快く餘計に戲談を云ふんてす。

一日兵士がやつて來たんてさ。

一杯飮んて居て、腰を掛けて笑つて居るんてす。で、私等ん何故笑うつて問くと、

「女が二人て己れの事から喧嘩した。リッドウつて云ふのと、ゲルトウつて云ふ女だ。」

つて云つて

「互に惡口を云ひ合つたぞ、ハハハ、、、、……。それから髮を摑み合つて、床の上へ重つて倒れて、上になり下になりハハハ、、、……。ひつ搔いたり、、、むしり合つたり爲て、己は噴笑し度かつた。女て彼樣な事を爲るなあ、態がないな。何故斯樣に常も握み合ひを爲るのか。譯が解らん。」

奴め腰掛へどしッと座つて如何にも面白さうに笑ふんてす。私等あ默つて居ました。奴を愉快く無つたんてす。兵士あ

「己は自分で解らん。己は如何なに女に縁が有るのか、實に可笑しい。己が一寸一と眼見ると、其女あ直ぐにまいつて、己の手に入るからな。」

黄金色の奇麗な毛が生えた白い腕を高く上げて、下ろす時に、ぱたッと一つ膝を打いて、女を手に入れるのが如何にも巧妙つて自分ながら感心したやうに、恍惚と奇異さうに私等を凝視めて、其肥えた赤い顏が、如何にも嬉しく面白いてやうに活々爲て、連りに舌あ鳴らいてるんです。

鐵杴で荒つぽく竈を刮げて居た麪包を坑く兄ん、急に冷笑し半分に

「小い樅を倒すなあ何でも無えが、大きい松の樹あ一寸倒せませんぜ……」

「それが己れに關係が有るのか。」

「汝に有りますさ。」

「ぢや何の事だ。」

「何ても無えんてす………無益らん事てさ。」

「まあ一寸待て、何んて云ふ洒落なんだ。松の樹つて云ふなあ何の事だ。」

麪包坑の兄あ。返事を爲ねえて、煖爐へ鐵杴を忙しく入れたり出したりして、善く坑けたビスケットをすくつちやあ、一寸振つて床の上へあけるんてす。すると少者んそれを皮て作いた網の上包へ整へるんてさ。

て、兄あ兵士の居るのも、奴と話したことも忘れたつて風て居るんてすが、兵士の野郎心配になつて、

立ち上つて、煖爐へ寄つて行くと、丁度鐵杴を擧げた所て、危く胸に中るとこなんてす。
「さあ話せ、松の樹つて云ふなあ何だ。貴樣あ己を侮辱するな。云つ終へ、女一人ばかりに負けるものか。貴樣此樣に己を怒らせやがつて…………」
奴あ眞實眞面目に腹あ立つたんて。
此樣な事より外に何にも長所は無いんて、奴の能るなあ、女を手に入れるだけなんてす。是れを除りやあ、奴あ全く活きて居る價値は無いんて、唯是れがあるんて活きてる人間だつて感へるんてさ。世の中にあ、體か精神に病氣な所を探いて、それを最良い最貴いものと考ふ人間ん有るんてさ。其樣な人間あ一生それを大切に育てゝ、全く生命に爲て居て、假令苦勞爲たつて、決して止めねえて、他人にあ「己れも是れに弱る」つてなこと云つて、隣の人の注意を引いて、それを同情を得る手段に使ふんてす。
これが無けりやあ、奴等あ全く何にも無して、彼等から此病を去つて全快させりあ、却つて不幸てさ。生活の唯一の手段を奪られたんて、ぽかんと爲つて終ふんてす。
時々人間つて云ふ者あ、不價値くなつて、自分の惡いことに無理に値を附けて、それて生きて行かなけりやあならねいんてす。實際云ふと、退屈て惡い事を爲るのん隨分多いんてす。
兵士の野郞憤怒つて、兄の方へつか〳〵行つて、
「さあ、云つ終へ、一體誰れだ。」つて怒鳴るんてす。

「え、云へつていふんですか。」つて、兄が奴の方を向くと、

「ん、さあ云へ。」

「タヽアつて少女を知つて居ますか。」

「知つてる。」

「知つてる、ぢやあ試つてごらんなさい。」

「己がゝ。」

「汝ですとも。」

「フッ、それが何だ。」

「まあ當つて御覧なさい。」

「ハヽ、見て居れ。ハヽハヽ。」

「少女ん汝を見て居まさ。」

「一と月見て居れ。」

「へ、好い加減なことお云ひなさい。」

「なに、二週間でいゝ、乾度手に入れて見せる。彼の女が何だ。小娘ぢやないか。フッ。」

「さあ行つておくんなさい。防害になりまさ。」

「二週間中に乾度だ。それて充分だ。待つて居れ。善いか。」

「行つておくんなせえつて云ふにッ。」
兄ん俄に荒つぽくなつて鐵楸を振り廻したんて、兵士あ愕いて退つて、默つて私等を見て居て、故意と沈着いて
「善し」つて云つて出て行つたんてす。
兄と兵士と論爭つて居る間、私等深く感じて、唯默つて居たんてす。
然し、兵士ん行くと、皆大きな聲でがや〳〵言ひ出して、誰だか兄に
「面白くなりやしたね。」つて云ふと、兄あ
「仕事を爲ろ、解つたか。」つて激しく云ふんてす。
私等、兵士の野郎、タヌアを脅すに違えねえ、危險だつて感つたんてす。然しそれでも何だか面白いやうな氣が爲て、何うなるだらう。靡きや爲めえかつて、皆感つても、私等少女を信用しきつて居たんて、
「彼の少女あ大丈夫だ。」つて、誰れも同じやうに云つて居たんてす。
私等少女ん靡かねえか何うかつて試すのが氣にかゝつて待遠しいんて、互に
「彼の少女あ大丈夫だ。誰だつて跳ねつける。」つて云つてゐたんてす。
て、私等兵士をよく鼓舞つて置かねえんて、野郎が忘れや爲ねえか、もう少つと煽てゝ置かなけりやあ無益だつて思つたんてさ。

其日からつて云ふものなあ、今迄たあ全て變つて、非常に感じが強くなつて、前にあ決して此樣こたあ無かつたんてす。毎日がや〳〵論爭つて、何だか斯う賢くなつて、高尚になつて話が多くなつたやうなんてす。

何だか惡魔あ對手に勝負をして、私等の方ぢやタヌアを賭物に爲たやうな氣がするんて…………て、菓子麪包工場の奴等から、兵士んタヌアを追ひ廻いて居るつて、聞かされると、私等心配で堪らなくなつて、何うだらう〳〵つて、其方にばつかり氣を取られて、私等ん騷いて居る間、持主あ捏粉を毎日十四ブッズ餘計得たてたあ知らなかつたんてす。

私等實際少つとも仕事を怠けねえんて、又タヌアのことも云はぬ日は無えんてす。で、毎朝來るのん待ち遠いんてす。

然し、來ても兵士と私等と賭を爲たこたあ、一と言も云はねえて、少女にあ別に何にも聞かずに、前の如うに親切に可愛がつて居たんてす。

ても、私等んタヌアに對ふ心持ん前たあ變つて、何か別な變つたものが入り込んだんてす。畢竟鋭い好奇心——鋼鐵の小刀のやうに、鋭くて冷い好奇心なんてす。

一と朝、兄ん仕事に掛りながら

「おい、さあ時間だぞ。」つて云つたんてす。

私等あ云はれねえつて、よく解つて居たんてす。然し云はれると、皆同じやうに震へたんてす、

「よく見ろ、少女ん直き此所へ來る。」つて、又云ふんてす。

すると、誰れか氣の毒がつて、

「彼の兄の眼を見ろよ。恰て何か凝視めてるやうじやねえか。」

云ふと復論爭が喧しく始つたんてす。

今日は私等の一所懸命な舟ん、到底も勝つ事ん出來んてえのが知れるやうて、其朝あ、俄に今更のやうに大勝負を爲て居るのに氣が付いて、事に依ると、私等あ此勝負て少女を取られて何も無しになりやあ爲ねえかつて事を感つたんてす。

私等あ此四五日つて云ふものあ、兵士の野郎が執拗くタヌアを追ひ廻して、頑固に少女を脅すつて事を聞いたんてす。然し、誰一人少女に兵士と出來たらうつて聞く者あ無いんてす。

それて少女あ毎朝ビスケット貰ひに屹度來て、常も同じやうて。此日も直きやつて來て、

「牢の中の衆、來たよ……………。」

て、私等あ、タヌア見やうつてどや〳〵行つたんてす。然し少女ん入つて來ると、常もと違つて唯默つて見て居るんてす。斯う熟つと少女を凝視めて居て、何を云つて善んだか、何を問いて善んだか解らねえて、皆陰氣に默つて立つて居るんてす。

少女あ此異つた樣子に愕いて、急に蒼白めて、心配さうに、落着かず始終動いて、靜な聲て、

「一體何う爲たの。」

兄あ少女から眼を離さねいて、

「汝は何うだよ。」つて陰氣に云ふんてす。

「妾？何う爲たつて云ふの。」

「いや、何ても無い。何んてもない。」

「さあ、ビスケットおくれ、早くッ。」

前にあ少女あ決して此樣に鋭く云つた事あ無いんて、兄あ、靜止として少女の顔から眼を放さねぇて、

「汝急いてるな。」つて云つたんてす。すると少女あ彼方を向いて戸口から行つて終つたんてす。て、兄あ鐵鍬を握つて、煖爐の方へ向き直つて穩に云ふんてす。

「解つた、少女あもうすつかり野郎に參つちやつた。あゝ彼の兵士の、飲だくれの、鼬野郎！。」

私等あ羊の群の如に、互に肩と肩あ摩れ合つて、机の所に行つて默つて座つて、厭や〳〵仕事を始めたんてす。

すると直ぐに誰れかゞ、

「だがもう出來たらうか…………」つて云ふと、兄が

「よせ、よせ、幾何云つたつて無益だ。」つて大き聲て云ふんてす。

私等兄あ怜悧て、私等よりずつと賢いて事を知つてるんて、兄ん斯う云ふんて、兵士の野郎ん勝ちや

がつたつていふ事を解つて、幸無く氣にかゝるんてす。

十二時が鳴つて丁度晝餐の時、門兵士の野郎がやつて來たんて。奴め常のやうにめかいて奇麗に飾つて居て、熟つと私等を視て居るんてす。然し私等あ煩さく思つて居ると、奴め高慢ちきに笑ひながら、「え、汝等、見たけりや少つと腕前を見せてやらう。丁度宜い、外へ出て裂罅から窺いて見ろ。何うだ。」つて云ふんてす。

私等あ肘て推し合つて外へ行つて、離屋の板屏の裂罅に顏をぴたりとつけて、庭を窺いて居ると、タヌアが急ぎ歩で、甚く心配な顏色を爲て、雪や泥の水溜をちよい〳〵飛んて、泣きながら庭を來るんてす。

すると兵士の野郎、直ぐ後を大急ぎて口笛を吹きながら出て行つて、庭へ來てタヌアと同じ方へ行つた、二人て何か談を爲たんてす。

奴あ兩手を深くポッケットの中へ突込んて、髭を上下へぴく〳〵動かいて居て…………奴も何所かへ行つたんてす。

其時雨ん降り出して、私等あ雨滴がぽつ〳〵水溜へ落ちて、水溜が其れで小波ん出來るのを見て居たんてす。其日あ陰暗い、天が灰色な極く厭やな日て、雪がまだ屋根に積つて居て、地にあ、もう所々に泥が見えて、家根の雪にも、汚い、淡黑い鳶色の煤が降りて、雨あ陰氣にしと〳〵と降つて居るんてす。

私等あ寒くなつて、其所に立つて待つて居るのが不快になつたんてす。然し私等あタヌア女郎め、高が普通の兵ぢやありませんか、其奴の爲めに彼れ程大切に爲てやる私等に背きやあがつたと思ふと、腹の中ん湧りかへるやうて、今に來たらうんと存分にど酷くやつゝけてやるつて樣な、惡魔のやうな氣て待つて居たんてす。

少時經つと、私等あタヌアが歸つて來るのを見たんてさ。女郎の眼、女郎の眼は實く喜と嬉さて燗々く爲て、口元あ微笑て居やあがつて、夢の中あ辿つて居るやうに、彼方此方搖れながら、ふら〳〵爲て歩いて來やがるんてす…………

私等あ靜止として居られなくなつて、皆急に戸口からどつと庭へ走けて行つて、惡魔や獸のやうに、しつて云つて少女に號叫いたんてす。

私等あ認ると、少女あぶる〳〵爲て、足元の泥の中から生たやうに立つて居るんてす。私等あ少女を取り圍いて、どし〳〵意地惡く腹存分に罵つて、くた〳〵に惡く云つたんてす。私等大きな聲あ出さねえて、暫らくさうして居たんてす、

少女あ今何所へも行けず、眞中に立つて居て、私等あ好きなやうに、腹癒ん出來るんてす、理由あ解らねえが私等少女を擲く事あ爲なかつたんて、少女あ眞中に立つて居て、私等の惡口を云ふのを聞いて居るやうに、彼方此方を首を廻いて私等を見て居るんてす。それて私等あ漸々亂暴に惡口雜言を濯ぎかけるんてす。

少女あ顔色ん眞蒼になつて、綠の眼——一分前まじやあ嬉さて彼れ程に輝いて居た眼を廣く開いて、胸あ苦しい嘆息をついて、唇あぶる／＼慄えて居るんです。

それて私等あ少女を圍んて、女郎め私等から盜みやあがたつんて、復仇を爲てやるんです。

少女あ私等の所有て、彼の女郎にあ出來るだけの事を爲てやつたんてす。それやあ其出來るだけの事つて云つたつて、乞食の持つてるほどの物て、眞のこれ許てさ。然し私等あ二拾六人て、少女あ唯一人てすから、到底もそれに相當するだけ苦めてやるつていふ事あ、工夫が附かねえんてす。

私等恐ろしく惡く云つて、少女あ默つて居て、捕つた獸のやうな眼色を爲て始終私等を凝視めながら、ぶる／＼震へて居るんです、

私等あ、嘲弄爲たり、罵つたり、苦めたり爲て居ると…………他の奴等ん走けつけて來たんて…………仲間の一人んタヌアの袖を引つぱつたんてす。

すると、少女の眼が急に活々爲て、悠然手を頭へ上げて、髮を整して、眞直に私等を凝視めて、大きな然し靜な聲て

「ヘッ、惡者め。」つて云つて、ずつと私等の方へ歩いて來るんてす。恰て私等ん少女の前に立つて、途を遮いぢや居ないやうてさ。

少女ん私等の方へ歩いて來た時あ、實際一人も立つて居ねえと同じだつたんてす。

眞中から歩いて出て、私等の方を回顧きも爲ねえて、大きな聲て、云はれんほど侮辱して、

「へッ、惡者、毒蟲等。」

そして少女あ行つて終つたんてす。

私等あなほ庭の泥の中て、雨の降る灰色の陰暗した天の下に立つて居るんてす。

やがて私等あ默つて灰色の石て造つた地の下の暗窟へ歸つたんてす。前の如に日の光あ決して射し込まねえて、もうタヌアも來ねえんてす。

俗語詩五章

吉野臥城

生活の苦悶

（北海に移住する窮民のうたへる）

今年や半作、去年は不作、
不作つづきの半作辛や。
年貢納めよと俵にすれば、
あとに殘るは籾殻ばかり。

殘る籾殻唐箕にかけて、
吹けば飛び散る埃のやうに。
こちの口からさらさら落ちて、
ちよいと積るは粕米一升。
あちの口から粃は五合、
雞にやらうか、家鴨にやろか。

あはれ今年は粕米食うて、
蠶飼時には籾殻賣ろか。

賣つて食はうとて幾日つゞて、
稚兒は火がつくよに泣き叫び、
老は枯木と瘦せさらぼひて、
死ぬと云ふのは目に見るやうな。

年貢とらえで一年二年、
小作惠むも、地主は死のか。
いつそ俵をこつそり運び、
市に鬻いて金得よ、金を。

鬼のやうなる地主ぢやとても、
涙、情は露ほどあらう、
朝日のぼらば涙も乾て、
露の消えない夜の間の生命。

金のあるうち故郷逃げて、
蝦夷が島根に幸の木探ろ。
土を掘るなら田鼠のやうに、
掘つて斃れりや、其のまゝ墓よ。

石工

田舍の町の安旅籠、
長行燈のほと消えて、
霜光りする家根の星、
ひつそり閑と夜が更けた。

その軒並び、簷低く、
洞窟のやうに淋しげな、
家に、石工がひとり居て、
鼻唄うたひ石刻む。

夜風に搖ぐかんてらの
油煙は細い氣息を吐き、
鈍い眼のものうげに、
信女の碑を守るけはひ。

石工は向鉢卷に、
うつすり蒼い顏を見せ、
片膝立に石踏まひ、
こつりこつりと小止なく。

石は月夜の霜光り、
ぞつとするよな白花崗石、
冷たい胸に信女とぞ
刻んで、凝と視おろした。

不安の眉根さと動き、
鐵槌振つて鐵錐を
眞白い胸に打ち込めば、
石火ひらめく瞬のはえ。

「戀も生命も石火と消ゆる、
消ゆる石火を又おこす。」
うたふ鼻唄泣くがやう、
涙が頬を傳うてた。

野の人

朝は未明に草の戸出てて、
土の氣息吹く畑耘れば、
胡蝶舞ひ來て鳥こそ歌へ。
(憂さも辛さも忘れて活くる。)

夜は洋燈と書に親みて、
昔の爺が心を讀めば、
神の御國はまぼろしに立つ。
(清い楽しい夢みて眠る。)

燕

海こえ、野こえ、山越えて、
夢はぐくんだ巣の巣に、
來て鳴きかはすつばくらの
春は、どんなに嬉しかろ。

去年の秋の無花果の
ころに、別れた戀人も、
世の苦を嘗めておはそかと、
私や思に痩せて泣く。

雪割草

越の國なる雪崩の中て
根掘じ、おこせし情を鉢に
植ゑて眺めりや、蕾は戀か、
あたたかい日の思に開く。

君が來ぬ日の冷たい空氣、
室をめぐれば、忽ち萎む。
君と私とが對ひて語る

氣息が薫れば、花さへ開く。
あれよあんなに雪割草が、
美し唇開いて笑ふ。
戀しめぐしと私や思ふ君は、
なぜに開かぬ愁の扉。

散會

溝口白羊

會果てぬ。
人皆散り行くさま——
黨の首大隈伯を
乘せて行く馬車の轍
敷石をキキと軋りて
ちらつく灯
玄關に群れ騒ぐ女ども——
あゝ闇に消え行く伯の車。

かくて一刻——
殘れるが立たんともせず
座敷には靜寂ぞ滿ちぬ。
彼方此方の徳利には
燗ざまし酒——
高き臭氣に、蠅一つ——
ぐる〱と其處ら廻りぬ。
床脇は四五人の席
皿小鉢そこら亂れて
骨出てし魚の骸に
あか〱と燈ぞ照らし
物の香は室にあぶれぬ、
あゝさびしら。
かゝるとき
白き髯胸に垂れしが

ひとり叫びぬ。
『媚ぶるは耻ぞ
藩閥に媚ぶるは耻ぞ』
繰り返す口の中。

囁きて、頭禿しが
北寄の襖に靠れ
眼つむりて
心無き仙者めく
唐詩の一とふしを
小音にうたふや。
傍座の若き一人は
ものをも言はず
捲煙草頻に吸ひつ。

また一人領袖らしき
姿せる肥えたる人は
灯火に背を向けて
双足をうち抱き
頭をば俯伏せて
うち萎れ、默し居ぬ。

電燈の下には
群れて居る三五人
埒も無く醉ひ痴れて
隣座の友どちと、折々に
可笑しげの高笑
肴をばせゝりつゝ
酒盃を空に上げ
一黨の安危も
知らぬさま——
會衆は等しく
大なる息吐く。

能辯の博士も
力落ち阻むらし。

思出す如くにも
ハタ／＼と力無く
途絶つゝうち出す
拍音にさそはれて
立ちにしが、辯舌は
日頃にも似ざりき。

勝利の氣に浮かれて
我黨の將來を
忘れたる若人も
滿場の寂寥に
さすがにも打たれて
皆からべ垂頭れぬ。

一としきり電燈は
薄暗く鈍みて
あゝさびしら――
誰一人華やかに
論ずるは無かりき。

（一月廿一日進歩黨懇親會の翌夜）

和歌　緑舟選

○　　川俣冬青

しづやかに駒はうたせぬ野の月の花草の芽にてりみちし時

野に立てば眉よりつゞく朝霞君住む森にひろごりにけり

山の雲海におつなりやわらかう胸に手あてて脉思ふとき

あさのあめ晴れゆく牧の花草は紅なり君の頬によう似て

美しき人の數ほど春の野は花さきけらし風なつかしき

○　　關　孤帆

うとましう三月へぬれど忘れえぬ心はさやに君を見るかな

雁なくや流人の涙いざなひて島に落ちゆく月をしぞおもふ

戀しさや君も寢ざめておはすらむ月ある窓のほのあかりかな

冬の森骨立つ木々の中にして高く星よぶ夕あらゝぎよ

○　小林狂霞

みだれふす芦のなかより鳥たちて船の灯小さし霜のなには江

あさ明のはなれ小島のあら磯に底なりどよむ鐘をきくかな

花草のしをるゝおもひ吾が胸は君かひとみの光にたへぬ

何といふ歡喜かむねに光しぬ君とならびて母をみる日は

雪の日やうつくし人は炬燵して物がたり本よみてあるらし

○　小木鳥城

名にひかり富にかゞやく世の人の目がくしすなる夜にやはあらぬ

山上や甍の巷を見下ろせば小さき人のものくるはしう

君とわれ花輪つくるとよりそひて夕の露につゝまれてゐぬ

○　梅田濤牀

離れ島忍び足して荒磯に信天翁おふ漂浪人よ

高鳴りの潮の遠音を天樂ときゝぬ二月の有明の海

○　金城白霓郎

南國のふる郷めきし家ならぶ竹藪ごしに月はにほひぬ

君見し日干かれし胸も歡喜のしづく流れてうるほひにけり

黃泉に行く影とも思ひ涙しぬ霧ふる町にうするる人を

怪魚住みて鰭ふり尾ふり胸の海の靜穩みだす日なり夜なり

このいく日君は來まさず流人めくこゝちをおぼえ雨きいて居ぬ

○　中川盈波

人の子がもだえに沈む日のごとも海は暮れけり海にび色に

よき衣の少女も銀の衝立もみながらさむし冬の高殿

風に乗りて磯回をめぐる雪姫が玉の御聲となく

千鳥かな
牧人が幸ある朝を小羊と影をならべて野行き岡行く

○　梅田米三郎

華やかに雨の降る日は琴の爪はめてはづして人をまつかな
大砂漠なかに泉を得しこゝちわすられしかの君が文見る
たゞ一人枯野の月にたゝづめば聖者となりて世を見るこゝち
木枯ははなち飼ひなる雞の毛をさかさまに吹きたつるかな
森行けば千年古りにし聖堂の廻廊めぐるこゝちするかな
磯の夜や波をし開けば海底に醜女千人が呼ぶかと思ふ

○　村田寛敬

木曾の山おどろが下にうづもれし雪ふみしだき朝なく雉子よ

○　大塚榮子

桑摘の桑摘を呼ぶ聲消えてゆふべとなりぬ蠶飼ふ村
山が家の椽に巌のかご下ろす娘にしばし照り春の日くれぬ
明けぬれば君と別れむかなし日の夜となりにけり夜は更けにけり

○　大塚石楠花

かすかにもかよふ我が呼吸大いなる音ときこゆる寂寥の夜かな
君思ふ胸めぐる神來とばかり襟ひろげみる闇にむかひて
小鳥らは耳かたむけてきゝて居ぬ花と花との朝さゝやきを

○　清宗廣太郎

春雨に首もたげたる花草ににるとし思ふ人のこひしさ
我幸に比すべく春の雲ぞよき手にするつかのまを消えてゆく
君はまだ歩みてあらむ雨雲はあわたゞしくも北に馳せゆく

○　鈴木康

恐ろしき影を影とも認めえず心ゆるみし夜の寐

覺かな。

○　　金澤妖花

星高く風もなき夜を遠流人經よむ聲す北なる小島

みづうみや岸なる家は灯して柳にほそき雨を見るかな

春の宵柳たをやめ梅をとこ相見て笑みぬ小川を中に

麗日やみづうみ近き松原のうへを流るゝうつくしき雲

春藻會詩稿

○　　和貝夕潮

春の潮大和田津海の彼方より天兵きたる音してよせぬ

とほくなる人と吾との頰をてらし夕月落ちぬ末(す)枯(かれ)大野に

○　　淺野白汀

小羊のひとみうつせる水甕のまろき底より陽炎立つも

わびぬれば愛づる花をもかへりみぬこともあり心あさましきかな

あゝ君のゆく路とほみさびしさをわれはつどりぬ夢の草もて

あゝおもひおもはぬがごとけふと明日と送りむかへて日をすごしぬる

いひしれぬもののわが胸をわたるときそゞやひとみに涙おぼゆれ

あゝ闇のながき洞(ほら)をはさぐりゆくこゝちにけふも君まちしかな

きれぎれに母が臨終(いまは)の吐息するやうにも夜の風はふくかな



蠶

窓あけて眠むた眼さます蠶飼哉　　蝶衣

等閑になりし機場や蠶飼時　　同

妹が蠶一木の桑をたのみかな　蝶衣
蠶棚掃けば戀歌の反古でありにけり　同
蠶飼ふ里下りの局かな　同
蠶飼時婿とりて家豊かなり　同
妻も妹も主家の蠶飼に行く日哉　同
軒つらぬ一族十家蠶飼かな　同
灯ともせば障子の棧に蠶かな　同
妹が家や蠶棚卸しの小豆飯　同
しめやかに隣の蠶屋や午時の雨　同
蠶室や晝の行燈の在り所　菱人
蠶飼濟んで安く寢る夜の小雨哉　葦水
暗き灯の下に夜食や蠶時　桂川
飼ひ殘すあと一棚の蠶かな　紫閣
中庭の桃の盛りや蠶時　天香
夜を着きし里の宿屋の蠶飼哉　履支
いさゝかの桑畑有つて蠶飼かな　七三
一村は蠶休みや初芝居　秋江
塗り盆に繭する蠶拾ひけり　天南生
嫁入の日も迫りたる蠶飼かな　句樂
十人の子だからもちて蠶飼かな　きく子
蠶良しと桃の里より姥が文　總子

桑の葉に載せて姫蠶を眺めけり　你斧
草鞋など賣る婆が家の蠶棚かな　眞天
物の本蠶飼のいとま〳〵かな　方外
五畝の畑に桑あつて世々蠶飼哉　柳子
上蠶に安睹の羃敷きにけり　曉村
蠶選る竹箸長くけづりけり　鳥兵
蠶飼時賃仕事ある工事かな　沐雨
蠶守るねむき眼や夜の鐘　十湖
育たざる蠶を捨てぬ夕ぐもり　白羽
蠶室の窓より見るや桑畑　同
蠶飼ふ部屋の障子や蛇の聲　玉鬼
片手間の今年からする蠶飼かな　同
藪醫者のはやらん樣も蠶飼かな　蘂花
小商ひもして女手の蠶飼かな　同
蠶飼ふ李花の奥なる小家かな　鳴弦樓
蠶かふ妹若し玉だすき　同
門川へはづれ蠶二枚流しけり　同
腹黑き法師がしたる蠶飼かな　泰[?]
骸骨を乞ふて蠶飼の主かな　同
桑やれば桑の上出る蠶かな　同
藁舟に遅れ蠶のせて流しけり　青城

蠶飼ふ眉美しき女かな　青城
蠶室や見なれぬ蝶の桑に來る　同
厄除けの赤き御幣や蠶棚　朱郎
田舍家の道から見ゆる蠶棚かな　同
育ち行く蠶に棚の歪みけり　同
蠶飼ふ小學校の一間かな　寒骨
おらが里蠶當りて祭かな　同
上り蠶にがらりと廣き飼屋哉　同
蠶飼ふて絹織ると母のたより哉　渭南
蠶飼ふて俗な坊主と申されし　同
年々の蠶飼日記や小さき文字　同
城南の桑畑買ふて蠶飼かな　同
蠶上げて堂再建の寄進かな　菫哉
養蠶を上手で人に戀はれけり　同
上り蠶の棚を組みそふ飼屋かな　同
雨ふくむ歸雁の聲や夜桑伐る　同
稅輕き十戸の村の蠶飼哉　蓼花
節穴に皆紙はりて蠶飼かな　同
蠶飼する小村ゆたかに桃の花　同
信濃から嫁を貰ふて蠶飼哉　同
馬宿に人宿に飼ふ蠶かな　天馬

捨てられて拾はれて屑の蠶かな　天馬
夜を起きて一人桑やる蠶飼かな　同
蠶飼ふ場末の町の寂れかな　同
建て增して部屋新らしき蠶飼哉　同
桃の宿櫻の宿も蠶飼かな　同
蠶室の窓から見れば月夜かな　天花
四五枚の蠶ながらにせわしさよ　同
湯の中や蠶飼のつかれ〱と　同
雁歸る山も見ゆるよ蠶飼の女　同
窓近き蠶棚に月のさしにけり　同
繭掻の庭に向つて日向かな　同
蠶をかふや橋の欄干に莚を干す　同
よき人と組して蠶飼日にうれし　同
蠶飼ふ夜半の灯や二三軒　へき生
親子して少なき蠶飼ひにけり　同
箱二つ妹と姉の蠶かな　同
蠶飼ふ與三や於花や部の戀　同
眼にあはぬ古き眼鏡や蠶撰る　同
閑あればよその蠶や見にありく　同
垣に干す蠶飼の莚や遲櫻　同
牧民の吏となり蠶飼はせけり　同

蠶室の掟五條やにじり書き　小魚
簇ながら繭干して居る野茶屋哉　同
指切るな蠶を過つな佛の日　同
一口に皆上りたる蠶かな　同
桐の芽の伸びる蠶飼の日數かな　同
葡萄酒の夕餉の酔も蠶飼哉　同
交る／＼飯食ふて立つ蠶飼哉　同
掃き立てゝ毛蠶なつかしむ眼鏡哉　同
編物を教はる蠶飼のひとま哉　同
蠶室の灯細し田螺なく　磨劍
蠶室や苗代見えて山遠し　同
蠶室や夜食の餅の黴くさき　同
蠶室の硝子越し見る田打かな　同
蠶飼する三畝の主や句も作る　同
繭ごもる早き隣りの蠶かな　同
蠶飼ふて霜の八十八夜かな　同
蜜蜂や蠶飼の家の裏戸口　同
蠶飼して根分の菊に荒れにけり　同
蠶飼ふ農學校や城の跡　同
養蠶の記事書くすさび發句哉　同
上簇の蠶を分つ灯影かな　同

先生の借家にせまき蠶飼かな　劍

募集課題

五月雨　四月十五日〆切
芍藥　五月十五日〆切

應募俳句は東京市本郷區駒込曙町大谷正信宛の事。

附記す、本號の課題に應じ給ひし讀者は五十九名にて、句數は小魚氏の二百句、蓼花氏の九十五句をはじめとし、天花氏の五十七句、磨劍氏の五十二句、董哉の五十句、へき生、天馬氏、十湖氏、朱郎氏の各四十句以上、寒骨、玉鬼、沐雨、方外諸氏の三十句以上仲々に多かりしが、前號と等しくその割に振はざるは選者の遺憾とする所なり。



族制問題と利己利他主義

麻畦

昨年夏頃より個人制度對家族制度の問題一時世間の注意を引き、諸大家の説三四の雜誌に散見したりしが、それも漸く秋風の落寞と共に何時しか人の注意より遠ざかりき、遠ざかりしも敢て十分開くべき解決を與へたる後にはあらず、されば何時かは再び識者の深慮に上りて已まぬは當然なるが、それかあらぬか此頃に至り慶應義塾學報に鎌田榮吉氏の「家族制度は國體にあらず」の一文見え、之と同時に他の二三の小雜誌にも同種の題目揭げらるゝに至りぬ、想ふに又も研究の論陣は張られ、その解釋に一轉進を見るべきか、予は今玆に筆を驅るもの敢て斯かる紛糾せる難議に一解決を試みんとするにはあらず、唯世に見ゆる幾多の説には、互に個人制度を以て利己主義に、家族制度を以て利他主義に結合し、之を以て一切の論據を構へ比較し判斷せんとするものあり、曰く個人制度は個人に重きを置きて、その利害より他の一切を律せんとするもの、此の如き個人制度の家庭を容るゝ國家は、砂礫を盛る囊の如く國家としては極めて基礎の薄弱なるもの、家族制度の獻身的にて、一旦緩急あらば義勇公に奉ずる精神の汪盛なるに如くものあるべからず、曰く家族制度は盲從主義のみ屈服主義のみ、自己を沒却して唯家長の命是れ尊しとするもの、此の如き國民は獨立自尊の念乏く、憑他主義にて怠惰遊佚に流れ易きもの、斯かる家族制度の家庭を包む國家は如何に大なりとも腐卵の如く、患內より出でゝ遂には崩壞に終るやも知るべからず、

個人制度の堅確なる意志を養ひ、壯剛なる思想を練り、國に遊惰の民なからしむるのそれに比すべからず、曰く何、曰く何と此の如くにして極らざらんとす、これ果して正見なるか、吾人少しく異議なくんばあらず、

由來利己主義と利他主義とが、已に爾く分ちて各々に論ぜらるべきものなりや否や、吾人は之を疑はざる能はず、心と物とは一體の兩方面といふが如くに、此利己と利他といふことも亦猶ほ一理の兩方面といふものにあらざるか、利他とは何ぞや、利己とは何ぞや、之にも用ふる人々の主觀によりて意味するところの内容一ならず、一概して論斷し易からずと雖ども、先づその極端なるものに意味せば、利己とは己を主と立て他の一切を從屬の位置に置き、直に之を己の器械と視んとするもの、利他とは之に反し、他を主と立て自己を從屬の位地に置き、直に己れを他の器械に供せんとするものなるべし、されど斯かることが孰れとて吾人の本然の性情に許さるべきものなりや、先づ之を言ふ前に吾人の本然の性情とは如何なるものなるかを見ん、吾人は春宵といはず秋夜といはず、孤坐默然空しく一星燈を守らんか、その寂寥は久しく堪ゆる所にあらざるを常とす、而かも斯かる人間二人をして偶ま膝を把つて一榻の上に坐せしめんか、その刹那における相互の心的狀態は如何なるべき、依然孤燈の下に痴座せる心的狀態が二個あるのみならんか、各々自己の胸裡に問はゞ何等かの囁嚅を聽くべき如く、その際にはそれ以上別に一個の摩訶不可思議不可說底の感觸、言はゞ氤氳たる一味の情趣兩者の間に湧生して無限の輕溫を覺えん、是れ西諺に謂ゆる社交的算術には二と二との和は四個以上なるもの、此以上とは何ものぞ、言はても著き心的產物それを指すのみ、アリストートル人類を目して社交的動物なりといふ、而かもその意味するところを詳言すれば、人は斯かる心的產物を愛する動物なりといふに歸す、人は單に衣食住を得れば安んずべき動物なりや、大厦高樓の上、食は龍鳳の珍に饜き、衣は錦繡の美に慣れ、頤少く前に動けば僮僕走り且つ轉ばんと欲す、斯かる境遇に居らしめば、人に

何等の不平なく煩悶なく、懊惱なく、呪咀なきを得べきか、大掖の池、未央の柳、其處には麗日長へに暖く、軟風常に微和を扇ぐを得べきか、籬に繡する双鴛鴦、窓に狂ふ双胡蝶を見て、此世は憂の器なりとの長嘯を洩すものなきを得んや、想へ彼のロビンソンクルーソーが、絶海の孤島に漂流し、寢るも起くるも耳を離れぬ碎波の響、廻飈の聲の寂しさに、遂に鸚鵡を馴らしたりし心事を、孤島とはいへ、衣るに獸皮あり、食ふに魚介あり、住まふに茅舍あり、何を苦んてか、人にはあらて唯人の言語を學ぶ一羽族に慰藉を得んとはせしぞ、人は所詮パンのみにては生くべからず、衣服のみにては生くべからず、將た又家屋のみにては生くべからず、誠にそれ以外一種不可思議の心的產物なくんば此世に居らるべからざるなり、之あらば時には衣食住を缺くを得るも、衣食住あらば時には之を欠くを得とはいふべからず、重罪犯人を密室に監禁する久しければ死せざれば狂すとかや、亦此心的產物の缺乏に起因するもの潜思して箇中の消息を味ふべし、

然らば此產物は如何にして生ずる、人以外の或るものに對しても時には生ずることありやといふに然らず、此の生ずるには必ずや我と等き人に對せざれば不可なり、換言すれば我と等く人格を認めらるべきものにあらずんば不可なり、試に兎に對すること半宵なれ、猿に對すること一日なれ、更に牛馬に對すること一旬なれ一月なれ、其處には人に對すると同き感觸あるか、世には頗る犬を愛し猫に親む、猶ほ人に於けるが如きものある少しとはせず、されどこは唯人に對する聯想を暫く之に移するより來るもの、直に以て犬を愛し猫に親む猶ほ人に於けるが如しとなすは不可、クルーソーの鸚鵡に於ける如き、最も能く這般の消息を詳にするもの、その模擬の巧妙なる、音調の宛轉なる、或は吾人に似るの性格ありやを訝らしむるに本づく、此の如くに如何なる場合にも對手に人格を付與することなくては如上の溫情は遂に酌むに由なし、然らば吾人が他人に對すべき態度は自ら明確なるものなかるべからず、他人を見る他人を遇する一に自己と等しき人格を

付與して敬愛せざるべからざることと之なり、決して他を器械視し自己の從屬者視すべからざるなり。苟も此の如きことあらんか、之れ對手の人格を奪ふものあり、之れ對手を奴隷にするなり、奴隷は形、人に似たる禽獸のみ、人格なき木偶のみ、吾人を奴隷と見て果して之に對して能く互に一味の溫情を湧かし得べきか、若し吾人にして眞乎に社交的動物にして、而かもそれが委くは一種不可思議の心的產物を欲するにあらば、他を器械視し己の從屬者視するは、これ吾人の本性に背きて、勉めて離群索居の孤獨に泣かんとするもの、殷紂天下の富を掌握して豪奢自ら尊ぶ、而かも獨夫を以て誇らる、誠に他を見る彼の如く他を遇する彼の如くんば、漠々たる黃壤盛るに幾千億萬の頭顱を以てすとも皆唯瓦礫のみ木屑のみ、而して身は唯瓦礫と木屑とに包まれて冷かなる大氣の中に呼吸するに過ぎざるものゝみ、生きて何の快かある、吾人無聊に荒めば時には心任せの兒童らしき遊を爲すを常とす、遊を爲すとて之が爲に娛むには非ず、娛むにはあらざれども而も爲さざるを得ざる悶えあり、渡し待つ間の手すさびに解きては放つ靑柳の糸、靑柳には迷惑なるべきも而かも斯からざるを得ざるが如く、彼の暴君狂主と呼ばるゝ徒輩は往々にして殘忍酷薄の非行に出でゝ顧みず、之れ唯何等かの道に出でゝ少しは快樂を得べきかとあせるもの、暴君といはゞ東洋にては殷紂狂主といはゞ西洋にてはネロ王なるべきか、殷紂が孕婦の腹を劈き炮烙の刑を樂む、ネロ王が母を湖水に沈め、羅馬市街を火にせるも想ふに彼等果して樂みしか否か、或は知らず、獨夫の寂寞を悲みて何等かの快樂に接せんとしたるにはあらざるかを、然らば見地によりては又一點の同情もあるべく、而かも求めて自ら寂寞に居るの痴は最も憐むに堪えたり、此の如く論じ來らば吾人は明かに世に處するに利己主義なるべからざるを知らん、蓋し利己主義とは忠義孝悌友愛の諸德も元は自己中心の打算より出で、斯くすれば因果の理、自然の應報は斯くかくなるべしとの意識より來れるもの、偶ま此因果の理、應報の道がそれ等の諸說と齟齬せざるが故にこ

そよけれ、赤裸々に心事を洗へば、利あれば百城をも與へ損あれば一毛をも拔かずといふ算盤珠より來るもの、一切の人はこの個人の利に役せらるべき器械のみ、器械に豈完全なる人格あらんや、然らば利他主義は如何、これも亦有り得べからざる說なり、吾人が人を敬愛すといふもの、元自己あるが爲にあらずや、愛する主體ありて愛せらるゝ客體あり、然るに愛する自己を沒却して全然愛せらるゝ對手に捧げ、一身を土芥に委して他人の幸福に貢せんとするが如きも、これ亦明かに人の本性の背くもの、非人情的の極致なり、されど之は一概に形式の上より批判すべからず要はその精神如何と顧んのみ、他人の爲に身命を抛つ、それが自己の心を滿足すべき究竟のものならば、身命を捨てゝ滿足を拾ふ、元より當然なるべきも、然らずして心に、口實の乘ずべきあらば何とか巧脫もせまほしとのみ思へる者が、場合に餘儀なくせられて厭々ながら死に赴くが如きは有るべからざるのみ、若しそれ利己も利他も共に此の如き極端の意にはあらず、利己といふも去る心的產物を愛するは我といふ主體あるによる、此主體の欲を遂ぐるが爲に對手に人格を付與することも當然の結果として來る、故に假に利己といふといひ、又利他といふも、己を沒却して他人を利せんとのみにはあらず、他人を利することが、能く自己の滿足を買ふを得といふのみといはんか、此等の如きは所謂、佛敎の利己利他圓滿と稱すべきもの、最早や吾人の爭はんと欲するどころか、實は吾人の正に言はんと勉めたるところのもののみ、若し兩者の所見偶ま此處に一致するものならば、之を利他主義といはんも可なり、之を利己主義といはんも可なり、そは區々たる用語上の爭のみ、實の關するところにあらず。

利己と利他との一致誠に此の如しとせば然らば之を以て個人制度對家族制度の問題を爭はんとするは最早や無用の事たるべし、幾對の夫婦一字に住みて中に一個の家長を立て他は之に隷屬するものと、一字には唯一對の夫婦のみ住し、各々自己の權利を維持し、義務を遂行するものとの差あるのみにて、之が爲に直に互

に相反撥すべき理を有すとも、之が爲に又悉く自己の進退を他人に委せて優柔懶惰に陷るべしとも定め難し、日露の大戰役に一たび奇勝の我軍に收められしより、列國環視の眼は、蔑視若くは疑懼の色より變じて驚嘆のそれとなり、頻にその因を窮めんとし、斯くて武士道に歸し、宗敎より獨立せる倫理に歸し、更に此家族制度に歸するに至り、國人又此說に聽き、成程との態度を示して日露戰爭の偉勳の一半を此れに分付せんとするに傾くものあるを致せり、然れども單に一の結果より見て、直にそれかと推測し當つる原因に、容易く左までの價値を附與し得べからず、現に日露戰役以前には、外人の體力の强健なると、勢力の過甚なるとは畢竟その肉食によるといふの說をも聞けるが、日露戰役後は却て我國人の智力の過懸なると、威力の堅剛なるとは畢竟その菜食によるものと見らるゝに至れるにあらずや、斯くて米の斯加古市その他にも菜食會なるものゝ設立を見たるにあらずや、予豈その醫學上より見て何れか正理なるやは斷ずる能はずと雖も、何となく理窟は後から來るの感なき能はず、武士道說や、宗敎と涉らざる倫理說や、又この家族制度說や、或は菜食說と步趣を一にしたるものかも判明せず、然るに一戰役の結果に見て直に家族制度は我國體なり、之を改むるは直に我金甌無缺の國體を打破するなりと叫ぶことの、頗る輕浮の論斷たるを疑はず。

要するに此問題は唯利己利他圓滿を人生の本義と解し、如何にして此本義に叶ふべき吾人の發達を爲すべきか、即ち個人としては勤勉に國民としては團結心に富むものを作るべきかと考ふるによつて定まらんのみ、家族制度は團結心を富ましむといふも、而かも二夫婦を一宇に盛りては、所謂嫁姑の爭潛に禍心を包藏して互に爪を磨くの陋態なからずとせず、個人制度は團結心を乏からしむといふも必ずしも然らず、親子相逢ふ偶まならば些事に爭端を激成するの機少く、會面の刹那に於て却て愛情を濃厚ならしむるの實あり、左れど又動もすれば之に反するの實なしとも限らず、一害一失は、孰れにも免るべからず、而して此一害一失

は、吾人の主義より來るものにはあらて、却てその主義に從はざる或る我儘なる劣性の發露に過ぎざるもの、此劣性の我儘を如何に妨止すべきかと個人制度家族制度の問題にはあらざるか、然るに之を然りとせず、各々人生の本義に背く利己の一面、利他の一面を把持して相爭はんとす、議論の枘鑿相合はざる百萬年の後を期すとも解決を見難かるべきなり、此點敢て諸彥の敎を請はん。

漢字存置論の妄見

南軒

國字問題の問題とせらるゝは、今は單に假名文字採用と羅馬字採用との兩者に限らるべしと思の外、今日猶ほ何處にか漢字存置の聲を聞くが如し、此中我國體を云々し、我國民の性情を云々するの論は、元と議論の範圍を明かにせず、彼此混雜せしむる迂說として一顧の値なしとするも、その然らずして動もすれば俗耳に入り易きの見は最も恐るべく、最も防がざるべからざるの說なり、即ち我國語は同音異義のもの他國のそれに比すれば甚だ多く、從て音韻の一條路を辿りては到底物の用を辨ずべからず、我國語は漢字の象形文字を採つて發達し來れるもの、今一朝にして之を廢せんか、百事沮廢の弊は刹那の近きにあり、目を以て知る文字は到底廢すべからずと、之れ少く聽くべくして實は大に聽くべからざるの言なり、歷史の一點は議論の順序として暫く措き、單に文字として音韻文字と象形文字とが何れか最も相應しきか、何れが最も日用に便なるかを比較せんに、こは自ら定論あり、前者の後者に優れるは略ぼ衆論の一致する所となす、然らば歷史の一點に反りて我國にては如何と見るに、是れ又いろはにせよ、アイウエオにせよ、明かに一の音韻文字なりしのみ、神代より崇神の朝に至る迄は、確かに音韻によつてのみ發達し來りし我言語が、一度漢籍の輸入と共に象形文字に親みしより、言語の發達は本來の軌道を外れて、有らぬ象形文字の上に進路を取り、象

に二千年の久しき正きに歸るを知らず、文字には知ら
れて、音には知られぬ不完全なる言語、即ち同音異義
の言語甚だ多きを致せるもの、病膏肓に入つて吾人却
て悟らざるの觀あるも、泰西人の眼には如何に吾人は
言語としては不完全なるものを使用し居る國民と見ら
るべきか、今にして之を改むるは新に移るにあらず、
舊に歸るのみ、正かりし歷史の初に歸るのみ、換言す
れば、今の言語は骨節を違へて違へたるまゝの發達を
遂げたるもの、違へたるまゝに肉も生じたらん、血管
も通ひたらんも、而かも此儘にては所詮あるべからず、
何時かは一度びその正に歸るの至當とせば、多少の肉
を斷ち血管を移すの苦痛は忍ばざるべからず、一日緩
うすれば苦痛は一日の强さを增さん、同音異義の多き、
一時は慥に文書應酬の上に困難を見んも、而かも物は
困難を經て初て改善あり、進步あり、發達あり、我國
語も斯くて漸次に語彙を殖やし、同音異義の言語より
遠かるを致さんかな、識者の惑はざらんを要す。

讀心術

綺窓

桑原越郎の精神靈動說唱へられて催眠術理に神秘の雲かゝらんとしたるが、心理學的硏究の結果、幻想に過ぎずと見られて形を消せし樣なるに、此頃又「讀心術」なるもの泰西には騷がるゝ傾向あり、二三の雜誌にその消息を聞ことあり、此事たる敢て新しとにはあらず、曾ては我國の店頭にも「讀心術」なる小册子を見受けたるやに覺え、又今より十年前に、佛のシユモール氏などの實驗の結果の傳へられたるものあり、先づ其如何なるものかといふに、次の如き例あり、被驗者を試驗者より去る一丈の遠きに置き彼方に面して目を掩はしめ、試驗者は此方の机上に向て音せざる樣毛筆を運び、或る一種の形體を畵く、斯くすれば被驗者は擧手その他の所作にて目の掩ひを除かしめ、直に筆を執つて膝裏に寫せし影像を摸せるが、十中の八九は酷似せる形を寫して誤らざりしとか、或は一夫婦あり、婦能く夫の心を讀む、試に之を聘して夫は階上に在りて畵帖を繙き、婦は階下に在りて畵架の配さるゝ時々、一々之を甞ひ中つることゝせしに一の錯誤なかりしとかいふが如き之なり、近頃見たる米國雜誌に、こは最早や事實として疑ふべからざるもの、唯學理の知られざるを遺憾とするも想ふに心理學界に一のニユートン現れ、早晚前古未曾有の一解釋を附與することあるべしといふものあるに至る、吾人は輕々しく之を信ずるに至らざるも、兎に角心ある心理學者の實驗を試み、

他に卒先して眞妄を世に教へらるゝことあらんを欲す。

何等の陋ぞ

咄々庵主

物その功を成せるものは去る、花の果實を生じ、果實の種子を育ひ、種子の新芽を抽づる、生じては去り、育ひては去り、抽んでゝは去る、功を成せるものゝ去るは物皆然り、去らざるものはその功を終らざるが故なり、天に麗れる日月星辰、地に流るゝ湖海沼澤の如き之なり、然らば彼の全國宗教協和會なるものは孰れと見るべきか、功を成せるか、成しつゝあるか、吾人は彼が、日露干戈を交ゆるに當り、流說動もすれば、こは異なる二宗教國の爭のみと言はんずる際に生まれたるもの、世人の妄を醒ますに於て多大の益ありしは疑はず、予輩は之を見て功を成せりとは信ず、然かも今日猶ほ功を成しつゝあるかは疑問なり、吾人は斯くと信ぜざるのみならず、更に之を望むの寧ろ妄なるかを想はずんばあらず、吾人に詳盲せよとならば詳盲も辭せざるべきも、吾人は敢て之が爲に個人を傷くるの盲を爲すを欲せず、唯心ある人々がその如何なる信仰の度に在る宗教の提携なるか、如何なる人々がその發起者中に列するか、巫蠱を使役して愚民を誘ふを勉むる徒輩はあらざるかを見れば足れり、斯かる眞信迷信の雜然相混ずるものが如何なる旗幟を揭げて此世に働かんとするか、その旗幟の分明ならざるは、ならざる十分の因あるを憐み、一日も早く解體し去るか、去らずは速に分子を精選せんことを望む、今の如くは、唯一種の按摩術のみ、關節の痛みは去り按摩術の功は終れり、然るに猶ほ人の皮膚に醜き痕を留むるは何等の陋ぞ。聞けば今月上旬には復も大會を開かんとすといふ、博覧會の開設を利して古宗教の御見参も有つたものにあらず。

亂著者と書肆とを戒む

彈鉄生

印刷の不便なる世には、一書の刊行も其費用と勞力と並に少からず、從つて著述者たる事多少の榮譽を覺えたらんも、印刷術の進步せる今日には、斯る望は既に痴夢に屬す、然るに近來續々新刊せらるゝ幾多の著書、就中小哲理めきたるものを讀けるのには不透明の頭腦怪僻の思想とのみ嘲棄すべきもの少からざるは何ぞや、想ふに或は彼等には、昔日の煩夢猶ほ腦の何處かを支配し、早く一書の著者たらんとあせるには非らんか、これ甚だ迷へり、更らに盲目なる書肆を利してそれをして損失を招かしむるに了るは、大に過てり、尙ほ更に斯くて撰擇力なき幼稚なる讀者を欺き、獨斷的臆說を流布せんとするに至つては最早や恕すべからざる一種の罪惡なり、予輩始皇に非ずと雖も彼等の著書を悉く咸陽に集めて焚かんことを欲す、

大に亂著者と書肆との覺醒を催す。



新作家の起つべき時

（文運新興の機を利用せよ）

黑甜鄕人

日露戰役後文運新興の氣勃々として文壇の各方面に瀰蔓しつゝあるは誰が目にも顯著なる事實也。新作家の簇々として出現するが如きは最も明白に此事實を證せり。而して吾人は是を以て戰勝國勃興に伴ふ必然の現象と信じ、且つ來るべき文運隆盛の時期を思うて歡喜愉快の念漫ろなるを覺ふ。

竊かに思ふに大凡そ世の中には何物にも機運といふものあり。此機運に乘ずるものと乘ぜざるものとの利害損得は算盤珠にも乘らぬ程莫大也。たとへば一は順潮に掉し、順風に帆を張る舟の如く、一は逆潮に柁を取り、逆風に蓆を揚ぐる舟の如し。一は千里を航すること易く、一は十里を行くだに難し。此理極めて明白にして恐らくは何等の說明をも待たじ。若し疑はゞ過去三千年間の人間の行程を檢せよ。國民興亡盛衰の歷史も、個人成敗榮辱の傳記も皆此理の普遍にして殆んど一個の例外をも許さゞるを見るに足るべし。勿論たまさかには順潮順風に航行しても尙且つ難破の災厄に遇ふものあるが如く、機運に乘じて遂に失望落膽の境界に墮するものなきにあらねど、是れ其人の才識力量の極めて凡庸なるが爲めにして決して機運に乘じたることの不利なるが爲めにはあらず。若しかゝる人にして機運に乘ぜざりしならば、夫れ以上の失敗落魄の悲運に際會すべきは知れ切た事共也。されば吾人を何をなすにも、よく機運といふことを念頭に置き、の難儀せず、無駄の骨折をなさず。充分自己の才識量を發揮するの得策なるべきを思ふ。

機運の神は氣早也。常に迅速を尊んで遲緩を厭ふ。彼はサッと流るゝ潮と共に來り。ピカリと光る電と共に去る。躊躇すれば袖を捉へざるに姿を隱し、逡巡すれば手を握らざるに形を沒す。されば機運に乘ぜんとするものは必らず慧眼ならざるべからず。又必らず敏活ならざるべからず。慧眼以て機運を見、敏活以て機運を捉ふ。斯くの如くにして初めて機運に乘ずるの人たるを得べし。

吾人は前きに世の中の何物にも機運といふものゝあることをいへり。最も出世間的なりとせらるゝ文學に於ても亦此機運の無視し難きものあるを見る。而して文士の乘ずべき機運といふは、いふまでもなく、文運興隆の氣の勃々たる時期にあらはるべきものにして、吾人は今が即ち其機運の最も熟したる時と見る。新作家の簇々として起れるものゝ如き、意識的か無意識的かは知らず、確かに此機運を捉へんとするものなること論なし。故に吾人は大に此等の新作家の出現を喜ぶ。さりながら文學趣味の普及せる今日、我日本國の中、已に起れる新作家の外、起るべきもの一人もなしと、信ぜず。否な寒村僻邑は扨て置き、單に東京市内に於てだに現れんとして未だ現はれず、出てんとして未だ出でざる人の極めて多數なるべきを思はざる能はず。吾人は「新作家の起つべき時」と題し、文運新興の機を利用せよと傍註を加へたる所以のもの、實に此等の未だ出現せざる文士の奮起を促さんと欲するのみ。

かくいへば人或は難じていはん。今日何等の素養もなく、何等の抱負なく、只一時の名を得んとし、少許の錢を得んとして文壇に馳せ集る木葉文士、三文文士實に雨後の筍よりも多し。汝の言の如き、偶々以てかゝる文士の出現を是認し、且つ益々かゝる厭ふべき風潮をして盛ならしむるもの也と。難者の言一應の理由あるに似たれど、是れ全く吾人の言說より生ずることあるべき弊害をのみ見たるものに過ぎず、若し弊害を恐るれば人世の事一として爲し得るものなし。吾人は固より何の素養なく何の抱負なきものゝ文壇に出現するを厭ふ。自重自愛深く研め博く學んで然る後其蘊蓄

を披瀝するの餘裕ある態度を喜ぶ。されど眞に素養あり、抱負ありて文壇に出現せんとするものにとつても、其出現の時期如何といふことが一の重要問題なり。而してそは又文士の作物と其生活問題といふ他の重要問題と關聯し來る。蓋し世の進むに從て生活の困難益々加はり、分業の法式愈々密也。されば其當然の結果として、文士は其作物によつて生活せざるべからざること、今後益々甚しきに至るべきや必せり。即ち彼等が一方に於て深く硏め博く學んて蘊蓄に勉むると共に、一方に於ては作物を估り、作物によつてパンを得るの道を考へざる能はず。而して今の世は知名の人とならざれば、其原稿を估ること容易ならず。即ち文士となるものは先づ運だめしとして其作物を文壇に持出し、世間の注目を惹いて、知名の人となり、其れによつて生活費を得、以て生活しつゝ自己の地歩を固むるの道を計らざるべからず。若し如何にしても世間の注目を惹かず、生活費も得られず、文士として生活するの資格を得る能はざる時は、其家富有ならざる限り、彼は職を他に求めて生活の道を講ぜざるべからず。世に或は男子一旦志を立てゝ文士となる。飢餓凍餒尙厭ふ所にあらず、生活問題の如き念頭に置くの要なしといひ、古の藝術家の例證を引合に出す人ありと雖も、吾人より見れば、その人は未だ實際の生活問題に苦勞したることなき人と覺えたり。生活問題は人生の總てなりとはいふべからざるも少くも其大部也。生活問題を度外に附して一意其志す所に專念する人の如き、吾人之を尊敬せざるにあらざるも、人生の上より之を論ずれば極めて例外の場合と見ざるべからず。例外の場合を以て人生を論ずるは不當なり。吾人は文士の名を成すと名を成さゞるとは實に文士の死活問題と見る、而して吾人が今に於て新作家をして起たしめんとする所以のもの、最も名を成すに容易なる時は實に今なるを思ふが故也。何となれば文運新興の時代は人心新たなるを求むるの時代にして、新たなる作家、新たなる作物に向て最も注意を拂ふの時期也。若し價値ある一篇の作物を出さんか。彼は一躍して知名の人となるべく、若

し力量手腕の充分なる人ならば之をキッカケとして永く文壇の人となるの幸運を得べき也。吾人の言、人或は誤て僥倖を推奬するものと見做さんことを恐ると雖も、吾人は文士の生活問題を重要視するが故に敢て之をいふ。固より一篇の作物に得たる名譽は花火線香の如くパッと光りて直ちに消え失するもあるべし。又何の光をも放たず、フス〱と燻りて忽ち盡き果つるも少からざるべし。されど一度發したる靈火長く地底より噴き出して天上を焦し、藝術壇上永久の飾となるものも偶にはあるべし。吾人は偉大なる飾を產出すべく多數の犧牲者を出すことを好むものにあらざるも、而かも亦人世實に止むべからざるの條件と見る。而して吾人はかゝる偉大なる飾を產出せしむべき資格ある文士にして其出現の時期を誤り、一作出づるも評に上らず、十篇現はるゝも名を知られず、其中生活問題に困しめられて遂に無名にして地下に埋沒したるものゝ決して少からざるべきを思ひ、今日の如き好機運に乘じて文壇に出現するの極めて得策なるを說けるのみ。

小栗風葉、泉鏡花、德田秋聲、柳川春葉等の諸氏は今日多くの人によつて第一流の作家として認められつつあり。而かも數年前迄は前二氏の聲名獨り隆々として後二氏の作物未だ世に重ぜられざりしが、是れ其作物の巧拙善惡よりも、寧ろ前二氏が日清戰爭後文運興隆の機運に乘じて文壇にあらはれたると、後二氏の否らざりしとの理由に基くこと多しと論じたる人あり。若し眞の藝術的の眼より見れば、早く世に知らるゝと、遲く人に認めらるゝと、生前の評判と、自身の名譽と、或は問ふを須ゐざることゝならん。然れども吾人の如く生活問題を眼前に置て文藝を論ずるものより見れば、早く名を成して生活の道を得ると、長く名を成さずして生活の道を得ざるとは、獨り其文士自身の幸不幸に止らず、延て文壇全體の盛衰に關すること大なるべきを思ふ。依て吾人はこゝに文士として生活し、文士として世に立たんと欲するの士あらば今日の如き文藝新興の氣勃々たる機運を利用して以て花々しく打て出で、自己の立脚地を定め置くことの極めて得策なるを

説くもの也。敗れて忽ちに勇氣沮喪するもの、起ちて直ちに詩想の枯渇するものゝ如きは寧ろ速かに職を他に求むるに若かざる也。

文ただ冗長にして、意極めて散漫なるも、聰明なる讀者は吾人のいはんとする所を認むるを誤たじ。可也。吾人は讀者の聰明なるに依賴して敢て此冗長漫散の一文を公にす。

詩人の生命

峡雨生

(一)

死は事實なり、當面の事實也、吾人は歩々彼の尺寸の終局の地、墓を指して歩み行く也。而して是の終に行くべき地、達すべき地點は、遠きに似て甚だ近く、近きに似て而も其間猶多くの道程あるが如く、或は闇黑の如く或は光明の如く、更らに或ひは闇黑の裡倏忽閃光となつて現れ來るものとも謂つべし。

佛祖釋迦嘗つて弟子に問ふて曰く、吾人の生命は幾何かある、弟子各々思ふ所を答へたれども、總て佛の許容する所とならず、終りに叫ぶものあり、吾人の生命は誠に呼吸の間なるのみと、佛初めて首肯したりといふ。一呼吸の間吾人の生命なりといふに至つては即ち已みなん、是の如きは天籟なり、吾人の口を藉するものなり、吾人の曰はんとする處は此處にあらずして只平凡の聲なるのみ、佛の首肯するものに非ざる在俗非解脱の聲なるのみ。

人生五十年、と是れこそ人命に與へられたる評定價格にして、最も平凡なる目安なれ、されば人生は五十年なりと云ひて、茲に議論の動機を作り更らに不朽の生命を語りて、如何にして是の不朽の生命に入るべきか等と說くは、宗教家の口吻屢々吾人の耳にする所なれども、吾人の曰はんとする所は斯くの如きものに非ず、我が詩人の生命を語らんとする也。然し乍ら宗教家の説くが如き生命論を移して茲に論ぜんも頗る興味ある問題なるべけれど、そは一つの背景として而して是の背景ある舞臺上に讀者の眼を借らんこそ興あるべけれ。

(二)

詩は感情の華なり、而して詩人は人生の華なり、華の生命は長きか短きか、陽春の曉嵐、滿朶の白雲を拂つて落花繽紛、春醉忽ち覺めて人は天を仰ぐ、あゝ斯るべきか詩人の生命は。

詩情は詩人の生命なれば、一朝瓢乎として詩魂天に皈れば、詩人は呼吸を引き取る也、冷たき詩人が亡骸のみ地に委して、崇き彼が靈は詩神の御手に誘り去る也。シェレーが狂瀾怒濤の中に最後の天地を俯仰したるの時、亂雲白雨暴風激浪、彼が嘗つて見ざりし凄慘の光景は如何なり

しぞ、此の時の彼が詩魂は如何に活躍せしぞ、成句としての詩は殘らざれど吾人は彼が絶命前の瞬時を連想すれば、其處に絶大なる詩を讀むが如く感ず、龍てシェレーが亡骸は瀾に漂ひぬ、恰も生前の漂泊の如く死後の彼れも漂へり、然れども是時既に彼が詩魂は高く蒼穹に歸り去りて又た詩人シェレーに非ず。

詩は詩人の生命なれば、苟も生命の存する限り詩人に作詩なかるべからず、彼れに是ある中は彼れが詩人としての生命は存する也、想枯れ筆動かずして早く既に文壇より遠ざかる者は、容易に彼が詩人としての生命盡きたるを認むるを得る也。彼が詩魂は彼が肉のみを殘して天に皈れり、彼には猶餘命あらん、呼吸あらん、體温あらん、然れども肉を留る血は既に詩を湛へて流るゝものにあらず、彼が魂は只の人の魂なり、詩魂にあらず、詩人は既に墓地に眠れる也。是の如き詩人の生命の員數は甚だ算し易し、彼が詩作の期間こそ彼が命數なるべければ也。

玆に一種の詩人あり、彼は猶引續き詩作に耽り、社會よりも詩人として認識せられつゝあり、只正しき批評家によりて彼の詩には熱情を缺き詩趣を失ひ來れり、生命既になしと云はる。既に詩は詩人の生命なれば、詩にしてかくの如くなれば其詩人は常に生命なしと云はれたるに同じ、かくの如きは只詩人の殘骸の猶ほ詩作の筆を捨てざるものにして、吾人は是を幽靈詩人といふ、生命なきものゝ浮ばれずして宙宇に迷ふ、幽靈にあらずして何ぞや。

（三）

詩は感興に因りて成る、感興は神來なり、天來なり、而して是は突として來り突として去る、誠に一時的のものなり、無常相なり常住の態にあらざる也。

詩人の詩魂は此の一時の感興に呼び起されて、勃然として迫り來る、此の際詩人は詩を作らんとして作るに非ず、作らざるべからずして作るなり。或は曰ふものあり感興を俟つて詩を作るといふが如きは横着なる囈語のみと、然り、少くとも詩人は常に詩を得んとして苦心せざるべからず、行住坐臥も作詩三昧に入らざるべからず、雖然猶ほ斯くしても感興は神來なりといふを首肯せざるものは是れ詩作の經驗なきものゝ曰ふ事なり、詩を解せざるものゝ曰ふ事なり、詩は感興なくして成るものと爲すは誤謬なる見解なり。

然らば詩人の肉の生命を假に五十年と定めて、是の期間に於て幾何時の感興に觸るゝを得べきか、否、尠くとも眞の詩を作り得る期間を幾何時と算し得べきものなるか、是に吾人は詩人の生命を論ぜんとする要旨に近づき來れり。

今、一日詩人が一時の感興に觸れたりとせんか、詩人に一篇の詩を與へたる後、かの感興は去り行けり。詩人は二度び彼を呼びぬ、三度、四度、幾度、然れども其日は遂に來らざりき。是の際吾人を以つて曰へば是の一日の詩人の生命は感興來時の少時間に過ぎず、他の煩悩の時間は全く詩人としての生命は無かりしなり。

是れ一日の事なれども、更に數日感興湧かず、月餘に亙りて猶ほ來らず、

此間詩人は糊口の爲めに作詩を賣る事もあるべけれど、そは評家の所謂生命なき詩にして、詩人自らも滿足したるものに非ざれば、詩人の生命の上には何等の交渉なしと見る。かくて長日月の後感興湧き來つて詩人が意に充てる詩成らんか、彼は復活したるもの再生したるものなり。とは云へ、詩人が是の一時の死の期間は漸く長くなり行きて、遂に肉の死と連續し了する事あるべし。かゝる際は詩人が生命の算數は、長日月の以前彼が滿足したる詩作と及び彼が創作との間の年月にして、詩人の生命は長きに似て、常に甚だ短きものとなる。斯くの如く感興湧き來つて詩作に耽るの間を詩人の生命とすれば、詩人程短命なるものはなしと思ふ。

人の思想は年齢を重ぬると共に變化す、少壯時は唯感情の時代にして、中老に至つては理性的となり、老年には全く意志のみの人となる。少壯時は唯感情なるが故に甚だ詩的なり、中老時は理性に重きを置く故に萬事思慮深く思索的にして、老年には哲學的傾向を帶び來るもの丶如し。斯くの如く生理上にも人の思想は熱より冷に、感情より理的に變遷し行くものなるに、唯感情の上に起つべき詩人の眞生命を持續し行くは、又如何に難事なるに非ずや。

（五、）

上來述べ來れるもの元より散漫なれども、吾人は現實に就いて、肉の上にのみ、詩人の生命を論じて、その甚だ短命なるを曰へるもの也。

若し夫れ眞に引ける宗教家の説教の如く、詩人が靈的生命を論じたらんには、一篇の詩と雖も、猶且白日を貫きて永遠に人天に懸る光灼として、讃美するを得べけん也。

唯是の不朽の生命を背景に置きて、現實の詩人が詩作の生命を算へたるもの、是文を草したる要旨にして、詩人が甚だ短き生命を以つての努力がやがて永生を得べき彼の詩を生む事實に於ては何等是を異するものに非ざるべきは勿論とす。

文壇見聞記

小蚊士

▲**夏目漱石氏**　は今回帝國文學及び高等學校の方を罷めて、朝日新聞に入ることになつたそうだ。一切の作物を必らず朝日新聞へ出すといふ條件丈けて、月に何回とか、年に何位(どのくらい)とかの制限は全くないそうだ。そうして一つの作物は東京、大阪の兩朝日新聞に全時に掲載さるゝといふ話だ。漱石崇拜の人はどうしても「朝日」を取らればならぬことゝなるだらう。

▲**小栗風葉氏**　が三人叢書に出さうとして書いて居る作物は「戀醒」といふ名で、まだ半分しか出來ないさうだが、餘程氏の得意のものらしい僕は一寸其原稿を見たが、「國民」の文藝消息に代作だらうなど丶書いたものがあるそうな。之れには氏自身の辨解も出て居たが、ない事を揑造して人を誣ゆるのは實に不道徳のことと思ふ。「戀醒」に對する氏の苦心

を知て居る僕等がかゝる評言を聞いては甚だ心苦しく、且つは憤慨に堪へないので、一言こゝに代筆でないことを保證しておく。又氏は先月の二十三日から「萬朝」に「天才」と題する長篇を掲載し初めた。本號に載せて居る「女髪結」などは極々の短篇であるが、近來稀に見るの佳作であつて、僕は完璧を以て許して差支なからうと思ふ。

▲三島霜川氏　は近々其短篇集を彩雲閣から發行すべく、又「平民の娘」といふのを「文藝倶樂部」に掲載するといふ噂である。前月の本誌に出た「解剖室」は多少説明が多くて感興の横溢するやうな處は少かつたが、然し書き方が風變りて、凡て西洋のものでも讀むやうな心地がした。僅かに三月中の一佳作といふてよかつたらうと思ふ。殊に橋上より見ゆる自然の景色を叙した筆力などは勁拔簡淨である。只景色以外の處は少し並べ過ぎた嫌があつたと思ふ。且つおしまひの方が左して振はなかつたのを慊らず思つて居たが、氏は何でもあの後を今少し延して、鳳早學士が月夜に解剖室に入る所を書いて見たいとかいふて居る相ぢや。若し書いたなら必らず本誌上にあらはるゝ事だらうと思ふ。

▲加藤咄堂氏　宗教小説「靈火」といふを起草中なりと、舞臺は福島、内容は或村長の昔高利貸まで陥落せし時の懺悔話だ相だが、それを書き上げて了へば、次には日本全國を舞臺にした小説を書くといふて居る相だ。

▲國木田獨歩氏　が三月の「新古文林」に長篇小説を書くといふ噂であつたから、どういふものが出來るだらうと大いに待設けて居た處が、出て見ると「泣き笑ひ」といふ、たつた六頁ばかりのものであつた。初め三分の二ばかりの書き方は可なりよかつたが、お終ひの方が甚た滑稽じみて、實に下らぬものになつてしまつたのは氏の爲めに甚だ惜むべしだ。

▲長谷川二葉亭氏　のゴルキーの飜譯「二狂人」は近來の飜譯界におつて最も注目すべきものであつた。面白い作とはいふべからざるも、學ぶべき處。感服すべき處の極めて多きものであつた。何時ものゴルキー調とは少し異つて、却てドストイヴスキー張の所が多かつた。然しかの綿密な觀察、精細な描寫。大に研究的に味ふべき處が甚だ多いと思ふ。但し「趣味」の卷頭に出た「狂人日記」が僅か三四頁ばかりで（未完）では恐れ入る。今少し多く出して貰ひたい。

諸國一見の僧はる〴〵とかすみけり

蝶々や女の道のあとやさき



我輩も猫である（二）

はくや

名なんかは奈何ても可いが、實は先刻から火鉢の火が强過ぎるので、横腹が熱くつてならぬ、身體の半面は熱過ぎて半面は寒む過ぎるのだから恐れる、熱帶と寒帶が斯う隣合つて居られてはやりきれない、何とか溫帶にする工風はなからうかと考へたが、別段の妙案もないから、地球のやうに自動回轉をやらかして、寒帶の腹を火の方へ向けて見た、初めの内は至極具合が好かつたが、ものゝ五分と經たぬ內、又以前の現象が起る、仕方がないから又回轉した、

「御覽なさい和郎、熱いものだから

と妻君が笑ひながら主人に上申する、

「ハヽヽ、

と主人も可笑さうに笑つてる、人間には可笑しいか知らんが我輩には熱い、

斯う熱くつて斯う屢々自動回轉をやらなけりやならんとなると、此猫臺も終に永く止まるべき所でない、一番在平朝臣の後を追つて、住むべき處求めんとて……出掛ずばなるまい、が迂濶に出掛けて、腹の兩面を寒帶にして了つては大變だ、何んでも事をする前には十分なる注意と研究とが必要だ、

先づ第一に地理に精通する必要があると思つたから、國見をすれば……と云ふ格て、猫臺の上へ突立つて、欠伸を仕ながら伸び上つて靜かに天下の形勢を窺つてやつた、

すると主人は大安坐て、前がはだかつて、メリヤスのズボン下がはみ出して居る、最う洗濯しても可いやうだが、そんな事は妻君の職分て、我輩の與り知る處

てない、

違ひに組んだ兩足と、恥骨縫合との前の方が、圓形に凹んで居る、其凹んだ處の周圍には、骨盤山から連續して、大腿山下腿山の連峰が、ぐるりと取圍んて居る、地勢の上から云ふと誠に京都に類似して居る、京都は古への帝都である、と思ふと住むべき處は正に此處かなと思つた、

すると其連山群峰が、ブル〳〵ブル〳〵と動き出した、これは變んだと見て居ると、止めどなく小搖ぎして居る、奈何かしたのかと思つて、主人の顔を見たが、別段變つた樣子もなく、痛さうても痒さうてもない、何の爲めにあんなに膝を搖るのだか更に主意が解らない、こんなに地震のする處は、帝都處の話ぢやないと思つてる内に、又半面が熱帶になりかけた、

ぐるりと又回轉したら、今度は妻君と舍弟君とを、眼下に見下ろす樣な位置になつた、失敬して遠慮なく觀察すると、妻君の膝はキチンとして、一とつの皺もない、全く平坦である、大分具合の好ささうな土地だと思つたが、能く見ると惜しい事には、少々勾配が强過ぎる、話に聞いた安芝居の大入場だなと思つた、おまけに皺一とつないと來ては、ズル〳〵とすべりさうだ、腰掛の官員さんのやうに、一生懸命しがみ着いて居なけりや、ならんとなると、此處も亦考へものだ、

舍弟君はと見ると、これは頭からお語にならない、妻君よりは勾配も劇しければ、面積も狹い、淸盛が福原て手を燒いた前例もある、歷史の知識は斯う云ふ時に役に立つのだ、

考へて見ると今の中學校の、歷史の敎師なんて馬鹿なものだ、紀元何年には何が在つたの、やれ誰の死んだのは何年だのと、くだらぬ事ばかり大騷ぎして居るさうだ、何年に誰が死んだつて構つた事ぢやない、そんな事が知りたくば、年代表を見るが可い、年代表の記錄は、人間の記憶なんぞよりは、遙かに多くに渡つて且つ確實だ、歷史の功能はそんな物に在るのぢやない、古今盛衰の跡を見、興亡の理を研めて、死せる歷史を活用するのて初めて歷史と云ふものの功があるの

だ、そろ〳〵又横腹が熱い、

扨て斯うなつて見ると誠に困る、猫臺は氣候が不順だし、主人の膝は地震がするし、妻君の膝は勾配が强いし、と云つて舍弟君の膝は福原の地だし、我輩に羽でも生ひて、火鉢の上を可い具合に飛び廻る事でも、出來ない以上は、完全無缺な處はなさゝうだ、

無論完全無缺な處をと迄は、我輩と雖とも願つて居る譯ではない、比較的に最上級の字を使ふ事が出來る所なら、それで可い、と先づこの猫臺と、主人と妻君と舍弟君の膝との、この四つの地面の中で、何れがベストと稱すべきものかと考へた、敢て深く默考する程の事でもない、要は主人の膝と妻君の膝と、何方が可いかと研究すれば足りる、て念の爲め、最う一度兩方を拜見する事にした、

妻君の膝は相替らず勾配が强い、主人のはと見ると、何時のか間か地震も止んで、大分具合が宜さゝうだ、地震さへ無ければ、無論此處が一番可い、

壯哉大丈夫不當宅此耶と、のそ〳〵轉居をしかけたら、この野郎と頭をポカリやられた、將門體をかわすの暇なく、甚だ痛かつた、仕方がないから猫臺を下りて、向ふへ行く振りを仕て、そつと裏門の備ひなきに乘じて、今度は義經君を眞似て、大腿山から逆落しにすべり込んだ、無論又この野郎と來るだらうと思つて、十二分に警戒して居たが、奈何云ふ譯か、今度は我頭を撫でゝ居る、先きとは全然(まるで)態度が別だ、少々我輩張合拔けがしてつまゝれたやうな心地がした。然し痛いよりは餘程結構だ、

主人も妻君も、最う我輩の名に關して、何とも討議する樣子がない、そんな問題は既に忘れて了つたのだらう、人間なんて云ふ者は案外物忘れの確かなものだ、

下腹から人肌の溫みが、メリヤス越しに來るので、何んとも云ひない可い心持ちて、少々眠くなつて來たお先きへ御免蒙るとしやう。暫時すると段々氣が遠くなるやうに、ボーとして、何んだか斯う、浮世からふら〳〵と拔け出して、何處か月の都あたりへもて行つたやうな氣がしたと思ふと、耳の邊てオイ〳〵と呼ぶ

ものがある、こんなに可い心持になつてる處を、五月蠅い奴だなと思つて、返事も仕ないで居ると、又オイ〳〵と云ふ、少し疳癪に觸つたから、何んでえと怒鳴りつけてやつた、すると變な、高慢ちきな聲をして、お前は不見識な奴だなと云つた、失敬な奴だ、何が不見識だと云ふと、何んだつて人の糟粕を嘗めて、そんなくだらぬものを書くのだと云ふ、オヤ〳〵異變な事を云ふぞ、貴樣は少つと馬鹿だなと云つたら、いや利口ですと咳を一とつした、自分で利口だと定めて居るのが馬鹿な證據だ、

　貴樣が利口なら、己も不見識ぢやねえと、少し巻舌て云つて見た、するといやに上品振つて、不見識ぢやありませんか、評判者の眞似をするなんて男らしくありませんと一とつ咳をする、きざな文句を竝べる奴だ、眞似をするのを何んでそんなに耻しかるんだ、糟粕を嘗めやうと、鼻糞を嘗めやうと己の勝手だ、この世の中に古人の糟粕を嘗めない奴は、一人だつて在りやしないと云つたら、變な顔をして、奈何してそんな大膽な事が云ひるかと、いやに三百句調になりやがつた、云ひないで奈何するものか、素戔嗚尊が八雲立の歌を詠んだのは、今から幾年前の事だと思ふ、それから今日迄、三十一文字の歌を作つたものが、日本全國に何人あつたか知つてるか、歌人だの何だのと云ふ奴は、皆素戔嗚尊の眞似をしたんぢやねえか、と云つたかまだ物足りないやうな氣がしたから、べらぼうめと付け加へだた、何んにも返事を仕ないから、定めて恐れ入つのだらうと思つて、ひよいと顔を見ると、鼻の先きへ皺を寄せて、白い齒を出して笑つてる、恐れ入るのに笑ふと云ふ話があるものかと云つたら、恐れ入りませんと云つた、强情な奴だ、斯う云ふ奴は、一口や二口ては恐れ入るまい、何んでもうんと饒舌り立てるに若かずと思つたから、歌人はかりぢやない、博士だの學士だのと云ふものも同じ事だ、矢張小學校でいろはを習つて、中學校へ入校すると、ボイルの定律が奈うの、オームの定律が斯くのと、一生懸命で暗記して、糟粕の試驗をされて、糟粕を嘗め〳〵大學校を卒業する、

日本丈けて甞めたりないて、外國まで甞めに行く、根氣よく甞めたものが博士と名を替えて威張り出すのだ、己れより外にえらい人はないと云ふやうな、顏をして威張つて居るが、先輩が遣つた通りの事をして、先輩が威張つた通りに威張つてるのだ、威張るのまで糟粕を甞めてる、念の入つた甞め方だ、

その内でも道學者なんぞは、古聖人の糟粕て細い生命を繋いで行き作ら、天下の聖人は手前で御坐い然と控へて居るが、時々煩悶のウン〳〵に惱まされる處を見ると、まだ〳〵甞め方が足りないのだ、と一息て饒舌つてやつた、仲々骨が折れた、この位骨を折つて饒舌つたのだから、其骨折りに對しても、恐れ入るべき義務がある、するといきなり、然しと云ひ出した、然しと云ふ言葉は賛成の時や恐れ入つた時に用ふべき言葉ぢやない、よく〳〵馬鹿な奴だ、

然し奈何したと云ふと、然し同時代のものを眞似るのは不見識だと、相替らず高慢な顏をして居る、それぢやこれから新體詩を作れば不見識かと聞きたくなる、寫實小說を書くのも家庭小說を書くのも、戀愛小說も宗敎小說も、非人情小說も寫生文も、猶進んでは言文一致を書くのも不見識かと聞きたくなる、話せないにも程がある、こんな恐物の對手になつては居られないから、默つて居たら、凹んだとでも思つたと見えて、おまけに先輩の作は有名なものですと、乘り氣になつて樣大ぶる、

最う決して對手になるまいと思つたが、きざな風を仕過ぎるから、先輩のは有名だつて、我輩のは有名ぢやないぞ、と、怒鳴り付けて濟して居てやつたら、呆氣に取られて眼ばかりパチクリさして居たのは、甚だ糟粕を甞めない態度だつた、

すると今度は行き方を替えて、眞似るのは可いにしても、眞似られる方では、自分の領分へ亂入されたやうな氣がするでしようなと、惡く甘つたく出掛けて來た、阿諛は我輩猫類の一手販賣だと、思つて居たら、こやつ何時のか間に、糟粕を甞めて居る、こんな奴には油斷が出來んと思つたから、先輩はそんな膽玉の小

さい男ぢやねえと、又卷舌て威勢を見せてやつた、然う被仰るけれど、詩人だの文士だのと云ふものは、兎角膽玉の小さいものですと、又甘い口調てある、我輩は未だ正實の處は、詩人や文士の膽玉と云ふものを一度も拜見した事がないのてある、故に大きいものか、小さいものか、想像もつかぬのてある、けれども一段小さくないと云ひ出したからには、飽くまでも小さくないて通さないと、我輩の男が立たぬと思つたから、詩人や文士の膽玉の事は知らないが、苦沙彌君とこの先輩の膽玉は、確かに大きい、こんなにあると、うんと兩足を伸したら眼が醒めた、

見ると今迄喧嘩して居た、變な奴の影も形もない、妙な事があるものだと暫時考へて見たが、矢張譯が解らない、少々氣味が惡かつた、それから今一とつ不思議なのは、我輩は確に主人の膝に上り込んだのだつたが、今見ると疊の上に寢て居る、何が何んだか五里霧中だ、神變不可思議とはこの事だ、

念のため妻君はと見ると、火鉢の向ふに居た筈だに、これも影も形もない、舍弟君も居ない、益不可思議だ、奈何も妙だ、斯うなつて見るとこの家も、實際我輩の養はれて居る家だか奈何だか、甚だ怪しくなつて來た、何んだか總身が、ぞく／＼惡寒がして、毛穴がはだかるやうだ、

連りに心細くなつたから、飛び起きて四方を見廻したら、向ふの隅の方に、ランプの傍て後ろ向きに、圓くなつてる人間が居る、何者だらうと恐る〳〵忍び寄ると、確かに女だ、針仕事を仕て居る、傳ひ聞く安達ヶ原の婆さんのやうに、眼が鏡の如く輝いて、口が耳元まて裂ては居まいかと、心中大に恐かつたが、ブン／＼絲を繰つてるのてないから、幾分か安心して、そつと顏を覗いて見ると、奈何やら見た事があるやうだ、ハテナと思つて、心を落付けて拜見すると、何んだ妻君だ、

この人間が妻君ならこの家も我輩の住宅だらう、果して然らば、舍弟君も居る筈だと、向ふを見ると次の部室て、机に向つて何か讀んて居るのが然うだ、居た

く、思ふに先生糟粕を嘗めつゝあるのだらう、して見ると唯一とつ合點の行かんのは、主人の膝に上り込んだ筈の我輩が、何時のか間に疊の上に居た事だ、事に依ると我輩が熟睡して居る間に、寐こかしを喰つたのかも知れない、然うだとなると我輩も少々男を下げたな、一體主人は奈何したらうと、梯子段の下へ來て見ると、二階から燈火(あかり)がさして居る、

二階に燈火がある以上は、二階に居るに相違ない、何を仕て居るか見てやりたいが、梯子段と云ふやつが、箱根の關所よりも我輩には始末に惡い、今夜は一とつ運動かた〲、梯子殿上りの稽古を仕やう、太夫身仕度も何もいらない、唯飛上りさへすれば可からう、やり損じは幾重にも痛いばかりだと決心して、ひよいと一とつやつて見た、可い鹽梅に一段登れた、案外容易だ、又やつた、又登れた、又やつた、又登れた、有難いぞ三段登れたと下を見ると中々高い、落ちたら大變だと思つたら、何んだか落ちさうな氣が仕て來た、最う劒呑だから登るのは止して、今夜はこれて下りやうと考へたが、上る時は直ぐ上の段ばかり見たのだから、ひよい〳〵と飛び上れたが、今度は三段ずつと見下すので、奈何も劒呑で下りられない、上るだけは上つたが下りる事が出來なくなつた、

東京市內　乙な喰ひもの

棧雲生

乙な食物と云つても或は一向乙てねエかも知れないが、僕には持合の舌が一枚きりないのだから、味のとき樣も十人向といふ譯には行かない筈さ、が、まあ手取早く本文に懸つて見やう。

湯豆腐　て一杯と言へば誰にも鳥渡乙な文句に聞えやう、所て市內の豆腐料理はと指を折つて見る。十手に梅川豆腐、千住に空也豆腐なぞがあるが、其處迄の通を云ふと氣障な話て聽く氣になるまい。まあ笹の雪に忍川に止めをさす事にする、笹の雪と云へば五行の松と共に根岸の里に昔から有名なものとなつて殘

て居るのだ。道筋を云ふと、上野は山下を北に、鐵道を踏切つて坂本の通、少し行つて左に、それから上根岸の交番と聞いて行くのが早解りて、交番の前の角になつて居る。木彫に笹の雪と門に横額が掛けれちてあるのを潜つて敷石から直ぐ座敷の椽に上る、一體が何となく古雅な趣があつて、市内の様な氣がしない所が乙なのさ。上つて左上段の床間に、曉齋の描いた惠比壽大黒の二幅對が懸つて居る、大黒も惠比壽も此家の豆腐をしこたま喰つて居る、所だ、是畫を説明すれば自から此家の様子が解る、何故ならば昔も今日も振を變へないのが此家の特色だから、も一つ附加へて云へば、笹の雪の眞の趣味を解しやうといふには、此の畫中の人物になれなくては駄目だ、一醉陶然として何も彼も忘れて了はなければ駄目だ、描出れた人となつて居なければ駄目だ。その畫中の人の喰つて居るといふのは、少し大形な茶呑茶碗に一片宛の餡掛豆腐が這入つて居る、それが一個一錢さ、ちよいと山葵下しを摘んである、口に含んで春の淡雪が解けるやうな奴さ、惠比壽殿も大黒殿も慥に四五十杯は喰つて居る圖だ勿論酒もあるが、瓶詰てなければ呑めねえとか、オヱビーヤは無いのかなぞと仰有る方々は此家には向かないんだからね、それに是の茶呑茶碗以外には泣いても笑つても外に何も出來ませんのだから是も合點あれ、但し俳味といふものは座敷中に轉がつて居るから拾つて來るが好い、陽氣の好い時節になれば、鶯が庭に來て鳴いて居ます。

忍川は上野廣小路町、三橋の東詰に共同便所があるが、彼の小路を這入つて右側に籠目に忍川とかいた行燈が釣つてある、是家は前の笹の雪とは違つて萬事當世向座敷も會席風で、庭に泉水噴水、紅裙侍つてお酌をしやうといふのだから、先づ豆腐の料理家と料理家を强く響かせて云ふべき所、種々の優にやさしい名を付けて豆腐の種類も澤山にある外に、普通の會席で出來るものは何でもお好めるといふ譯だから、笹の雪なれば五十錢一箇で三本も呑めやうといふのが是家だや圓助以下では上戸はきまりが惡からう。

蕎麥　となると數が多くつて何家でゝも喰へるがその中の摘み喰ひが、更科と云へば麻布永坂町、その分店が神田錦町三丁目に出來た。それから本郷の藪(眞砂町櫻木神社內)。淺草で奧山と池の端の萬盛庵、つい近頃上野廣小路にも出來たが、家作から品から池の端のそつくり其儘。同じ池の端でも不忍池畔には、三橋から西に這入つて左側の蓮玉庵。神田裏神保町の地外庵。團子坂の有名な藪は失くなつてその出店丈け神田連雀町（舊萬世橋を渡り郵便局を廻つて南へ小路を入る）に殘つて居る、全體東京で藪蕎麥の起りは深川の藪と云つたもんだそうな、今元加賀町といはれて居る邊に、江戶の昔、竹藪があつてその中の一軒家で蕎麥を賣つて居たのが抑藪蕎麥の創ださうである、是も疾に失くなつて、礪殼町の取引所近くに深川藪蕎麥といふのがあるが、這那處に名殘を止めて居るのかも知れぬ。元祖鴨南蠻といふ蕎麥家が、馬喰町一丁目にある、電車で馬喰町一丁目の停留場から南に這入つて左側だ。も一つ、是は故谷活東氏が文藝倶樂部？に書いた事のある、木原店の角の東橋庵といふ家だ、客應對が叮嚀て、、もり二杯のお客でもおろそかにせぬといふ、這那氣持の好い事はないから、妙なもので實際是家の蕎麥は非常に旨く喰へる。

壽司　の旨いのは魚河岸の屋臺店に限る、是は誰でも知つて居る事だからくどく云ふには及ばないが、全體料理人などといふものは、腕の確な者になると乾度何か癖があるので、一家を爲す事が出來ないのが多い、てこの社會の腕利者は一生屋臺店で握つて居て終るのだ、是が又魚河岸の屋臺店の旨い理由の一つかも知れない。最も古い壽司家では、通一丁目の帆懸壽司、麴町て鶴の丸壽司、芝で玉壽司、神田鍛冶町にあつた若菜壽司（是は十五年斗り前に破産したが、紺屋町に移つて四代目の當主が繼いで居る）、それから麻布で鳴戶壽司、下谷で松山壽司、兩國橋を渡つて與兵衞壽司、橋の這方に千歲壽司、通三丁目にお六壽司等で、[illegible]たのを云へば、竈河岸の毛拔壽司（人形町水天宮手横町）は笹に卷たもの、小網仲町の鯛雀壽司（主人が

擊劍好なので擊劍壽司尾と云はれて居る、小鯛の腹を割いて飯をつめてなれさせたのが雀ずし、それより湯氣にかけた、むし壽司が自慢だ)、それから芝愛宕町三丁目に細工壽司といふのがある、是は四季折々の花鳥を壽司で細工するのだが、近頃俳優の似顔などを作つて居る、餘程風變な亭主だ。石町停留場から南へ半町東へ入つて右側にいなりや治右衞門といふのがあるが、

●是は十軒店の治郎公と云つた方が古い人には通る、當代の親父が治郎公といふ剽輕者で、十軒店に屋臺を出して居て、誰でもかまはない、通りがゝりの人を呼びかけて「オッ兄弟一ぷく呑みねえな、お前の煙管で。寄つてきねえな、向ふの方へ。」と云ふ粋な巻舌、是が江戸中に通つたものださうな、壽司は稻荷壽司專門で今日でもそれで通して居る、一皿五錢だらう、是等も隨分變つた方だ。千住の大橋際にも有名な稻荷壽司がある、是家は藥種商をして居る傍店先で壽司を賣つて居るが、古風なものゝ一つだらう。

天麩羅　ては天金(銀座四丁目)か橋善(新橋停車場近くて芝口一丁目、電車停留場前東側にある)てあらう、けれど何方かと云へば自分は橋善を取るのだ、家は間口が半分屋臺になつて居るから一寸這入り惡い氣もするが、何這入つて見れば立派な紳士連と膝突合せて喰へるといふ具合で、決して居心が惡い事はない、それに天金よりは第一安價く喰へるのが腹の蟲の氣に入るのさ。

蒲燒　なら神田川(外神田明神下、臺所町、松住町停留場から北へ一丁斗り左側)は有名なもの。淺草北田原町の奴鰻(門跡裏停留場前)も古いものだ。

とろゝ　家を一軒加へて置かう、湯島天神下同朋町(西黑門町停留場前北側)で、麥とろと行燈を掛けて居る、一寸した料理は出來るが安直が主なのだから、酢の物で一杯やつて飯に爲る位が乙なのだらう、飯は勿論丸麥だから不味い筈はない。

小料理家　て、安價くつて旨いといふのを二三ひろつて見やうならば、

揚出し、上野の元黑門町、三橋際西詰の右角に、表

が格子戸て只御茶漬と親板が出て居る斗りて、それに間口が三間?もあらうといふのだから、初めての人には這入り惡いが、中は牛肉店よりも氣樂なもんて、安價くつて澤山あつて旨いのが特色、東京人て揚出しを知らぬものはあるまいと思ふ、酒も好い、生ビールもある。五十錢もあれば呑んて飯が喰ひやうといふのだ。

花村、日本橋手前一丁斗り三越呉服店の側て所は室町一丁目、店は橋善のやうに屋臺が入口を半分取つて其處に障子が閉てゝある、表から見れば是の障子に〇に花の字が書いてあるから直ぐ判る、それて人によつては丸花とも呼んで居る、横の小路も入口になつて居て其處には繩暖簾が掛けてある、這入つて見ると店半分は板場に取つてあるから客の上る所は十疊位な座敷丈けだ、而も是が始終入り替り立ち替り客て充滿だから、横の小路にも腰掛てやつて居る人が多い。客は中々乙な人斗りて、魚河岸に來た市中の小料理家の主人とか、米の噂をするやうな人體なぞだから氣持の惡い事もない。料理は普通のものは大底ある、自分は鮟鱇鍋(十四五錢)が一番好きさ、酒は餘り好くないが、そのかはり總體に於て、安價いのに驚く、おつけに刺身位て飯を喰つて只の十錢て好いだらう、午前の九時迄は都飯(茶めし)を炊いてある、併しこれはお愛相てあるから飯の價は違はない、旨いのは元より保險附。

平の家、京都圓山の支店ださうな、日本橋上槇町で、通三丁目の停留所から南へ一丁斗り西に這入つて北側にある。總て京料理といふのだから變つて居る、尤も東京の人には旨いか不味いか解らない、が、總菜物が種なのだから淡白して居て好いと思ふ。自慢なのが海老芋と、芋棒鱈煮と三平四満豆(オタフ)て、先女子供を連れて飯を喰ひに行く所だね、素敵に安價いとも云はれないが、決して高價い事はない、栗飯、竹の子の鎧煮などいふのがある。

隅田川、矢の倉河岸(兩國橋南下手)の水上に浮んで居て、家形船のやうな作り、河岸に入口があつて、トン〳〵と棧橋の渡殿風なのを下りて座敷に行く、二階も附いて居る、つい昨年出來たもので、大阪には是の

船上料理家は澤山あるのださうだか、東京では初てだから一寸珍らしい、安直な納涼舟、月見舟に乘つた氣になれるだらう。

重箱、花川戸から北へ吉野橋(舊山谷橋)まで行つてそれから三丁左側、山谷町にある、鰻の蒲燒もやるが、是家の自慢なのは、鯰のすつぽん煮で、是れは寛政元年に創製たもので、火加減が秘傳で、全く江戸一品ださうな。庭も閑靜で泉水に瀧があつて、川魚が活けてある、その庭の一隅に稻荷様が祭つてあつて、掛額の正一位稻荷大明神といふのは抱一の筆だから面白い。肯庭内に山谷橋際から堀出したといふ其角の句「明月や疊の上に松の影と」刻んだ尺餘の石碑がある、是等はお景物にならう。

鯰長、發句で思出したが、龜江戸の天神の裏に、鯰屋長といふのがある、是家に其角が呑んだと見えて、板屑に「それよりして夜明烏や時鳥」といふ句がかいてある。それに蜀山人と文晁か同じやうな板片に文晁は寒の龜江戸細工の畫、蜀山は狂歌「是神の誠の道のあらはれて、うそは賣り切れ申候」と書いてある、珍ではないか。

雲水、向島言問からまだ奥へ土手を行く三丁斗りて右側にウス汚ない白木板屏の門に、檜笠が出て居る雲水とそれに書いてある、もと萩の園の跡なので萩は少しはあるが、春ならば梅もある、庭に泉水といふよりは小さな池といつてよい程な水がある、さて總體に寺院を氣取つて、玄關にいきなり案内の小僧が出る、天窓をクリ／＼と剃つて鼠の腰衣で白衣を着て居る、是が二人居て、天海さん、珍海さんといふのだ、十三に十四だとかいふ、座敷に通ると經机の食卓で、傍に木魚、是の木魚を叩いて天海なり珍海なりを呼ぶのである、床の間には佛畵佛像といふので、料理は精進、酒を般若湯なぞは可笑しい、茶飯で一通りお極が五十錢、普茶料理と名乘つて居るのだ。而も是の主人が艶な女で、友禪模樣のはでな座布團、化粧鏡の前に立膝はちよつと凄艶なり焉。

まだいくらもあるから、追々讀者のお慰みに、お安

い御用、筆さきて御案内致すてムらう、と、此邊て筆を擱くのも乙てはないか。

新刊批評

▲哲學と人生

朝永三十郎著
隆文館發行

哲學雜誌、教育學術界、無盡燈、精神界、求道、丁酉倫理會倫理講演集等に掲載したるとある著者の論文、及び講演の筆記等を集めたるもの也。説に斬新なるものなく、文に精彩あるもの少きも、而かも穩健の論旨、暢達の筆數亦捨て難き所なしとせず、好學の士の參考となるべし。(定價一圓)

▲血汗

西村醉夢著
精華書院發行

日露戰爭中著者が輜重輸卒として戰地にありし間の感想、觀察、經驗の結果等を書き記したるもの也。事實を傳へんとするには、其文體餘りに小說らしく、感興をのみ與へんとするには其內容餘りに自己に忠實也されど事實を小說らしく書けるものに興味を有する人には一讀の價値あるべし。(定價七十錢)

▲その女

島村抱月譯
服部書店發行

英國の哲學者にして美學者なるグラント、アレン氏の著、『ゼ、ウーマン、フー、デッド』を譯せるものにして數年前の讀賣新聞に掲載せられたるもの也。大膽なる自由結婚論を主張せるものにして、中に間々痛快なる所あり、確かに昔氣質の老人に讀ましめて功あるべし。但し、その道にはなか〲拔目なき青年男女をしても感服せしむべき斬新なる所あるや否やは疑はし。譯文先づ無難といはんか。(定價一圓)

▲探檢小說無人島

江見水蔭著
成功社發行

面白き愉快な書き方、青年には定めて歡迎さるゝことてあらう。水蔭氏の筆はどうしてもかういふ風のものに適するやうに思はるゝ。但し製本はあまりにわるし。(定價三十錢)

▲修道講話

加藤咄堂著
井洌堂發行

氏は口と手を兼ぬる人なり、一度演壇に起たんか懸河の雄辯滔々として盡きず、又一度筆を執らんか遒健の文字忽ち稿紙數十枚を滿たす、而して氏の生平は口と筆との爲に繁劇を極むれども、尙は口と筆との活動は暫時も止まざる也。此書の如き僅々旬日の中に成ると聞けども、曰ふ所廣く現實の問題に觸れ、說く所悉く修道の精神を籠めて、難解の個所なく淺薄に流れず、蓋し吾人は求道の青年の爲めに良書を得たるを喜ぶもの也。(定價金四十錢築地二丁目井洌堂發行)

▲月刊雜誌 **文學**　本郷弓町一ノ七 文學會發行

一號を見た時に又た賣れない雜誌が出たわいと思つた、二號を讀んで或人に内幕を聞いて見た、所がイクラ損をしても繼續する計劃があるといふのだ。それならば結構な話、金儲主義の文學雜誌が多い當節、一番こゝらでしつかりやつて貰ひたい。（一部税共六錢）

▲月刊雜誌 **ひぐるま**　小石川白山御殿町八 永井方白日社發行

新聲、新潮、文庫若くは白百合式の文藝雜誌なり、内容體裁初號より整へるはうれし、健全なる發達を望む。（毎月十日發行拾貳錢）

▲**成功と人格**　田村逆水著 博文館發行

擧世滔々徒らに富貴と勢名とに憧れ、苟も機の乘ずべきあれば、手段の如何を問はず、人格の如何を顧みず、斯くて志を得れば人も己も以て大なる成功を見たりとなす、著者之に慨するところあり、人格の二字を揭げ來りて成功に別種の解釋を與へ、陋巷清貧を守るの士にも時には之を許さんとするもの、所論切實引例豐富、志ある青年の一讀を値す（定價金三十五錢）

▲**乞食の豫言**　岩谷小波著 博文館藏版

世界お伽噺の第九十二編にして材を羅馬尼お伽噺に採り多少の創意を交えたるもの筆は定評ある小波山人のもの、言はでものことなるべし（定價金八錢）

讀者諸君の應募し玉へる

遊覽者の見逃す可らざる　**東京名勝拾個所當選披露**

及び切取線を附したる東京案内

其一　東京近郊

其二　寄席劇場

は收めて卷末にあり

附録小説

一條路　幸田露伴

家鳩　柳川春葉

女髪結　小栗風葉

人と犬　佐藤紅綠

一條路

露伴

ヤ、新井君！」と、すゞしい、ふつくりした、人好きのする顔で呼びかけられ、停車場の三等待合の、いやな硬い木

の腰掛から快く身を起して、そして如何にも學生らしく活潑ではあるが、さればと云つて少しも粗野で無く帽子を脱いで挨拶したのは、眼鼻立の上品な、櫻色に冴えた顏の、まだ人の世の苦勞なんぞには汚されて居ない二十三四の男で、其の鷹揚な態度と都雅な風采とに、たゞ紺メルトンの脊廣を着て居るのではあるが、氏も育ちも決して賤しく無いことが明らかに現はれて居る。

物を搜すやうな眼をして、つか〳〵と入つて來た、目立たぬ縞のスコッチの午後三時過ぎと云ふ奴を着た、丈の高い、色の赭黑い、鼻の短い、如何にもイカツイ、田舍びた、頑丈づくりの、是も二十五にはまだらしい位の年恰好の男は、呼び掛けられると同時に、ギクリと立停まつて、

「ウン、梅辻君か。」

と云ひさま、ギゴハに茶の古い中折帽子を取ると、其の下から棕櫚の毛のやうな眞直な髮の、クリームか何かで分けられて居ればまだしものところを、水ばかりで梳けづられて居ると見えて妙に白つぱげて、しかもばらけて居るのが突と現はれた。赭黑い顏と突張つた髮との工合は、これで裸體でさへあれば何樣してもインヂアンで、長い鎗を持つてコロンブスの身のまはりに立ちながら怪しみの眼を睜つて居やうといふ風體だが、褒めて云へば精悍の氣は其のさも〳〵堅さうな狹まり逼つた額のあたりに溢れて居るので、梅辻と呼ばれた男の白くて潤い額にしなやかな髮の一ト浪打つて垂れかゝつて居るのと面白く相反對して居ると云つても宜い。

「早かつたナア。」

「七八分ばかりも前に來たよ。後れまいと思つて。」

此樣な短話が取り替されて居る間も無く、切符が賣り始められると、構内は忽ちざわ付き出す、二人も出札場の方へ其の眼を向けた。

「赤に仕やうネ。」

鼠帽子が物優しく聞くと、

「勿論さ。」

と茶色帽子が荒く答へる。そして財嚢を出さうとでもするのか身を反らせてポッケットへ手を差し込んで何か探りにかゝつたが、其の時は既に鼠帽子は切符賣場の人込みに揉まれて居た。

茶帽子は其の方を見ながら猶モヂ〱やつて居たが、やがて取り出したのは小さなマッチ箱で、今度は又忽ちにして左りの衣兜から朝日を抓み出した。そして直に其の封を切つて一本抽き出す、マッチを擦る、パフリ〱と吸ひ出した。

梅辻は二枚手にして來た切符の一枚を新井に渡すと、新井は一寸點頭するやうにして謝意を表はし、其の返しとてではあるまいが煙草を出して取れと云はぬばかりにした。梅辻は輕く會釋して一本取つて火を移した。兎角する間に新井は其の第二本を吹かし始め、梅辻は其の手にしたのを靜かに捨てやうとする頃になつた。改札口は開かれた。人浪は其處に打ち出した。丁度二人共サアと云ふので腰掛から腰を離れさせた時、轔轢といふ車輪の音と勇ましい馬蹄の地を蹴る音がして馬車が一臺此所へ駈け着けたの

て、衆人一齊に振り返つて見ると、油でも塗つてあるかと思はれるやうな艶の好い栗毛の馬の、丈は高し、頸は長し、龍馬とでも云ひたいやうに立派なのが二頭揃つて、銀金具のきらめき渡る馬具美しく、入口の廂へ閊へさうになつて停まつたのであつた。

馬車に續いて數輛の人力車が來たが、梶棒が下されるや否や其等の車の上からは、禿頭の三太夫然たる男や、岩藤が萎びたやうな中婆さんや、赤馬鈴薯に手足を生やしたやうな御付きが、こぼれて落ちるが如くに慌てゝ降りて、そして馬車から降りる自己が主人に寸時も後れまいと競つてひよこ付き出したが、恰も好し馬車の扉は開いて五十餘りの品格の好い紳士が現はれる、續いて其の夫人にしては少し若過ぎるやうであるが服裝が慥に其と證據立てる三十前後の此も品の好い美人が現はれたので、人々が隨んで扈從してソロ／＼停車場へと入つて來た。

人は十人十色だが、場内の衆人は誰も皆今來た人を何でも立派な華族だらうと想像して、そして其の榮華を羨むやうな目を擧げて待合室へ入つて行く一行の衣服や髮飾りや履物や從者等が持搬ぶ手荷物や何ぞの結構づくめなのを見送つて居るやうに見えた。

新井は身動きも仕無いで其のやゝ赤く濁つた眼でジロリと見た儘冷然として居たが、梅辻は去つて待合室へ行つた。彼の貴族らしい人と梅辻と何樣いふ間か知らぬが互に敬禮し合つて居る樣子の慇懃さから見ても淺からぬ知合であるといふ事は慥で、又何を話して居るか聞えぬが打解けて語り合つて居る事は双方の笑顏から見ても猜知された。双方の身振り手振りから顏の動きまでが、少し歩を動かして視ふ

と芝居でも見るやうに此方から能く見えて居るのだから。

て、其の態を見ると新井の面色は餘り好くは無くなつた。併し何樣といふ事も無く、たゞ煙草を咬んだまゝ妙に、足に力を入れて、ストストと一ツところを往き戻りしては、ちよい〳〵と待合室の方を覗くに止まつた。

其の中此方へ戻つて來た梅辻の顏色には何の蟠りも無い。例の如く眼もすゞしければ聲も矢張り涼しい。

「ヤ、失敬失敬。一寸挨拶を仕たらば、何處へ行くの何を仕に行くのと色々聞き糺されて、おまけに同乘したら宜からうのなんぞと云はれたが、やつと逃げて來た。」

「何だネ、彼の人は。」

「ソラ何日か話した事の有る彼の伯爵サ。伯爵だけれども眞に好い人で。」

「フン、爵位やなんぞあると誰でも好い人に見える。人間に鍍金が掛かつて居るやうなものだからネ。」

何も左樣激して居るては無からうが險惡千萬な語氣だ。

「コリヤ甚い、驚いた、酷論といふものだ。本當に識見も同情も有る好い人なので、今に僕の爲に口を利いて呉れて、僕を洋行するやうにして呉れやうといふのも彼の老伯爵なのだよ。」

「ハヽヽ、道理で辯護するネ。同車するが可いぢや無いか、白い切符だらう。」

「からかつちやアいかんよ、何の爲の旅行なんだい？全く遊びの爲ばかりといふのでも無いのぢや無い

か。」

「ハヽヽ、左樣かい、サア行かう君！」

「ハヽヽ、行かう〳〵。定めし雜沓するだらう。」

改札口へ掛かつて赤毛布的の老夫や薄穢い婆さんなどに押返されながら二人は通つて、やがて切符の色が示す一車室の中に相對して陣取つた。

二人は共に或私立大學の學生で、新井は貧家に人となつて今でも、猶窮して居るのを免れない、其の爲に學業の餘暇をいろ〳〵な事に使つて學資や小遣錢の一部を自分の手で造つて居る位、それに反して梅辻は小さくても華族の家に生れ、二男でも只一人の親に鍾愛されて、十二分に不足無く敎育されて居るのだから、實に二人の境界は月鼈の差が有るのだが、又實に二人の思想感情も雲泥の差が有るべきだが、それでも緣は奇なもので、近來知り合になつてから甚だ相親んで居るのである。といふものは梅辻は其の身が華族に生れた爲に、其の仁慈の美性質が然らしむるので有るか何樣か知らぬが、却つて小作人や勞働者や細工人や薄給官吏やに甚く同情して、そして小說や雜書に散見して居る社會主義的の思想を悅んで是とした結果、何時と無く自分は細民の荷擔人となつて働きたいやうな考を懷くに至つて居たところへ、殆ど極端な社會主義のやうな議論も吐けば同情も有して居る。そして實際に於ての其の寒酸の狀は人の同情を惹くに足る新井に値遇したので、大に悅んで其の人に接近すると、新井の方ではまた紈袴子弟には珍らしい傾向の思想を持つて居る、自己の歸依者のやうな、同志者のやうなものを得たの

て、勿論今直自分の懷抱して居る主義主張を何樣仕やうと斯樣しやうといふ念は持つて居ないのではあるが、差當り一味の談敵として自然他の同窓よりは梅辻と談論もすれば往來もするやうになつたのである。て、二人は昨今の間柄であるに關らず親善の仲となつて、そして此の春季休暇に、梅辻が云ひ出して、二三日の旅行を試み且ッ其の間に社會の下級者生活の實際をも觀察し得たらば觀察しやう、併しよしんば其は何樣あれ都外に嘯傲するだけでも宜い、といふので、初めて此の二人——性質も素性も境遇も異つて居る此の二人は一ッ車に乘つて一條の路を旅行するのである。

三等車の内は何時も同じ模樣である。たゞ取り留め無くわや／＼と仕て居るばかりだが、今しも車外を先刻の伯爵一行が通るので、人々は窓から首を出して見る。梅辻は却つて其の一行に見出されぬやうにとてあるか窓にも近づかなかつたが、新井は矢張り窓から見た連中だつた。そして一行が通り過ぎて一等室へ入つて仕舞つたのを見て手にして居た煙草を棄てた。

「君も彼室(アッチ)へ行つたら何樣だ。三等室へは乘つた事が無からう。」

新井が斯樣いつたのを聞いて慌てゝ遮るやうに梅辻は、

「何故？僕だつて三等室へ乘つた事位ある。併し實を云へば大概は青切符の世話になつて居るが。」

と無邪氣に斷つて居る背面の方で、

「いづれ昔時なら下に居ろ／＼を呼ばらせた何處かの殿樣だべい！」

と、今通つた伯爵の噂だらう、野良聲を出して百姓らしい一人の爺さんが云ふと、其の同伴者らしい、

絹絲入りの縷に光る綿入に黒紬の羽織を着て、茶の綿フラのシャツに留め鈕扣の輝くのを附けて居る二十七八の、裁判所にも二三度は出て理窟を捏ねたり、代議士選擧の時の運動員になつて口も利いたりしたらうと云ふ下品な男が、

「左樣でしやうよ。だが今ぢやあ華族樣だと云つても鄭寧にするなあ宿屋と巡査位のものになりました。へ、、、。」

と嘲けるやうに笑つた。梅辻は其を聞いて非常に不快を感じた。何故と云へば其は事實に於て全くの誣妄て、華族は今尙到る處に尊敬されて居るのだから、今の一言は畢竟するに全く其の男の下劣な品性の嫉妬心から燃え出した黑煙りに過ぎないと認めたからだ、

汽車は今上野を後にし出した。物の響きの間から復其の男の聲が聞えた。

「白切符も行くとこまで行きやあ赤切符も行くとこ迄行きまさア、ハ、、」

これは事實其の通りだ。然し何樣も嫉妬かヒガミかの匂がするやうに梅辻には思へた。百性の老人は例の大きな聲で

「遲牛も淀、速牛も淀といふ古い世話見たやうでがすナ。」

と笑つた。梅辻には其の言葉は無邪氣に可笑しく聞えた。新井は一切無感じのやうだつた。

車の音は段々激しくなつた。新井は我儘に腰掛へ大きくなつて坐つて、ポケットから雜誌を出して讀みはじめた。梅辻はたゞ窓外を眺めた。

我孫子から成田線へ移つて、二人は成田に下車し、新勝寺を見物した。新勝寺の境內には種々の人が寄附した色々の像や劍や名を刻んだ碑やなんぞ、隨分盛んな澤山な異なものがある。新井は其等を眺め廻して步いたが、最後に

「下らないぢやア無いか！」

と一語で評して退けた。簡單は威嚴てある。梅辻も餘り此の境內の景色を好いとは思はなかつたから、直に其の評に服從した。

「僕も詰らないやうに思ふネ。」

と云つた。けれども梅辻は、俗惡とても評したい此の境內の景色は、要するに新勝寺の本尊の信者等が區々に自分の渴仰心を表現したゝめて、甲乙丙丁の間に何の顧慮も斟酌も無く互に箇々の物を寄贈したから起つた事である、恰も大宴會に多くの醉客等が或は義太夫を語るもあり或は謠曲を怒鳴るもあり或は甚句を歌ふもある、それを外から聞けば雜然たる非音曲的の響となつて聞えるのと同じ事だと感じたのである。て、

「まるて統一といふものが無いから。」

と、自分の言に自分て割註を爲た。綿密は親切てある。

二人の云つた事は言語に於ては相反しては居なかつた。而し意義に於ては互に相異つて居た。新井は新勝寺境內全體に存在して居る舊い信仰から、又其の信者の精神から、信念の表白の方法から、又目前

に見えて居る其等の結果の狀態に到る迄の一切を引くるめて、下らないと一喝したので、梅辻は單に目前の景色に就いて批評し、且ッ其の不美不妙の所以を解釋したのであつた。

「統一が無いからッテ。統一が有つたつて何だつて仕方が無いぢや無いか。」

新井の語氣は例の如く强い。

「左樣いへば其は左樣だが、解釋して見たらまあ其邊だらうと思ふネ。」

梅辻は例の如く優しい。そして例の如く親切で、

「だつて君いくら新勝寺の坊さんが世間的の人でも成田の隨喜者が何樣いふ階級の人であつても、其の中の誰かが一人中心になつて、そしてこれだけの境內の經營が其の人の一手から出たものとして見給へ、まさか斯樣では有るまい、僕は乾度もつと見る可きものがあるだらうと思ふよ。つまり此丈の費用を擧げて一人の手に委ねて遣らせれば、いくら拙くてももつと莊嚴で、そして明王の威を益すに足るものが出來るだらうてはあるまいか。併し此の境內のは何も彼も、時間的にも空間的にも、ボツリ〳〵と一箇一箇に出來て、それが累積したのだから如何とも仕方は無いやうだネ。」

と付加へた。其の說は不道理で無いと新井も點頭した。

「それは勿論左樣さ。穴守稻荷の境內も君の所謂ボツリ〳〵て出來て居るから」

「餘り美觀では無いさうだネ。」

「ア、。」

「左樣だらう。何樣も統一を缺いたり中心が無かつたりするのは、美を成さぬ所以の一のやうだ。繪ても小說ても劇ても何ても。」

是に至つて新井は氣が付いたと云ふやうに、

「待つて吳れ給へ。」

と遮つた。

「エ。何だい」

と梅辻は訝る。新井は段々と歸路を步みながら、

「左樣君の說にばかりも從へ無いナ。繪ても詩ても中心の有るのが必ずしも必要條件ては無いやうだ。中心が無くなつても宜い理屈もある。統一だの中心だのと云つたのは今ては古い思想だ。」

「てもそれては美とか面白いとか云ふところが無さうになるては無いか。」

新井の步き方は妙にコツリ〳〵と正確になつて來た。

「イヤ、別に際立つてこれと云ふところは無くつても宜い、劇ても小說でもこれと云ふところが無くつても宜い。イヤ或は本當は中心らしいものなんぞは無い方が宜いのかも知れない。」

おとなしい梅辻は新井の面を覗く樣に見た。

「ぢやあ面白いところが無くつても宜いといふやうに聞えるネ。」

「聞えるのては無い。實に左樣なので面白いと云ふところなどは無くつても宜いのだ。」

「何樣いふ說だイ。」

「何樣といふ事も無い。物に中心や統一の有りたがるのは極古い思想、イヤ古い思想といふよりは古い感情なんだネ。つまり良い國王を中心にして國が榮えるといふやうな事を感じて居た古い時代の遺物的感情なんだ。」

「それて」

「一幅の畵の中には必らず其の一幅の畵を支配して居るものがある。即ち其の畵の題目たり精神たるものだネ。先づさう云ふものが有つて、そして一幅の畵が成り立つて居る。それが古來の畵といふものだネ。云ひ換れば古來の畵といふものには、無形にせよ有形にせよ大抵其の畵の主權者のやうなものがあるので、其の主權者のやうなものを君等は中心と云つたり統一點と云つたりして居るのだ。」

「ウン、それから。」

「て、其の所謂中心や統一點の明白で無いやうなものは困つた畵として居るのだ。」

「それは左樣だよ。何を描いたのだか分らないやうなものは困るから。」

「小說や劇でも、矢張り其の小說や劇其物の中心になつて居るやうなものが古いのには有る。」

「ン、有るのが多いやうだ。」

「だから畵でも劇、小說でも、其の中に或意味にせよ或感情にせよ何か支配者たる一ッのものがあつて、それが國家に於ける君主の如き地位を有して居る。つまり古い藝術は皆藝術其物に君主政體の影が映つ

て居るんだナ。」

新井が一歩ゴッリと地を踏んだ時に、今や二人は境内を出て仕舞つた。

「要らんこッた。生活に酋長の奉戴を必要とした時代が去つたらば酋長制度は保存せずともだ。藝術の中に支配者主權者のやうなものは無くつても差支無い。」

優しい梅辻も服す事は出來ない。藝術の事に關しては自分の方が新井より平生多く注意を拂つて居るつもりだから。

「それぢやあ美術も文學も變なものになつて仕舞ふ。中心の無い畵やこれといふ面白いところの無い劇や小説て價値のあるといふのは一體まあ何樣なものを指すのだらう?」

「何樣なもの? 何樣なものと云つて、それは今例を擧ぐる事は出來無い、丁度我々の理想して居る社會の狀態を實例を以ては示し難いのと同じ事だ。併し人類の生活狀態に於て我々の主張が漸く勝つて行つて、酋長制度や君主獨裁制度が歷史の上に漸く消えて行くやうに、事實に於て段々と完全に統一されて居ない、中心の明白て無い、古風の人に云はせれば面白く無いやうなものが少しは世に現れて來出したては無いか。」

「イヤそれは失敗したものなのては無からうか。」

「或は主權者の尩弱なやうなのも有らうが、或は又全く何處といふ提へ處も無く作らうと試みたのも有らう。」

「何様も解らん。」

「ナアニ二十世紀までの藝術は君主獨裁制度の陰影が映つて居るが、今後の藝術は必らず左様で無い點に向つて歩を移すだらうといふ迄なので、統一や中心といふ事は必らずしも美を成す所以の要素では無いといふのにあるのだ。」

「をかしいぢやあ無いか、左様いふと君が下らんといつた新勝寺の境内のやうな亂雜て統一の無いものが好いといふ事になるでは無いか」

「ハヽヽ、解らんナ、新勝寺の境内は別だよ。强ひて例を云へば木曾の十三宿だの、豊の耶馬溪だの、白石の奥の山道だのといふ景色ネ。」

「ッ、それが」

「それ等は皆おもしろい山水だが、別に何様統一されて居るといふても無ければ、何の景色が中心といふのでも無い。然し皆一幅の大畫圖たるに相違無いだらう。」

「ア丶それは能く知らないが左様だらう。」

「て、若し其等の大畫圖の全部のやうに、若くは其等の大畫圖の部分のやうに出來た畫があるとすると、」

「ウン。」

「統一も中心も無くても其は面白いに違ひない。」

「イヤ面白く無いだらう。」

「サア待ちたまへ。て、劇でも小說でも人事の或部分を寫したらば、其が頭も無く尾も無く、因緣も不明て理路も暗くつて、何處が中心だか、何處で統一されて居るのだか分らなくつても、寫し方さへ惡くなければそれて面白いだらうと思ふネ。そしてなまじ一幅の畵や一卷の書の中に主權者が威張つて居るやうに或る處或る事が優越權を附與されて居るよりも面白くはあるまいかと思ふのだ。」

「それはいけない。君の云ふやうにすると、パノラマカメラといふ寫眞機械て撮つた畵のやうなものは藝術の大作と混淆されて、蓄音器と活動寫眞との巧みに聯結されたものは第一位の演劇になる事になつて仕舞ふ。」

「そんなに君は緊しく縛り寄せられたやうな藝術を好んて、そして無政府狀態のやうな藝術を好まないのか。」

「左樣では無いが春の夜の夢を見るやうに取り留まらないものは良い藝術だとは僕には思へないから。」

「よさう、藝術論を仕に出て來たのでは無いから。ハヽヽ、もう停車場へ來て仕舞つた。」

「佐原へ行つて宿るといふ時になるネ。」

「左樣だ、詰らないだらうが明日は香取鹿島を見やう。」

其の夜二人は佐原の或旅店に宿つた。第一等の旅舍をば、其の好奇心から却つて避けて、二等だか三等だか分らぬが、餘り甚くもあるまいと見える店つきを見て突と入つたところ、新井に取つては意外に上等な好い宿屋て、梅辻に取つては意外に悲しい厭な宿屋だつた。

通されたのは十疊の座敷だつた。疊數は十疊に違ひ無い、そして古びても居ないに違ひ無い。しかし七通り刺したのか八通り刺したのか知らないが、歩くと足ざはりが實に柔かい變にブクツク奴で、其の疊の目から歩く度に氣息を吹き出しさうな心持がする。梅辻は此疊よりも赤く焦け色のついた古い疊に座するのは何とも思はない。併し極端に惡口を云へば藁束を列べた上に蓆を伏せたやうな此樣な疊の上に寢るのは好まない。

座敷の壁は床の間が銹砂とかいふのださうだ、黑つぽく堅さうに塗られて、チヨ〳〵光つて居るのを除いては皆青く塗つてある。黃大津鼠大津は皆廉い壁だが、せめて其等ならば見る眼も安からうものを、兎角宿屋にある奴だが、提灯屋の繪具然と青い壁は嬉しく感じられなかつた。床は板床で紫檀の一枚板だ。といふと非常に立派に聞えるが、紫檀だもの幅が無いのは是非が無いとは云へ其の幅が無い爲に床の間の奥行が一尺と少し許しか無い。疊床で宜いから十疊の座敷だから三尺奥行の床に仕て貰ひたいのを、態と紫檀で有難がらせて淺床はイヤな氣がする。床柱も落し掛ケも唐木づくめで、床には文晁の眞赤な僞物、しかも圖柄も有らうに老人星を彩色入りは絕妙とせざるを得ないが、憐むべし描いた人は表具屋の三分一の收入が無かつたらうと思はれる。床に續いて棚がある。規則だから是非が無いが御約束の金物の付いて居る地袋。檜の柱、同じ長押、梅の花と松の葉が組打を仕て居る釘隱しの金物も赤銅なら宜ささうなところを黃金色に光らせて居るので、御寺樣といふ景色がある。天井は馬鹿に幅の有る豪氣な板が使つてあるけれども、何樣も眞の神代杉にしては厭な色氣に見えるのが却てさもしい。座敷の眞中

に紫檀の方卓、絹物の座蒲團、宣徳の火鉢、又しても紫檀の煙草盆といふ道具立。年若の婢が恭しく持出したのは抑も仰々しい埋木の大茶盆にヒカ〳〵光る水金づくめの茶器、銀瓶と行きたいがニッケル瓶は二十世紀だつた。

梅辻は年こそ若いが育ちが育ちなので、實際普通の佳い物と惡い物と位は見別ち得るので、すべて表面ばかりの趣味で持切つて居る此等の態を見て、却つて嬉しく無い感じは起しても嬉しい感じは仕無い。石版刷の蛭子大黑の額で無いがまだしもだと惡口を云ふ程に人が惡くは無いが、餘り感心も仕無いで懸額の繪――靑年畫家の一寸名ある人の描いたのを、まだしも此の座敷中で此が一番宜いと思ひながら見て居ると、新井は

「宜い家だネ。大きに吾輩を優遇すると見える。」

と聲を掛けた。

互に欺かぬ感じだ。併し趣味性は全く大に徑庭が有つた。所謂三社巡りを仕て翌日二人は共に歸つた。梅辻は歸りの汽車の内で前夜の鯨飮に疲れたゝめでもあらう新井が居睡りして居るのを見ながら、

「主義は一致出來る、趣味は一致出來ぬ、人生を支配するのは主義斗りでは無い。」

と獨語した。

（完）

泉鏡花氏よりの來電

氏は附錄小說に寄稿の約なりしが、左の如き來電あり、氏獨特の作物を本號に掲載するを得ざりしは、讀者諸君と共に吾人の甚だ遺憾とする處なり。（編者識す）

電報送達紙

受信人居所氏名
ホンコウ
コマゴメ
ニシカタマチ
一〇バンチ
ハンセイシヤ

發局
私報
ツシ局
第一六號
三月十三日
四/八四字
午后二時廿分

着局
受付 午后三時分
受信者 ケ

指定

記事

オヤクソクノモノ、マ
ニアワヌ、マギワニ
ナツテ、モヲシワケナ
ケレド、イマニモ
イマニモト、オモツタ
タメ、ヲコトワリガ
オクレテ、ナヲスマズ、
イクヘニモ、オワ
ビスル

發信人居所氏名
イヅミ

發信番號 第六三號

注意

着局日附印
40.3.13

明治三十九年四月印刷局製

家鳩

柳川春葉

紙屑を丸めて投ちあるやうな雪が降る。これしも三月、春の彼岸ごろのは是だらう。松や笹葉まこと六纐(ごうわり)せ乗るが、めまて地(ぢ)面(ごゞ)へ落つけば、ドロリと、水にしもならで、やがてま黒な土のぬめりと消失せるのだ。

其又柔かい土の上には、爪紅を取つたやうな夏草の芽出しや、押合へし合ふ菊の苗が、我勝と顔を出て、此方は伸びるだけ伸びたらば、花でも咲かして、實でも結んで、一生を成行くまゝに暮すのさと言はぬばかり、樂しげな、希望に充ちた、而して勇氣の有る姿を示してゐる。

薄つぺらな雲は小く剝げて落盡したのであらう。雪が止むと共に、鼠色の空は豁然と霽つて、眩しい程強い春の日が、若草の上に大手を擴げて照渡る、縮みきつてゐた大地は此暖りに安心して、方々から息を吐くやうに水氣を立て、今迄は高い處を彷徨いてゐた風が、初々しい芽生を擽つてても遊ぶ氣か、徐と遠くから忍び寄つて、知らぬ顔に其頭を撫てゝは行くと

彼是正午近ひ日當りに、椽側は逆上る程の暖さ。處々に櫻の花や紅葉の形の切張を爲てある障子も、根氣好く拭込まれて黑光を放つ柱も、椽の下に詰つた薪の木口も、皆此美しい春の光を浴びてゐる。

奧の方て二言三言聲が爲たと思ふと、不意に其障子が啓いて、丸髷に結うた、二十四五の小格な美しい女が椽先へ現れて、少し身を屈めながら空の模樣を眺めたが、

「まあ、全然晴れて了ひましたよ。目が舞ふやうな。何といふ好いお天氣てせう。」

内では何とも返事が無いので、彼は黄の勝つた銘仙の衣服の兩袖を胸の處て合せ、徐と端近く蹲踞むと黑つぽい格子縞の前懸が履脫石の上にする／＼と垂れる。途端に薪と炭俵の間から、斑の駄犬が首を出して、其布の端を恐る／＼嗅いて見たが、突然凄じい音を立てゝ躍かゝる。

「あれ！」

と女は顔色を變へて立上つた。其騒に驚かされて、閉てゝある背後の障子を慌てゝ引啓けたのは、年齢二十歳ばかりの、體格の好い、色の黒い學生である。

「何う爲ました姉様。」

「あゝ可恐かつた。」と女は戰々兢々て椽の下を覗き込み「斑の所業なのだよ。」

「何の事だ。」と學生は不平らしく「姉様が餘り頓狂な聲を出すものだから、僕は膽を潰して了つた。」

「妾だつて……斑が突然前懸へ飛ついたのだもの！」

學生は此時大跨に椽へ立出て、兩手を鴨居へ突張りさま、有らん限りの勇を振つて大欠伸を爲たが、飽氣に取られて其方を打目戍る姉を尻目にかけて、

「何うです。强さうでせう？」

「まあ、大變な顔ねえ。」

「全身の力が此顔面に集るんだから。而して御覽なさい、此筋肉の怒張した事ッたら！」太い腕を振廻して「宛然松の木だ。」

「然うね。」と此方は又妙に感服して眺めてゐる。

學生は二三度屈伸して、撫てたり叩いたりして見た揚句、不意に姉の鼻先へ突出して、

「一つ喰ついて御覽なさい。」

「え？」と目を丸くして「何故。」

「齒が立つか立たんか。」と又恐ろしい顏を爲て睨つける。
「可厭だわ、那樣馬鹿らしい事なんぞ。」
「可厭ならお止しなさい。貴方の齒が折れるか、僕の肉がそげるか、運を一時に試すんだつたが、あゝ惜い事を爲た。」
「少とも惜ひものですか、那樣に運試しが爲たければ、斑に喰ついて貰ふが可い。」
「失敬な。」
此家は遠山といふ少許りの地面持て、此女は嫁のお俊、學生は彼女の實弟て、大原四郎といふ。元來が遠山と其大原は親類同士、姑のお光は姉弟の實の叔母に當つて居るので、姉のお俊を子供のうちから許婚にして引取つた後、大原の父母が死絕へて、殘るは稚い四郎一人と成つたので、五六年前から家の者にして一切面倒を見てやるのだ。
て、此運試の一件が濟むと、二人とも何か考事を初めて、四郎はノツ〳〵一つ處を步廻る。お俊は熟と日に匂ふ土の上を見詰めてゐたが、偶と思出して周章と座敷に入り、友禪メレンスの座蒲團を五枚持出して、一つ〳〵日表に並てゐる。
布團が巾を取るにつれて、四郎の運動の場所が狹く成る。彼は本意無げに姉を下瞰して、
「誰かお客でも來るのですか。」
「否、唯乾して置くのさ。」

「餘り日に當てると色が褪めるさうですぜ。」
「おや、お前誰に聽いたの?」
「聽かなくつたつて丁と心得てゐるさ。」
「ちやあお前さんも一日日向に寢てゐたら、少とは色が白く成るでせう。」
とお俊は一寸奥を覗込んで。
「お母樣、此方へいらつしやいましな。陽氣で可うございますよ。」
姑のお光といふ、六十を越した婦人が切下の頭髮を撫でながら、片手に蔓のついた煙草盆を提げて、此時座敷の端近によいとこさと居處を定め、
「眞にねえ、宛然蘇生つたやうなお天氣に成りました。暑さ寒さも彼岸までといふけれど、最う是で時候も落着いたね。先刻の雪が降らんと、今日も未だ斯うは暖く成らなかつたらうが。」
「然うでございますよ。是では追つけ裏の桃も咲きませう。」
「然ればさ。」とお光は一つ頷き「落着いたと言へば、雅雄は何うしましたえ。」
「はい。」とお俊は忸怩して「今朝程から未だ書齋に入つて被在ひます。」
「然うですかい。室へ籠るは可いが、又例の事を考へ出さなければ可いが。」
分の薄い雲が動くと覺しく、椽の日當が急に鈍く成つて、三人は同じやうに何やら不安の色を浮かべた。少時するとお光が煙草を吸つけて、

「雅雄の歸つて來たのは何時だつけね。」

姉が答も待たず、四郎は橫合から、

「僕は知つてゐます。彼はたしか……先月の二十六日でした。」

「然うすると。」お光は目を瞑つて二口ばかり忙しく煙を吸込み「彼是最う半月に成ますね。今度はく〳〵と歸る度に安心して居るけれど、又初りは爲んかしら、あゝ猶且心配でならない。」

「お母樣、今度こそは大丈夫でございますよ。」

とお俊は前垂を膝の下へ折込んで「先日も、あの斯う有仰つてでした——俺も最う今年は三十二に成つたのでッて!」

其先が有るのかと思つて、お光も四郎も耳を澄してゐると、

「ですからお母樣、然うでせう。」とお俊は不得要領な事を言ふ。

「自分が三十二に成つて、其から何うだと言ふのです?」

「別に何うといふ事は伺ひませんけれど……其ですから畢竟、お母樣の御心配なさるやうな事は無からうと思ふのですよ。」

「解らんなあ」と四郎は大きな聲で、「那樣謎見たやうな事を言つてゐて、姉樣には意味が取れるか知らんけれど、他の者は少しも得る處が無い。」

お俊は眞赤に成つて「お默り! お前なんぞの生意氣に口を出す處ぢやありません。何かといふと直に

出酒張つて、お前見たやうな書生は默つて引込んでゐる方が可いのですわ。」

「引込んで居られるなら引込んでゐますさ。然し姉樣だつて考へて御覽なさいな。兄樣が時々家を出てお了ひなさるのは、何も放蕩なさるんぢやありませんよ。又酒の上でも無いのですよ。」

「其はお前が言はなくつても、丁んと知つてゐますよ。」

「ちやあんと知つてゐるなら、又ちやあんと熟考したら可いでせう。兄樣が彼樣事を爲さるのは何か不平が蟠つて居るからです　眞面目で和しい兄樣が、時々我慢が爲切れなく成つて家出を爲さる、其不平の原因は一體何ですか、貴方其を考へて見るが可いです。」

お光は喫驚して、威丈高に辯じ立てる四郎の顏を見たが、軈て重々しい咳を爲て、細く首を振りながら、無意識に煙草を詰めては喫む。お俊は又折々姑の氣色を窺ひつゝ、何と答へたものかと迷惑の體。

「僕は生意氣な事を言ふやうだけれど、僕は其何だ……全く生意氣かも知れんけれどね。實際焦慮つて爲やうが無いんだ。姉樣貴方能く考へて見て下さへ。」

「其は妾だつて、何時も考へて居ますわ。けれどね、何うも解らないの。まあ其は第一に……。」とお俊は最う腹を立てゝゐる樣子も無く「妾の足らないのが原因なんだらうけれど。」

此問答を茫然聽いてゐたお光は、やつと心着いて、長煙管の雁首でそゝけた灰吹の縁を叩き、

「お前那樣事は何うでも可いがね。四郎さんも然う言はんでも宜敷い。お俊に一として惡い處は無さ。成程雅雄の方には不平をいふ筋が有かも知れんが、其といふのが畢竟彼の我儘なので、放蕩こそ爲なか

らうが、お酒こそ飲まんが、彼様いふ氣紛れの變人だから、譯も無い事に不平を起したりなんぞ爲る。えゝ我儘に違無いのですよ。

「何有、妾は最う〳〵彼の豪さうな理屈だの、氣違染みた話を聞いても今では少とも驚きは爲ません。初の中は一人の子息では有るし、思切つた事でも爲れては後の者が困ると、其ばかり心配してからに、自分に何ぞ惡い事でも有りは爲んか、其ともお俊が機嫌を損じたのかと、其はね、心の中では種々他も疑つて見たけれど、今思へば馬鹿氣切つた事さ。氣違の介抱を爲て、正氣な者が自分の氣を疑るも同じ事です。」

袖に着いた糸屑を拾つたり、襦袢の袖口を引張出したり、心苦しいのと、極の惡いので、絶へず俯目に成つてゐたお俊は姑の話の切目を見計つて、

「然う有仰ると妾共には何の惡い事も無いやうですけれど、決して然うでもございますまい。」

「無論です。」と四郎は調子外れの聲を出す。

「何れ思召に恊はない事が、何處か有るだらうと存じまして……それで自分でも出來るだけは氣を着けますし、又機に觸れて伺つても見ますが、少とも解りませんのですよ。」

「だけと姉樣、解らんが解らんでは澄みませんぞ。兄樣の事に就いての責任は半分以上貴方に有る。而して其殘りの半分は……或はお母樣と僕に有るかも知れんけれど……。」

「何有、最早別に言ふ事は無い。」とお光は手を振つて「幸今は無事だから、那樣詮議は無用ですよ。又

ね、萬一持病が起つたにしろ、それならそれて捨てゝ置くさね。左右本人の思ふまゝ、妾共は構つた事は無い。」

と言つて未だ言足りぬやうに考へてゐたが、

「眞逆に親や家内を干乾にも爲て置かれまい。が、唯お俊！氣の毒なのはお前てすよ。」

「何う致しまして。」とお俊は涙組んてゐる。

「然し、今ては彼樣して落着いて居るのだから、左右家内に事なかれて、此話も是ぎり。て、雅雄が何時までも氣を變へずに居てくれゝば、其に越した喜びは無しとして、先づ〱お互に疎相の無いやうに爲るのだね。先刻お前の言つた（三十二に成つた）といふのは、自分でも徐々目が覺めて來たのかも知れない。」

と言ふ時、主人の居間て氣立ましい呼鈴の音が爲る。

「はい！」

お俊は急いて返事を爲て、慌しく前垂に涙を拭きながら、椽傳に良人の室へ驅けて行く。お光と四郎は息が詰るやうて、少時は默然としてゐたが、

「今日は日曜かね。」とお光は解り切つた事を聞いて見る。

「えゝ。」と此方は今迄餘り思切つた事を並べたので、少し耻かしく成つたが、そは〱と庭の方を見て、

「上野は非常に人が出るさうてすな。今日あたりは散歩に行つて見やうかしら。」

「其も可からう。」

「然し何だか可厭な天氣ですなあ、氣味の惡い程日が映すかと思へば、叉變に曇つて哀しく成る。」

「南風が吹くのだよ。南風は何うも氣持が惡いから。」

肉にも皮にも成らぬ話を爲てゐる間も、互に言ふに言はれん不安の面色である。」

（二）

四疊半の東向の室には、大きな机が一つ据えてある。茶褐色の机懸がインキの汚點だらけて、竹の筆筒へ、何れも坊主に成つた筆が薄の苅株のやうに挿さつてゐる。

横手の床の間には、墨繪の軸が怪しく反返つたまゝ行儀も作法も無く懸り、其下の擬青磁の花瓶が、花も無く置いてあると、是を中央にして、雜誌やら、小説やら、金文字背革の難しい書籍やらが、滅多矢鱈に積重ねられた其處等一面、埃塵の霜が薄々と置いてゐる。

背の壁からかけて、苟くも窓で無く、押入で無く、疊で無い限は、得態の知れぬ水彩畫、鉛筆畫、木炭で描なぐつた肖像畫の半出來、さては惡く隈を取つた油畫などが、當るにまかせて貼つけてある。

處で、此机の上に片肱を突いて、開放つた窓から庭の一部分を眺めてゐる男は、此家の主人の遠山雅雄であつた。

背丈はヒヨロ高く、色の白い方て、骨太だが肉の瘦せた、何處か稜々した體格て、顏も先づ角張つた。髭鬚の無い肌理の好い、柔い毛を奇麗に寐つけた——といふよりは自然に癖のついてゐる——一體に完全

な體ではあるけれど、唯異様なのは其眼だ。上下の瞼を押分けるやうに凸起して、妙に潤を持つてゐるのが、何うしても體や顔と釣合の取れぬ處がある。

　無意識に怪しく口を曲め、間斷無く食指で卷莨の灰を落して、

「チヨッ、何うしたと言ふんだ。返事ばかり爲たつて！だが、俺は又何故人を呼んだのだらう。何にも用は無い、用が無くつても人が唯呼んで見たく成つたのかしら。而して彼の不快な、兢々した、犬や猫が主人を恐れる時のやうに、可憐な、卑しい目つきを爲る人間を見たく成つたのかしら。馬鹿だなあ。其では自ら求めたんだ。え？何を？不愉快をさ。」

と獨語を言ひながら奇麗な髮の中へ五本の指を差込んで、前後左右へ荒々しく掻亂しながら、

「何たる馬鹿だ。然し來て呉れない方が可い。何うせ人間は、何時も返事ばかり爲て用を達して呉れない自然といふ奴を相手に生きてゐるのだ。自然は牛屋の婢のやうなものさ。痛く成る程手を鳴らした揚句に、漸と氣の脱けたやうな、何も彼も御存知のやうな面色を爲て（ヘイ、お代りは何に致します？）と言つて現れるんだ。」

と言ふ處へ靜に襖を開けて、細君のお俊が可恐々々入つて來た。

「お呼になりましたか。」

「えゝ？」と雅雄は吃驚したやうな顔色でしげ〳〵其方を打目成り、變に口をモグ〳〵爲てゐるうち、其無邪氣な面はやがて意地の惡い冷笑を湛えて、

「呼ばれたから來たのだらう。解り切つた事は聞かんでも可い。」

「……」

「然し。」と自分でも怪しい程和しい語調で「何故お前は那樣馬鹿氣切つた口上を言ふのか當てゝ見やうか。え？入つて來る時に眞逆今日はとも言へないから、其て然う言つて見たのだらう。」

「はい。」

「然うだらう。」と急に又嚴めしい態度で「だから俺は氣に入らんのだ。那樣間に合せな事ばかり言ふのはお願だから廢して呉れ。」

「那樣事を有仰つても……妾は何う申上げて可いのですか解りません。」

「然うか、ぢやあお前は勝手に何か言つてゐるさ。俺は俺で別に考へる事が有るんだから。」

お俊は蒼く成つて俯いたが、無理に悲しさうな笑を浮べて、

「彼の御用と有仰いますのは？」

「用は無い。」

其限て默つて了つて、一人は庭を、一人は自分の膝を瞬も爲ずに見詰めてゐる。と、雅雄は不意に振返つて、

「彼方へ行つたら可いぢやないか。」

「……………」

「實は別に用も無かつたのだ。お前が其處に居ると邪魔に成る。」

お俊は良人の横顔を眤と見詰めてゐるうち、何時か胸が迫つて、熱い涙がハラ〳〵と膝に零れる。淋しいうちにも偶と斯樣氣勢が爲たので、雅雄は今一度其方を振向いたが、忽ち目を丸くして、見る〳〵赤く成る程腹が立つた。

「お前は、何を泣くんだ。行けと言つたら穩しく行くが可いぢやないか。泣いたら何う成る。おい、其て人の同情を買はうと思ふのか、泣いて氣の毒がらせやうといふのか。」

「然うではございま　。」

「て無ければ何うなんだ。」

と嵩にかゝつて怒鳴りながら、雅雄は昔子供の時に、猫を殘酷な目に逢はした事を思出したのである。其は斯樣話だ。家に飼つてゐた玉といふ猫を彼は何よりも愛してゐたが、或時何ういふ機會だつたか、虐めて〳〵虐め拔いて、終に片輪に爲て了つて、其時は可憐な家畜が只管哀を乞ふ擧止を見ると、雅雄も堪らない程悲しく成つたのだが、同時に又狂氣のやうに猛立つて、泣き〳〵酷い事を爲てゐたので。今も恰度其と同じだ。少しも罪の無い、從順な妻が、途方に暮れて只悴々してゐる姿は、言はん方無く可傷い。其に何故自分は斯樣に氣難しいのだか、意地が惡いのだか、若し他が斯くまで冷酷な所業を爲てゐる處へ引合せたなら、彼は其男を叩挫いてやりたい程苦々しい。然し一方から然ういふ非難を受けべき自分だと思ふと共に、彼の反抗心は忽ち燃揚つて、最う目の眩むばかりに弱者が憎いのだ。

「同じ人間でありながら、斯樣意氣地の無い者は、實に下等だ。」
と雅雄は心の中に叫んで、又以前の恐しい倨傲な態度を爲て、佶と相手を見下しながら、
「然うで無ければ何故うぢ〳〵してゐるのだ。」
「妾……少し貴方にお話を申上げたい事がございますが。」とお俊は上目で良人の樣子を窺つた。
「ふゝむ、話を爲たい？」と此方は焦々するのを押つけて「言ふ事が有るなら匆々と言ふさ。」
「他では無いのですが、貴方は何かお氣に召しません事がお有りなさるのですか。」
「那樣事か。其なら勿論有るとも、一から十まで氣に入らん事ばかりだ。」
「何れ然樣な事とは存じますが、一體何がお氣に入りませんのですか、其を伺ふ譯には參りますまいか。」
「聽いて何う爲るね。」
「それは……」と又爲う事無しに笑顏を爲て「妾の至りません處は、御呵を受けた上で、如何やうとも氣をつけたいと存じますので……。」
雅雄は默つて然ういふ人を打目戍つてゐたが、やがて冷然として首を掉り、
「其は駄目だ。無益な事です。」
「でも妾のやうな者は、お小言を受けませんと一向氣が着きませんので、種々と及ばぬながらも心配は致して居りますけれど、何分……でございますから、貴方！お願でございますお惡い處は何うともお

腹の癒るまでお呵り遊ばして下さいませんか。」

「お前は能く然ういふ事を言ふね。だが俺は其を聞かされるのが一番嫌なのだ。常々俺の言つたり、爲たりする事で最う少しは解りさうなものだが。」

「其が不束な者でございますから、何時もお母樣とお相談を致したり、弟に怒られたり致しますのです。貴方が御立腹遊すのは皆妾が惡いからだと、四郎は今も散々怒るのですよ。」

「あながち然うばかりでも無からうさ。」と雅雄は何を感じたか、俄に氣の弱い事を言つて「よしんばお前が何程骨を折つた處で、其了間では迚も俺の心を慰めて呉れる事は出來ん。まあそつとして捨てゝ置くさ、勝手に煩悶さして、思ふやうに起居を爲せて置いたら、其で此方も幸だし、お前達も亦別に困る事は無からう、其を憖に媚びて見せたり、泣いて見せたり爲ると、俺の氣難しさが益す增長するばかりだ。」

「では何うしたら宜敷うございませうか。」

「煩いなあ。要するに俺はお前達のやうな動物と一所に居るのが嫌なんだ。」と眞赤に成つて「服從する事ばかりを好いと思つて、瓦のやうな光も何にも無い命を大事に爲て、食ふ事ばかり考へて、變に虚飾を爲たり、お世辭をつかつたり爲るやうな、那樣猫犬兎同樣な動物と共に居ると、此方も鮑貝へ首を突込んだり、豆腐の殼を食ふやうに成つて了ふんだ。」

「まあ……貴方。」とお俊は恐れるといふよりも寧ろ心配さうな顏を爲た。

「おい、最う夜は明けてゐるのだよ。あゝ何時まで皆は睡てゐるのだらう。俺は今起やうと爲てゐるのに、貴樣達が寄つて集つて重苦しい夜具を被せるぢやないか。廢して呉れ、那樣親切は却て此方を怒らせる。」
「然う致しますと、何にもお構ひ申さずに居りますのが宜敷いのでござざいますか。」
「可いも不可いも無い。彼方へ行つてゐろ、後生だから捨てゝ置いて呉れ。」
「其でも貴方と妾とは夫婦ではございませんか。」とお俊は一生の勇を振つて最う一度衝突つて見る。
「夫婦？まあ然うだらうな、不幸にして……。」
お俊はとう〳〵泣出した「不幸とは餘りなお言葉ではございませんか。」
「何が。」
「だつて貴方、其では妾が此處に居りますのが、お腹立の原因なのですね。貴方は妾をお嫌ひなさるから然うして不平をお起しなさるのでせう。」と珍らしくツケ〳〵物を言つて「宜敷うございます。其程お嫌なら妾は最う……妾はお母樣と御相談して……。」
「何を言つてるんだ。」と雅雄は調子外れに笑ひ出して「お前ばかりが嫌なのぢや無い、俺は家が嫌なのだよ。其位の理由ならお前一人を追出せば濟むが、家中を追出す譯には行かんから、先づ俺の方から出て行くのさ。」
「否何と有仰つても丁と解つて居ります。妾は覺悟を極めました。」

「勝手にしろ！」

と雅雄は猶且馬鹿にしたやうな態度で喚き、忘れてゐた巻莨を取上げて、考へ〳〵火を點けたが、直に口へ持つて行かうとも爲ずに、

「何うせ何を言つたつて通じや爲ん。」

と獨語ちつゝ、一寸尻目にかけると、お俊は何時か室を去つてゐたのだ。

「ふむ、何を言つた處で……。」

最う一遍繰返さうと爲て、彼は急に匆忙くと立上り、追かけるやうに室の入口へ行つた。而して發と息を吐いて、例の大きな目で壁間の繪を見廻しながら、ノサ〳〵と十文字に歩き廻つてゐる、其容は宛も勝利に誇るやうで、世界も一呑にでも爲たやうで、今迄の落着かぬ。焦々した風は少しも見えなつた。て、歩きながら今の出來事を細く考へて見たが、其が深く進むにつれ、足の運動は鈍く、疎略に成り、果は室の中央に茫然と佇立んで了つた。

一體今迄は何を言つてゐたのか、自分の言を繰返して批評を試ると、一として筋道の立つた處は無く、徹頭徹尾感情一遍の、謂はゞ熱に取つかれた者が囈言を言ふのと同じ事であつた。

此頃は非常に物に激しやすく、感じた事は直に口へ出るやうに成つた、其だけは先づ自分を僞らぬをつけたと思つてゐるが、偖其口に出る言を聽くと、考へてゐる事の萬分の一も言つてはゐない。斷々の、偶發的の虚僞で無い代りに面白くも可笑しくも無い、單に冷な聲に過ぎぬ。

「錦の袋から何故玉が出ないのだらう。斯様瓦礫のやうな物ばかり吐出してゐたつて、到底自分の意見を立てる事なんか出來やしないぞ。」

と思ふと、さしも大人物らしかつた遠山雅雄が、小な、唯怒ッぽい下等な動物に成つて了つて、一から十まで片腹痛い事ばかり。

「牛が馬に變つた變で、角を捨てゝ歩行が疾く成つた位のものだ。立派な言を出すには、先づ立派な頭を造らなけりやあなあ。動物から人間に變化しなければ口が利かれるものぢや無い。先づ自分を立てろ、之に命あり、此命は人の光なり。」

と叫んで、其から机の前に行くと、何かは知らず落膽して、目を閉ぢたまゝシワ〳〵と坐つて了つた。

大分時が過ぎたのか、我名を呼ぶ聲に目を開くと、義弟の四郎が入口に突立つて、

「兄様、御膳の支度が出來たさうです。」

雅雄は穴の明く程彼を眺めた後、返事も爲ずに與平と立上る。

（三）

満らない晝飯を濟して、カラリと箸を捨てると、雅雄は誰か此中に文句を云ふ奴は無いかと、其を待構へるやうに一同を見廻した。

が、母親も、お俊も、四郎も、打合せても爲たのか、此方の顔を見やうとも爲ず、默つて食事にかゝつてゐる。

「何といふ淋しい人達だらう。」
と雅雄は腹の中で呟いたか、少時すると矢庭に母親の方を見て、
「お母様、貴方はお俊の話を聞きましたか。」
「あゝ聴いたよ。」と好意とらしい澄した顔を爲る。
「それて貴方は何も有仰る事は無いのてすか。」
「有るともね。」と佶と面を揚げ「其は何程ても！えゝ無くつてさ。」
「有るのなら何故言はないのてす？」と雅雄は忽ち勃氣に成る。
「言つたつて爲やうが無いてはありませんか、お前さんが又他のいふ事を肯くやうな人ては無しさ。」
「其ぢやあ貴方方は私の言ふなり次第に成るといふのてすか、何う爲れても搆はんといふのてすか。」
お光は断乎として頭を振り「決して搆はないてはありませんよ。然し、眞逆お前さんだつて親だの女房を干乾には爲まいからね。まあ妾達は然う思つて、目を瞑つてゐる。」
胸の中央を抉られたやうに、雅雄は慄然として睨返したか、
「はゝあ。然うすると皆は僕を輕蔑してゐるんだね。」
お俊は青く成つて母の袖を引張る、四郎は兩手を膝に肩を聳した。
「老いては子に從ふもの、又女房は良人に隨ふものとしてある。妾共は昔から然う敎られて來ましたよ。其が間違ひだとはお前も言ひなさるまい。ねえ、然うして見ると、子と成り、良人と成るものは、其だ

けの……親や女房を安心させる……務が有ります。」

「昔？其昔が可厭なんだ。」と雅雄は火鉢の椽を力任せに引ぱたいて「人間といふものは無暗に服從するのが美徳ぢやない。人間のえらい處は反抗だ。」

譯が解らないから、斯樣聲は母親に取つて痛くも痒くも無さゝうだ。

「反抗、何物にも反抗して、初めて人間の價値は現れるのだ。可し解つた。貴方等は僕に服從するといふ、其は取も直さず僕を爲て貴方等に服從させるやうなものだ。然うは行くものか。」

「だからさ。勝手に爲てゐるが可いといふ事さ。」とお光は冷淡に言つて除けたが、其でも慄えながら嫗に向つて「彼方へ行こうではないか、斯樣人に關つてゐると、何時まで經つても際限が有りませんから。」

漸うの事で立上つたけれど、腰が伸びると共にガックリ力が脱けて、思はずお俊の肩に倒れかゝる。

「お母樣、お危うございますよ。」

「お前、お氣の毒だけれど、隱居所まで連れて行つてお呉れてないか。」

「えゝ、お易い事です。」と此方は其背を押へて徐々室を出やうとする。

「お俊！」と母親は次の間へ出ながら「お前とは仲良く爲やうねえ。生涯妾の面倒を見て呉れる人は、お前より外に有りはしない。」

襖の外で泣きながら、お前も可哀さうだとか、不運と諦めて呉れとか、悲しい事の限を言ふ聲を聞き

つゝ、雅雄は眤と疊の上を見詰めてゐたが、突然顏を揚げて
「四郎君。」
「何ですか。」太く激した四郎が叩つけるやうな返辭を爲た。
「君だけは少とは話せるだらう。まあ此方へ寄り給へ。」
「御免蒙りませう。何うせ僕にだつて解りさうも有りませんから。」
雅雄は是を聞くと、俄は氣が折れて、不思議にも莞爾しながら「まあ然う、慳貪に言ふものでは無からう。君は中立者だから一つ批評して吳れんか、何方の言ふ事が可いか。」
「無論彼方が可いてせう。」
「面白い！では其理由を伺はう。」と雅雄は其側へ摺寄つて「何故だらう！」
氣味の惡い程其目を耀したが、相手の答を待兼ねて、
「あゝ解つた。君は……僕が氣でも違つてゐると思つてゐるね。」
「否、然うとは………。」
「僞は決して言ひ給ふな。正直な處、君は今然う考へてゐるのだらう。」
「多少、然うい ふ事も思はれます 。」と四郎は再び肩を聳した。
「ふむ、其も可からう。何とでも思ひ給へ。氣違にしろ、人間として大きければ其で望足れりだ。」
「兄樣！」と今度は四郎の方から膝を前めて「其て貴方可いのですか。」

「僕の事を氣違だといふ人を、僕の目から見れば其こそ正銘の氣違だ。卑怯者だ。」
「那樣事を問答する必要は有りますまい。貴方は那樣滿らん事に怒つたり、人を泣かせたりして被在て、其て實際面白いんですか。」
「否。」
「ぢやあ面白く無い事を忍んで爲さるだけ、何か利益が有るのですか。」息も吐かずに「恐らく一だつて半分だつて利益は無いでせう。御覽なさるが可い。お母樣は口でこそ彼樣强い事を有仰るけれど、陰では泣いてゐられますよ。馬鹿者ではあるけれど、姉だつて何んなにか苦勞を爲てゐるでせう。其が貴方には解りませんか。」
雅雄は口を噤んで細く首を振つてゐる。
「よしんば又、貴方は然うしても他に滿足を得られるかも知れんけれど、一人の爲に親だの妻だのを酷い目に逢はして、其て眞實に……人と言はれるんですか。」
「人とも！　其煩累を脫し得て、初めて眞實の人と成るのだ。君は能く僕の言はんとする處を言つて呉れる。」
「誰が?!　反對です。大反對です。人はお互に他人の爲に働く者です。然うて無かつたら、實に生きてゐる效が有りますまい。」
「他人の爲にするよりも、先づ自分の爲に働がなければ成るまい。君の言ふのは國を治るは先づ其家を

齊ふ位な事なんだらう。」

「えゝ、然し其が惡いのですか。」

「那樣事を言つてゐる時では無いよ。」と熱心に押付けるやうな手つきを爲て「君も是から世の中に出る人だから、大いに考へて吳れ給へ。先づ君の襯衣の鈕釦を外すんだ、其から胸を開いて、腹の中の或物を天日に曝して見たまへ。自分の體に斯樣塵埃ばかり澤山に詰つてゐると思ふと、恐らく愛想が盡きるだらう。」

「解りませんねえ。」と四郎は目を瞬いて「貴方は一體何に感化れたのです。宗教ですか。」

「馬鹿な事を言つちやあ可かんよ。宗教なんぞ爪の垢程も感じや爲ない。」と一人で悶へて「僕が最う少し強ければ、立派に敎へてやるのだけれど駄目だ。斯樣事ぢやあ到底話が出來ない。話は廢さう、氣違だといふなら言ふさ。僕は然ういふ人達と共に住んでゐない意だから。」

雅雄は憤然として立つたので、横に在つた膳が其勢で覆る。四郎は慌てゝ袖を引留め、

「兄樣、貴方は又何處へかお出かけなさるのですか。」

「斯樣煩累に耐へられんのだ。」

「ぢやあ最う一度伺ひますが、一體何う爲れば貴方は滿足するのです？」

「一人に成れば、斯ういふ境涯から脫出すれば、屹度滿足が出來るんだ。」

と言つたが、彼は少しく逡巡の體で、何處やら力無い聲音であつた。

「一人で居るのが、果して愉快でせうか。」

「……で無ければ成らん筈だと僕は思ふ。天地は廣いからね、斯んな穢ない屋根の下に、何だとか彼だとか名のつく小な物に取圍まれて、何の思ふ處も無く死んで了ふ程情無い事はあるまい。君は冷靜に考へたら、猶且然う思ふだらう。」と再び坐り込んで「まあ僕の言ふ事も聞け。君は是から學校も卒業して軍人になり、法律家になり出世すると假定してだ。其先は何う爲る、細君でも貰つて、可いかね、無意味に誰かに周旋された細君を貰つて、而して家庭を造る。子を生む、其から其子を大事に教育して、君位な者に成つた處で、君はやがて、白髪に成つて、齒が脱けて、腰が曲つて、其揚句に朽ちた木が倒れるやうに、ポックリと死んで了ふ。是でも君は滿足して死ねるかね。是でも立派な人の生涯だらうか。」

四郎は殊勝にも大いに論じやうと決心したらしい。で、彼は顏を赤くして、

「然う言へば其までゞすけれど、我々の頭の上には國家といふものが有ります。我々の生てゐるのは、國家に盡さんが爲です、貴方だつて其……あれでせう、國家の一員なんでせう。」

「成程。然し其と是とは何ういふ關係が有るのだ。我々の茫々乎として只生きてゐるのが、國家の爲に成るのかな。まあ其は何うでも可いとして、僕は何が爲に生きてゐると問ふたのぢやない。何が立派な生涯だと聞いたのだよ。」

「正義を踏んで行くのでせう。

「ぢやあ人間の幸福は？」

「其は圓滿な家庭を造つて、子孫の繁榮を見るのが一番幸福だらうと思ひますね。」

「那樣事が可いのかなあ。」

雅雄は腕組を爲て冷に笑つたが、

「左に右僕は思ふやうに爲て見る。」

「御出かけなさるなら一所に行きませう、貴方のやうにして何が面白いのだか、其を僕は見たいのです。」

と四郎は續て椽側へ飛出すと、

「來るのは可いが、面白くは無からう。僕自身だつて、放浪してゐて何の面白味は無いのだもの。けれど家にも居られないから外へ出る……」

と兩手で頭を抱えて、飄然と出て行くのを、四郎は有繫に追ひも爲ず、只嘆息を吐いて見送るのであつた。

* * * * * * *

其から一週間程經つと、雅雄は疲れ切つて、何か欲しさうな顏を爲て、狐鼠々々と歸つて來たが、其も五日目六日目と成ると徐々難かしい文句を言初める。

母親のお光は氣が狂つたのだと言つて天から相手にも爲なく成つた。お俊は斯樣事を繰返してゐるうち段々に見捨てられるのでは無いかと心配する。四郎は何うても猶且歸つて來るには違ひないと言ふ。

（完）

女房話

小栗風葉

私の以前住んで居た郡内に二人の女房話があつた。一人はおせきと云つて三十二、一人はおとくと云つて三十六、町内違ひでおとくの亭主が篤くよろのぐが、

小造りで色の小白い所から、おせきよりも却て若く見える。

同じ職業で同じ長屋に住んで、然かも女同士の商賣敵であるから、表面こそ奇麗には付合つて居るもの丶、何かに付けて、始終角突合は絶えなかつた。腕から云つたら、年下のおせきの方が僅かに勝つて居るさうだが、何故かおとは程に人氣が無い。おせきに言はせると、自分はおとはさんのやうに心にも無いおべんチャラが使へぬから、それでお得意様の氣に入らないのだとの事だが、私の家内などの見た所では、おとはと云ふ女は寧ろ無愛相と云つても可いほど無口の方で、然ういふ當人のおせきの方が餘程口數が多いさうだ。

少々腕は落ちても、大人しいおとはの方が誰にしても氣に入る。家内も内々おせきの口彌喧しいのを厭がつて居たが、爰へ引越した其最初おせきに結はせたのが不承で、今更おとはと取變へる譯にも行かなかつた。口彌喧しい女だけに、若し取變へでも爲やうものなら其れを根に持つて何を言歩くかも知れぬので、上手を取得に厭々結はせて居た。

四つ年上のおとはの方が若く見えると言つたが、強ちおとはが若く見えるのでは無く、おせきの方が年の割に深けて見えるのだ。おとはは前にも言ふ通り小造りの色白の所へ、始終小ザッパリと身奇麗にして居るのに引替へ、おせきと來たら全て裝も振も管はぬ。結へる手を持つて居ながら、銜いぞ滿足に髪を結つた事は無く、盲縞の筒袖半纒を端被つた上へ、前垂の紐を外へ廻して緊めて、紺足袋に男のやうな日和下駄、それでも白金巾の胸當だけは毎も新しいのを掛けて居る。色の黒い口の大きな女で、體

はヅングリと太つて居る。

「私は這麼男のやうな性分て御座いますから、」と言ふのが口癖て、「身裝なんぞ面倒て管つて居られないものてすから、今朝も貴方、税金を納めに參るのに、此儘て飛出したものて御座いませう。すると貴方、おとはさんと向ふて落合つたのは可いが、那人はコートなど着込んて何所の奥樣かと云つたやうな澄し方て居るんぢや御座いませんか。私が此裝て行成聲を懸けたものてすから……いえね、私の方は何の氣無しだつたんてすけれど、那人には本當に氣毒な事をしましたよ。」と言つて、和やりと笑つたものだ。

家内は何らを何うとも言ひかねて、「本當にね、おせきさんと、おとはさんとは、何うして那も違ふかと思ふやうてすね。」

「えゝ、私は恁ういふ男のやうな性分て御座いますし……」と元結を絲切齒て咬へて、結懸けて居た髷の根を一つ緊めて、「てすが、髪結風情には是て澤山て御座いますよ、縱んば貴方、縮緬の三枚襲て押出したつて、手て分りますもの手の油染みて。」

おせきの言ふ所を聞くと、おとはは然も髪結風情に似合はぬおシヤラクでもするやうてあるが、それは税金ても納めに行く時は知らず、不斷は何も那樣に目に立つほど身裝に憂身を窶すても無い、唯おせきに比べて幾らか身奇麗だと云ふのに過ぎぬ。同じ出入をさせるなら、小ザツパリした方が何所ても受けが可いのだらう。彌張おとはの方が得意も殖ゑて行く。て、自分一人ては手が廻りかねる所から、下梳を置いた。

すると、或時おせきが一日遲れて廻つて來て、其時家内に、「何うも忙しいもので御座いますものですから、ついね、何方樣へもお氣毒致しまして……」と斷りを言つた後で、何を言ふかと思ふと、「ですがね、下梳だなんて置きましても、雲脂一つ滿足にや起せないんですから、那樣素人に大切なお得意樣も任せられませんし……まあね、餘り慾張つてお客樣ばかり殖しますと、つい麁相になり勝て御座いますから、私なんか新規に被仰つて戴くお客樣は大低お斷り申して居るんて御座いますよ。」

それから又、一段聲を密めて、「貴方、おとはさんの所へ下梳の來たのを御存じて被居いますか。何うてせう。大きい聲ぢや申されませんが、那女は手癖が惡いんて御座いますつて。」

然し、其下梳は別に惡い噂も無くて、永くおとはの所に居着いた。

所が、間も無く大事件が起つた。其れはおとはの所へ聟が來ると云ふので。是は下梳とは大分違ふから、おせきが何と言つて廻るかと、私も内々家内と噂をして待つて居た。

と、案の如く、「何うてせう、まあ！呆返るぢや御座いませんか、」と悍立つて遣つて來た、「お聞きなさいまして御座いますか、

おとはさんが貴方、お聟さんを貰ふんてすつて。それも貴方、自分より年下の、全で息子見たいな男なんて御座いますよ、可い年をして、厭らしい人ぢや御座いませんか。」

「那樣に若い人を貰ふんてすか。」と家内が問くと、

「えゝ、三十出たばかし――四てすつて。」

三十四なら、おとはより僅か二つ若いだけだ。

家内が笑ひながら、「ぢや、今度はおせきさんの番ですね、年上のおとはさんでさへ貰つたんだから。」

「眞平です！亭主なんか一度持つて見りや澤山で御座いますわ。まあ貴方、少しの間見てゝ御覽ぢやいまし、おとはさんが今に馬鹿を見ますから。男は何でも巡査の古手だとか云ふんでせう、何うせ食詰者が食ふに困つて轉込むんですもの、永持するものですか。」

おせきの話は嘘でも無かつた、近所の噂を聞いても、おとはの入夫はおとはよりも年下で、全く巡査揚りに違無いとの事。して見ると、所謂髮結の亭主と一口に言ふ通り、女房に食はせて貰つて、自分は懷手をしてブラ／＼遊んで居る怠者の口だらう。おとはが裸に剝かれるか、それとも愛相を盡かして別れるか、何道永持はあるまいと家内も言つて居た。所が、案外隣近所の評判が可い、巡査揚りだけに理窟ぽいのが難だが、長屋の者にも那樣に無愛相では無く、怠者どころか、毎朝五時から起きて下町の何やら會社へ通ふとか。夫婦中も至極睦しいさうだ。

おとはの事も、其亭主の事もおせきはフッツリ言はなくなつた。家内が話の次手に噂をすると、然も苦々しい顏をして、「全て交尾期の付いた犬見たやうなもので、御座いますのさ。」とばかりて、外に何にも言はない。

いや、おとはの事を口にしないばかりては無く、那麼に能く喋つたおせきが、此節は恐しく無口になつた。何うかして居るやうだと、家内も蔭で怪しんで居た。

「新聞は何といふ新聞が一番宜しいんて御座いませう。」

私が隣の間て新聞を讀んて居るのを見て、おせきは家内の髪を結ひながら突然訊ねた。

「さあ……一口に何れとも言へないが……」私は何ういふ意味で訊ねたのか分らぬので、「お前さんが讀むのかね。」

「えゝ……」と曖昧な返事。

「まあ都新聞などは、女の讀むのに可いだらうね」。

二三日すると新聞配達の鈴の音がおとはの門を訪ふやうになつた。

新聞を取初めて半月ばかりも經つてからだつた、其時私は家には居なかつたが、後て家内の話を聞くと、おせきが、「淫亂と云ふ事は新聞ぢや何と書きますてせう？」と妙な事を訊ねたさうだ。

それから、「郵便ても屆かないつて事が御座いますてせうか」。

「途中て失へれば左に右く、滅多に無い事てせうよ」

「然うて御座いませうてね」。と暫く考へて、今度は又、「新聞なんて、能く噓が有るつて言ひますが、噓を出すくらゐだから、矢張本當も本當に爲ないんてせうね。何が何うなんだか、存外當に成らないもので御座いますね。」と獨りて新聞を貶して歸つたさうだ。

案の如く、其翌日からおせきの家へは新聞を配達しなくなつた。

おとはの亭主は戸籍に面倒な事があつて、今まて内縁のまゝて居たのを、今度愈よ入夫の手續が表向

に濟んだと云ふので長屋中を呼んで披露の饗をした、無論おせきは顏出し爲なかつたが、其翌朝の事である。私が寢て居るのを家内が起して、何か知らないが、おせきさんが是非お目に懸りたいと言つて、目の色を變へて來たと言ふから、起きて會つて見ると、何樣おせきは眞靑な顏をして居る、て、用事を問くと、

「貴方、樂書ぐらゐて懲役になるもので御座いませうか。」

藪から棒に、何故那樣附かぬ事を問くのか分らなかつたが、法律上の事は私の職業なので、「然やう、唯樂書したと云ふだけなら違警罪で濟むが、何ういふ樂書だね」。

「餘所の惡口を書きましたので……」

「成程、それだと惡口を書かれた方が訴へて出ると、究り誹毀罪と違警罪の倶發と云ふ事になつて、十五日以上六ヶ月以下の重禁錮――懲役だね――それに五圓以上五十圓以下の罰金が附く。だが、是は單に法律上の明文の事て……」

「てすが、」と唇の色まで變へて、「惡口とは申す條、本當の事なんて御座いますが……無い事を拵へて、何も嘘を書いた譯ても御座いませんが、其れても何てせうか……」

「本當ても嘘でも罪の成立つ事は同じだが、然し大低の事なら裁判官の方て……」

「いゝえ、有難う御座いました。」と言つて、慌てゝ歸つて行つた。

後て家内に聞くと、今朝長屋の木戸口におとは夫婦の事を白墨て樂書した者がある。無論おせきの字

て、長屋中の者が皆出て讀んでおとはは泣く、おとはの亭主は慍つておせきの所へ捩込む、大騒だつたさうだ。樂書の文句は、

おとはの、いんらんをんな
ひるひなかをとこめかけとねてゐる
ふたりとも、いぬみたやうなやつだ

其晩おせきは夜逃をして了つた。

（完）

洞房昨夜春風起　遙憶美人湘江水
枕上片時春夢中　行盡江南數千里

山中對酌山花開　一杯一杯又一杯
我醉欲眠君暫去　明朝有意抱琴來

人(ひと)と犬(いぬ)

紅緑

一、

夜(よる)になると寂(さび)しいのは小瀧(こたき)の町(まち)で、殊(こと)に雨上(あまあが)りであつたら全(まる)で人影(にんえい)も引(ひつ)擾(そりかく)る返(きやう)な有様(ありさま)だ、草(くさ)も木(き)もなき足尾(あしを)の禿山(はげやま)は少許(すこし)の雨(あめ)が降(ふ)つても渓(たに)といふ渓(たに)、路(みち)といふ路(みち)が苟(いやし)くも高(たか)い処(ところ)から低(ひく)い処(ところ)に流(なが)れ込(こ)む濁水(だくすい)は凄(すさ)

ましく音立てゝ落る、恁那日には無性者は、え、休んで了え、と焦れ込む、晝は撰礦、運搬にこき使はれる子供等も夜になると休ませられるので、是等は撰礦場の前の坂口から小平の廣場へ集まつて泥を捏ねる、柾舟を流す、水掛合、泥玉の投げつ競、何奴も此奴も碌な遊び樣をするものが無い、人が通ると誰れ彼れの差別なく

「親方何か呉んねえな」

と喚き立てる、一人に遣れば二人が來る、三人が集まる、瞬く間に二十人三十人其の集まり方の早い事、犬が魚の骨を嗅ぎ付けるよりも早い、遣らなければ後ろから惡體口を叩く、泥を刎ね返す、踏み戻ればわあつと言て蜘蛛の子を散らす如く逃げて了ふ、逃げたかと思ふと直ぐに集まる、變幻出沒極まりない。

是等の一團と、彼の休んで了えの無性者と、ごつたになつて唄を唄ふ、諍論をする、わけなしに其處ら中を驅けずり廻つて、足尾達摩の格子を叩き歩く、叱られても平氣である、叱るものも平氣である、此の一條が濟むと、二の方と三の方との交代の鐘が足尾全山に響き渡る、と、町並の煮賣屋の軒から立騰る湯氣が、次第に濃くなつて、甘いやうな酸いやうな蒸し熱い香の中を、尻切半纏に細帶、藁で編んだ尻當、右の腰に導火線、左腰に鐵槌、其れから麻繩に括つた大小六七本の掘鑿、辨慶の七つ道具といふ工合に背負つて手ん手にかんてらを振立てた連中が、地獄の繪に見る百鬼の行列を恰らに、往くもの歸るもの、雜然として此の小さな町を急ぎ行く。

山ぞひに、逶迤と開いた一本町で、多いのは飲食店、駄菓子屋、其れから腰板の高い窓から奇妙な

擧て人を呼び立てる達摩屋、食と色との二つが此町の骨子で、實際入時間といふもの奈落の闇に眼を疲らして扨て急に陸に出て娑婆らしい日の光り、底温い風に顔を吹かれたら、財布をはたいても明日の事は明日にして、二つの欲に其日の働いた苦勞を忘れたくなる。

硬い石と戰ひ、闇と戰ひ、硫臭と戰ひ、足尾の人々は朝夕「死」の問題を控えて自然と戰つてるので、其れが石屑を變じて銅となし汗水を化して金となし、當座は自然に勝ち自然を利用し得た積でも、いつの間にか自然に征服されて了ふ。

人は地を掘て一生を穴の中に暮らす。何處まで掘つて終點に達するといふ目當てもなく、只だ五尺の身體に血を通はして居たい許りに無盡藏の大自然中の極めて小なる一部を鐵槌でこつ／＼と叩く、叩いた結果は根氣が盡きて其處に倒れる、自分で倒れるのか、自然が倒すのか其れはわからない。倒れた處が其れは通例で生きて居る間は生きる工夫をせねばならぬ、硫毒は身體の害になると知りつゝも生活の爲めには此山で働かねばならぬ、其れは自分が好きでする譯でもない、只だ自然が然るべく命ずるのだ。

眼に見ゆる限は赭色の山、石、地、原、濕氣のない空の色、足尾の山は細かく色づく美くしい雲を見る事は稀に、只だ一面に濁つたやうな灰色の布を擴げたやう。赭色と灰色、二つの色の天地の間に朝夕の仕事は石を割り穴を掘る、綠の若葉があるでもなし魚住む水が流るゝでなし、鳥も啼かねば春になつても紅いもの一つ見る事が出來ぬ、全て沙漠の中に住んで居るやうなもの、人の心の奧まで何となく乾ききつて粘氣もなく濕氣もないやうに思はれる。

因果は同じ懸る町中に「灰色」と呼はるゝ一匹の犬がある。

耳が小さく、胴は恐ろしく細長く足が短かく背骨は竹の根のやうに露はれて、どんよりと曇つた茶色の眼は人が何といつても俺が生きて居ればいゝといふ樣な鹽梅に、極めて無頓着に見える。

主人は吉藏といふ坑夫て、一年前は相當に時めいたのであつたが、今は肺病で黑い啖を七號飯場の三角疊の上に病つて居る、主人の妻のお鶴といふは吉藏が零落と同時に吉藏の友の政次といふ坑夫の妻になつた、喰はす事の出來ない亭主はいつでも捨てゝ行くのは此社會の通例で足尾では女房の抵當流れといふ事も珍らしくない。

犬は主人に狃むといふが、「灰色」は決して主人に狃まない、吉藏もお鶴も犬好きで全盛時代には高價い魚を食はし、全て我子の如く可愛がつたものだが、灰犬に於ては一向何とも思はぬらしい、普通の犬のやうに藝をして見せるでなし、喉を鳴らして媚びるでなし、其の細長い胴を動かしてのそり〳〵と步くか、腹が一ぱいになれば何處でも構はずに寢轉ぶか、盜賊らしいものが來たとて嚔一つした事がない、けれども吉藏夫婦は可愛くて堪らぬ。御鶴は亭主よりも犬が可愛いと云ひ、吉藏は女房よりも犬が可愛いと言て居る。

卒氣ない「灰色」の態度は榮華の昔から主人零落の今日に至ても變らぬ、彼れは昔のやうに寢て居て食ふ事の出來ぬ身分になつたけれども別に困るやうな風も見えぬ、瘠せた脊骨を高くして町中を彷徨き、掃溜の中に首を突込んで、魚の骨や南瓜の腸などを食て居る、足尾の掃溜には魚氣が少ない、けれども、

彼は平氣である其れは如何なものでも食ひさへすれば生きて居られる事を發覺したからで。
　言はば灰犬は不羈獨立の犬で、決して人間とは昵まぬ、物を呉れても難有いといふ樣な顏をした事がない、主人が今ま病氣で旦夕に迫つてるなんといふ事を氣に掛けべき筈がない、良人が妻を質入して流して了ふし、妻は流されて却つて喜んで居るし、犬は主人を主人とも思はぬ、此の奇妙なる三人！は只だ手ん手に生きる爲めに生きて居るやうなものである。
　犬の友達は例の子供等である、子供等が夕方一通り町を騷がして元との處へ引返して來ると、灰色が丁度掃溜から出て來る處なので、一齊に鬨を作つて歡迎する。灰犬は柔順と云ふよりは寧ろ大悟徹底して居るので、子供等が四肢を摑んで宙に投げても別に嚙み付きもせず、尻尾が抜ける許り引張られても吼え立つる抔の野暮を働かず、頭を把てくる〳〵と廻し曳き放せばくる〳〵と筋斗打てすつくと立つ、身輕で敏捷で大抵子供等の誂への藝は此那ものだと合點で居るので、子供等に取ては此那都合のいゝ玩弄物は又と無からう、併し子供といふものは慘酷なもので、今までの歡迎は直き虐待になる喜んでるかと思ふと早や厭氣が來て、手扱ひも段々と嚴しくなる、繩で首を縊る、水を掛ける、怎うなつて來ると可愛がるのでなく只だ嬲るのである、犬でも人でも可愛がるといふ事は足尾に無い、元來愛するといふ事と嬲るといふ事はどれ丈けの差異があるか疑はしい。
　怎ういふ場合には、此頃まで吉藏が血眼になつて駈け付けたもので、犬の遺恨は子供との喧嘩になる。

「手前達あ何をするのだよ」
「何もしねえだ」
「俺處の犬を酷い目に逢はして居たぢやねえか」
「俺あ知らねえ孝さんだよ」
「俺あ知るもんか辰さんだよ」
「俺でないよ濱さんが打つたのだよ」
順繰りに逃げ合つて果てしが付かない、
「其れぢや誰だかわかりやしないぢやないか」
「灰犬に聞いて御覽よ伯父さん」
此位が結尾になつて、吉藏は
「今度すると聽かねえぞ」と的もなく其處らを睨め廻して歸つて了ふ、此の一段に子供等も遊興の腰が折れて四散になつて了ふ。
元來子供等の方て、犬を嬲るのは何故惡い事なんだか腑に落ちぬ、只た吉藏に叱られたから俺て無えやと逃れて見たくなつた許りて、腹の底ては其那に惡事とは思ふて居らぬからだ、子供が吉藏に叱られても左までに恐ろしく思はぬ如く、犬が子供に嬲られても仍且左までに苦痛に思はぬ、犬の嬲られるのは寧ろ犬の方ても樂であるのかも知れぬ、といふものは翌日の夕方になると、犬が態々嬲られた子供の群

に來る子供は昨日を忘れて又々曲藝に取掛る、嬲るもの嬲らるゝもの、兩者の間に暗契ありとすれば吉藏の氣を揉むのは難有迷惑な話だ。

灰犬が子供に嬲られる、お鶴のやうな女が坑夫に嬲られる、其の又坑夫が自然の爲めに嬲られる、生きて居る間は嬲られる事が苦痛であつて又止を得ざる樂みである。

二、

七號飯場の二の方坑夫等は悉く出て了つて、二十疊敷の室中は水を打たやうに靜かになつた、入口の階子段の下は丁度膳棚で、並べ立てた溜塗の膳、醬油の壜、蓋のない大きな土瓶などは、室の眞中を竪に仕切る板椽と冷たい光りを照り交はして居る。

何處かで岩を劊る發叺の音、全山に響くかと思ふと、其れが地の底邊りを幽かに行くやうなトロックの音と共に夢の如く消えて行く、外は正午過の夏の日盛り、足尾の山には蟬も無ければ蠅も無い、只だ烈しい日光が照り付ける丈け照り付けて、石も土も瓦も板も龜裂割れる許りに思はれる。

「眠つたかな」と窓の下の卓子に凭れて居た飯場の世話方は椅子をがたんと音させて、大きな欠伸、忽ち小聲に

「八幡の境内に於て非命の最期を遂げましたる田宮源八郎の一子」と唸り出し

「おい眠てるか」と再び奥の薄暗い方に聲掛けたが、返辭が無いので、ちよつと舌打をし

「死ぬには些と早いなあ」と呟やいた。

室の眞隅、便所口と蒲團部屋との間、一方は板壁と通り廊下に狹められた三角疊に、黑染んだ赤毛布を腰に卷いた吉藏は、ひよいと頭を上げて再び木枕に額を當て

「どうもならねえ」といふ。

「今日は餘程切ねえか」

「うむ」と言たきり默つて居たが、ころりと横になつて

「俺あもう死ぬだらうか」と天井を見詰める、吉藏は今年四十二歲、萎けた小さな頭の毛は勢なく伸びて、耳の兩傍に垂れて居る、絕えず痙攣が來るやうな兩眼の下は仄かに色づいて居るけれども顏は一體に淋しき蒼みを帶びて、呼吸をする度に前齒が乾いた唇の下から氣味惡く露はれる。

「肺病にや叶はないさ」と世話方は卒氣も膠もない。

「あゝ爾だらうな」と眼を閉つて何か考へ始める。

「爾だらうぢや無いか、今年からでも數へて見ねえ、御前を入れると二十何人てえのだぜ」

「俺を入れると。」と言て吉藏は眼をぱつちり開き

「爾かな、俺も死ぬかな」

「生きてるのが死ぬのだから不思議なやうだが、考へて見りや當然のやうだ」

「爾だ」と氣乘のせぬ聲で「親分、死ぬてえのは一體どんなものだらうか」

「俺あ死人に聞いた事無えから知らねえが死んだら眼を眠るだらう」

「其れからどうなるだらうか」
「眠つて了えば何も見えないさ」
「其れからどうなる」
「は……」と世話方は笑ひ出した。
「なる程」と吉藏は、恹と考へ込んだ、遙かに念佛の聲と鉦の音が唆かすやうに聞える、其れが段々と近くなつて來たと思ふと表の方は俄かに人の足音がする。
「あゝ爾だ」と世話方は上草履の儘で入口に飛び出した。
「今日は松太郎の葬式だつた」と獨りで高く喋舌つて
「おい見ねえか、隨分多勢だぜ」
「俺あ止さう、沒意らねえ」と吉藏は起直つて、外行く人の足音、念佛、鉦の聲を聞く。
「やあ來た〳〵、これだから葬式は面白いや、妙唱寺の和尙の題目と、專念寺の和尙の念佛とごつたになつてけつかる、やあ耶蘇の先生、やあありや天理敎の奴だ、此間達摩屋で逢つた、面白いな、皆な眞面目な面あしてやがらあ」と獨り興に入つて、奧を顧み
「おい早く見ねえ、面白いぜ」
「俺あ止さう」と再び言て耳を欹てゝ葬式の音の行過るを聞き澄まして居る。
「御前何を其那に嚮ぎ込んでるのか」と世話方は吉藏の傍に坐つて窓に凭れる。

「何でも無えけれど、俺あ宗旨を決めて置かにやならねえから」
「何？宗旨　其那ものは藥にも何にもならねえぜ」
「其れも爾だな」と最早對手になつてる元氣もない。
「松五郎だつて爾だ、宗旨も何も無えからあんな賑やかな葬式だらうぢやねえか、眞宗に法華に天理教に耶蘇教よ、賑やかでいゝやな、俺あ死んだら達摩宗てえのだ、足尾達摩總揚てどんちやんて以てやつて貰ひ度え」
世話方は好き放題を言て了つて、窓から外を見た。
「やあ、獨身者は堪らねえや」と飛上るやうに驚いて向ふの岩の上を見る。
窓からは僅かに十間許り、赫々と照りつける岩の上に素裸になつて岩疊な背中を此方へ向けて居るのは政治で、其傍らに中形の浴衣、双肌脱いで兩袖を胸の處に疊み、政治が何か言ふ度毎にきやつくと故意とらしい聲て笑つてるのはお鶴てある
「畜生奴、今日も休んで巫山戯てやがらあ」と世話方は猶も二人の上に目を放さぬ、
「え、おい、御前口惜しく無えか」
「何を」と吉藏は眼を上げて山の方を見上げ
「あゝあれか」と苦笑をする
「あれかぢや無えぜ、嗅あ取られて、向の男と眼の前に巫山戯られちや堪るめえがな」

「仕方が無え、御互ひつこだ」
「本當に口惜しく無えか」
「其りや御前、金のある時は彼那のを見たら腹も立つだらうが、自分が生きてるのさへ不思議に思つてる今の境涯ぢや腹あ立てるたつて立てる腹が無えや」
「こう見ねえ」と世話方は窓から首をいぢり出し
「馬鹿にしてやがらあ、頰ぺたを突つついてけつかる、罰が恐ろしくも無えて晝日中、え御前どうだい」
「どうでもいゝや」と投げ出したやうに言ふ
「ありや御前が此處から見てるのを知つてるのだぜ、え、故意とあんな眞似をしやがるのだぜ」
「うむ爾かも知れねえ」
「しいつ」と世話方は突然に叫んで
「どうだい、此の犬ももう駄目だね」
「あゝ灰犬が來たか、灰犬よく〳〵」と力なき聲で言て、窓の外を見
「何處かで打たれたのだらう、此那に老耄れて了つちや傷も中々癒らないさ」
灰犬は主人の顏を見ても別に嬉しさうな素振もない、處ろ〳〵泥に汚れて、毛波が皮に粘り着き、傷口から眞黑な血の凝りらしいものが乾き切つてるのが見ゆる、稲荷樣のやうに蹲んで世話方と主人の顏

を見比べたが、例の悟つたやうな顔をして直ぐ寢轉んで了つた。

「此の暑いのに引接いたりなんかして始末に了えねえ奴だな」

と世話方は未だ熱心に上を見て居る

「いゝぢやないか、自分の物だから」

「諦めのいゝ奴だな、え、御前又どうして彼那女を嬶にしたんだい」

「して呉れと賴んだからさ」と落膽した樣に肩を落して兩手を膝の上に載せる。

「彼女あ俺の處で七人目だ、だから俺あ彼奴を貰ふ時爾言た、御前の今の亭主は穿子に落魂れて肺病で寢てるぢやねえか、いくら何だからつて死にもしない中に俺の嬶になるのは餘りだと爾言た、するとな、今の亭主だつて金で買はれたのだから御前さんに金で買はれても可いぢやないか、私、御前さんに惚れるんぢやないからと恁う言つた」

「惚れやしないが、金の爲めにと言たか、豪いなあ、お鶴の方がお前より餘程豪いや」

「爾か」と淋しく笑て居る。

「其那事言はれて癪に障らなかつたか」

「癪に障るものか、俺も惚れて貰つたのぢや無し、金抱て寢るより女抱た方が暖けえと思たからだ、一體俺あ此年になつて嬶でも無えものだと爾思つてたのだが、其時は金が儲かつたのでな、急に女が欲しくなつた、金があると寢覺が淋しいてな」

「了見が間違つてらあ、年取て若え嬶持て、加之に貧乏して病つた日にや誰だつて逃げ出さあな」

「だから俺も其時爾言た、俺あ今は此那に金もあるが零落たら御前仍且寢返り打つだらう、其時にや俺あ口惜しいから嬶にする事は御免蒙らうと爾言てやつた

「うむよく言た、向て何と言た」

「御前さんも私に惚れなきや、口惜しい事はなからうと恁ふ言ふた」

「巧え事を言ふたな、感心だ」と世話方はほく／＼喜んで

「して御前惚れたのか」

「うむ惚れた」

「何故惚れた

「何故つて御前、坑内に這入つて見ねえ、右も左も眞暗で、便りにするのはカンテラの火一つだらうぢやないか、晝はまだしもだが夜中の丑滿頃になつて見ねえ、山が霎時眠る事があるんだ、四邊はもう死んだやうに寂閑になつて何とも知れねえ寒氣が頸元へぞく／＼來る、すると御前カンテラの火が松の葉のやうにぱち／＼と劃れて自分の影法師を明るくしたり暗くしたりするぢやねえか、もう此那時には淋しくつて／＼錢も金も入らねえといふ氣にならあ、其れが御前陸へ出る時になると何だか恁う話相手が欲しい、柔らけえものを抱て溫く寢てえといふやうな心持に變るんだ、不思議ぢや無えか」

「其れが娑婆氣といふものだね」と世話方は笑ひ出した。

「爾かな」と感心して居

「其れて御前嬶に惚れたのか」

「うむ爾だ、女は藥だね、其那時に引扶持（長屋）へ歸つて嬶を見ると、もう氣が暢適して來らあな」

「其や御前惚れてるのぢや無え」

「何故だ」

「何故つて御前、今は如何だ」

「今は惚れて居ねえ」

「爾だらう、食ふ事に困つて居りや惚れるといふ事があるもんか、色戀といふ奴は腹が出來てからの事よ」

「成程爾だ、爾言へばお鶴も爾言た、足尾へ流れ込む前には隨分男て苦勞もしたし、惚れた男も澤山あつたが、此處へ來てからは男に惚れやうつて氣が出やしない、惚れやうと思つても何だか一寸も油斷が出來ないやうな氣がして一日だつて優適した事はありやしない、其れにどの男もどの男も乾いた丸太のやうて、腕節が太く顔が強いけれども心の底に油氣がない、自分までが何だか身體が砂のやうにかさ〳〵して來たやうに思はれる、だから私の惚れるのは灰犬ばかりだつて」

「なに犬に惚れた？」と世話方は頓狂な聲を出す、吉藏は落着きながらも息苦しい胸を休めて

「灰犬は畜生だから可愛い、位が下だから、可愛いと獨言た」

「はてな」と哲學者のやうな顏をして考へる振をする

「七人の亭主を持たが、どうしても大木が家根にかぶさつてるやうな氣がして何だか自分が壓し付けられるやうで面白くない、其れが灰犬だと自分で思ふ通りに馴つて見たり揶揄つたりする事が出來ると恁ういふのだ」

「妙な奴だな」

「灰犬を抱て頰摺をして居ると、五六年以來覺えのない嬉しい涙がぽろ〱出て來る事があるつて」

「妙だな」と再び考へる

「恁ういふ晩もあつた、灰犬を抱て寢やうと言ふ、其れは今年の春だ、俺あ何だか心細いやうな氣がして一日仕事休んで飮んで了つた、けれども此日は全く變な日で、俺あ今までに無い死んだ親の事が思ひ出せて泣きたくて〱堪らなかつた、窓から外を見ると御月樣が暈かぶつてどんよりとした空合で其癖ほゝら暖けえ土の香が戶の隙間からぷん〱這入つて來る、妙に淋しいからお鶴に獨言ふと、彼女も仍且淋しくて堪らねえ灰犬を臥床に入れて二人の間に抱て寢やう、二人の子だと思へば可愛いぢやないかといふのだ」

「馬鹿にしてやがるな、御前だつてい丶年をして子供のまゝ事ちやあるめえし、其れから如何した」

「抱て寢た」と力なき顏を弛まして笑ひかけたが、急に忸と思に沈んで

だが親方、俺あお鶴と緣が切れたのだらうか」

「あゝ何處へ行きやがつたらう、もう見えなくなつた、小屋へ這入り込んだな」と世話方は上の方を見て直ぐ吉藏の方に向き直り

「何を言てるんだい」

「全く緣が切れたのだらうか」

「當然だね、あの何だな、御前仍且未練があるのだな」

「爾ぢや無えが、俺あ恁う思ふのだ、お鶴は俺を捨てゝ政治許へ嫁つたらう、」

「其りやわかつてらあ、今の山の上だつて御前……」

「まあさ」と慌しく止めて

「政治許へ行たけれども灰犬を可愛がるだらう、俺と二人の子だつて謂言た位だもの」

「犬は可愛がるが御前は捨てた」

「その話だ、まあさ、お鶴は犬を可愛がるだらう、俺も恁うして犬を可愛がるだ、二人が一つの犬を可愛がるぢや無えか」

「何だか謎みたいな話だね」と眼をぱちくりさせる

「其れだから妙だ、俺あ何だかお鶴と緣が切れて居ねえやうな氣がする、お鶴と俺とは切れて居ても灰犬とは二人とも切れて居ねえからな、例へば東と西へ行く汽車の眞中に停車場があるやうなものぢやね

えか」

「いろんな熱吹きやがるな」と世話方は笑つて立上る

「うむ爾だ、どうも爾だ」と吉藏は獨りで考へる

「其處だらうぢや無えか御前御鶴に惚れても居ねえ癖に仍且惚れてる振を仕度がるんだ、意氣地が無くなつたなあ、何故其那事を考へるのだ」吉藏は泣出しさうな顏をして

「何故考へたか俺あ自分でわからねえ」

「沒意らねえ夢見たいな事考へたものだね、仍且病氣の故だよ、心が弱つてるから起きて居ても夢見るのよ」

「爾だらうか、稼えてる中あ何とも無えが、仍且爾だらう」

「沒意らねえ」と世話方は空を仰いで「あゝ何處かで夕立がしてるな」と言捨てゝ軈て鼻唄を唄いながら出て行た。

其後影を見送つて吉藏は這上るやうに窓端に攫まつて向ふを見る、二人は既に影もない

丁度山頂の大煙突から恐ろしく濃い眞黑な烟が、綿のやうに續々と出て來ると、中空の風に煽られて見る〳〵町の方へ靡き降るに從つて其道筋が虹の如くぼうと靉いて一面の薄埃が擴がり出し、其れが次第〳〵に人家の上て消て行く、

「あゝこれを吸ふてるのだな」と言たやうに吉藏は淋しく烟の行方を眺めた

豫防工事の行屆いた此町此山の景色は、只見るといかにも規矩整然たるもので、魚の鱗の樣に並び築いた腰石垣、護岸石垣が先づ目に付く、隧道の赤煉瓦が丘陵に起伏して居る、胸壁堰堤、川といふ川には一寸の隙もない、どんな大きな岩でもどし〱截開いて、石段、橋梁、煙突、凡てが西洋の市街圖を見るやうに規畫が付いて居る、いかに人間が此の山と戰ひ山の毒と戰つて居るかが一目にわかる。

人間の智識と機械の力は其れ丈け激烈に自然を凹まして了つた、併し一つ〱に見る事を休めて全體の上から全山を見上げ見下すと何となく淋しい思に打たれる、手箱のやうな家並、幾何的にくねつた道路、凡てが機械的にきちんとして居る丈け其れ丈け、始終何物かを防禦して居るやうな、何かしらん不安の思に窮屈に暮らして居るやうな氣がする。

畢竟、人間が自然に對して城壁を築き上げたのである、自然と人間と離れ〱になつて、其間に情愛が無い、哀れみが無い、戀が無い、あるものは只だ赭色の山。

全山の人の心は赭色の石と共に乾ききつて居る。

吉藏は只だ淋しく眺めた、勿論何の爲めにといふ事もない。

「ほ……」と女の笑ふ聲がする續て

「は……」と男の聲、吉藏は力なく其方をながめた、聲は眼前の小屋の中から出て來る、假りに建て置いた、ブリキ屋根の物置、眩ゆき許りに日光に照り付けられて居るが、處ろ〱無殘にも腐融して夕立に打たれたら直ぐに凹みさうに脆い銹色を見せて居る。

只だ何といふ事なく淋しい、何物かが後ろから摑みかゝるやう、夏の日盛にいきれ立つ土の香は弱り果てた吉藏に眩暈を催ほさせるやう、疲れに疲れた吉藏は男女の笑聲を夢の如く聞いて居た。

丁度小屋と窓の間に一本の立木がある、何といふ木かわからぬ、鑛毒の地上に誤まつて生まれて來た一本の立木、五尺ばかりひよろ〳〵と伸びて二三本の枝勢なく岐れて居るが、ちよび〳〵と付いた葉は風なきにほろ〳〵と落る。

吉藏は默つて見詰めて居る、見詰めて居るのは其處に平伏ばつて居る灰犬の眼玉て瘠せさらばえた背骨が打傷の皮から露はれ、いとど長い胴を太儀さうに地べたに着けて立木の根に頤を載せたまゝ、苦しさうに舌を出しながら忸と吉藏の顏を見て居る。

「あゝ御前も死ぬのだな」と吉藏は小聲に言て再び其眼を見る、灰犬の疲れた茶色の眼玉と吉藏の疲れた薄曇つた眼と互に瞬もせず何物か相通ふてるやうに見詰め見凝らして双方身動もせず默つて居る。

再び大煙突から吐き出す煙は魔の神の翼の如く町中の空を翺り初めた。

(完)

遊覧者の見逃す可からざる東京名勝拾個所投票披露

入選名勝地

(1) 上野公園……（二九二點）
(2) 淺草公園……（二六七點）
(3) 丸の内……（二六〇點）
(4) 銀座街……（二二九點）
(5) 泉岳寺……（二〇八點）
(6) 愛宕山……（二〇六點）
(7) 芝公園……（一九六點）
(8) 靖國神社……（一九四點）
(9) 吉原……（一七六點）
(10) 隅田川……（一六七點）

選外名勝地（二〇點以下略す）

増上寺……（一五〇）
ニコライ教會……（一三七）
魚河岸……（一一三）
神田明神……（九三）
植物園……（八八）
青山墓地……（七六）
湯島天神……（七四）
三越呉服店……（七三）
待乳山……（七三）
帝國大學……（七三）
日枝神社……（六五）
不忍池……（四九）
護國寺……（四八）
水天宮……（四一）
芝勧業場……（三六）
琴平神社……（三五）
盲啞學校……（二八）
築地本願寺……（二七）
牛込八幡……（二六）
江戸川……（二五）
回向院……（二四）
傳通院……（二二）
平河天神……（二〇）
兩國橋……（二〇）

入選投書文

吉原。 東京を見物に來て、「歌舞の菩薩の色揃」なる吉原を見ずに歸る人は餘ッ程の間拔也。但道徳屋といふ人はソット見に行くべし

上野公園。 春の花時最もよし。秋の黄葉時も亦あしからず。西郷の銅像あり、動物園あり、博物館あり、東照宮あり、美術の展覽會あり、夏でも冬でも必らず見るべし

淺草公園。 ドンヂヤン〳〵の音、平常と雖も田舍の大祭典より賑か也。お小兒衆などを連れて來た人は第一に見るべし

日比谷公園。 人工的公園、文明的公園、東京市の代會的公園也。殊に海軍省、司法省などの建物周圍にあつて立派也

九段靖國神社。 境内にある遊就館必ず見るべし。神社に必らず參詣すべし

愛宕山。 男は男坂より女は女坂より上るべし。上れば東京市街一眸の裏に落ち來る

隅田川。 水の清からざるは難なれど、汪洋として緩やかに流るゝ有樣、業平の昔も忍ばる。殊に夕暮、兩國橋に立ちて上流下流にチラ〳〵する燈光を眺むる、心地よし

高輪泉岳寺。 見て面白き處あらず。但し「忠臣藏」の芝居や淨瑠璃を好きな人は是非共見るべし

丸の内。 二重橋、櫻田門、正成の銅像皆見るべし。殊に皇居を仰ぎ拜するを得るは日本國中、こゝがたつた一つ也

ニコライ。 東京の何處に居ても此建物は大抵目に入る。但し其内部を見る人は比較的少し。内部は日本の大抵のお寺より立派也

頰冠生

二重橋。 皇居の狀を見ずんば何くんぞ天子の尊きを知らんやだ、此處から拜んでかゝられば日本臣民ぢやないさ

上野公園。 忍ばずの辨天様屋根から見下す處に淸水の觀音様南洲翁の銅像、斷つて置くが狐の樣に見えても側に居るのは矢張り犬だよ、その外東照宮、彰義隊の古戰場の黑門、博物館、大佛樣まだあるよ

淺草觀音。 一寸八分の小男で有名な佛樣でもお詣りのあるのは一番だよ、お祭禮に來合したなど喜んでは掏兒に付かれる。

芝增上寺。 金碧燦爛流石は德川の御靈廟だ、拜觀料を取るのが瑕だが、我慢しても見とくだれ

日比谷公園。 公園中のハイカラだ、音樂堂なんてオツだれ、それからお尻から水をのんで嘴から噴き出す大噴水もあるよ、

銀座通。 土一升金一升東京の腦味噌、鋼ていへば眼肉だれ、之を見なければ東京は話せないれ

九段公園。 九段坂上つたら大村益次郎が案內して居るから間違いつこなし、大きな石鳥居を潜ると招魂社がある、遊就館もある。

愛宕山。 男は男坂、女は女坂、上つて直ぐ下りる丈の狹いところだが東京市中は眼下に見える

ニコライ教會。 大抵の人は知るまい、外からだけで中は分るまいが、西洋風の大寺院斯くばかり莊嚴な結構だ、一覽を請ふべしだ

日本橋　淸水終平

外濠一周。 江戸城の外堀、老松翠の淵に伏し、屛障の如き石垣千

古の色を帶ぶ、外濠線電車を驅つて是を一周せんか蓋し壯快事。

江戸川端。 江戸川兩岸の櫻樹、紅雲二旒白水を挾んで春光を含む、若しそれ流水を清澄ならしめば、吾何ぞ小金井を說んや噫。

舊水道口。 小石川關口水道町を江戸川に沿ふて溯れば、忽ち飛沫粒賠銀鱗の巨龍躍るを見る、參天の老樹翠緑滴るの陰、石を疊んで瀧水を堰き落すもの舊水道口の壯景也。

青山墓地。 新宿行電車を青山三丁目に下り、左に入れば是れ墓地なり、直進或は十丁、將に墓地地きて霞町へ坂を下らんとする時左を仰げ、是れ軍神廣瀨武夫が碑。

魚河岸。 東京住民二百萬、彼等が血となり肉となる海魚の美味は此處より分けるものならずや。ホ句みものす「明月や鱗落ち散る魚市場」

佃島。 春夏秋冬賞月の閑適趣を措いて他になし。

銀座の月。 畫を欺く白熱燈の銀座街、一痕皎兎中天に懸る、地の光明は天のそれよりも強し、是れ物質の誇りに似て而も無限の寂寥を感ず。

淺草寺。 念彼觀音力釋然得解脫。

東照宮。 花の山二丁上れば……。

神田明神。 逆賊平將門を祀る。

上野公園。 俗氣なき處甚だよし。ドンナに人がドヤ〳〵しても大きな靜かな天然が、ソット頭を押へて居るので、餘まり俗境とならぬのはうれしい。

見給是雄

淺草公園。 俗氣たッぷりなのが、却て面白い。仙には仙の面白味あり、俗には俗の面白味があるといふ哲理が上野淺草の兩公園を見ればわかりまする。

日比谷公園。 まだ未製器の觀があるが、東京市の公園としては最も代表的のものでせう。

三越呉服店。 要君や、女の子を連れて來た人は必ず見に行かればならぬ。但し懷中の餘り溫かでない人が、要君などゝ一所に行くと飛んだ目に逢て歸りの旅費のゼロとなるを覺悟めさるべし。

吉原。 素通りすべし。色めかしき女共のあざやかに飾り立てたるが、金光燦爛たる衝立を背景としてズラリと並べる、田舎物はアッとばかり、驚嘆すべし。但し近いて見れば興醒むる顏ばかり、必らず〳〵近寄り給ふな。

丸の內。 流石に鳥居に近き丈けありて、何物もいかめし。

丸の外。 丸の外の石垣、壕の有様江戸趣味あり。

增上寺。 德川將軍家の靈廟(おたまや)、立派也。

靖國神社。 拜まずとも見ておくべし。境内の遊就館をも。

一錢蒸汽。 隅田川を往來する蒸汽也。之に乘て隅田川を見るべし。

類冠生

二重橋。 九重雲深うして窺ひ知るべからずだが水滑かなる御濠を隔てゝ遙に禁城の曉色を拜むも神々しい、井伊大老斃て名高い櫻田門を潛るとだ直だ、前には楠公騎馬の銅像がある。

芝公園。 小さい丘が幾つもあるから陰氣だなどとけなすものも有るがそれ丈幽邃の趣は及ぶものなしだ。

泉岳寺。 忠臣藏でお馴染だから行く氣には誰もなるだろう、老樹翁

樹の徑に幾個の苔むした石碑が當年の恨を語つて居る。

上野公園。大佛樣に南州翁の銅像、東照宮に清水の觀音に寛永寺、見どころは澤山とある、黒門の彈痕は彰義隊の血戰の跡が見えるから尋ねるべしだ。

淺草公園。觀音樣に五重塔、裏へ廻つて噴水を見たら左へ外れて奥山の觀せものへ入る、それから花屋敷を窺くも宜い、凌雲閣も一寸見ものだ。

待乳山。隅田の清流を控えて斜に言問を見渡すところ、花の頃には向島の堤を土埃で捲かれるよりは此處から心靜に眺めるがよい

吉原。道學者はケチを付け樣が東京名所には洩れまいさ、建物の美々しいのを見たゞけてもホット出はお役所かと聞く

富岡公園。場末だから餘り離されぬが隅には置けない、成田不動の出張りもあれば八幡樣もある。

その外九段の公園、愛宕山などを擧ぐべきだ。

田端　洒落通人

深川公園。八幡樣の方には八重櫻が美事だ、不動樣の方は奉納もので俗氣紛々、八幡樣の背後に力士の碑があるが、實に殺宥なものだ。

上野公園。今年は博覽會があるのてさぞ雜踏する事だらう、動物園では象が唸る、大佛が顔を顰める、西郷が涙を流す、不忍の辯財天が耳を塞いて居る。

淺草公園。奥山の興行物は賑かて、珍世界は珍らしくつて、水族館が綺麗て、電氣館が不思議て、池の鯉が口をあいて凌雲閣を眺めて居ると、花屋敷て虎が吼いる、時しも淺草寺の鐘の聲。

坂本公園。日本橋の坂本町、一寸田舍の人の知らな所。

芭蕉庵。早稲田大學から北へ目白臺の下、駒止橋の際、芭蕉が是處の風致が粟津の原に似て居るといふて庵を結んだ跡がある。

駒形堂。君は今駒形あたり時鳥、是れて皆樣先刻御承知。

妙見堂。柳島の橋本の傍の妙見堂には、近松翁の淨瑠璃碑がある。牛二が建てたもの。

向陵　學人

植物園。農科大學の附屬て、園內只花樹に富む斗りてなく、學術上に資するものが夥多ある、その溫室の熱帶植物は是非見て置きたい。

日比谷公園。昔大名屋敷の跡が、今は西洋にても來たやうな心持になる、是の公園の風。

星ケ岡公園。山王のお猿樣は赤いおべゝがだいお好き……と手鞠唄に唄はれて此處日枝神社のお猿樣は赤い著物て控へてゐる。

女の見るべきものは三越呉服店。小供の見るべきものは淺草公園、芝居好きの見るべきものは歌舞伎座、本郷座。誰ても見るべきものは上野公園、日比谷公園、丸の內、隅田川、銀座通り帝國大學。

東京遊覽者案内

（東京名勝拾ケ所投票の中遊覽者に便なるものを得たれば茲に掲上せり）

其一、東京近郊名所

〔梅見〕

- ●臥龍梅 亀戸天神東へ五丁、
- ●江東梅園 南葛飾郡字小村井、亀井戸より東北へ十丁、
- ●木下川 仝上字木下川、江東梅園より北へ十餘丁、
- ●百花園 向島、言問より北へ十丁、
- ●八景園 大森停車場より一丁、
- ●川崎大師 大師河原平間寺境内、
- ●蒲田 京濱電車蒲田停留所前、

〔櫻狩〕

- ●隅田堤 向島、
- ●荒川堤 南足立郡、千住停車場より西へ荒川堤上、
- ●飛鳥山 王子停車場より一丁、
- ●花見寺 日暮里停車場より二丁、
- ●道灌山 仝上、
- ●品川公園 品川町、東電八ッ山下終點より南へ五丁、
- ●妙華園 南品川町、仝上西南へ十餘丁、

- ●八景園 大森停車場より一丁、
- ●本門寺 大森より西へ廿七丁、
- ●小金井 北多摩郡多摩川上水畔、甲武鐵道境驛より七丁余、
- ●川崎 川崎より大師河原道、

〔瀧〕

- ●王子 王子停車場より西北三丁余、
- ●十二叢 豐多摩郡角筈、新宿驛より西へ十丁、
- ●目黒 荏原郡目黒村、目黒驛より西へ七丁、
- ●新富士 仝上

〔桃林〕

- ●市川 成田鐵道市川驛近傍、
- ●越ヶ谷 東武鐵道越ヶ谷驛近傍、

〔花菖蒲〕

- ●堀切 南葛飾郡綾瀬村字堀切、鐘ヶ淵驛より東へ五丁、
- ●菖蒲園 京濱電車蒲田停留所より一丁、

〔紅葉〕

- ●夕日ヶ岡 目黒行人坂、目黒驛近傍、
- ●海晏寺 南品川町、
- ●瀧の川 王子驛より西へ七丁余、
- ●十二叢 角筈村、

〔汐干狩〕

- ●品川沖 品川沖七番臺場邊、

〔社寺〕

- ●穴守稻荷 荏原郡羽田村、京濱電車羽田停留所より東四丁、
- ●平間寺 川崎大師河原、仝上大師停留所、
- ●新田神社 荏原郡矢口村、蒲田停車場より廿丁、
- ●本門寺 大森停車場より西北廿七丁、
- ●祐天寺 目黒停車場より西十五丁余、
- ●目黒不動 仝上より五丁、
- ●十二社 新宿停車場より西七丁、
- ●鬼子母神 雜子谷、目白停車場より東四丁余、
- ●王子稻荷 王子驛より北へ五丁、
- ●西新井 南足立郡西新井停車場より大師堂迄西北七丁餘、
- ●木母寺 向島鐘ヶ淵、
- ●水神祠 仝上、
- ●長命寺 向島言問、
- ●白鬚神社 向島白鬚、
- ●秋葉神社（牛の御前） 向島言問、
- ●三圍神社 仝上、
- ●亀戸天神 亀戸停車場より八丁、

帝釋天　南葛飾郡柴又村、柴又停車場より十餘丁、

《藤》

龜戸天神　龜戸停車場より八丁、

《躑躅》

大久保　甲武線大久保停車場より二丁、

其二、電車便に依る市内劇場及び寄席案内

（停とあるは電車停留所の略なり）

- **市村座**　下谷二長町、停外神田旅籠町より東へ四丁余、
- **本郷座**　本郷春木町、停本郷一丁目東へ半町、
- **東京座**　神田三崎町、停南神保町より北へ四丁余、
- **常盤座**　淺草公園内、停東仲町より北へ二丁、
- **柳盛座**　淺草向柳原、停美倉橋より北へ五丁、
- **歌舞伎座**　京橋木挽町、停歌舞伎座前、
- **開盛座**　淺草七軒町、停小島町前北入、
- **眞砂座**　日本橋中洲、停水天宮前より東南五丁余、
- **深川座**　深川富岡門前町、停黑江町より東へ二丁、
- **國華座**　淺草諏訪町、停駒形町より南へ一丁西入、
- **壽座**　本所公園地内、停龜澤町より東へ二丁余、
- **演伎座**　赤坂溜池町、停溜池前筋向ふ、

- **明治座**　日本橋久松町、停浪花町より南へ半丁、
- **三崎座**　神田三崎町、停南神保町より北へ五丁、
- **宮戸座**　淺草千束町、停雷門より北へ觀音本堂裏手、
- **新富座**　京橋新富町、停新富町より南へ半丁、
- **伊勢本亭**　日本橋瀬戸物町、停室町四角東入半町、
- **市場亭**　神田美土代町、停錦町前東角、
- **本牧亭**　上野黒門町、停廣小路より西側、
- **東橋亭**　淺草花川戸町、停雷門より東へ北側、
- **小川亭**　神田小川町、停小川町前北側、
- **大ろじ亭**　日本橋葺屋町、停人形町より北へ西入一丁北側、
- **若竹亭**　本郷西竹町、停本郷一丁目南寄西側、
- **金澤亭**　銀座一丁目、停京橋前横丁東入、
- **川竹亭**　神田表神保町、停小川町より西へ二丁、
- **立花亭**　日本橋米澤町、停兩國前西へ横丁入、
- **大金亭**　淺草茶屋町、停雷門より東へ半丁、
- **玉の井**　芝日蔭町停、芝口より西南へ一丁半、
- **立花亭**　神田通新石町、停須田町より南へ東側、
- **鶴仙亭**　京橋南鍋町、停竹川町より北西横丁裏通り、
- **並木亭**　淺草並木町、停雷門より南へ半丁、
- **吹拔亭**　下谷數寄屋町、停上野廣小路より西へ一丁、
- **琴平亭**　芝琴平町、停櫻田本鄕町より西へ四丁、

- **惠知十**　芝南佐久間町、停愛宕町より西北へ四丁、
- **木原亭**　日本橋通一丁目、停日本橋南へ筋向横丁東入、
- **銀座亭**　銀座四丁目、停銀座四丁目より北東へ半丁、
- **宮松亭**　日本橋茅場町、停茅場町前藥師境內、
- **新磐館**　神田表神保町、停小川町より西北二丁、
- **新福亭**　淺草新福井町、停瓦町前角西入二丁、
- **廣市場**　神田五軒町、停五軒町より北へ西側、
- **鈴本亭**　上野廣小路町、停廣小路より北へ東側、
- **末廣亭**　日本橋新和泉町、停人形町より北へ一丁、
- **演藝館**　牛込通寺町、停神樂坂下より坂上へ四丁余横丁、
- **牛込亭**　牛込通寺町、停神樂坂下より坂上へ五丁余、
- **久本亭**　下谷西竹町、停竹町南へ入る一丁半、

（中央公論第二十二年第四號春期大附錄號添附）

東京本郷西片町十
反省社